有明工業高等専門学校紀要

創　刊　号
昭和41年3月

Research Reports
of the
Ariake Technical College
No. 1
March 1966

Published by the Ariake Technical College
Omuta, Japan

目　　次

共同研究：高専図書館はいかにあるべきか …… 甲木季資ほか… 2

教科、身体の形態と体力、運動能力の相関についての一考察 …… 寺本匡謨 …… 55

高感度核四極共鳴吸収測定器の試作 …… 酒見次郎 …… 73

切削加工における傾きの角計算 …… 永田達郎 …… 77

The Lattice Theory of Liquid State under the Condition
That Can Make Two Molecules Involve into Each Cell.…… 永田達郎 …… 84

"The Grapes of Wrath" の国際的反響について …… 井芹龍成 …… 89

大御神忌と連歌 附連歌屋考 (一)
——近世太宰府天満宮連歌史・その二—— …… …… 棚町知弥 … 120

大牟田市における条里制の諸問題 …… 日野尚志 … 124

創 刊 の こ と ば

本校は昭和 38 年4月に創立され、今や4年次を迎えようとしています。いまだ校舎は建設中でありその主力は学生の実験の整備に集中され、教官の研究などまだ程遠い現状であります。また諸教官は若い世代の教育と補導に力をそそがれ、研究の余裕さえない繁忙のさなかにあります。

先生方がこれらの悪条件を克服して日夜研鑽につとめられ、その研究成果の一端を有明工業高等専門学校紀要の創刊号に上梓するはこびとなりましたことは、誠に欣快とするところであります。先生方の研究に対する正しい態度とその熱意とは、自ら学生に浸透する立派な教育であり、啓発されること大なるものがありましょう。この意味におきまして、紀要刊行は学園の発展と教育の振興の上に大いに寄与するものと信じ、号を追ってその充実をはかりたいと考えています。ここに掲載した論文につき諸家の御批判と御教示を賜わりますれば有難き仕合せに存じます。

昭和 41 年 2 月 15 日

有明工業高等専門学校

校 長 牛 尾 広 恵

共同研究

高専図書館はいかにあるべきか

有明工業高等専門学校教職員
甲木季資ほか共同執筆

A Common Study : The Basic Principles of the Technical College Library

S. Katsuki and Other Members of the Ariake Technical College Staff

Foreword

It is only a short time since new technical colleges (5-year course) were founded, and so the T. C. (technical college) library has not yet such a history or a standard as the university library has. Moreover, the T.C. library is not under the application of the school library law, though three-fifths of the T. C. students are the same age as senior high school students are.

On the one hand, the T. C. library has a function as a research library like the university's, and on the other hand it will be required to play a more important part as a general culture center than the university's.

To make a study of "an ideal T. C. library" we began with an investigation into the reading environment of the Ariake T.C. students, in August, '65. Since then we have held several debates on all the subjects concerning to the T.C. library both in the sectional and in the general meeting.

This is an interim report of the basic principles of the T. C. library, which deals with the following contents:

Ⅰ. Researches after the Reading Environment of the Ariake T.C. Students
Library Statistics of These Two Years
Ⅱ. Several Problems of the T.C. Library:
a. An Ideal T.C. Student
b. A Comparative Study of the T.C. Curriculum
c. A T.C. Library as a General Culture Center
d. Centralization of the T.C. Library
e. Training in Documentation Work in T.C.
f. Audio-Visual Services g) Reprint Services
Ⅲ. Specific Planning of Library Utilization in Each Lesson of Our Technical College
<Supplement>The Basic Principles in Standardization of T.C. Libraries

はじめに

高専の図書館はいかにあるべきであろうか。大学図書館の歴史は大学の歴史とともに古く、最近はその体質改善が重点的に推し進められている。その大要は、「図書館雑誌」Vol. 59 No. 7（昭和40年7月）に発表された「大学図書館設置基準要項」、ならびに「学術月報」Vol. 17 No. 6 特集：大学図書館職員講習会（昭和40年6月）に窺えるが、われわれの共同研究もまた、この二つを基点として出発したのであった。

高専制度において図書館はどのように位置づけられているか。設置基準で、わずかに第17条（校舎等）第3号に保健室・学生控室とならんで図書館の名称があげられ第20条（図書及び学術雑誌）にきわめて漠然とした規定があるにすぎない。大学の場合はどうであろうか。現行文部省令の大学設置基準は、図書館をただ施設としてのみ捉える根本において高専設置基準と大差ないものの、そこには閲覧座席比率や図書および学術雑誌の最低蔵書冊数（部数）が定められている。また、大学基準協会による「大学図書館基準」（昭和27年6月17日）がある。さらに、文部省大学学術局による「国立大学図書館改善要項」（昭和28年1月）がある。それに、上述した目下の基準改正の動きである。

基準のことはさておき、大学ともなれば必ず附属図書館がある。ことに国立大学の場合は、学部長にならぶ部局長としての図書館長が任命され、分任管理官たる事務（部）長の総轄する図書館事務部が置かれるのは常識である。大学に準じた高等教育機関である高専において、未だその図書館の正式位置づけがなされず、事務組織としての係さえまだ確立されぬ現状は、早急に改善さるべき問題と言えよう。

本研究に伴なって、われわれは全国43の国立高専にその図書館概況を照合した。その結果、施設・組織・蔵書数等について、校ごとの差がきわめて著しいことが明らかとなった。この事実は、「高専図書館基準」ともいうべきものの作成が急を要することを示唆している。また

一面から見れば、高専図書館のすべてが、その解決を将来に委ねて白紙の状態にあることは、大学図書館改善の今日の到達点をふまえて、われわれが高専の図書館のあるべき姿を追求する上に、豊かな可能性をも期待させてくれるのである。

高専の目的が“教授”に定められていること（学校教育法第70条の２）によっても、高専図書館が、大学図書館の場合に比し undergraduate library（学生図書館）機能を主軸とすべきことは明らかである。学生用図書費の配当がきわめて少なく、各高専の蔵書が著しく教官研究用図書に偏している現状は、すみやかに改善さるべきと考える。教官研究用図書が多いわけでは決してない。ゼロから基本図書を整備するというのに、学生用図書費があまりにも少ないという事実なのである。大学設立認可の際の蔵書検査重視の例を思えば、その必要はまさに自明であろう。

新「大学図書館設置基準要項」において重点的にとりあげられた、総合的教養の場として図書館が果たすべき役割は、大学工学部の1.2倍もの専門科目授業時間をもつ高専において、特に大なるものがあると言えよう。中学卒業生を受け入れる高専の図書館が、学校図書館法の規制の外にあることも注目されねばならない。いわゆる読書指導は、高専図書館、いな高専教育全体において甚だ重大な問題であると考えられる。図書館管理の問題についても、ここでは、大学図書館とはまた違った性格をも要求されるであろう。

開校半年目の昭和38年９月に開設された本校図書室は学生諸君によって甚だ活発に利用されている。総合的教養の場としての本校図書室利用の現状は、われわれが知る限りのどの高校における利用よりも、はるかに積極的であるようだ。まだ課程の前半を終えようとしているに過ぎないが、受験から解放されて自由にスポーツ・クラブ活動・読書などにいそしむという、いわば本来普通高校にこそあるべき姿を、わが高専において見出すのはまことに好ましいことと思われる。これまで体得した良い習慣が、専門教科に集中すべき後半においてもさらに生かし続けられることを望むものである。しかし、われわれはここで満足してはならない。高専図書館はさらに進んで、技術者研究者としてのレファレンス、ドクメンテーションの基礎訓練を与える場でもなければならないであろう。

われわれ有明高専教官有志は、昨年の夏期休暇を前に≪高専の図書館はいかにあるべきか≫と題した共同研究を発起した。高専における図書館建設の促進には、まず諸基準に対する希望案の考察が第一と考えられたので、後掲の目次のように、“期待される高専生像”から管理や予算・施設にまで及ぶ広範囲な問題をとりあげた。

また、冒頭には「本校生の読書環境についての調査」および「本校図書室における過去満２年間の利用実績の統計と分析」を紹介したが、これは本研究の討議資料として新たにまとめたものである。調査によれば、彼らの読書はすでに中学時代から図書館によって支えられてきているが、本校にはいってさらに読書への目を開き、図書室とのつながりを一層密にしながら、本に対する強い関心と意欲をもって、多感な青年時代を送っているかに見える。特に国語科の授業における指定図書方式は学生の図書館利用の風潮をかなり助長しており、科目によって適用度は異なろうが、この制度は高専教育一般において大巾に採用さるべきと考える。一方家庭における読書環境を見てみると、ここには極めて貧弱なその実状が明らかにされるのであり、学生各人の学校図書室に対する依存度は極めて大きいと言わねばならない。

８月17日を第１回として全員の会議を重ねること８回その間各分科における話し合いも別に開かれた。そして一応の結果をまとめたものが本報告である。第４部管理の諸問題以下は、紙面の都合もあって将来に譲ることにし、ここに発表する分にも、まだまだ検討すべき未熟な段階にあるものが多い。しかし、問題は焦眉の間にある。これらの問題が、一日も早く全高専共通の場において検討されんことを願い、あえて発表する次第である。

本研究には、校長はじめ本校教官の多数が参加し、事務長ならびに図書主任以下の図書事務職員、それに統計面では学生９名の参加協力を得た。目次とともに各項の担当者名（うち○印が執筆者）を掲げ、ここに緒言を結ぶことにする。

昭和41年１月15日

有明工業高等専門学校
教務主事　甲　木　季　資

内容目次　ならびに　担当者名

（○印は執筆者）

Ⅰ　調査と統計

A）有明高専生の読書環境

1.　入学以前の読書、図書館利用について……（西）

2.　家庭の読書環境について（西）…… 8

3.　現在の図書室利用について（品川）……16

荒尾章三（体）　荒木三知夫（電）　井芹龍成（英）
甲木季資（電）　勝田正男（化）　川野広市（電）
木村剛三（機）　木本知男（機）　○品川尚司（英）
清水正夫（化）　下村龍太郎（機）　田中道雄（国）
永田達郎（機）○西　誠也（英）　樋口大成（化）

B）有明高専図書室の現況

1.　現在仮図書室概況（黒田）……24

2.　本校図書室の利用諸統計（田中）……26

3.　有明高専生の読書傾向(田中)……29

——分類別利用統計——

＜資料Ⅰ＞有明高専図書室双書類目録抄……45

＜〃 Ⅱ＞　〃　雑誌一覧……47

＜〃 Ⅲ＞よくよまれた本（3.の表C）……48

○田中道雄（国）○黒田芳則（図書主任）　倉本国弘・川崎征子（図書事務）

協力学生　有馬慎一（3M）　川崎義則（3M）
田中大一郎（3C）三宅満次郎(3M)
岩田　勉（2C）　奥園　明（2M）
後藤誠一（2M）　益田豊記（2M）

Ⅱ　高専教育と図書館

A）期待される高専生像……32

川野広市（電）　○清水正夫（学主）　寺本匡謨（体）
中山　尊（数）　永田達郎（機）　日野尚志（地）

B）高専カリキュラムの比較的考察……34

○甲木季資（電）

C）一般教養の場としての図書館……35

井上盟朗（数）　○樋口大成（化）　室永芳三（歴）

D）集中か分置か——工学専門書について——……35

○木本知男（機）　甲木季資（電）　清水正夫（化）

E）技術教育としてのレファレンス、ドクメンテーション……37

○清水正夫（化）

F）視聴覚サービス……38

酒見次郎（物）　○木村剛三（機）

G）文献複写サービス……39

○黒田芳則（図書主任）

Ⅲ　各教科授業と図書館利用

a. 現代国語　棚町知弥……39
b. 古　典　田中道雄……40
c. 歴　史　室永芳三……41
d. 地　理　日野尚志……42
e. 倫　理　日野尚志……〃
f. 数　学　井上盟朗……43
g. 保健体育　寺本匡謨……〃
h. 英　語　井芹龍成……44
i. 機械工学　下村龍太郎……〃
j. 電気工学　辻　一夫……45

＜附録＞「高専図書館設置基準」において考慮さるべき、基本的諸問題

棚町知弥（図書係教官）　○村上正男（事務長）

本＜附録＞は、紙面の都合で以下に目次のみを掲げるⅣ・Ⅴ両章に代るものである。

Ⅳ　高専図書館管理の諸問題

A）組織および運営

1.　学校組織上の図書館の位置づけ

——図書館長・図書館運営委員会など——

2.　事務部組織上の図書事務

3.　図書係の組織・事務分掌

B）図書館関係諸規程について

C）経費について

D）図書専門事務について

Ⅴ　高専図書館新営希望案

以　上

Ⅰ 調 査 と 統 計

Ⅰ-A 有明高専生の読書環境

調査の目的

この調査は本校教官有志による共同研究のテーマである"高専図書館のあるべき姿"を追究する出発点として、現本校学生の中学時代に於ける図書館との関係を尋ね、家庭に於ける読書環境を知り、そして、現在高専教育を受けている段階で、彼等の読書活動が、どの程度、図書館と密着しているかを探ろうとするものである。この調査の結果は、それ自身を今後の図書館運営、もしくは、高専教育全般についての参考にすると共に、本共同研究を進めるなかで、討論、研究の資料を提供しようという目的で行ったものである。

調査方法

調査方法は、無記名のアンケート形式によった。内容を大きく3部に分け 1) 本校入学以前の読書・図書館利用について 2) 家庭に於ける読書環境について 3) 現在の読書・図書室利用についてとし、列記された回答に○印をつけて答えるものと、記述するものとの2種類あり、それぞれの部が、更に4、7、14の小項目について尋ねられた。尚調査項目、文案については、数次にわたって分科会で検討され、最終的には全体会議で決定された。

調査対象

ほとんどの項目については、本校生全員（現在3学年353名）を対象として行った。このうち、アンケートを提出した学生は346人で、回収率98%であり、自宅通学生、寮・下宿生別と学年別の学生数は次の如くである。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	全	計
自宅通学生	70	58	53	181	346
寮・下宿生	44	63	58	165	

（内女子学生11名を含む）

調査期日ならびに集計方法

昭和40年9月16日、各ホームルームに於て、アンケート用紙を全学生に配布、記入上の説明をし、すぐに書ける項目については、その場で書かせ、他は家庭で調べて記入するよう家庭に持ち帰らせ、翌9月17日朝、各担任が、ホームルームで回収した。当日忘れて来た者に対しては、更に翌18日まで提出させ、その後、ホームルーム単位で集計をし、その結果を、本調査担当グループで学校全体として集計した。機械的に扱えない記述による項目については、最初から、このグループで集約した。最初の予定では、更に相関々係を調べ、或は追跡調査をして、もっと深く探究する積りであったが、予想外に時間をとられ、殆んど、一次調査に終ったことを残念に思う。ただ、第3部に於ては、1割の無作為抽出により分析を深め、不安な点については、全回答に目を通すよう努力した。

1. 本校入学以前の読書・図書館利用について

① a) 中学時代に感銘を受けた本

本校入学以前の読書・図書館利用がどのように行われていたか、その実態を正しく摑むことは困難なことであろうが、高専に於ける今後の読書指導の上に、その概略を知ろうというのが目的である。そこで、先ず、この項では、中学時代に感銘を受けた図書名を挙げさせ、次に、その本はどこにあった本で、又それはどういう動機で読むようになったかを尋ねて見た。同じ質問を第3部の⑨でもしている。中学時代と、高専に入学している現在とを比較して見ようという試みである。中学時代に感銘を受けた図書としては、74%にあたる296人が書名を挙げているが、下村湖人の「次郎物語」を筆頭に、夏目漱石の「坊つちやん」、山本有三の「路傍の石」、島崎藤村の「破戒」と続き、管見の他の読書調査に於ける結果と、ほぼ類似した傾向を示している。特に「次郎物語」は、3学年を通して、一番多く学生に感銘を与えているようだ。

1—① a表（中学時代に感銘を受けた本をあげなさい）

1	次郎物語	21 (6.1%)
2	坊つちやん	13 (3.8〃)
3	路傍の石	8 (2.3〃)
4	破　戒	5 (1.4〃)
〃	車輪の下	5 (1.4〃)
6	ロビンソン漂流記	4 (1.2〃)
〃	野菊の墓	4 (1.2〃)
〃	戦争と平和	4 (1.2〃)
〃	大　地	4 (1.2〃)
〃	レ・ミゼラブル	4 (1.2〃)

① ℓ) 図書館の本はどの程度読まれていたか

中学時代に感銘を受けたとして挙げられた117冊の本が、何処の本であったかという問に対して答えられた回答のうち、66%は、学校図書館の本と答えている。自分で買った本、家にあった本と答えた者は、合せて、19.9%にすぎない。中学校に於ても、生徒の読書の面に於ける図書館の役割は、非常に大きいといわねばなるまい。

制度的には異るが、旧制中学時代に於ける図書館の比重はこのように大きくはなかったようだ。戦後、学校図書館法が制定され、各小中学校に図書館(室)が設立され、閉架式から、開架式に変っただけでも、画期的であったが、その後、学校図書館を中心とした学習、読書指導が活潑に行われるようになり、生徒と図書館の関係がより密接なのもになっているのは当然のことであろう。感銘を受けた本の中に占める図書館蔵書の比率66%と、家庭蔵書に相当する比率20%は、そのまま中学時代の読書に於ける図書館・家庭の比重を示していると見られないだろうか。

1—①ℓ表（それはどこの本でしたか）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	全	%
学校図書館の本	59	48	42	149	66.0
自分で買った本	9	7	10	26	10.6
家にあった本	8	8	5	21	9.3
友達から借りた本	5	5	6	16	7.1
公共図書館の本	2	2	2	6	2.8
貸本屋から借りた本	2	1	2	5	2.2
学級文庫の本	3	0	0	3	1.3

① c）読んだ動機

感銘を受けた本を読んだ動機として、最も多く出て来た答は、"図書館で見かけて"であった。過半数の55%がそのように答えている。他からの働きかけが動機となる「親兄弟のすすめ」「先生のすすめ」「友人のすすめ」などがそのあとに続くが、いずれも6%台であり、1位との差は非常に大きい。閉架式だった旧制中学時代では、恐らく「先生のすすめ」「友人のすすめ」「親兄弟のすすめ」がもっと大きな比率を占めていたのではなかろうか。たしかに、開架式の現在では、図書館へ出入りする習慣をつくることが、そのまま、読書指導に通ずる。図書館に蔵書があるというだけでも、生徒はかなり自発的に、というよりも、ごく自然に、目に見えるものを手にとって読もうとする。「その他」の動機を見てもその中には「何となく読みたかったから」というのが10名あったし、又、「家にあったので」というのが3名あり、「図書館で見かけて」「書店で見かけて」まで含むと、143名となり比率も67%となる。中学時代には、本が目に写るということが最大の動機となっていたといえよう。以上の動機に対し、「授業で使った」「劇の台本として使ったので」と答えた者が、それぞれ1名宛あり「映画、テレビを見て」と答えた者が9名あった。この項目については、さらに第3部の⑩と比較して見ると、本校に入学してからの変化がうかがい知られて甚だ興味深い。

1—① c表（その本を読んだ動機は何ですか）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	全	%
図書館で見かけて	49	40	30	119	55.0
親兄弟のすすめ	3	6	6	15	6.9
先生のすすめ	4	7	3	14	6.5
友人のすすめ	8	4	1	13	6.0
書店で見かけて	6	3	4	13	6.0
新聞雑誌を見て	2	1	3	6	2.8
映画を見て	1	0	5	6	2.8
テレビを見て	3	0	0	3	1.4
そ の 他	7	9	12	28	12.8

② a） 中学時代の読書への反省

①に於て、学生時代に於ける読書と図書館の関係を瞥見したが、学生自体は、中学時代の読書をどう考えているだろうか。中学時代をふりかえって、「よく読書出来たと思うか」という問に対しては、「よく出来た」と答えた者が15.7%、「あまりよく出来なかった」と答えた者が41.7%、「ほとんど出来なかった」と答えたものが42.5%であった。「ほとんど出来なかった」と答えた者と、「あまりよく出来なかった」と答えた者を合せれば平均84.2%となるが、学年別に見ると、一、二年生が82%、80%になるのに対し、三年生は90%に達している。

1—②a表（中学時代をふりかえって、よく読書出来たと思いますか）

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
ほとんど出来なかった	34	31.2	57	49.2	50	47.2	141	42.5
あまりよく出来なかった	55	50.5	38	32.7	45	42.5	138	41.7
よく出来た	20	18.4	21	18.2	11	10.8	52	15.7

② ℓ）よく読書出来なかつた理由

2 a）に於て、「殆んど出来なかった」と答えた者と「あまりよく出来なかった」と答えた者に対して、その理由を尋ねた。次の表は、その回答をまとめたものである。受験勉強がかなり影響しているだろうと予想したのに勉強のため時間がなかったと答えた者は14.2%の低率であり、それに反し、読書に対する関心や興味がなく、又本を読もうという意欲に欠けていたと答えた者が、約半数もあったのは意外であった。「図書館の設備が悪く、興味ある本も少かった」と答えた者（12.7%）と、「読書指導もなく、読書する雰囲気もなかった」と答えた者（4.1%）は、中学時代の図書館、読書指導に対して、不満をのべている者と理解してよかろう。また、テ

レビや漫画ばかり見ていたと答えた者も、僅か3名であり、テレビの読書に対する影響はここでは否定されている。読書出来なかった理由を、いわば、外的要因だけではなく、内的原因として、かなり反省しているのは、中学時代、時間的にも、能力的にも、もっと本を読む余裕を持っていたという証になるようにも思える。しかもこの内省的傾向は、2 a）にも見られたように、三年生に於て、顕著のようである。失われた過去に対する反省の強さは、そのまま現在に於ける読書意欲の強さを示すものかも知れない（利用諸統計参照）。そして、この読書意欲こそ、凡ての条件に先んじて、読書活動の原動力となるものである。

1—②ℓ表（中学時代をふりかえってよく読書出来なかった理由は何ですか）

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
読書に対する意欲、関心、興味がなかった	39	46.5	41	45.1	48	51.6	128	47.8
(受験)勉強のため読書の時間がなかったし、考えもしなかった	13	15.5	13	14.3	12	12.9	38	14.2
図書館の設備がよくなく、興味ある本も少かった	4	4.7	23	25.3	7	7.5	34	12.7
運動や遊びに忙しかった	10	11.8	4	4.4	14	15.1	28	10.4
クラブ活動で時間がなかった	7	8.3	4	4.4	3	3.2	14	5.2
読書指導もなく、また読書の雰囲気もなかった	2	2.4	5	5.5	4	4.3	11	4.1
そ　の　他	9	10.8	1	1.1	5	5.4	15	5.6

③　読書の場所

「あなたが、勉強や読書の一番よく出来たと思う場所はどこでしたか」という質問に対しては、「自分の家」と答えた者が 83.2%で、「学校図書館」と答えた者は、僅かに、 4.6%にすぎなかった。このことは、表1—①ℓ、1—①cと考え合せると、中学時代の彼らに対する図書館の役割は、本を貸すという働きが、主となっていたといえないだろうか。学校の教室が一番落着いて勉強出来たという学生が8.2%で、学校図書館の4.6%より大きい比率を示している。もっとも、現学生の中学時代は最高の急増期にあたり、図書館に余裕のある場所をとることも、質の高い読書雰囲気を作ることも、困難なことであったろうと思われる。又、中学生の読書は殆んど読物中心となるだろうから、時間や場所の制約はあまりなく、従って、一番よく読書の出来た場所が、生活の本拠である自宅となったのは当然かも知れない。併し、本を読ませることと同様に、図書館を利用した学習を習慣づけることは、将来、後期中等教育、高等教育を受ける生徒にとっても、そのまま社会人となる生徒にとっても必要なことであろうから、それにふさわしい閲覧室の条件整備をすることは、中学校図書館にとっても大切なことと思われる。尚この項については第2部の⑦など（13～17ページ）を参照されたい。

1—③表（勉強や読書の一番よく出来た場所はどこでしたか）

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
自分の家	88	83.0	89	80.2	92	86.0	269	83.2
学校の教室	5	4.7	14	12.6	7	6.5	26	8.2
学校図書館	10	9.4	4	3.6	1	0.9	15	4.6
公共図書館	1	0.9	2	1.8	4	3.7	7	2.2
その他	2	1.9	2	1.8	3	2.8	7	2.2

以上①～③を通して言えることは、大部分の学生が、中学時代余りよく読書出来なかったと反省しているようであるが、しかし、それでも読書の中心的役割を果したのは、学校図書館であり、図書館の蔵書によって読書活動は支えられていた。現在では、図書館の蔵書が、家庭の蔵書の肩代りをしつつあるといえるかも知れない。従って、一般に図書館利用の習慣は、一応中学時代に身につけられていると考えてよかろう。また、図書館利用について必要な公徳心についても、中学時代に既に注目に値するものを植えつけられている。完全開架方式をとっている本校図書館に於て、この3年間、1冊の本も紛失していないというのは中学時代に培われた素地の上に築き上げられた、本校図書館教育の成果と見てよかろう。併し、一方、落着いて勉強したり、読書したり出来る図書館の整備は不充分のようであり、図書館は専ら本を貸す所という先入観が、かなり学生の頭に浸透しているかも知れない。自分の本でないと、落着いて読めないという学生は少いようであるが（3—⑧参照）、図書館ではどうも落着いて勉強したり、読書したり出来ないという学生の教育は、今後図書館の条件整備と相俟って、考慮して行かなければならない点であろう。また中学時代の読書についての反省からすれば、困難な客観情況のなかでも、中学時代に、すでに、能力のある生徒達に対しては個別の読書指導を施し"見せる読書指導"から積極的に"読ませる読書指導"へ発展させ得る可能性を暗示しているようにも思える。

④中学時代に読んだ本

最後に、参考のため、日本学校図書館協議会必読図書（中学の部）の50冊について、中学時代の読書状況をしらべて見た。1—④表はこれを示す。尚、学年別に見ると延冊数及び一人当り冊数は次の如くで、ここでは、学年差は殆んど認められない。但し、本表は昨年秋に改訂された新表によったので、本校在学生の中学時代の表と幾分ちがいのあることを附記する。

1年	387冊	1人当り	3.4冊
2年	443冊	〃	3.7冊
3年	392冊	〃	3.5冊

1—④表（次の表の中から中学時代に読んだ本をえらびなさい）

順	書名	冊	%	順	書名	冊	%
1	シャーロック ホームズの冒険	140	40.5	25	ヴィーチャと学校友達	7	2.0
2	夏目漱石集	112	32.4	27	橋のない川	6	1.7
3	エイブ リンカーン	99	28.6	〃	名探偵カッレくん	6	1.7
4	次郎物語	84	24.3	29	チャップリン	5	1.4
5	ギリシャ・ローマ神話	70	20.2	30	黒部ダム物語	4	1.2
〃	ビルマの竪琴	70	20.2	〃	原爆の子	4	1.2
7	山本有三名作集	69	20.0	〃	チボー家のジャック	4	1.2
8	二宮尊徳	67	19.4	33	赤毛のポチ	3	0.9
9	あしながおじさん	61	17.6	〃	こぐま星座	3	0.9
10	二十四の瞳	53	15.3	〃	星の王子さま	3	0.9
〃	アンネの日記	53	15.3	〃	白き処女地	3	0.9
12	車輪の下	48	13.9	〃	夢を掘り当てた人	3	0.9
13	水滸伝	39	11.3	38	田宮寅彦集	2	0.6
14	島崎藤村集	37	10.7	〃	オオカミに冬なし	2	0.6
15	石川啄木名作集	29	8.4	〃	君達の天分を生かそう	2	0.6
16	ガンジー伝	22	6.4	〃	日本人の心	2	0.6
17	ビーグル号航海記	19	5.5	42	あらしの前あらしのあと	1	0.3
18	キューポラのある町	14	4.0	〃	中勘助・野上弥生子集	1	0.3
19	人間の歴史	13	3.8	〃	星の牧場	1	0.3
20	埋もれた世界	12	3.5	〃	サル物語	1	0.3
21	エベレストを目指して	11	3.2	〃	信濃の民話	1	0.3
〃	君達はどう生きるか	11	3.2	47	うた時計	0	
23	老人と海	9	2.6	〃	父と母の歴史	0	
〃	ヒマラヤの旅	9	2.6	〃	湖のおいたち	0	
25	アイヌ童話集	7	2.0	〃	森の新聞	0	

上記の本の中で、①aに於て、"感銘を受けた本"として挙げられているものをえらび、その本を読んだ者のうち何名が感銘を受けたかをしらべて見ると、次のような結果が出た。選んだ本は、14位の島崎藤村集までをとる。但し、夏目漱石集は「坊つちやん」山本有三集は「路傍の石」島崎藤村集は「破戒」と見做す。

1.	次郎物語	25.0%
2.	島崎藤村集	13.5〃
3.	山本有三集	11.7〃
4.	夏目漱石集	11.6〃
5.	車輪の下	10.4〃
6.	水滸伝	7.7〃
7.	アンネの日記	5.7〃
8.	ビルマの竪琴	4.3〃
9.	シャーロック ホームズ	2.9〃
10.	二十四の瞳	1.9〃
11.	二宮尊徳	1.5〃
12.	エイブ リンカーン	1.0%

「ギリシャ・ローマ神話」と「あしながおじさん」は、それぞれ70人61人が読んでいるが、感銘を受けた本として挙げた者はいない。

（西 誠也）

2．家庭の読書環境調査

（読書環境としては、父母の職業、教育程度、家庭の経済状態等も大きな要素となると思われるが、これらの調査は、学生の生活実態調査と共に、別の機会に譲り、本調査では、狭い意味の読書環境に限定した。ここでいう読書環境とは、教養的家庭環境、つまり"読書にかかわりのある世界"の謂である。しかし、ここで尋ねられた項目によっても、上記の状況は概略推定されると思う。テレビ・ラジオ等のマスメディアについては、学生の読書活動に影響する所大きいと考えて、調査項目に加えた。尚、この部については調査結果の信頼度を高

めるため、主として、自宅通学生のみについて、集計したので、全学生の読書環境調査としては、不充分なものであることを、始めにことわっておく。

① 蔵書しらべ

この場合の家庭蔵書としては、学生ならびにその兄弟の所有する教科書、学習参考書、問題集などを除外して考えた。分類の仕方は、N.D.C. の項目に準じ、全集、単行本、文庫本のそれぞれについて、各人の判断により分類記入させた。従って、何とか、家庭の蔵書を正確につかみたいという期待にもかかわらず、表の数字が、そのまま、家庭蔵書の正確な数を示しているという確信は持てないが、学生のアンケートに答えている真摯な態度から判断して、大方の傾向を示していると思う。他と比較すべき何らの資料も持合わせないのであるが、一瞥して感ずることは、全体的に非常に少いということである。単行本、文庫本を併せて平均すれば1世帯当り約25冊、全集は0.7セットである。分類別に見れば全集、単行本、文庫本を通して、文学が、絶対多数を占めている。工学関係の専門書は、恐らく、特殊な家庭を除いては、学生の手持ちの蔵書に限られると思われるが、四・五年生のいない現在では、まだ目立っていない。又、学年別に見ると、学年が高くなるにつれて、蔵書数が増えているのは、学生本人の蔵書の増加と考えるべきであろうか。その推測を裏付けるものとして、一例を文庫本にとれば、次のような事実がある。国語科の教材、指定図書、或は、推薦図書として、学生が、校内売店より購入した岩波文庫の冊数は次のようである（昭和38年4月より昭和40年7月まで）。

恩讐の彼方に	72冊	出家とその弟子	63冊
思出の記（上）	28	暗夜行路（前）	10
〃 （下）	27	〃 （後）	8
藤村詩抄	70	羅生門	19
破戒	129	侏儒の言葉	10
田舎教師	77	その妹	10
三四郎	78	イタ・セクスアリス	20
こゝろ	59	李家荘の変遷	13
宣言	79	計	792冊

にごりえ・たけくらべ 20冊

従って、2—①表中の文庫本文学の項総数1577冊のなかに、上の792冊の約6割（自宅通学生を全学生の6割と見る）474冊程度は含まれていることになり、これは家庭蔵書の文庫本のうち、4分の1を占めることになる。このように、家庭蔵書のうち、学生個人の蔵書の占める割合が非常に大きいということは、以下数項目の調査に見られる家庭の読書環境を考え合せても想像されよう。ただ学年間の差が、単に学年進行に伴うものか、より多く家庭の経済的環境によるものであるかは、一つの問題点として残ろう。

2—①表 家庭の蔵書

分類	全集				単行本				文庫本			
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	全	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	全	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	全
哲学			5	5	13	40	80	133	14	7	27	48
歴史	3		10	13	27	58	58	143	8	4	31	43
社会	1	3	3	7	4	15	20	39	4	5	23	32
自然	6		4	10	2	4	97	103	5	3	17	25
工業	1		2	3	155	12	96	263				
芸術	1		6	7	5	6	332	343	5		4	9
語学	1	1	1	3	10	42	94	146	1	4	23	28
文学	27	21	27	75	263	444	535	1242	294	515	768	1577
その他	3		2	5	22	66	139	227	12	15	44	71
計	43	25	60	128	501	687	1451	2639	343	553	937	1833

② a）家庭で読まれている新聞

アンケートのとり方は、用紙に12種類の商業新聞名を書き、その中からえらばせ、それ以外の新聞は、その他の欄に、書き込ませる方法をとった。このため、宗教関係や政党関係等の紙名は、殆んど出てこなかったのかも知れない。1番読まれているのは西日本新聞の82部であり、これは朝日、毎日、読売の3中央紙の合計部数83に匹敵する。このあと、熊本日日新聞、夕刊フクニチ、大牟田日日新聞と地元紙が続いている。英字新聞では、The Mainichi, Asahi Evening News, Student Times 各1部が読まれている。次の表は上位5種類の新聞名と部数をしめすが、%は全部数に対する比率である。

2—②a表あなたの家庭でとっている新聞はどれですか

順	新聞名	I	%	II	%	III	%	全	%
1	西日本新聞	32	45.8	19	32.8	31	58.5	82	45.3
2	朝日新聞	15	21.4	20	34.5	11	20.8	46	25.5
3	毎日新聞	9	12.9	4	6.9	7	13.2	20	11.1
4	読売新聞	6	8.6	6	10.0	5	9.4	17	9.4
5	熊本日日新聞	2	2.9	6	10.0	2	3.8	10	5.5

②ℓ）家庭でとつている雑誌

家庭で購読されている雑誌についても、新聞と同じ要領でしらべた。挙げられた雑誌は、全部で62種類になるが、比較的多くの家庭で読まれているものを10位まであげた。中心になっているのは、婦人雑誌である。総合雑誌が殆んど読まれていないのが目につく。その他学生が購読していると思われる雑誌では、高一コース 5、高一時代 3、高二コース 2、English Age 2、螢雪時代 1、英語研究 1、機械技術 1、モーターファン 1、模型工作 1、科学 1、新電気 1、C.Q.ハムラジオ 1、等が考えられるが、多くの学生は恐らく学校の図書室で読んでいると思われる。

2—②ℓ表(あなたの家でとっている雑誌はどれですか)

順	雑誌名	I	II	III	全
1	主婦と生活	6	6	4	16
2	暮しの手帳	2	4	6	12
3	主婦の友	1	7	3	11
4	文芸春秋	3	3	4	10
〃	婦人倶楽部	2	3	5	10
〃	婦人公論	4	4	2	10
7	リーダーズダイジェスト	3	1	5	9
8	平凡	4	1	3	8
9	明星	1	1	5	7
10	高校英語研究	2	2	2	6

②c）家庭で購読されている新聞の部数、雑誌の冊数

学生の家庭環境を知る上に、比較的確かな資料といえないだろうか。新聞では、1部とっている家庭が82%で大多数であるが、全然とっていない家庭が5.1%もある。又雑誌では、1冊もとっていない家庭が通学生の半数にあたる48.1%もあり、1冊とっている家庭が31.7%である。ここでも、学年による差が特に0の項で目につく。

2—②c表（あなたの家庭で購読される新聞の部数、雑誌の冊数はいくつですか）

	0					1部					2部					3部					以上				
新聞	1	2	3	全	%	1	2	3	全	%	1	2	3	全	%	1	2	3	全	%	1	2	3	全	%
	4	4	1	9	5.1	58	45	43	146	82	5	8	9	22	12.4	1	0	0	1	0.6	0	0	0	0	0
雑誌	0					1部					2部					3部					以上				
	1	2	3	全	%	1	2	3	全	%	1	2	3	全	%	1	2	3	全	%	1	2	3	全	%
	36	31	18	85	48.1	21	16	19	56	31.7	6	4	9	19	10.7	5	4	2	11	6.2	1	2	3	6	3.4

③辞典、事典類の普及率（この項全員対象）

a）国漢辞典

学生の所有する、又は学生の家庭にある辞典は34種類にわたり、535冊となっているが、そのうち、最も普及しているものを10種類えらぶと、次の表のようになる。

2—③a表（あなたの又はあなたの家庭にある国語辞典はどれですか）

順	辞典名	I	%	II	%	III	%	全	%
1	岩波国語辞典	66	57.8	75	62.0	25	22.5	166	48.0
2	明解国語辞典	16	14.0	18	14.9	22	19.8	56	16.2
3	明解古語辞典	18	15.8	14	11.6	19	17.1	51	14.7
4	角川漢和中辞典	12	10.5	8	6.6	18	16.2	38	11.0
5	旺文社古語辞典	7	6.1	21	17.3	9	8.1	37	10.7
6	角川古語辞典	9	7.9	6	5.0	21	18.9	36	10.4
7	角川国語辞典	5	4.4	14	11.6	13	11.7	32	9.2
8	旺文社国語辞典	10	8.8	8	6.6	9	8.1	27	7.8
9	広辞苑	3	2.6	8	6.6	10	9.0	21	6.1
10	広辞林	8	7.0	1	0.8	6	5.4	15	4.4

更に国語辞典、古語辞典、漢和辞典に分け、学生の家庭に於て利用出来る国語辞典の分類別普及率を示すと、次のようになる。

種　類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	全	%
国語辞典	105	117	80	302	87.2
古語辞典	53	58	73	184	53.2
漢和辞典	12	9	28	49	14.2

ℓ）英語辞典

学生の使用している辞書36種類の中から、普及率の高いもの10種類を挙げると、次のようになった。

2—③ℓ表（あなたの又はあなたの家庭にある英語の辞書はどれですか）

順	辞　典　名	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	三省堂コンサイス英和辞典	26	22.8	34	28.1	51	45.9	111	32.0
2	旺文社エッセンシャル和英辞典	59	51.8	21	17.4	24	21.6	104	30.0
3	旺文社エッセンシャル英和辞典	63	55.3	15	12.4	21	18.9	99	28.6
4	三省堂コンサイス和英辞典	17	14.9	18	14.9	42	37.9	77	22.2
5	旺文社シニア英和辞典	8	7.0	58	47.9	4	3.6	70	20.2
6	三省堂新クラウン英和辞典	22	19.3	19	15.7	21	18.9	62	17.9
7	三省堂カレッジクラウン英和辞典	7	6.1	9	7.4	6	5.4	22	6.4
8	研究社大英和辞典	2	1.8	3	2.5	8	7.2	13	3.8
9	研究社簡約英和辞典			3	2.5	9	8.1	12	3.5
10	研究社ポケット英和辞典					11	9.9	11	3.2

更に英語辞典を3分類し、英和辞典、和英辞典、英々辞典に分けてそれぞれの普及率を見ると、

英和辞典　429冊　123.0%
和英辞典　198冊　57.2%
英々辞典　19冊　5.5%

となる。

又中辞典以上の大型辞典を拾って見ると、66冊となるが、なかには複本を持っている学生もあるので、家庭に於て、中辞典以上の辞書を利用出来る学生数は58名となる。それは、全学生の17.3%にあたる。

2—③ℓ表に於ける、ポケット版英語辞典の学年別によるムラは、入学時の推薦によるものであろう。中辞典以上の大型辞典、及び、英々辞典の所有数は、学年進行に比例して増加している。

その他の外国語辞典としては、ドイツ語辞典が多く、フランス語は、全体で3冊、スペイン語が1冊散見される。ドイツ語は現在三年生が履習しているので、三年生は殆んど所有している。種類としては、岩波独和辞典、木村・相良独和辞典が断然多い。

c）百科事典類

事典の種類、組数、もやはり学年によってかなりの差が見られる。即ち三年は12種類で27組、二年は7種類で18組、一年は7種類で12組である。下の表は主な百科事典とその組数を示す。

2—③c表（あなたの家庭にはどんな百科事典がありますか）

事　典　名	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
平凡社国民百科事典	3	2.6	9	7.4	5	4.5	17	4.9
小学館日本百科大事典	3	2.6	2	1.7	7	6.3	12	3.5
平凡社世界大百科事典	2	1.8	1	0.8	3	2.7	6	1.7
保育社学習百科大事典			1	0.8	3	2.7	4	1.2
三省堂百科事典			2	1.7	1	0.9	3	0.9

④a）**家庭の年間図書費**

記入上の注意として、この項目に於ける図書費とは、新聞、教科書、問題集の代金を除いたものとして考えさせ、家庭で相談して、書くよう指示した。しかし、この項についても、家庭蔵書と同じように数字の信頼性には疑問があるが、一応学生の回答をそのまま尊重したい。それによると、半数以上が月額500円以下の図書費となっている。家族構成人員が平均5.5人（学生全数の1割抽出による）であるから、大体1人あたりの図書費は、月100円以下となる。

2—④a表（あなたの家庭の一年間の図書費は大体いくらですか）

年　額	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
6,000円以下	42	65.3	30	60.0	24	48.0	96	58.5
12,000 〃	11	17.2	14	28.0	16	32.0	41	25.0
18,000 〃	2	3.2	2	4.0	4	8.0	8	4.9
24,000 〃	4	6.0	2	4.0	2	4.0	8	4.9
30,000 〃	3	4.5	1	2.0	1	2.0	5	3.1
60,000 〃	2	3.2	1	2.0	3	6.0	6	3.7

④ℓ）学生1人当りの年間図書費

記入上の注意は④aと同じである。

調査の結果では、42.8%の自宅通学生が、月額100円以下の図書費となっている。即ち、二つ星の岩波文庫本が、1冊か2冊買える金額である。雑誌でも、100円で買えるものは、あまりあるまい。さらに、31.1%が、月額100～300円となっているので、両方合計すると、73.9%が、毎月300円以下の図書費ということになる。学生達は相当に苦労しながら、勉強していると云えるようだ。

2—④ℓ表（自宅通学生の年間の図書費）

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1,200円以下	45	46.5	55	55.0	27	27.3	127	42.8
3,600 〃	33	34.1	27	27.0	32	32.4	92	31.1
6,000 〃	11	11.3	17	17.0	25	25.3	53	17.9
12,000 〃	8	8.3	1	1.0	10	10.1	19	6.4
12,000円以上					5	5.0	5	1.7

ここで少し見方を変え、学年別の対比をして見ることにしよう。2—①表、2—②c表、2—④a表、2—④ℓ表に於て学年差があり、特に三年生と他の2学年との間に、かなり差異があるということが認められてきたがこの差は、特に、低辺の部分に於て差が著しいようである。2の②cに於ては、新聞をとってない家庭が、三年では2%であるのに、一、二年の方ではそれぞれ6%、7%である。又、雑誌を一冊もとっていない家庭が、三年では35.3%であるのに、一、二年生の方ではそれぞれ52.2%、54.4%である。

2の④aに於ては、家庭の年間図書費が、6,000円以下のところで、三年では48%であるのに一、二年がそれぞれ65.3%、60.0%である。

2の④ℓに於ても、学生1人当りの年間図書費1,200円以下のところが、三年では27.3%となっているのに、一、二年ではそれぞれ、46.5%、55.0%である。

このようなことは、自宅通学生のみに云えることであろうか。ちなみに、この項についての寮生の調査を見て見よう。下表は寮生の年間図書費をあらわす。

2—④c表（寮生の年間図書費）

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1,200円以下	20	54.0	31	60.8	14	27.5	65	46.7
3,600 〃	15	40.5	10	19.6	16	31.4	41	29.8
6,000 〃	1	2.7	9	17.6	16	31.4	26	18.6
12,000 〃	1	2.7	1	2.0	4	7.8	6	4.3
12,000円以上					1	2.0	1	0.7

ここでも、自宅通学生の調査と同じ傾向が見られる。つまり、全体としてみれば、約半数の46.7%が、やはり月額100円以下の図書費だと答えているが、その内訳は年間1,200円以下の項で三年は27.5%となっているのに、一、二年ではそれぞれ54.0%、60.8%である。

この第2部の各項目を通じて見られる、各学年間の差は、学年進行に基くものか、それとも、家庭の読書環境に基くものか簡単に断定することは出来ないが、上述の事実と、さらに2—③c表、2—⑤表等を勘案すると、より家庭の読書環境に起因しているのではないかと想像される。本校が2年次校として出発した頃と、現一年生が入学して来た頃とを比較すると、高専の学校数も増え競争も緩和されて来ており、応募学生の居住地域もせまくなってきたのは事実である。それを表わすものとしては、冒頭、調査対象の項で示した表のように、この3年間に、自宅通学生と寮・下宿生の数は逆転している。このことと学生の家庭読書環境に於ける格差と何らかの関係があるのではないかという想定も成立つ。若し、そうだとすれば、学生の読書活動は、将来ますます学校図書館に依存する傾向にあるといえよう。

⑤テレビ、ラジオ等の普及率

テレビ、ラジオを中心とした視聴覚器材が、どの位、家庭に普及しているかを見てみよう。平均して最も普及しているのはテレビの88.4%であり、ラジオ、トランジスタラジオ、プレヤー(電蓄)、テープレコーダー、ステレオの順となる。上述の図書費、雑誌の購入状況等を見たあとでは不釣合なほど高い普及率のような気がする。視聴覚器材の普及は、購入費のほか相当の維持費を伴い、特にプレヤー（電蓄）、ステレオ、テープレコーダー等には、レコード、テープがなければ意味がない。従って、この面に於ける教養娯楽費の支出はかなり多くなっていると思われる。また台所の電化が進み、洗濯機、冷蔵庫、掃除機といった電気製品が普及していく段階では、学生の、教科書、参考書以外の狭義の図書費が、そのしわよせを受けているのではないかと考えられる。一方、学年別に見ると、ステレオ以外は、いずれも三年生の家庭が一番普及率は高い。そして、全体として最も普及率の高いテレビ、ラジオでは、二年生が他の2学年に比して、かなり低くなっている。

2—⑤表（次のもののうち、あなたの家庭にあるものはどれですか）

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
テレビ	63	90.0	49	72.1	48	90.7	160	88.4
ラジオ	53	75.7	46	67.7	43	81.2	142	78.4

トランジスタラジオ	37	52.8	37	54.5	39	73.7	113	62.4
プレヤー(電蓄)	26	37.1	20	29.4	23	43.4	69	38.1
テープコーダー	15	21.4	16	23.6	14	26.4	45	24.9
ステレオ	7	10.0	4	5.9	2	3.8	13	7.2

⑥ テレビ、ラジオの視聴時間

眼前に入学試験のない高専学生は、一方のびのびと学生生活を享受出来る恵まれた立場にある反面、自主的に自分の生活時間を規制して行かないと、安易な生活に流れ、不勉強になる危険性がある。ところで、テレビ、ラジオが一体どの程度学生の生活に影響を与えているか、1日の視聴時間をしらべて見た。

調査によると、1時間30分～2時間視聴している者が全学生の32.8%で一番多いが、2時間以上という者も、22.5%ある。従って本校学生の55.3%が1時間30分以上テレビ、ラジオを視聴していることになる。学年別に見ると、三年生が、やはり上級生だけあってか、僅かながら視聴時間は短いといえよう。

次に、自宅通学生と寮生に分けて、視聴時間を対比して見ると、両者の間には、意外に大きな開きがあることがわかった。即ち、寮生のうち、62.7%以上が、1時間30分以下の視聴となっているのに、自宅通学生は、71.9%以上が、1時間30分以上の視聴となっている。また、寮、自宅の双方に於て、三年生が一番視聴時間が短い点では共通しているが、それでも両者では、2時間以上視聴する者が、それぞれ9.2%と31.4%であり開きは大きい。寮では二年生が一番長く、視聴しており、1時間30分以上のものが46.8%ある。自宅では、一、二年とも大体同じ程度であるが、それぞれ、74.6%、77.3%の学生が、1時間30分以上視聴している。

全学生の内46%にあたる寮生は、市の郊外にある2棟の寮から、毎日、約500米離れた学校に通学し、往復にも近所にも、何ら娯楽になるような施設はない。従って、唯一のたのしみは、寮内でテレビ、ラジオを視聴し、新聞雑誌、漫画を見ることにあるようだ。そういう意味では、テレビ、ラジオは、彼等の生活に、不可欠のものとなっているといわねばなるまい。然るに、上述の結果を見たのは、寮生にとって、テレビ、ラジオは唯一の娯楽でありながら、テレビのある談話室が、別置され、寮の規則によって、視聴時間の制約を受けているのに対し、自宅通学生の場合は、殆んど、無制限といってよく、自分の意志によって、制限を加えなければならない。2—⑤に於てふれるように、⅔の自宅通学生が、個室を持っていない状況下では、(個室を持っていても、狭い家屋では、大差ないかも知れないが)非常にむつかしい問題を包含している。

2—⑥a表 (寮生のテレビ・ラジオの視聴時間)

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
30分以下	6	14.3	9	14.5	9	16.7	24	15.2
30分～1時間	14	33.3	13	21.0	15	27.8	42	26.6
1時間～1時間30分	7	16.7	11	17.7	15	27.8	33	20.9
1時間30分～2時間	13	31.0	20	32.3	10	18.5	43	27.2
2時間以上	2	4.8	9	14.5	5	9.2	16	10.1

2—⑥b表 (自宅通学生のテレビ・ラジオの視聴時間)

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
30分以下	1	1.5			1	1.9	2	1.2
30分～1時間	6	9.0	5	9.4	8	15.7	19	11.1
1時間～1時間30分	10	14.9	7	13.2	10	19.6	27	15.8
1時間30分～2時間	28	41.8	21	39.6	16	31.4	65	38.0
2時間以上	22	32.8	20	37.7	16	31.4	58	33.9

テレビ、ラジオの視聴が、学生にとって、どのような影響を与えているかについて論ずるには、視聴時間とともに、見られている番組も検討しなければ片手落ちとなるだろうが、ここでは特に、読書時間に関わる視聴時間に限り、番組については、附として、"学生に好まれて視聴される番組"をそれぞれ、31位、19位までをあげ凡その傾向を示すことに止めた。

⑦ 勉強部屋

調査1の③で「中学時代をふりかえって、勉強や読書の一番よく出来たと思う場所はどこですか」という設問に対して、学生の83%は、自分の家で、一番よく勉強出来たと答えていた。「現在、あなたが、勉強するとき、一番落着いて出来るのはどこですか」という質問に対して、自宅通学生の回答は次の如くである。

2—⑦a表 (あなたの一番落着いて勉強出来るのはどこですか)

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
自宅	62	86.1	47	81.0	47	94.0	158	86.8
図書室	4	5.6	7	12.1	3	6.0	14	7.7
教室	6	8.3	4	6.9			10	5.5

即ち、全体の86.8%が、自宅と答え、特に三年生では

94%の高率を示している。図書室（本校の場合は図書室と呼ぶ）と答えた学生は、僅かに7.7%に過ぎず、他に、教室と答えた者が、5.5%あった。要するに、殆んどの学生が、自宅に於て、一番落着いて読書出来ると云っている。

ところで、自宅通学生の家庭に於ける、勉強部屋はどうなっているだろうか。

2—⑦ℓ表（あなたの勉強部屋はどうなっていますか）

	Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
兄弟と共有の部屋	28	39.4	7	15.6	25	46.3	60	35.3
個室	24	33.8	16	35.6	15	27.8	55	32.3
特別の部屋なし	19	26.8	22	48.8	14	25.9	55	32.3

上の表によると、自宅通学生170人のうち、個室を持っている学生が55人、兄弟と共有の部屋を持っている学生が60人、そして、特別の勉強部屋のない学生が55名となっている。つまり、⅓が個室、⅓が兄弟との相部屋、⅓が家族と一緒の部屋ということになろう。

そうして、特別の部屋を持たないと、答えた学生55名の中には、2—⑦a表で、一番落着いて勉強出来る場所を自宅以外（図書室と教室）と答えた学生24名全員が含まると仮定しても、31名は、自宅が一番落着いて勉強出来ると答えていることになる。又、たとえ、個室を持っていても、テレビ、ラジオや、騒音等の妨害があっては落着くところ必ずしも能率のあがる勉強場所であるとは限らない。その例は、テレビ、ラジオの視聴時間に於ても見ることが出来た。

一方寮生の勉強部屋を見ると、三年生は、2人宛の個室になっているが、一・二年生は、数名宛の相部屋で、しかも、通路を兼ねた所に机を並べている。下学年生の不満にも、理由がある。

以上の如く、自宅通学生であれ、寮生であれ、他によりよき条件の勉強場所があるならば、2—⑦a表の比率は、かなり変り得る要素を含んでいるといえよう。現在でも落着いて利用出来ないとは云いながら、かなり、活潑に利用されている図書室である（調査B利用諸統計第2表参照）。では、どのようにしたら、学生が落着いて勉強出来る場所として、図書館は利用出来るだろうか。

都会の公共図書館に列をなして、開館を待つ受験生の話をよく聞く。そして、その受験生たちは、図書館の本は借らずに、専ら座席だけを確保するという。しかし、これ等の受験生にとって、魅力となっているのは、恐らく、場所だけでなく、時間と設備を加えた三点であろう。（そこには、物理的条件以外に、雰囲気といった精神的問題があり、本校図書館の構想の中でも重視せねばならない要素であるが、ここでは、主として、読書、勉強をより効果的ならしめる外的諸条件について考えたいので、敢えて取上げない。）そして、この三点が、"高専図書館のあるべき姿"とも、又、"落着いて勉強出来る図書館"とも、大いに関係のある基本条件ではなかろうか。一般家庭の生活様式が、便利になって来ている今日、もし公共図書館が、夏季に蒸し風呂のように暑い処だとしたらどうだろう。酷寒期に暖房のない寒々とした処だったらどうであろうか。逆に、中学校の図書館でも、本校の図書室でも、暖冷房のついた閲覧室があったら、様子は多少変るのではなかろうか。しかし、附随的な、設備や、サービスだけでは、改善されるどころか、閲覧室としては、改悪されることも大いにありうる。学生を図書館へ導入し、利用者を定着させることは出来ても、本当に落着いて読書し、勉強する雰囲気が醸成されるかどうか甚だ疑問である。図書館へ出入りする学生は3の④で言及されているように、多種多様であり、それぞれの目的を持って集る。本を読もうと思って来る学生、雑誌・新聞を見ようという学生、或は、単に、気晴らしのために来る学生等、様々である。これらの学生が、すべて、暖房の利いた部屋に蝟集して来た場合、はたして、勉強の場所として、落着いた部屋になるだろうか。

ところが、幾つかの閲覧室があり、それぞれの目的を持った学生を、それぞれ分けて、収容するならば、結果は変って来ると思う。高専図書館新営のプランには、この点を、もっとも重視して欲しい。

図書館の閲覧室を勉強の場所として、特に必要とする者も、さして必要としない者も図書館に気軽に出入りするだけで、読書指導につながることは、第1部に於ても述べたのであるが、第2部の読書環境から見れば、図書館の図書を用い、図書館の場所を使って、勉強する必要性を多くの学生が持っているといえよう。個室を持っていて、周囲の環境に恵まれている学生は、今のところ必ずしも、図書館に居残る必要はない。帯出出来る本なら借りて帰って、自宅で落着いて読んだらよい。併し、そういう学生でも、将来、手許にない、辞書・事典・参考書、或は種々の文献を必要とするとき、又、レポートや卒論を書く時など、丁度製図をする場合、製図室が一番落着いた仕事場となるように、図書館の閲覧室が、もっとも落着いた勉強場所になるのが、学生にとっては最も能率的だろう。そのため、更に解決しなければならない今一つのものは、開館時間の問題である。現行のように放課後の一時間足らずの閲覧時間では、到底落着けるものではない。学生達が、製図室で落着いてかけるのは、

常時入室出来る態勢にあり、夜分まで仕事の出来る時間の配慮があるからだろう。図書館の開館時間が延長され土曜の午後、日曜にも開館され、さらに、夜間開館も出来るようになる時、学生達の云う落着ける勉強場所としての図書館の機能は充分に発揮されることだろう。

以上、学生の家庭に於ける、読書環境を見てきたところによると、一般に、自然発生的に読書（本格的読書）の雰囲気を醸し出すような環境には、程遠いような気がする。家庭で支出する学生の図書費も、学生の読書意欲を満すべきものではなかろう。（図書館の本を利用するため、自分で買う必要を余り感じていないのかも知れないが。）又、読書、勉強の場所としての家庭にも、勉強部屋をはじめ、テレビ、ラジオ等、学生の勉強の障害となるものが多い。学生の読書、勉強のために、学生の図書館への依存度は非常に大きいと思う。

勿論、読書を支える最大の力は、物的条件ではない。強力な読書指導と、それに答える学生の意欲があれば、物的悪条件を克服出来るということは、いみじくも、本校三年生によって、初年度に既に立証され、その後この伝統が継承されていることは、調査Ⅰ－Bの利用諸統計に歴然としている。

しかしながら、図書館活動――読書指導が、よりよい物的条件のもとでは、更に格別の成果を斎らすことは論をまたないし、また一方、精神主義には、限度があることも当然である。学生数の増加により、本校図書室は、3年次の現在、すでにこの物的条件の限度を越えている。

ここに於て、合理的近代図書館が、すみやかに、建設され、学生の不満足な読書環境の完全な代替が行われ、学生の健全なる成長に大きく寄与することを望みたい。

（西　誠也）

附 1　よく見られているテレビ番組

（昭和40年9月現在）

1	太閤記	170	49.2%
2	七人の孫	165	47.7
3	歌のグランドショー	115	33.2
4	ただ今11人	109	31.5
5	プロ野球	97	28.1
6	N. H. K. 特派員だより	91	26.3
7	チコちゃん日記	63	18.4
8	虹の設計	52	15.1
9	ナポレオン・ソロ	47	13.6
10	プロレス	42	12.1
11	ごろんぼ波止場	41	11.9
12	新日本紀行	37	10.7
13	スチャラカ社員	36	10.4
14	ザ・ガードマン	31	9.0%
15	事件記者	29	8.4
16	N. H. Kニュース	25	7.2
17	ある人生	24	6.9
18	檜家の人々	22	6.4
19	バークにまかせろ	18	5.2
20	ねずみ小僧	17	4.9
21	逃亡者	16	4.6
〃	俺の番だ	16	4.6
23	ひよっこりひょうたん島	14	4.0
24	夢で逢いましょう	13	3.8
〃	ロッテ歌のアルバム	13	3.8
26	生活の知恵	12	3.5
〃	人形佐七捕物帳	12	3.5
〃	陽の当る坂道	12	3.5
29	英語会話初級	11	3.2
〃	喜びも悲しみも幾年月	11	3.2
〃	次郎物語	10	2.9

附 2　よく聴かれているラジオ番組

1	プロ野球	69	20.0%
2	9500万人のポピュラーリクエスト	33	9.5
3	英会話	22	6.4
4	ニュース解説	21	6.0
〃	FMコンサート	19	5.5
6	ドイツ語入門	19	5.5
7	今日のベスト3	14	4.0
〃	ヤング・ヤング・ヤング	14	4.0
9	大学受験講座	12	3.5
10	ソニーワールドワイド	10	2.9
〃	ポップスタイム	10	2.9
〃	ホット100	10	2.9
13	世界音楽めぐり	7	2.0
〃	テレフォン・リクエスト	7	2.0
15	夜の室内楽	6	1.7
16	基礎英語	5	1.4
〃	教養特集	5	1.4
〃	東芝ヒットパレード	5	1.4
〃	ドライブ・イン・ミュージック	5	1.4

3. 現在の図書室利用について

3—① 勉強部屋

あなたが勉強するとき、いちばん落着いて出来るところはどこですか

		Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	家庭	71	60.7	59	48.4	55	50.9	185	53.5
2	寮（または下宿）の自室	26	22.2	37	30.2	50	46.3	113	32.7
3	図書室	8	6.8	13	10.7	3	28	24	6.9
4	教室	10	8.5	6	4.9			16	4.6
5	寮の読書室	2	1.7	7	5.7			9	2.6

図書室、又は教室を自分の勉強場所として使っている学生の数を知りたいという理由から尋ねてみた。その答は、1)「家庭」としたもの185名・53%、2)「寮（または下宿）の自室」としたもの113名・約33%であった。そして、3)「図書室」は約7%・24名となり、4)「教室」は約5%・16名であった。学習環境の良、不良は、自然環境、地域社会環境、家庭環境等々の総合平均によって決まるとすれば、その良、不良を決めることは難しいが 1) 2)と答えた者の学習環境は、一応満足すべき状態にあるものとみて、3) 4) と答えた者40名につき、2—⑦の調査から、住居と勉強部屋の状態をみると、24名が自宅、16名が寮となる。そこで、24名の勉強部屋の状態を調べると、13名が「特別に部屋なし」といい、6名が「兄弟との相部屋」を使い、残りの5名は「個室」を持っている。この部屋の状態を常識的にみると、「特別に部屋はなし」という者が学校の図書室、又は教室を勉強部屋としていちばん落着けるというのは理解出来るが、その他の者についてはどんな理由があるのであろうか。すぐに想像される理由として、騒音、大気汚染等の公害があげられようが、本校の立地状態をみると郊外の台地にあって、今あげた公害の影響を受ける心配はなく、学校としては絶好の場所にあるので、個室の有無に拘らず勉強場所を学校に求めるのも、もっともであると思われる。一方、寮生についてみると、三年生に寮自室以外に勉強部屋を求める者がいないことから、一、二年収容棟の自習室の構造に問題があると考えられる。

ところで現在の図書室は応急的なもので（1. B—1参照）、図書館本来のものとは種々の点で比較にならないがそれでも上述の通りに図書室（合同講義室）などに依存して勉強する学生が若干名いるという事実から、将来、設備の整った図書館を持つに至った時は、1)「家庭」2)「寮」と答えた者の中にも、図書館を利用して勉強する者が出てくることが考えられるし、又、専門学科の講義が増加するに従い、参考図書を利用して、勉強する為に図書館等に依存する学生が増えることが予想される。

〔註〕2—⑦ 勉強部屋についての調査、参照。

3—② 図書室利用の仕方

2 あなたの図書室利用の仕方は次のどれにあたりますか。

		Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	本をかりて帰ることもあり閲覧室も利用する	82	68.8	70	64.8	70	63.1	222	64.2
2	本をかりて帰るだけで閲覧室を利用することはない	20	16.8	13	12.0	21	18.9	54	15.6
3	本をかりて帰ることはあまりないが閲覧室は利用する	10	8.4	15	13.9	18	16.6	43	12.4
4	自分から図書室にはいることはあまりない	7	5.9	10	9.3	2	1.8	19	5.5

図書室利用の仕方について述べる前に、図書室の構造、運営等について触れるが、その詳細はⅠ. B—1で取扱うので、ここでは簡単に触れるに止める。

現仮図書室は普通教室一室を当て、全面開架方式をとり、その部屋の一隅を閲覧事務室、図書係教官の居室としても使っている。つまり、この部屋は書庫、事務室、新聞雑誌等閲覧室の三つの働きを兼ねていることになる。閲覧室本来の部屋はないので、図書室に隣接する合同講義室が閲覧室の役割をしているが、3—①でもふれた通り合同講義室は閲覧室本来のものと比べる迄もなく、落着いて勉強読書出来るようにはなっていない。次に事務職員についていえば、現在3名配置されているが、閲覧業務専任の職員はいない。このような現況で、表のような利用の仕方がなされているのであるが、さて、その利用の仕方は、1)「本をかりて帰ることもあり、閲覧室も利用する」という幅のある利用の仕方が66%を占め、図書室を学校直営無料貸本屋とみなし、「本をかりて帰るだけで、閲覧室を利用することはない」者が約17%、「本

をかりて帰らないが、閲覧室を利用する」者、つまり、閲覧室という場所に可成り重点を置いているものが約12%、そして、図書室とはほぼ無縁の状態で学校生活を送っている者が約6%いることになる。この6%を除いた95%に近い学生は、夫々の利用の仕方で、図書室に出入りしていることになるが、参考の為に、ここで、草創期の図書室利用状況について述べてみることにする。本校も、全国高専と同じように発足当初一年は仮校舎住い（荒尾市南部）であり、当時、図書室は閲覧室が無いために貸本屋的運営方針を以って出発した。仮校舎は大多数の学生の居住地大牟田市（自宅通学生と寮生の割合はほぼ半々で、通学生の大部分は大牟田市在住であり、又寮舎も大牟田市にあった）から遠く、その為に、寮と学校間にスクールバスが走り学生の通学の便を計った。そこで、放課後には学生達は下校バス出発時刻迄一様に若干のバス待合時間があることになり、その間、学生は図書室に集り、本を借り出したり、自由な雑談をしたりした。これは自然発生的現象でもあったろうか。しかしそれは、図書係教官の意図でもあった。即ち、当教官は図書室と学生の関係が密接になり読書活動が活潑になる糸口は、先ず学生が肩肘張らずに図書室に出入りし、本に接する機会を持つことにあると考えた。そして又、図書室は課外時間を学生達が有効に過ごす場所として利用されるよう指導した。従って係教官の意図は学生に対する図書室利用の初歩的指導段階に限って考えられたわけではなかったようだ。仮校舎に付属する運動場は、幼稚園のそれと五十歩百歩、運動部の活動の余地はなく、偏向の嫌いはあるにしても、読書活動は活潑になり、図書室は学生達の精神的レクリエーションの場となり、そこで次第に学生達の読書習慣の芽が育まれていったらしい。そして開校後二年目、現在の校舎に移転し先に述べたような図書室で、表のような利用の仕方がなされているのである。

3—③ 備えつけ図書の利用

3—②で1.3と答えた人は閲覧室では備えつけの図書（雑誌を除く）を使っていますか

		Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	使っている	64	79.0	66	74.1	57	65.5	187	72.7
2	あまり使わない	17	21.0	23	25.9	30	34.5	70	27.3

前項②で1）、3）、と答えた者は閲覧室を利用しているので、備えつけ図書（雑誌を除く）を使っているかどうかを尋ねてみた。その答は、1）「使っている」者が72.7%、2）「あまり使わない」者が27.3%となった。最近、公共図書館の閲覧室は参考書持参の上級学校受験生によって占められ、図書館の機能の第一にあげられるもの、即ち備えつけ図書が閲覧室で読まれ最も効果的であること、が麻痺していると云われる。このような現象のために、今述べた機能に期待して公共図書館に行こうと思う一般の利用者も、つい二の足を踏むときく。学校図書館の場合も同様な現象が起き、それが定着すれば、図書館の機能は、貸出し希望者の為の窓口的機能と、勉強部屋を提供する機能とに分離してしまう。しかし、本校の場合は図書室利用者の70%強が、閲覧室で備えつけ図書を読んでいるので、公共図書館にみる弊害を危惧する必要はないように思われる。2）「あまり使わない」という30%弱のものについては次にゆずることにするが、今後上級学年が出来、専門教科の講義が増えてくると、各教科の参考図書利用者は増え、現在の備えつけ図書利用の型が変ることが考えられるが、勿論それは当然のことであり、歓迎すべきことであろう。

〔註〕備えつけ図書の利用については利用諸統計を参照

3—④ 備え付け図書を利用しない者の閲覧室利用

3—②で2と答えた人は主にどんな目的で閲覧室を利用していますか

		Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	新聞雑誌閲覧のため	9	37.4	23	56.1	26	61.9	58	54.2
2	気ばらしのため	8	33.3	9	21.9	10	23.8	27	25.3
3	ただ勉強の場所として	5	20.8	6	14.6	5	11.9	16	14.9
4	乗車時間待合せのため	2	8.3	3	7.3	1	2.4	6	5.6

3—②で備えつけ図書を「あまり使わない」と答えた者につき閲覧室利用の目的をたずねたが、その目的は次の二つに分けられる。即ち、1)、2)、4）、と答えた者は閲覧室を軽読書室として利用し、3)と答えた者は勉強部屋として利用していると云える。（便宜上、前者を軽読書室型と呼び、後者を勉強部屋型と呼んでおこう。）ところで、1.「新聞雑誌閲覧のため」と答えた者が58名・54%、になるが、学年が進むにつれ、人数が増加しており、一年生と二、三年生との間には可成りの格差が認められる。この現象は、この二者の間に社会意識に差があるためか、又一つには、一年生は未だ閲覧室利用に慣れていないためとも考えることが出来ようか。いず

れにしても、図書館には本来マス・コミの機能もあるので本校図書室もその機能を果していることになろう。

2)の「気ばらしの為」という者は各学年共10名前後いるが、彼等は別に不真面目な心算ではないと考える。即ち本屋にぶらりと立寄る類であろう。又、4)「乗車時間待合せのため」と答えた者も6名いるが、要するにこれら軽読書室型の利用の仕方は②で草創期の図書室についてふれたように、或る意味では図書室利用の仕方として奨励されたのであり、勿論、これは本校に限ったことでもない。一方の勉強部屋型について云えば、いわゆる公共図書館を占拠する受験生に似た型ということになろう。

3—⑤ 閲覧室を利用しない理由

3—②で2.4と答えた人はなぜ閲覧室を利用しないのですか

		Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	大勢人がいて落着いて読めないから	15	60.0	7	25.9	8	44.4	30	42.8
2	クラブ活動などで時間がないから	4	16.0	9	33.4	3	16.7	16	22.9
3	読書はあまりすきでないから	2	8.0	8	29.6	2	11.1	12	17.1
4	そ の 他	2	8.0			3	16.7	5	7.1
5	読みたい本が図書室にないから	1	4.0	2	7.4	1	5.6	4	5.7
6	机などの設備が図書館らしくないから	1	4.0	1	3.7	1	5.6	3	4.3

3—②で閲覧室を利用する者と、利用しない者の比率が出たので、ここでは、閲覧室（図書室）を利用しない学生、即ち、「本を借りて帰るだけで閲覧室を利用しない」54名と「自分から図書室にはいることはない」19名計73名について、その理由をたずねたが、3)「読書はあまりすきでないから」利用しない者12名を除けば、他は上表 1)、2)、4)、5)、6)の理由で、目下、閲覧室利用を差控えていることになろう。もっとも、「その他」の中には、「読書は独りでした方がよい」という者もいるので、元来、閲覧室で落着けない者が含まれていることは云うまでもない。ところで、念の為に、上表1）と答えた30名について、3—⑭の図書室に対する希望、意見をみると、16名が「図書館の新築(図書室の拡大)を望む」と書き、上表中2）と答えた16名中5名が「開館時間の延長を希む」と書いているので、将来、図書館が建てられ、係職員の配置が適切に行われ、開館時間も延長され、つまり、大学図書館と同様の設備、運営がなされるならば、3）は別として、1）～6）迄の数は可成り減少するだろうし、又、現状に不満はあり乍ら図書室を利用して居る大多数の学生達の歓びと利益は計り知れないものがあると云わねばならない。

3—⑥ 自習時間の利用

あなたは、休講などで与えられた自習時間をどのように利用しますか

		Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	そ の 他	56	52.8	37	29.1	54	46.6	147	42.5
2	図書室へ行く	21	19.8	65	51.2	46	39.7	132	38.1
3	教室で勉強する	29	27.4	25	19.7	16	13.6	70	20.2

休講などで生じる自習時間の利用の仕方を尋ねてみた結果は表の通りである。1)「その他」が42%となっているが内容について補足すれば、本校は工業系専門学校という性格から、学生は日常製図に追われているので、自習時間には日頃の製図時間不足を補う為に、製図室で作図に当る者が可成りあるというのが実状のようである。次に2)「図書室へ行く」38%の学生は積極的に図書室を利用する学生を中心にしたグループといえるだろうか。尚、2)「図書室へ行く」という欄で、一年生と二、三年生の比率に格差が認められるが、その原因は、本調査実施時点に於いて一年生は未だ図書室利用に不慣れであることと読書習慣が定着していないことにあると思われる。

3—⑦ 備えつけ図書整備状況

あなたが読みたいと思う本は、大体図書室にありますか

		Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	大体揃っている	56	50.9	71	63.4	63	60.0	190	54.9
2	あまりない	50	45.3	38	32.9	38	36.2	126	36.4
3	ほとんどない	4	3.7	3	2.7	4	3.8	11	3.2

備えつけ図書の整備状態について尋ねると、1)「大体揃っている」とみる者が58%、2)「あまりない」という者約38%あり、3)「ほとんどない」という強い不満を感じる者が約3%いる。学校関係者は教育的見地から高専図書館の蔵書構成の理想像を描き、その具体化に努めているのであるが、予算措置を伴うことでもあって、

開校後三年目の今日、蔵書不足とするものが40%程いることは致し方ない。図書室側の蔵書整備の順序としては先ず図書館必備の本からと云うことになろうが、一方、利用者（学生）からすれば、図書室は何でも読みたい本は提供してくれるものと考え勝ちなので、発足後未だ日が浅い図書室の現況では需要と供給のアンバランスが出てくるのは避けられまい。ここで、3—⑭「図書室に対する希望意見」をみてみると「もっと軽い本を入れて欲しい」ものが5名、「もっと専門書を入れて欲しい」ものが4名、ただ「蔵書をふやして欲しい」もの3名等、蔵書の充実を望むものが18名（この18名については現在の読書内容が問題になるが、本調査ではその内容が出ないのでこの点についてふれることが出来ない）いたが、これらの者が、2）、3）の代表的な意見であろうか。

尚、蔵書購入に関しては、特定教官の好みに支配されるのを恐れるが、本校ではその弊害は図書委員会により予め防がれているし、又、学生側の図書購入希望は自由に出させ、予算整備方針等を考慮して、成る可く学生の期待に応えるようにしているようである。〔注〕 専門書整備については、Ⅱ—D（35ページ）参照。

3—⑧ 備えつけ図書に対する気持ち

あなたは自分の本も図書室の本も同じ気持ちで読んでいますか

		Ⅰ	%	Ⅱ	%	Ⅲ	%	全	%
1	同じ気持ちで読める	82	75.2	93	65.0	76	68.5	251	72.7
2	自分の本でないとあまり落着いて読めない	22	20.2	19	13.3	31	27.9	72	20.8
3	自分の本でないと落着いて読めない	5	4.6	31	21.7	4	3.6	40	11.6

「自分の本も図書室の本も同じ気持ちで読めるか」と問うたのに対して、1)「同じ気持ちで読める」ものが約70%て大勢を占め、2)「自分の本でないとあまり落着いて読めない」もの約20%、3)「自分の本でないと落着いて読めない」もの約10%であった。1) と 2) 3) との比は7対3となり「同じ気持で読める」ものが多いのは予想外であった。しかし、戦後は一般に図書館活動が生活指導改善のために積極的に導入され、利用指導も各方面で活潑に行なわれたので、図書館利用の風潮は広く人々の間に浸透したせいて、又一つには2—①の家庭蔵書調べに見られる通り学生の家庭蔵書は概して不充分なところに、国語科を筆頭に諸教科の授業法が大きな影響を与え読書活動は活潑になり学生の大部分は自然に図書室の本を利用するようになっているのであろう。この項については「家庭環境調査」「家庭蔵書しらべ」「月当り図書費しらべ」の部分と「利用諸統計」（26ページ）の資料と説明を参照され、この項の説明不足の点を補って戴ければ幸である。

3—⑨ 高専入学後感銘を受けた本

第1表　（○印：国語科指定図書（テキスト）一年用、◎印：同二年用、◎印：同三年用、△印：三種の○印に準ずる推薦図書）

	書名	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
1	破戒	△14	○32	○12	58
2	キュリー夫人伝	○34	○11	○ 8	53
3	こゝろ		○11	○13	24
4	友情	△ 6	△ 5	△ 5	11
5	狭き門	1	8	3	12
6	チボー家の人々	△ 1	△ 6	◎ 4	11
7	思出の記	○ 7		△ 4	11
8	三四郎	4	○ 5	○ 1	10
9	車輪の下		1	8	9
10	風と共に去りぬ	△ 1	△ 3	△ 5	9
11	愛と死		6	2	8
12	暗夜行路	1	2	◎ 3	6
13	ジャンクリストフ	△ 1	△ 1	△ 4	6

	書名	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
14	嵐が丘	1	2	2	5
15	赤と黒	△ 1	△	△ 4	5
16	出家とその弟子		○ 2	○ 2	4
17	野菊の墓	1	1	2	4
18	武器よさらば	1	1	2	4
19	大地	△	△ 2	△ 2	4
20	アンナカレーニナ	△	△ 3	△ 1	4
21	レ・ミゼラブル	△ 1	△ 2	△ 1	4
22	橡家の人々	△ 1	△ 2	△	3
23	それから		3		3
24	宮本武蔵		2	1	3
25	路傍の石		1	2	3
26	田舎教師	○	○ 1	○ 1	3

書　　名	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
27 人間の運命		2	1	3
28 藤村詩抄	○	○1	○2	3
29 モンテクリスト伯	△2	△	△1	3
30 坊つちやん	1		2	3
31 夏目漱石集		1	2	3
32 怒りの葡萄	△	△1	△2	3

第　2　表

	1　年	2　年	3　年	合　計
① 解答者数	114名	121名	111名	346名
② 感銘を受けた本なしという者の数	28〃	18〃	19〃	65名
③ 本項の事実上の対象となる学生数①—②	86〃	103〃	92〃	281名
④ 感銘を受けた本の数	41冊	64冊	73冊	119冊（3学年間で重複するものがある）
⑤ 感銘を受けた本の延冊数	102〃	157〃	148〃	407冊
⑥ 感銘を受けた本の中教科書用作品数	4	7	16	
⑦ 授業中推薦された作品数	24	24	24	
⑧ ④－（⑥＋⑦）＝	13	33	33	
⑨ ⑥に感銘を受けた学生数	59名	74名	55名（50%）	188名
⑩ ⑦に感銘を受けた学生数	15〃	25〃	44〃	94名

感銘を受けた本の書名を書かせた。一覧表にしてみると上にかかげた第1表のの4倍に及ぶ結果を得たが、この項の資料としては、同じ書名を3名以上あげたものを纏め第1表とした。そこで元の一覧表は第2表として数値でまとめ代用することにしたので、不満足なものながら第2表から全体の結果の概略をみていただきたい。尚、第2表には説明を要する箇所があるのでそれを補ってみる

第2表④の数字は学年毎に「感銘を受けた本」の書名数を纏めたものである。3学年合計は 119となり、学年毎の数の合計と一致しないが、それは各学年共通の「感銘を受けた本」が数多くあったためである。次に⑧の補足説明をすれば、「感銘を受けた本」の中には国語教科書として使用されたものが⑥の数だけ——一年で4冊、二年で7冊（うち4冊は一年と同じ）、三年で16冊（うち7冊は二年と同じ）——あり、準教科書として推薦されたものが学年共通して24冊あったので、国語教科書、又は 推薦図書と 関係がない 本の数、つまり、国語授業に関係のない「感銘を受けた本」の数を出した。次に⑨⑩の数について云えば、それに国語授業とは関係なく感銘を受ける者が若干名含まれる可能性があり、ここから生ずる誤差を考慮して参考にしていただくことを期待する。以上で第②表の補足説明を終り、次に第①表に拠って説明を進めてみることにする。

さて、第1表を一覧すると、連なる書名、順位等は新聞雑誌でみるこの種の調査結果と酷似しているようにみえるが、書名、符号、数値の三者の関係に、この調査が他の同様のものと似て非なる点が在り、それがこの調査結果の特色であり、又問題点となる。即ちそれは符号の意味から歴然としている如く、主として国語授業法と深い関係があるということである。その国語授業法については Ⅲの α（39ページ）で担当教官により詳述されるのでここでは触れないことにし、表から幾つかの事象を選び説明を加えてみることにする。取扱いの便宜上学年別にみると、一年では先ず第1点として、「感銘を受けた本」と主として国語授業との関係が非常に密接であることが指摘される。即ち、「キュリー夫人伝」34名を筆頭に「破戒」14名、以下「三四郎」4名迄、比較的多数の者が「感銘を受けた本」はテキストとして強制的に読まされたものが多い。第2表⑨、⑩の数59、15 計74 は全部が国語授業の結果出て来た数とはみられないことは先にも断っておいたが、その大多数は国語授業の結果出た数であるとみるのが妥当であろう。3－⑩で「感銘を受けた本に接した動機」を尋ねたが、一年では「先生のすすめ」が56となり、この数と第2表⑨59との関係は一年の特徴の第1点を裏付けるものと考えても、あながち、無謀ではないと思う。次に第2点として、一年生は二、三年生と比較して外国文学作品に対する志向度が低いことが指摘される。第1表△印付きの本は学年に関係なく休暇を利用して読む本として一様に推薦されるもので、国語授業計画、進度に関係はない。従って、この種の本が一年生にもっと読まれても不思議ではないのだが、実情は表の通り他学年との間に格差がある。

さて、この事象は何に起因するのであろうか。一概に一年生は知的な関心が低いから、と云って済むことではなく、これは今後検討されるべき問題であろう。

次に二年生についてみよう、主として国語授業の影響

が強いことは一年生と同様であるが、一年生に比較すると、それはやや薄れている感がある。即ち第1表でみられるように「狭き門」（8名）、「チボー家の人々」（6名）等国語テキストとして扱われない作品が幾つか上位に並んでいることから、又ひとつは3—⑩で「感銘を受けた本に接した動機」を「先生のすすめ」という者28名という数から云えることである。次に二年生は外国文学作品を可成り読んでいることも、一年生との相違点としてあげられ、読まれている外国文学作品をみると、大作が散見され、それと取組む意欲が見受けられるが、これは学生時代の読書傾向として歓迎すべき現象と云わねばならない。

さて、三年生ではどうであろうか。国語授業の影響はここでも一、二年生とほぼ似た様相を示している。しかし、或る作品に数が集中する傾向は一年生よりも二年生二年生よりも三年生と弱くなりほぼ拮抗した数が分布しているが、感銘を受けた本の数は増えている。又、推薦図書に感銘を受けた者の数が教科書用作品に感銘を受けた者の数に接近していていることも一、二年生と異り（第2表⑩参照）、これは、学校で推める読書の型を示しているものとみられる。次に、外国文学作品に対する志向の萌芽は一応二年にあるとさきに推測してみたが、三年生ではそれが成長し根を下ろしているように見受けられる。第1表から外国文学作品とそれに感銘を受けた者の数を挙げると、「狭き門」8名、「チボー家の人々」4名、「車輪の下」8名、「風と共に去りぬ」5名、「ジャン・クリストフ」4名等と続いていて感銘を受けた者の数の比を日本文学作品と外国文学作品の間にとるとほぼ5：4となる。尚、先に二年生について指摘した幾つかの事象は三年生にも見られ、二、三年間には、可成り多くの共通点が認められる。

以上、表を基にして概略の説明を進めて来たが、「感銘を受けた本」の調査結果から、本校学生の読書の型には大別して三つあり、Aとして、一年生にみる大方は国語授業の強制力に牽かれた読書の型があり、Aの型を基礎にして読書習慣を定着させた型（B型）、さらに本校入学以前から既に読書生活に親んでいた型（C型）が考えられるが、最後に国語授業の強制力に重圧を感じ読書に背向しようとする学生と、3—②で「読書は好きでない」と答えた一部の学生の存在を無視する訳にはいかない。勿論、読書効果を万能とみる心算はない。「万能足りて一心足らず」ということもあろう。しかし、諸賢の例が教えるように、読書は我々の人生に資するところは大きいことを考える時、これらの学生の読書指導が問題となる。

尚、本校は理科系学校であり乍ら、その方面の著書が32位迄に登場しないことは遺憾であるが、この種の著書や社会科学系統の著書は今後次第に読まれてゆくものと推測される。

3—⑩　感銘を受けた本を読んだ動機

	1	%	2	%	3	%	計	%	
先生のすすめ	56 (4)	64.3 (4.8)	28 (7)	31.8 (10.0)	42 (3)	38.5 (4.7)	126 (14)	45.3 (6.5)	+112 (名)
図書室で見て	20 (49)	23.0 (59.0)	38 (40)	44.7 (57.2)	32 (30)	29.4 (46.8)	90 (119)	32.2 (55.0)	−29
書店で見かけて	2 (6)	2.3 (7.2)	8 (3)	9.4 (4.3)	10 (4)	9.2 (6.3)	20 (13)	7.1 (6.0)	+ 7
そ の 他	1 (7)	1.1 (8.4)	1 (9)	1.2 (12.9)	11 (12)	10.1 (17.7)	13 (28)	4.6 (12.8)	−15
友人のすすめ	2 (8)	2.3 (9.6)	2 (4)	2.3 (5.7)	6 (1)	5.5 (1.5)	10 (13)	3.6 (6.0)	− 3
新聞雑誌の書評や広告を見て	1 (2)	1.1 (2.4)	6 (1)	7.6 (1.4)	3 (3)	2.8 (4.7)	10 (6)	3.6 (2.5)	+ 4
親兄弟のすすめ	5 (3)	5.8 (3.6)	1 (6)	1.2 (8.6)	3 (6)	2.8 (9.4)	9 (15)	3.2 (6.9)	− 6
テレビで見て	0 (3)	0 (3.6)	1	1.2			1 (3)	0.3 (1.4)	− 2
映画で見て	(1)	(1.2)			1 (5)	1.2 (7.8)	1 (6)	0.3 (2.8)	− 5
計	87 (83)		85 (70)		108 (64)		280 (217)		+63

「感銘を受けた本」を読んだ動機について尋ねてみたところ、上の表のような結果を得た。上表各欄の（ ）を付けた数は中学時代に於ける同じ質問の結果を示しているが、ここでは、その両者を比較しながら説明してみよう。

さて、この表をみて第一に気付く事象は、1）「先生のすすめ」が中学時代に比べて差が著しいことである。即ち、それは「感銘を受けた本に接した動機」を「先生のすすめ」とする者が、中学時代に比較して高専入学後飛躍的に増えていることを意味しているが、その「先生のすすめ」の内容は中学時代と高専入学以後のものとで

は等質ではないと思われるので、本校に於ける「先生のすすめ」について説明する必要があるが、本校の場合、この「先生のすすめ」には次の三つが考えられる。そのaは、例えば感銘を受けた本として「キュリー夫人伝」をあげ、その動機を「先生のすすめ」とした者の場合、その動機は「国語授業によって」と云いかえることが出来るし、この「先生のすすめ」には強制力が伴っていて「強制的古典文学作品読書のすすめ」とも云える。(ここで敢て「強制的」という言葉を使ったが、教科の与え方はいずれの場合も強制的であり、問題とすべきは、与えるものとその指導法にある)次にbとしては、感銘を受けた本に「風と共に去りぬ」をあげ、その動機を「先生のすすめ」とした場合、その「先生のすすめ」は国語授業中先生によって機会を見て頻繁に推薦されたことを意味する。そしてcとして、「暇をみて読み給え」式の、どちらかと云えば、相手の自発性に期待する「すすめ方」がある。この様にしてみると、本校学生が「感銘を受けた本」を持つに至った動機は、a、b型の「先生のすすめ」にあり、国語授業法と深い関係があると思われる。

次に「図書室で見かけて」の数は各学年共中学時代に比べ多少の増減があるが、一年で49名から20名に、つまり半数以下に減っているのが目立っているが、この原因も大方は国語授業にあるのだろう。というのは、一年生は入学以後、本調査時迄日浅く、学校の内部事情に不案内の点が多かったために、図書室利用度も低く「図書室で見て」本を読み感銘を得るという手順よりも、先にあげたa、b、の「先生のすすめ」によって感銘を得る本に接した者が多かったものと推測されるからである。

次に「その他」「友人のすすめ」「親兄弟のすすめ」は夫々10名前後減り、一方「書店で見かけて」「新聞雑誌の書評や広告を見て」は5名前後増加しているが、この変化は学生の自発的な読書傾向を示していると云えるだろう。とも角も、本校では「先生のすすめ」という動機が一般的に考えられる幾つかの動機を吸収しているというのが実情ではないかと思われる。

以上、中学時代についての同じ調査結果と比較対照し乍ら、幾つかの事象を説明して来たが、中学時代についての調査結果は当時の記憶、印象と現在の事実と食違っていることが考えられるので、参考の一部として利用した程度であることを断っておきたい。

3—⑪ 読書時間

8. 1日のうちであなたは平均してどの位の時間を読書にあてていますか

		I	%	II	%	III	%	全	%
1	1時間以内	49	45.4	45	39.1	44	43.2	138	39.9
2	30分〃	30	27.8	40	34.8	35	34.3	105	30.3
3	1時間半〃	16	14.8	11	9.6	11	10.8	38	11.0
4	2時間〃	9	8.3	15	13.0	7	6.9	31	9.0
5	3時間〃	2	1.9	2	1.7	2	0.2	6	1.7
6	2時間半以上	2	1.9	1	0.9	2	0.2	5	1.4
7	3時間以上			1	0.9	1	0.1	2	0.6

学生が読書に当てている時間を調べた結果はこの表の通りである。この表によれば学生は毎日平均1.2時間を読書に当てていることになり、1週間当りに直すと約8.5時間となり、読書時間としては充分と云えるが、感銘を受けた本の調査の項で触れた通り、この週平均8.5時間の中には強制的読書時間、換言すれば本校独特の国語予習の為の読書時間も含まれていると見るのが妥当であると考える。ところで、週8時間程の読書時間があれば300頁の単行本が2冊～3冊読めるだろうが、「利用諸統計」によると学生の月平均貸出冊数は3冊となっているし、家庭の読書環境調査の結果をみると、本校学生の読書は大方は図書室の本を利用してなされていることからも、読書時間の内容としては①国語授業予習の為の読書、②貸出図書読書、③雑誌等の読書に使われているとみてよかろう。それにしても統計上学生は年に36冊の本(図書室備えつけの)本を読んでいることになるから、本校学生と同輩で別進路を取った人(普通高校で受験勉強に追われている人、実社会に出た人)と比較すると、学生は充実した読書生活を送っていると思われる。本校学生は、毎日の学習生活に或程度の苦労はすると云い乍ら、卒業迄には可成り高度の専門知識、技術の習得は出来ることになっているので、普通高校でみられるように今後大学受験準備の為に余計な神経を苛立たせる必要はない。そうすると、かつて旧制高等学校生徒に見られた読書生活にいささか似たものを学生は体験出来ることになり、現にそうしている者も可成りいる。つまり、それらの学生は受験地獄に喘ぎ苦しむことなくのびのびと学

生生活を謳歌している、と云えば手前味噌に過ぎた見方になろうか。

3—⑫ 図書室利用時間

あなたが図書室を特によく利用する時間はいつですか

		I	%	II	%	III	%	全	%
1	昼休み	109	(95.6)	113	(93.3)	91	(82.0)	313	(91.0)
2	放課後	26	(22.8)	25	(20.6)	36	(32.4)	87	
3	授業の合間	8	(7.0)	10	(8.2)	34	(30.6)	52	(15.0)
4	始業前					2	(1.8)	2	(5.8)

先ず、説明にはいる前に、表についての注釈をすると、この質問には二つ以上の答も可とした為に、答の合計数は解答者数より多くなっていることを断っておく。

さて、この表を見ると学生は昼休みに集中的に図書室に出入りしているが、この現象には次の様な理由がある。つまり3—②で既に触れた通り、本校図書室の開館時間は、平日では午前8時半から午後5時迄、土曜日は午後1時半迄となっており、一般事務官の執務時間と殆ど同じである。ところが毎日の授業は土曜を除いて午後4時迄行われるので、放課後落着いて図書室を利用することは実際問題として仲々出来にくい。勢い学生達は昼休みに、ということになるらしい。3—②、⑤でも指摘した通りに、応急的図書館運営が限界点に達しつつあるのは何も場所の問題ばかりでなく、この時間の制約が大きいということにも原因があるのである。

ところで、昼休みに学生が図書室に蝟集することは歓迎すべきこととは云い乍ら、一方学生の健康管理増進の面からは好ましくない現象と云えるのではなかろうか。

3—⑬ 現在読みたい本

第 1 表

		1	2	3	計
1	戦争と平和	1		4	5
2	チボー家の人々		3	1	4
3	アンナ・カレーニナ	2	1	1	4
4	夏目漱石集	2	1	1	4
5	トルストイ作品集		1	1	2
6	三国志			2	2
7	出家とその弟子	2			2
8	嵐が丘	1	1		2
9	成せばなる	1		1	2

「現在読みたい本」を書いてもらったところ、系統別に答えた者と書名をあげた者と二種の答が出たので、それぞれについて纏めたが、第1表は上位9（同じ書名2名以上のもの）迄、第2表は13位迄（5名以上）で切ったものを表にして出した。全体の表について説明してみると、読みたい本の書名をあげた者が67名、一方系統別に答えた者が 179名、合計 246 名が読みたい本をあげたことになる。書名をあげた方はその殆んどが文学作品であり、又系統別に答えた本も大方は東西の文学作品であったが、「哲学関係書」と答えた者も二、三年に10名いたし、専門書を望む者も7名（三年6名、二年1名）いた。この少数の例からではあるが、読書の傾向が変化する時期は二年時にある、と云えるのだろ

第 2 表

		1	2	3	計
1	外国文学	4	2	7	15
2	推理小説	7	3	4	14
3	青春恋愛もの	4	3	4	11
4	宗教・哲学関係の本		3	7	10
5	日本文学	2	4	3	9
6	伝記	5	1	3	9
7	冒険もの		4	2	7
8	人生論		3	4	7
9	世界の長編文学	2	2	3	7
10	平易な専門書		1	6	7
11	文学作品	4	2		6
12	世界地理風俗もの	4	1		5
13	空想科学小説	3	1	1	5

うか。尚、専門書を読む学生の数は今後増加の一途を辿り、上学年（四、五年）が出来る頃には、備えつけ図書の利用状況も、現在とは違ったものになると想像される。

3—⑭ 図書室に対する希望意見

		1	2	3	計
1	図書館を建てて欲しい	8	12	16	36
2	〃 拡張して欲しい	7	15	14	36
3	貸出手続きを簡単に	10	12		22
4	毎日貸出事務を		7	8	15
5	日曜、休日の開館		2	3	5
6	貸出期間の延長	1	1	3	5
7	もっと軽い本を入れて欲しい	2		3	5
8	静かな雰囲気を作って欲しい			4	4
9	もっと専門書を入れて欲しい	1		3	4

	1	2	3	計
10 係員をふやして欲しい		2	1	3
11 貸出冊数制限撤廃	1	2		3
12 本を項目別に明示すること	2	1		3
13 係員の態度を親切に	2	1		3
14 蔵書数をふやして欲しい	1	1	1	3
15 新規購入図書の発表	2	1		3

現在の図書室に対する希望、意見を書いてもらったところ、45項目に亙り186名（全学生の54%）が発言していたが、同じ意見3名以上のものの項目を表にして出してみた。この186名の大部分の者は、現在の図書室の設備機能運営等に満足しない為に意見を述べたのであり、いわば、積極的に図書室に関心を寄せている学生達と云うことが出来るが、一方、図書室（活動）は「今のままでよい」「今以上活潑にならぬがよい」という学生も夫々2名づつ計4名いた。

次に発言数を学年別に見ると、一年は15項目につき41名（36%）、二年は25項目につき73名（60%）、三年は24項目につき72名（65%）いて、関心度は高学年になるにつれて高くなっており、又高学年生の意見の内容は具体的且つ切実なものであった。

ここで、その希望、意見につき検討すると、学生側の理解があれば早速解消するものもある。例えば、表の3)「貸出手続きを簡単に」22名がその種のもので、全面開架方式を採用している現在、今以上に貸出手続きが利用者たる学生の為に簡略化される余地はない。三年生には3）の要望がないということは、今述べた様な事情を理解しているからであると考えられ、従って、一、二年生も図書室利用に慣れるにつれその点を納得すれば、自ら解消する意見であると思われる。つぎに「毎日貸出事務を行って欲しい」(15名)、「係員をふやして欲しい」（3名）等は、図書室の現状の説明で触れた通り、現在、貸出事務職員が居ないことに対する学生側の不満の声であろうが、係員不足と図書室が狭いために混雑している時は、学生の一部には「係員は親切に」（3名)と云いたくなる者もいるだろうし、つい「貸出手続きを簡単に」と無理な注文を思付く者が出て来るのであろう。そこで、表1)、2）の希望意見、即ち「図書館を建てて欲しい」（36名）、「図書室を拡大して欲しい」(36名)、という希望が実現すれば、幾つかの不満、不便な点は自動的に解決されることになりはしないかと思われるのである。

以上「現在の図書室利用について」14項に分け調査した結果を基にして若干の説明を加えて来たのであるが、図書室利用の仕方と、国語授業法との関係が再三浮かび上って来たことが、本調査結果の特色であろう。しかし教養を重視する観点に立てば、この両者の関係は学生の内面形成に資するところは大きいと考えられるのである。ところで本校では、発足以来、関係者の努力で不自由な中にも効果的な図書室運営がなされて来たが、学生の図書室利用の実態と要望を検討し、高専教育と高専学生の理想像を描く時に、現在の図書室の機能の限界は眼に見えており、独立した図書館の存在とその役割が、今後必要不可欠のものとして、考えられねばならないのである。

（品川尚司）

Ⅰ－B　有明高専図書室の現況

1. 現仮図書室概況

沿革　昭和38年（初年度）9月　熊本県荒尾市増永の仮校舎内に開設。当初の蔵書数0。事務担当者は図書係教官ならびに事務補佐員1名。9月1日付をもって、有明高専図書室規則、図書室運営委員会規程および図書室利用規程が制定された。購入図書の他に、3月までは大牟田市立図書館より巡回文庫50～100 冊の貸与を受けて供用。当期は運動場もなく、かつスクールバス待合所も兼ねたためか、利用度は極めて高かった。初年度受入冊数

図書（和）　3,282冊（洋）116冊（計）3,398冊

雑誌（和）　46種（洋）31種（計）　77種

○昭和39年(2年度)4月　新築の現校舎へ移転。現在の仮図書室開設。事務職員数は前年度に同じ。所属した厚生係より年平均0.5人の出向を受ける。

年度末蔵書数　図書（和）6,062冊（洋）438冊（計)6,500冊、雑誌（和)78種(洋)23種（計)101種

○昭和40年（3年度）4月　室外ロビーに分室（整理事務室）を仮設。図書主任1名、事務員1名増員、事務職員は計3名となる。昭和41年1月1日現在の蔵書数は次の通り。

図書（和）8,470冊　（洋）599冊　（計)9,069冊

（1,760冊）　（291冊）　（2,051冊）

雑誌（和）　81種　（洋）23種　（計）104種

（25種）　（21種）　（46種）

〔註〕括弧内数字は上記のうちの教官室別置分。

現仮図書室所在位置および面積

一般棟3階

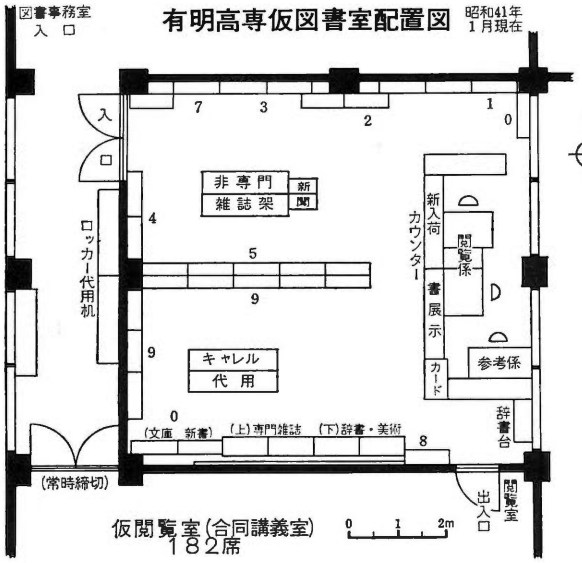
図書室（全面開架）　68㎡　〔普通教室1室流用〕

閲覧室　182席　〔合同講義室兼用〕

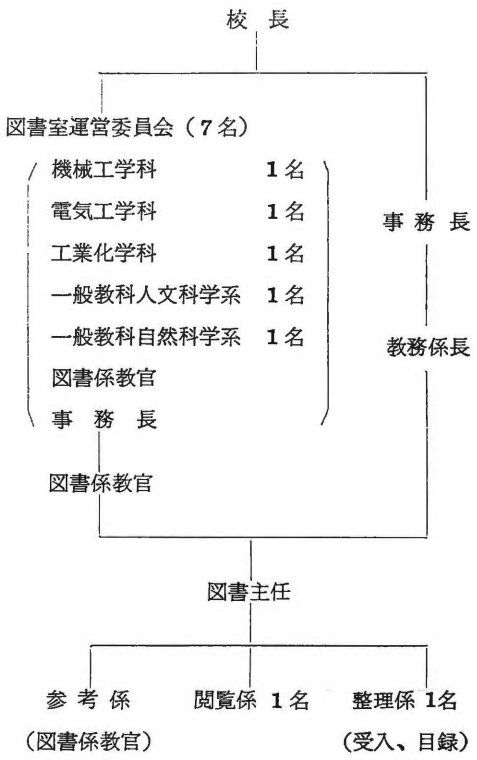
図書事務室　38㎡〔廊下ロビー間仕切分〕

有明高専仮図書室配置図

昭和41年1月現在



組織機構図



利用状況　（昭和40年1月～12月）

閲覧者総数（延入室者数）	30,728名
館外帯出冊数	11,171冊
一日平均閲覧者数（延入室者数）	130.2名
一日平均帯出冊数	47.3冊
一日平均帯出中冊数	355冊
〔註〕 開館日数	236日
学生数（1月～3月）	240名
（4月～12月）	360名

（詳細についてはI－B－2利用諸統計を参照されたい。）

カウンター業務

◇開館時間

月～金　8：30～17：00

土　9：30～13：30

◇貸出日

月、水、金　（週3日）

◇貸出冊数および期限

2冊まで　1週間以内

◇夏期、冬期、春期休暇中の特別貸出

1人5冊。（ただし1作品の分冊は合わせて1冊に数え、また複本用文庫本はこの制限外とする。）

蔵書構成表

昭和41年1月1日現在

区分	和漢書 図書冊数	和漢書 雑誌種類数	区分	洋書 図書冊数	洋書 雑誌種類数
総記	291	11	総記	56	2
哲学	254	2	哲学		
歴史	938	2	宗教		
社会科学	319	5	社会科学		
自然科学	1,507	8	語学	266	
工学	2,047	37	純粋科学	110	6
産業			有用技術	167	11
芸術	403	7	美術		
語学	464	5	文学		4
文学	2,247	4	歴史		
計	8,470	81	計	599	23

高専図書館に備えるべき<基本図書>の目録試案に代るものとして、現在本校図書室に蔵する双書類（学生閲覧用のみ）および雑誌の抄目録を稿末に付載するので御検討を仰ぎたいと思う。　（黒田芳則）

2. 本校図書室の利用諸統計

本校図書室では、昭和38年9月開室以来数度の利用諸統計を試み、図書室報『蹊（こみち）』（41年1月現在10号まで発行）紙上に報告を続けてきた。本稿執筆に際し、そのすべてについて再集計を施し、開館以来満2ヶ年間の利用実績を整理したものが以下の報告である。

一ケ年を前期（4月～8月）後期（9月～3月）に分け、38年度後期を第Ⅰ期として第Ⅳ期に至る。まず「第1表　入室者数・帯出冊数等統計表」を御覧いただきたい。**開館日数**は465日、これは日曜祭日・休暇期間・学校行事日を除いたほとんどすべての日数に当たり、今までのところ、整理などのために図書室独自の休館日をとったことはない。学生定員数が年度毎に120名ずつ増えるのは、言うまでもなく完成途上にあるためで、この統計も、利用者数が年度毎に変る特殊事情を承知して検討されねばならない。

入室者数は図書室入口に備えた入室者名簿に自署することによって集計される。（閲覧をせず、ただ部屋を利用するだけの者も、この数に含まれる。）入学後時を経るに従って署名を怠る学生が増えるのは止むを得ないが、記録の信頼性に大きく影響することはないと思われる。**延入室者数**はⅠ期が11,269人（一日平均 74.6人）、Ⅳ期が12,068人（一日平均 145.3人）であった。Ⅰ期の仮校舎（荒尾市増永）の一隅に設けられたわずか50㎡位の図書室の狭隘さは論外であるが、Ⅱ期以後新校舎に移ってからも、150名余収容に68㎡の図書室の広さが充分とは言えない。**人別入室者数**はⅠ期が8,562人（一日平均 57.4人）、Ⅳ期は10,695人（一日平均 128.9人）であるが、一日平均の定員に対する比率はⅠ期が47.8%、Ⅳ期が35.8%、すなわち、Ⅰ期においては全学生の約½、Ⅳ期においては約⅓が毎日入室した勘定となる。本校における図書室が、学生諸君によってかなり活潑に利用され、その生活に重要な位置を占める事実を認め得るであろう。

帯出冊数はⅠ期が4,223冊（一日平均 28.0冊）、Ⅳ期は4,526冊（一日平均 54.5冊）であった。この一日平均の定員に対する比率をも考えるなら、Ⅰ期は全学生の約¼弱、Ⅳ期は⅛弱が毎日一冊ずつ帯出したことになる。しかし実際の帯出は月水金曜日にのみ行われるから、この隔日の帯出日には、Ⅰ期において全学生の約½、Ⅳ期において約⅓が出納台に殺到して一冊ずつ帯出したわけなのである。**返納冊数**もほぼこれに近い数であるから、かかる傾向が全学年完成に至る今後二年間も持続するとするなら、正に嬉しい悲鳴とともに図書室は膨壊し、三人の図書職員は昏倒を余儀なくされるであろう。現図書室の狭隘は利用する学生側にも大なる不満をもたらせ、その声は23ページの希望として現われている。

本校における図書室利用度の高さは、その**蔵書回転率**に最も端的に現われている。Ⅰ期の124.3%を筆頭にⅣ期の63.3%に至るまで、各期とも50%を割っていない。つまり、平均的に言えば蔵書の½以上が、半年に一回は必ず帯出されたことになるのである。ⅡⅢ期の一ケ年間には125.6%を、全期間には236.7%を記録したから、平均すれば年間にはすべての蔵書が必ず一回以上は帯出されたことを意味し、蔵書が効率よく活用される事実を物語っている。

しかしわれわれは、好ましい資料ばかりを見出すのではない。例えば、Ⅳ期の一日平均の入室者数（延、人別共）がⅡ期のそれと大差ないのはどうしたことであろう。一日平均の帯出冊数は、その上昇率は鈍化しつつも、定員増に比例して一応増えつつあるのに、入室者数はⅡ期Ⅳ期ほぼ同数（人別の場合）にとどまり、または減少（延の場合）を示すのである。この間に定員は120人増えたから、定員に対する比率は著しく低下した。われわ

第1表　入室者数・帯出冊数等統計表

期＼別	開館日数	学生定員数	延入室者数 実数	延入室者数 一日平均	人別入室者数 実数	人別入室者数 一日平均	人別入室者数 定員に対する比率	帯出冊数 実数	帯出冊数 一日平均	返納冊数 実数	返納冊数 一日平均	帯出中冊数 一日平均	各期末蔵書累冊数（前期の場合は7月末登録まで）	蔵書回転率
	日	人	人	人	人	人	%	冊	冊	冊	冊	冊	冊	%
Ⅰ　38年度後期	151	120	11,269	74.6	8,562	57.4	47.8	4,223	28.0	3,536	23.4	119.8	3,398	124.3
Ⅱ　39年度前期	77	240	11,775	153.0	9,864	128.1	53.4	3,336	43.3	2,305	29.9	246.3	4,443	75.1
Ⅲ　〃　後期	154	240	18,175	118.0	15,668	101.7	42.5	5,266	34.2	6,055	39.3	225.9	6,500	74.3
Ⅱ+Ⅲ　〃　全年	231	240	29,950	130.0	25,532	110.5	46.0	8,602	37.2	8,360	36.2	232.6	6,500	125.6
Ⅵ　40年度前期	83	360	12,068	145.3	10,695	128.9	35.8	4,526	54.5	3,835	46.2	338.2	7,146	63.3
四期間合計	465	—	53,287	114.7	44,789	96.3	—	17,351	37.3	15,731	33.8	213.9	7,146	236.7

第 2 表　学年別帯出冊数統計表

学年別 / 期	1年次生（現三年） 実数	一平均	人一平均	2年次生（現二年） 実数	一平均	人一平均	3年次生（現一年） 実数	一平均	人一平均	全学生 実数	一平均	人一平均	職員 実数
	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
Ⅰ 38年度後期	3,901	32.5	4.6	—	—	—	—	—	—	3,901	32.5	4.6	322
Ⅱ 39年度前期	1,566	13.1	2.6	1,698	14.2	2.8	—	—	—	3,264	13.6	2.7	72
Ⅲ 〃 後期	2,615	21.7	3.1	2,417	20.1	2.9	—	—	—	5,032	20.9	3.0	234
Ⅱ+Ⅲ 〃 全年	4,181	34.8	2.7	4,115	34.3	2.9	—	—	—	8,296	34.6	2.9	306
Ⅵ 40年度前期	1,557	12.9	2.6	1,324	11.0	2.2	1,475	12.3	2.5	4,356	12.1	2.4	170
四期間合計	9,639	80.3	3.3	5,439	45.3	2.7	1,475	12.3	2.5	16,553	—	3.0	798

れは、Ⅱ期53.4%→Ⅲ期42.5%→Ⅳ期35.8%という対定員入室者数の漸減傾向を最も注意すべきと思う。署名もれにしては数値が大きすぎる。やはり、学生の図書室疎遠化の現象と見るのが正しいであろう。学生の関心の低下等、図書室が親しまれなくなった幾つかの理由をここに考え得るが、その中には現図書室入室者数の限界到達という問題も含まねばならないであろう。

次の「第2表　学年別帯出冊数統計表」を御覧いただきたい。ここでは、帯出冊数の期別変化を学年ごとに見てみようと思う。

まず目に止まるのは、Ⅰ期における一年次生の、一人一月平均4.6冊という高い帯出数である。これは、二・三年次生によつても、またⅡ期以後の一年次生自身によっても更新できなかった最高記録であるが、そこには特殊な事情が介在した。Ⅰ期は仮校舎時代であり、新入の彼等を迎えるに運動場はなく、クラブ活動に参加しようにも、彼等を勧誘する上級生は勿論、クラブすらも未だ存在しなかった。所詮彼等は、図書係教官の強力な指導もあって、図書室へと蝟集せざるを得なかったのである。全く以って、当時の彼等の読書欲は凄じいほどであった。Ⅱ期以後、新校舎に移った彼等の読書量は急減する。言うまでもなく、堰を切った奔流の如くに高まる学生会活動・クラブ活動に時を奪われたためであろう。しかし注意深く見ると、その後の読書量は決して低下せず、常に2.6冊以上の一定率を保っている。これこそ、Ⅰ期において得た読書の習慣が偽りのそれでなく、彼等の生活に深く根を下すことを証するのではあるまいか。一月に2.6冊という数は高いものではないかもしれない。しかし恒常的にこの数を守り得るに至ったことは、彼等の生活に読書の基本的数量を定着し得たこととして高く評価されねばならない。

次に二・三年次生について考えれば、その一人一月平均帯出数もほぼ各期の一年次生のそれに近似する。しかし、Ⅳ期の数値には一応の注意を促したい。すなわち、二年次生については低下が、三年次生については一・二年次生の利用始期には見られなかった低率が認められる。一年次生に比較して、二年次生には読書習慣の未定着、三年次生には意欲の低さ、また下級生ゆえの入室のはばかりが指摘できるが、仮に図書室の受入れ態勢に何らかの欠陥があるとするなら、その影響を最も受けやすいのが、読書習慣の未だ身につかぬ低学年生であることはうなずける。

ここでいささか視点を換え、各学年ごとに個人別傾向を見てみよう。今、各学年の学生を各期の一月平均帯出冊数に従って①～⑥の六グループに分けた。各グループに内包されるメンバーは、期が変るごとに、より上層へあるいはより下層へと移動することもあろう。その分布の推移を示したのが、「第3表　個人月平均別帯出冊数分布表」である。

第3表　個人月平均帯出冊数分布表
（一ケ月当り平均帯出冊数により6段階に配分）

学年 / 期 / 冊数	① 0～1冊	② 2～3冊	③ 4～5冊	④ 6～7冊	⑤ 8～9冊	⑥ 10冊以上
	人	人	人	人	人	人
1年次生 Ⅰ 38後期	8	33	31	25	15	8
1年次生 Ⅱ 39前期	34	41	27	11	2	1
1年次生 Ⅲ 〃後期	29	40	25	14	6	4
1年次生 Ⅵ 40前期	36	42	20	9	4	4
2年次生 Ⅱ 39前期	20	53	30	16	1	0
2年次生 Ⅲ 〃後期	25	50	21	17	5	1
2年次生 Ⅵ 40前期	34	55	24	7	1	0
3年次生 Ⅵ 40前期	20	59	29	7	2	0

ここにも第一に見出されるのは、やはりⅠ期における一年次生の傾向である。②に頂点があるとは言え、③④

⑤⑥もかなりの数があり①が極めて少い。しかしこの構成は、あくまで特殊事情を背景とした特異な傾向に過ぎず、Ⅱ期にはいると忽ち一変せざるを得なかった。しかしⅡ期以後は、先にも述べた通り極めて安定した構成を保ち続けるのである。

ここで各学年を対照させてみよう。三年次生は一期間の資料しかないから、当然一年次生と二年次生との比較になる。まず気付くのは、両学年の構成が明らかな個性を持ち、一年次生同様②にある二年次生の頂点の数値が、前者に比べて極めて高いことである。すなわち、一年次生は⑤⑥の上位グループと①の最下位グループにおいてわずかに多く、これに対して二年次生は③（Ⅲ期を除く）④(Ⅳ期を除く)の中位グループにおいてわずかに多く、②の下位グループにおいて際立って多いのである。つまり、一年次生の方が比較的に平均化しており、これをグラフに示せば、二年次生の描く曲線のピークには鋭い尖りが、一年次生のそれには相対的に鈍い尖りが現われることとなろう。ところで、両者共にかなり固定している①②の数値は、このグループに包含されたメンバーの固定をも想像させる。この学生達の帯出する書物は何であろうか。おそらくは、次の読書傾向の項に指摘される、国語科棚町教官社会科室永教官等の指定図書と思われる。月1乃至3冊という数は、教材または副教材として必要とされた図書の最低の線なのであろう。しかし、彼等が僅かに指定図書のみしか利用しないと非難するのは当たらない。ただこの指定図書によってこそ、彼等は細々ながら図書室と結ばれるのである。図書館の扉を叩かせることが図書館奉仕の第一歩であるなら、本校においてその第一歩は、全学生について既に成果を得ていることになるからである。

さて、次の問題に移ろう。二年次生については、下位グループの多さのみでなく、その構成の不安定さについても述べねばならない。①は→増→増を、③は→減→増を、④は→増→減をかなり大きく示している。この不安定さは何に起因するのであろうか。われわれは、図書室活動および読書指導に反応した、読書習慣定着および図書室からの乖離の二現象の前段階としての動揺と考えたい。すなわち、③のⅢ期の減少分は下位の①と上位の④⑤に二分した。帯出冊数の一人一月平均値にも見る通り、未だこの段階、つまり入学後一年以内においては、全学年および上位グループの増加傾向は続くのである。同時に下位①グループの増加が始まることも、また一方では注意されねばならないであろう。しかし二年目のⅣ期にはいると、④の多くが①②③へと移行して構成は著しく変化する。この構成が今後もこのまま安定して継続されるかはまだわからない。また、ここに残された④⑤⑥の少数メンバーにのみ読書の習慣が定着したとも未だ断言できない。しかし、分極化が二年目にはいると表出するとは言えるであろう。そのように解するなら、Ⅱ期の一年次生に現われた特異現象についても、二年目ゆえのこの要因を認め得るのではあるまいか。われわれはここで、読書指導の時期の問題に想到せざるを得ないのである。一言にして言えば、読書習慣の定着には、入学早期の、しかも強力な指導が要求されるであろう。この要求にかなり応え得た例を、Ⅰ期における一年次生の図書室利用に認めることができる。偶然にも幾つかの条件がその習慣定着に益したのであったが、その効の大なりし事実は、次の資料にも見出されるのである。

最後に掲げるのは、全学生から全期間を通じての多読者を選んだ「第4表　多冊数帯出者十傑表」である。全期間平均による(A)表ではその七人まで、各個人の最多期による(B)表はそのすべてが一年次生によって占められている。今この調査によって、われわれは彼等の読書を量的にしか評価できない。しかしこの表の数値を見る時、その質的価値も、また相応の実りを得つつあることを信じないわけにはいかないのである。　　（田中道雄）

第4表　多冊数帯出者十傑表

(A)表　在籍全期間の月平均による十傑

順位	学籍番号	帯出冊数	期数（月数）	月平均値
		冊		冊
①	1217	272	4 (24)	11.3
②	1213（女）	261	4 (24)	10.9
③	3329	45	1 (5)	9.0
④	1202	202	4 (24)	8.4
⑤	1328	192	4 (24)	8.0
⑥	3234	40	1 (5)	8.0
⑦	1211	189	4 (24)	7.9
⑧	2231	122	3 (17)	7.2
⑨	1109	170	4 (24)	7.1
⑩	1203	168	4 (24)	7.0

(B)表　個人別最多期の月平均による十傑

順位	学籍番号	帯出冊数	最多期(月数)	月平均値
		冊		冊
①	1213（女）	106	Ⅰ (7)	15.1
②	1217	100	Ⅰ (7)	14.3
③	1328	63	Ⅱ (5)	12.6
④	1140	79	Ⅰ (7)	11.3
⑤	1208	78	Ⅰ (7)	11.1
⑥	1301（女）	76	Ⅰ (7)	10.8
⑦	1211	73	Ⅲ (7)	10.4

順位	学籍番号	帯出冊数	最多期(月数)	月平均値
		冊		冊
⑧	1317(女)	52	Ⅵ(5)	10.4
⑨	1214	68	Ⅲ(7)	9.7
⑩	1202	48	Ⅱ(5)	9.6

3. 有明高専生の読書傾向

—分類別利用統計—

以下に掲げる三種の表は、帯出図書の分類別統計により読書傾向をたずねようとするものである。館内の閲覧については記録を求めぬため、その実態を把握できないが、大勢は本調査の結果と一致するであろう。また、帯出数がそのまま読書量を示すわけでもないが、その傾向に大差はあるまいと思われる。

ここで二、三点をお断りしておきたい。まず、対象学生数・対象学生の学年別構成・蔵書冊数・蔵書構成等、調査の際の基礎的条件が、完成途上にあるため年度によって著しく異なること、従って、正確な読書傾向およびその変遷を把握しにくいことである。次は、特定図書の数値の極端な高さについてであるが、これは、指定図書として複本を含み、またテキストとして用いる場合は、一人が幾度も帯出することがあるからである。なお、一点二冊以上の図書は、その冊数（複数）によって集計したためもある。

分類表についても一言しておきたい。工業高専という特殊な学制に応じ、教科本位の特殊な分類表を立てた。類段階では、600（産業）を500（工学技術一般）に含ませてこれを廃止し、綱段階では、430（化学）を570（化学工業）に含ませ、900（文学）に国語科古典に対応する（和漢古典）の綱を設けた他、各類内において綱数を集約整理した。今後も改良を試みたい。

ここで、おおよその読書傾向を指摘しておこう。列挙すれば次の通りである。

イ．文学書が過半を占めること。

一般科目が多い低学年生のみを擁する現段階では自然な現象であろう。しかし高学年まで学年構成が進行しても、文学を多読するこの趨勢が維持されることは望ましい。文科系学校で工学書の多読が行われるとすれば、これは確かに異常であろう。しかし、工業高専において文学書が多読されるのはすこしも異常ではない。文学書は、あらゆる職業の人間にとって、不可欠必備の教養または娯楽の手段だからである。

ロ．歴史・伝記書がかなり読まれること。

歴史書の多読は、社会意識の覚醒を促すものとして好ましい。伝記書が多いことも、人格形成に大きく益するであろう。

ハ．指定図書への極度の集中。

文学や歴史に多いのは、現代国語および歴史の教官の指定によるためである。現代国語教材としての複本備え付け状況は、Ⅲ a のA表を参照されたい。なお、同表に付記した学生自身の指定図書購買数を見れば、指定図書が読まれた数値はさらに増加することとなる。既に見て来た——彼等自身の蔵書中に指定図書の占める率が高く（9ページ）、彼等の多くがこれに感銘し（20ページ）、読書しない学生がこれによって辛うじて図書室に繋がれる（28ページ）——諸事実をも考え合わせるなら、本校の図書室活動において指定図書制は大なる効果を収めつつあるようである。

ニ．社会科学書があまり読まれぬこと。

総数も少いが、読まれた図書の質も問題にされねばならない。類内の第一位は風俗綱の「エチケット」であり、経済綱のトップは「日本の会社」また社会・教育綱のそれは「学者の森」と、それぞれ手軽な図書の名しか現われて来ない。低学年段階の今日ではむしろ当然であろうが、社会科学の原理的なものへの関心が今後高まることが望まれる。岩波新書など、もっと多く読まれてよいのではあるまいか。

ホ．自然科学書に偏りがあること。

副教材または参考図書的なものが多いが、科学思想や科学史的なものまで読み、巾広い自然科学の視野を持つことを期待したいのである。天文学・地学・生物学・医学が少いのも、カリキュラムに生物と地学を持たぬ高専としては問題であろう。理科マンに限らず、自らに世界観・人間観の確立を望む者にとって、この二分野の教養は欠かせないからである。もっとも、第一・二年度の集書の重点を文学中心の人文・社会科学におき、自然科学を第三年度、工学を第四年度以降としたことが反映したかもしれない。また学力レベルから言って、教科書や参考図書への依存度が高いのは止むを得ないこともあろう。しかしなお、上記の問題は今後も留意さるべきように思われる。

ヘ．芸術に乏しく、体育が多いこと。

体育が多いのは結構である。しかし、芸術への関心はあまりにも低い。本校のカリキュラムに音楽はなく、美術の時間数も僅少という制度上の欠陥を補うため、金額的にもこの綱へはかなりの配分を行なっている。大型美術書など禁帯出のものが多く、

そのため現われる数値が低いこともあろう。しかし、統計外の観察結果によってもやはり関心は薄いのである。普通高校と違って入試科目にこれらが課されないため、おのずと基礎知識を欠くに至ったのがその主因と思われ、制度がしからしめる欠陥を遺憾ながら認めざるを得ないのである。

次に、この二年間を通じ、読書傾向がいかに変遷したかを見てみたい。最初に述べたように、統計の基本的諸条件の変化もあって正しくは捕捉できず、その推移も全体から見れば極く微量でしかない。大勢は、むしろ変らぬと見るのが妥当であろう。それでも、なお強いて二、三を挙げるなら次のようである。

イ．工学のⅢ期からの急増。

専門教科授業の増加に伴なうものであろう。

ロ．社会科学のわずかな増加。

成長に応じ、社会への関心が高まった故であろうか。また、三年生のカリキュラムに加わった法制・経済の授業が影響したのかもしれない。しかし、絶対数の少いことは依然として問題であり、今後の増加が望まれる。

ハ．非必修語学書の漸減。

普通高校では大学受験という目標が生徒の語学力向上に役立っているが、高専の場合はかような強い動機づけに乏しく、語学の学習指導上幾多の困難が存することは容易に想像できる。このことに留意し、英語科教官と図書係教官とは、読み物の整備による多読の奨励を開設当初から進めて来たわけであるが、本校図書室でやや目立つことは、必修の英独両語以外の語学書の整備である。

現代の技術者にとつて、ロシア語・（工業化学面での）イタリア語の習得が持つ実益的有用性については、今更言うまでもない。また図書室としては、企業・研究所等のドクメンテーションの仕事など、ことに女子学生にとって将来望ましい分野と推測し、よしんば初歩程度で終るにせよ、フランス語・ロシア語等の独習を推進させたい意図を持つ。かかる実利的見地を離れても、語学学習そのものが持つ教養的意義は、その説明に言を俟たないであろう。すでに高専においても、フランス語・ロシア語を開講した群馬高専の例があるが、これが全高専に一般化する気運は認められない。

ところで、本統計のⅠ・Ⅱ期においてかなりの冊数を記録した非必修語学書は、Ⅲ期以後は減少をたどる。Ⅰ・Ⅱ期の多読の背景に、開設初頭における集中的な語学書購入と強力な利用奨励があったこと、Ⅲ期以後減少の理由には、専門教科の増加に伴ない、上級生が語学学習のための気持ちの余裕を失っていることを挙げることができる。しかし他方において、次の要因が潜むことはないであろうか。本校生が、入学当初に高専に対して抱き、またその実現に努力したかに見える教養主義的理想主義的ヴィジョンが、今や衰頽しつつあるとの見解である。＜大学入試にわずらわされる高校と違い、ここでは自由に好きなことを学ぶのが可能だ＞という新学制への期待が、現実化されぬまま消え去るのでなければ幸いである。われわれは彼等の夢を守り、かつ育ててやらねばならないであろう。実利性をも現実に知る高学年に至り、再びこの綱の数値が高まることを望んでやまない。

最後に、喜ばしい現象を指摘して本章を終えよう。それは本格的読書派――文学に限らず、手堅い思想書等も広く読みこなす一群――の誕生ということである。まだ統計の上位には現われないが、哲学では、心理学応用の通俗的教養書や人生論に混って「プラトン名著集」・「考へるヒント」・岡潔の随想などが増加し、歴史では「東洋文庫」、和漢古典では「中国の思想」のシリーズが読まれ始めたのも注意されよう。われわれは、希望を未来に託すことができるのである。　（田中道雄）

表 A　分類（類）別帯出冊数統計表　　単位：延冊数

類	Ⅰ 38年度後期	Ⅱ 39年度前期	Ⅲ 39年度後期	Ⅵ 40年度前期	四期間 合 計
	%	%	%	%	%
0 総　記	3(0.1)	12(0.4)	14(0.2)	19(0.4)	48(0.3)
1 哲　学	210(5.0)	82(2.5)	211(4.0)	144(3.1)	647(3.7)
2 歴　史	394(9.3)	415(12.4)	547(10.0)	568(12.5)	1,924(11.1)
3 社会科学	49(1.2)	41(1.2)	106(2.0)	76(1.7)	272(1.5)
4 自然科学	532(12.6)	311(9.3)	640(12.2)	575(12.7)	2,058(11.8)
5 工　学	158(3.8)	126(3.8)	428(8.2)	336(7.4)	1,048(6.1)
7 芸　術	80(1.9)	58(1.7)	131(2.5)	112(2.5)	381(2.2)
8 語　学	259(6.1)	142(4.3)	176(3.4)	102(2.3)	679(3.9)
9 文　学	2,538(60.0)	2,149(64.4)	3,013(57.5)	2,594(57.4)	10,294(59.4)
計	4,223(100.0)	3,336(100.0)	5,266(100.0)	4,526(100.0)	17,351(100.0)

表 B　分類（綱）別帯出冊数統計表　　単位：延冊数

綱	Ⅰ 38年度後期	Ⅱ 39年度前期	Ⅲ 39年度後期	Ⅳ 40年度前期	四期間合計
0 総　記	**3**	**12**	**14**	**19**	**48**
1 哲　学	**210**	**82**	**211**	**144**	**647**
哲学一般・宗教	179	72	181	113	545
心 理 学	31	10	30	31	102
2 歴　史	**394**	**415**	**547**	**568**	**1,924**
日 本 史	41	73	81	123	318
世 界 史	115	107	218	150	590
伝　記	137	196	151	218	702
地　理	101	39	97	77	314
3 社会科学	**49**	**41**	**106**	**76**	**272**
政治・法律	0	3	16	20	39
経　済	20	17	20	24	81
社会・教育	21	18	69	24	132
風俗・民俗学	8	3	1	8	20
4 自然科学	**532**	**311**	**640**	**575**	**2,058**
自然科学一般	15	16	13	21	65
数　学	298	167	383	289	1,137
物 理 学	166	109	172	170	617
天文学・地学	16	8	17	23	64
生物学・医学	37	11	55	72	175
5 工学・技術	**158**	**126**	**428**	**336**	**1,048**
工学技術一般・産業	27	12	32	22	93
機械工学	28	16	70	48	162
電気工学	77	50	206	167	500
化学・化学工業	26	48	120	99	293
7 芸　術	**80**	**58**	**131**	**112**	**381**
芸術一般・諸芸・娯楽	3	0	2	3	8
美　術	13	2	18	13	46
音　楽	2	5	11	1	19
演劇・映画	1	3	3	2	9
（以上、芸術の小計）	(19)	(10)	(34)	(19)	(82)
体育・スポーツ	61	48	97	93	299
8 語　学	**259**	**142**	**176**	**102**	**679**
言語学一般	5	7	12	12	36
国 語 学	4	10	10	0	24
英　語	198	80	123	41	442
ドイツ語	6	5	8	26	45
（以下、非必修語学の小計）	(46)	(40)	(23)	(23)	(132)
フランス語	8	7	13	13	41
ロシア語	20	20	1	2	43

綱	Ⅰ 38年度後期	Ⅱ 39年度前期	Ⅲ 39年度後期	Ⅳ 40年度前期	四期間合計
その他諸国語	18	13	9	8	48
9 文学	**2,538**	**2,149**	**3,013**	**2,594**	**10,294**
和漢古典	62	160	123	113	458
日本文学	1,746	1,445	1,708	1,368	6,267
世界文学	730	544	1,182	1,113	3,569
中国文学	42	12	78	13	145
英米文学	191	118	318	268	895
ドイツ文学	85	79	181	113	458
フランス文学	239	179	373	537	1,328
ロシア文学	152	107	194	142	595
その他諸国文学	21	49	38	40	148

（注）「**表C　よくよまれた本**」は、分量が多いので稿末48ページに収めた。参照されたい。

Ⅱ 高専教育と図書館

Ⅱ－A　期待される高専生像

「職業に必要な能力」を備えた人材を育成して、それを求める社会に送り出すのが高専の任務であることは、「学校教育法」第70条の2に示されたとおりである。具体的には工業高専であるから、ここでいう「職業」の内容は、機械装置・建築物・構築物・化学製品等の設計製造・製作・建設・運転・保守、これらに関連する試験研究、技術サービスなどを含み、「深く学芸を教授する」ことによって、これらに従事する有能な工学関係の中堅技術者を育成するのが高専の任務なのである。

職業上の能力として犬丸直氏はつぎの項目をあげた。（『高等専門学校制度と関係法令の解説』p. 216）

ア．設計・製作・管理あるいは試験研究等について現場技術者として上司が企画したことを理解する理解力と判断力。

イ．これを実際に具体化する思考力と応用力。

ウ．技能者等をしてこれを実施させる指導力と実行力

各教育機関における科

科目別 ＼ 教育機関別	普通高校	工業高校 M	工業高校 E	工業高校 C	高専 M	高専 E	高専 C	短大 M	短大 E	短大 C
一般科目 人文科学	945	490	490	490	525	525	525	60	60	60
一般科目 社会科学	175	140	140	140	210	210	210	60	60	60
一般科目 自然科学	1225	700	700	700	980	980	980	285	285	330
一般科目 外国語	595	315	315	315	770	770	770	240	240	240
一般科目 保健体育	385	315	315	315	350	350	350	60	60	60
一般科目 芸術	140	35	35	35	70	70	70	—	—	—
一般科目 特別教育活動	105	105	105	105	105	105	105	—	—	—
一般科目 小計	3570	2100	2100	2100	3010	3010	3010	705	705	750
専門科目 講義	—	1050	1225	1085	2100	2240	2520	1050	1230	960
専門科目 実験・実習・製図	—	630	455	595	1540	1400	1120	585	450	675
専門科目 小計	—	1680	1680	1680	3640	3640	3640	1635	1680	1635
合計	3570	3780	3780	3780	6650	6650	6650	2340	2385	2385
週当り授業時間数	34	36	36	36	38	38	38	39	39.8	39.8

エ．専門の技術分野についての観察力と注意力。

オ．上司に対し技術上のよき提案者であるための表現力と同僚に対するよき協力者であるための協調性。

さらに、以上の能力を育成するための教育目標としてつぎの5項を示した。

ア．設計・製作・管理に関する基礎的知識と技術を身につけさせること。基礎的原理を容易に使いこなし実社会における若干の研修期間によって特定の技術部門において創造性が発揮できるようにすること。

イ．試験・研究・調査の具体的計画がたてられる程度の基礎的知識と計測技術を与えること。

ウ．総合力・判断力および着想力の啓発に努めること

エ．公民意識の昂揚ならびに協同作業の精神と責任感の育成に努めること。

オ．外国語に関しては、基本的な語法に習熟させ、読む能力の基礎を養うとともに、カタログ、仕様書等の内容を理解することができ、聞き、話し、書くなどの実際的な能力を養うこと。

つづいてこれらの教育目標を達成するための各教科目の考え方について詳細に触れている。

われわれは、この共同研究に当り、特に一般科目について授業時数および内容につき検討した。数学・物理・化学を除いて、一般高校および大学教養課程と較べて少ない総時間数に、いかに対処すべきかを検討した。（時間配当についてはⅡ－B参照。）

国語科を例にとれば、高専第3学年までの週当り総時間数9時間は、工業高校なみの最低基準の時間でしかないわけである。にもかかわらず、われわれが目指すのは大学教養課程水準のそれであり、しかもこの目標達成は、必ずしも不可能ではないと考えている。高校生や大学教養課程学生は、入学試験・学部学科選択のための競争試験にかなり大きなエネルギーを消耗しているが、高専生はこれらに苦しめられることなく、エネルギーを有効に用いればよい。

高専ではカリキュラムの時間だけに頼らなくてもよい。学校での授業は導入を受け持ち、再び例を国語にとれば、現代文学や古典に興味をひきおこさせることにまず重点を置く。その一方、図書・その他の資料を充実しこれを十二分に活用させて時間不足を補う方法を採るのである。われわれとしては、現在の本校国語科は、かように視て本来の教育目的を果たしつつあると考えている。

歴史・地理・倫理社会・外国語・芸術についても、上述の国語同様、図書資料・視聴覚資料の充実により、豊かな教養を身につけた技術者の育成に役立たせることができよう。

高等学校段階として履修すべき学科目中、生物および地学が高専の一般科目から省かれているが、これは学年別時間配当の技術上の理由であろうが、残念なことである。この面も図書資料の整備により補いたい。

外国語としては、中堅技術者として、辞書を手にしながら専門書を理解できる程度の力までは期待したい。技術者としての語学の基礎、教養としての語学に、それぞれ六分・四分の重みをつけたい。高学年では専門学科に関する外国語の文献や図書を用い、専門学科の教官が外

目別授業時間数の対照表

短大＋高校			大学			大学＋高校			旧制専門学校		
M	E	C	M	E	C	M	E	C	M	E	C
1005	1005	1005	180	180	180	1125	1125	1125	210	210	210
235	235	235	180	180	180	355	355	355			
1510	1510	1555	450	450	450	1675	1675	1675	630	525	350
835	835	835	420	420	420	1015	1015	1015	210	210	210
445	445	445	120	120	120	505	505	505	210	210	210
140	140	140	—	—	—	140	140	140	—	—	—
105	105	105	—	—	—	105	105	105	—	—	—
4275	4275	4320	1350	1350	1350	4920	4920	4920	1260	1155	980
1050	1230	885	1835	1755	1620	1835	1755	1620	1470	1820	1505
585	450	675	1140	810	1260	1140	810	1260	1050	805	1295
1635	1680	1560	2975	2565	2880	2975	2565	2880	2520	2625	2800
5910	5955	5880	4325	3915	4230	7895	7485	7800	3780	3780	3780
—	—	—	36	32.6	35.3	—	—	—	36	36	36

国語の一部を担当することも、益するところ小ならざるものがあろう。

保健および体育については、高等学校指導要領において示されているところはそのまま適用されるが、学生の将来の社会生活（工場勤務が主であろう）を考えると、その環境において自分自身のみならず受持つ部下の保健衛生にまで心を配り、またレクリエーションとしての種々のスポーツに理解をもち、変転するルールに適応できるよう指導すべきである。これはまた、工場での「人との良き関係」の樹立と維持にかなりの役割りを果たすであろう。

数学については、一般数学・応用数学を通じて一貫した教育を施し、工学関係の例題を多く取り入れ、演習にも時間をかけて、基礎をしっかりやる必要がある。

物理については、教養としてより基礎工学としての物理に徹した方がよい。

化学については、工業化学科・金属工学科など化学を主とする専門学科の学生と、機械工学科・電気工学科など非専門学科のものとに対しては、その内容を変えた方がよい。前者では引続いて履修する分析化学・無機化学・物理化学等の導入とし、後者に対してはそれぞれの学科との関連を考慮すべきである。

一般科目・専門科目を通じて、各科目で使用する教科書や参考書の内容において、その質がいかに高く、またその量がいかに豊かであっても、それらを記憶しただけの学生では、われわれが育成しようとする目標には合致するとはいえない。学科の本質を理解し、常々科学的接近（scientific approach）を心掛け、積極的に事物の解明開発に当る高い潜在能力を秘めた人材の育成を図らなければ、「仏作って魂入れず」になってしまう。われわれが学科の基礎を重視し、自力開発を期待する理由もここにあるわけである。　　（清水正夫）

Ⅱ—B　高専カリキュラムの比較的考察

文部省大学学術局技術教育課の「高等専門学校教育課程の標準試案」第1章(総則)第1節(高専の教育目標)にはその教育の目的と使命について次のように述べている。

即ち、「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成する」ことを目的とし、豊かな教養と専門的な技術を身につけた工業に関する有為な中堅技術者を養成することを使命とするのである。

我々は、この目的と使命を達成するため、具体的に展開された高専のカリキュラムを、他の各種の工業教育機関のそれと比較し、特に一般教養科目と専門科目との比率に考察の重点をおいて、調査に着手した。

調査の対象として、福岡県所在の県立普通高校、工業高校、及び国立の短大、大学を選び、各校の学校要覧、学校案内、又は履修要項、学科課程表によって、一般科目、専門科目に大別した授業総時間数を算出してその概要を明らかにし、検討の資料とした。参考のため犬丸直氏著『高等専門学校制度と関係法令の解説』より、旧制専門学校（官立）の授業科目及びその授業総時数をも資料中に加えた。

授業時間数の算出に当たり、普通高校、工業高校にあっては現に実施されている授業計画により、また、短大、大学にあっては最小履修単位数に基づいて、各々の授業時間数を算出した。一般科目と専門科目の分類は、大学の教養部における分類に従い、また教養部で履修する科目中特に自然科学科目のあるものについては、当該教養部で一般科目と指定されてあるものは一般科目に、それ以外のものは専門科目の時間数に加算した。

本校には、機械工学科・電気工学科・工業化学科の三学科が設置されているので、参考のため、他の教育機関についても、三学科に亘って調査した。

なおこの種の研究報告としては、東京都立工業高等専門学校・加藤博助教授の、「工業教育機関の授業時間数の比較」と題した都立の各学校についての詳細な研究報告が、同校研究報告第1号に掲載されている。調査の対象校が異なるため、授業時間数や、科目の分類内容に若干の差異が認められるが止むをえないことである。

我々の調査の結果は、前ページに一覧表としてまとめた。本調査の結果を見ると、概ね以下のようなことが明らかなように考えられる。

1、専門科目の総時間数は、何れの教育機関に較べても高専の方が多い。大学に比較して700～1,000時間、短大・工業高校と比較すれば、実に約2,000時間も多くなっている。

大学と高専との間の専門科目の時間数の差は、前記の加藤報告ではさらに開いて1,100時間となるが、一方、高専特集号ともいうべき本年の『リクルートメント』No. 4 掲載、文部省大学学術局・杉江局長の論文によれば、大学における専門科目の総時間数を約3,000～3,200時間と見積ってあるので、その差は約600時間と縮まる。しかしいずれの場合も、大学に比して専門科目の時間数は多くを配当してあり、専門技術の習得にいかに重点が指向されているかが分かる。

2、専門科目中の実験、実習、製図等技能的要素を多分に含んだ授業時間数について見れば、機械工学科・電気工学科にあっては、いずれも大学のそれを上まわり、短大・工業高校に比すれば、各科とも約2～3倍の時間数になっている。この点に関しても、中教審の「短期大学制度改善についての答申」（昭和31・12・10）中にあ

る「実験・実習などを重視し…」とある意向が十分に採用された結果であろうか。

3、これに反して、一般科目の時間数は、工業高校を除く他のいずれの学校の卒業生と比較しても少い。大学卒・短大卒に比して、それぞれ約1,900時間および1,300時間、普通高校に比しても、560時間少くなっている。

一般科目の内容をさらに細分して比較したとき、最も目立つのは、人文科学の時間数であり、短大卒・大学卒の約5割になる。次いで自然科学の6割弱乃至6割強、保健体育の6割乃至7割、外国語の7.6割乃至9割となっている。

一般科目の時間数の不足については『リクルートメント』No. 4の杉江局長の論文中にも言及され、この弱点は高専が五年間を通ずる一貫教育であるため、高校と大学にみられるような一般科目の重復を避け、技術者として必要な教養識見をもたせることに重点をおいているので、内容的には数字ほどの差はないものと解説されている。

4、一方、高専における授業の週当り時間数をみると平均38時間で短大に次いで多く、最終学年にあっては週40時間となっている。この週当り時間数をみるとき、かりに、現在の高専のカリキュラムにさらに補うべき科目が何かあったとしても、これ以上の時間数の増加は、教育効果の上から期待できないのではないかと考えられる。

（甲木季資）

Ⅱ－C　一般教養の場としての図書館

高専の教育のあり方を普通高校と比較することには多くの問題があるにせよ、学生の年齢も同じであるから、普通高校の短所を見て反省し、同時にその長所をとり入れることは必要であると思う。普通高校の短所（となりがちなこと）とは「大学進学のため」に役に立つことに力を入れるあまり、人格形成の余裕をもち得ないことが起る可能性である。もう一面の長所とは、芸術活動としての文化部の活動が一般に盛んなことであり、絵画展・書道展・活花展・音楽コンクール等への出品出場活動が活発である。この点は大学でも然りである。

ところが高専では、下手をすると普通高校の上記の長所を捨て、短所を採る可能性が生まれる。すなわち、理工科系科目で授業の多くを占め、芸術や一般教養科目を閉め出して、「工場のため」の予備校になるおそれがあるのである。

大学入試のために予備校化するにせよ、工場のために予備校化するにせよ、学園が予備校化することは、教育上最も警戒する必要がある。そうなったときには、教官と学生には何ら心が通わず、それはただ、教官も学生も自分達の利益を求める集団となってしまうだけだからである。

技術者だから芸術が必要とか不必要とかではなく、美しいものを美しいと感じ、また、ものを考える人間ができなければ学園とはいえない。

図書館は、この役目を果たす場所の一つであるべきで私は次のことを望みたい。

1. 学生も教官もともに足を運び易い雰囲気を作ること。
2. 開架式にし、色とりどりの文学書や大衆小説を備え、文学に親しむような雰囲気を作ること。
3. 壁面の一部は画廊の役目をも果たし得るよう設計し、学生の絵画展などに利用させること。
4. できるだけ多くの複製名画や風景・美術品の写真などを備え、適時壁面を飾ること。
5. 文化祭（文科系の活動）やレコード・コンサートの会場にも利用できるよう設計を考慮されること。

以上のようなことが、高専で正規の授業に不足しがちな芸術教育の補足の役をわずかながら果たすものと思う

（樋口大成）

上述の御意見には全く同感である。ところで、本校の学生諸君が実社会に出た場合には、従事する仕事の専門家になることがいやおうなしに要求せられるであろうしそうなると、ややもすれば読書は専門書のみに片寄ってしまい、時として手にする本は、頭を休めるための読みやすいものになってしまうであろう。こうしたことは、文科系出身の自分のことに照らしても、最近考えさせられていることである。自分が専門に研究している分野以外のことについては、学生時代に図書館で読んだことの知識にたよっているようなものである。学生時代は、それが記憶力の旺盛な時期と一致するためか、そのときに得た感慨はいつまでも鮮明によみがえってくる。学生時代には片寄らず広く読んでおくことが、本校のような所では大切なことのように思えてならないのである。

（室永芳三）

Ⅱ－D　集中か分散か

――工学専門書について――

近年、大学図書館の組織に関してセントラリゼーションの是非が論じられているが、わが高専においてはいかにすべきであろうか。

大学図書館の組織は、

中央図書館――各学部図書館

――各教室図書室――各教官研究室蔵書

の4段構成をとるのが普通である。当高専においては、各学部図書館を除く3段構成が一応考えられるであろ

う。ところで、この中央図書館は学生の勉学のために図書館資料と場所を提供することを主任務とし、教官研究室蔵書は教官専用を旨として学生への配慮は無視されがちである。それはまた、前者の蔵書が学生利用を主目的とするため教官の利用を得るに乏しく、逆に後者はその高度の専門性ゆえに学生の利用には程遠いという現状ともなるであろう。

しかし我々は、高専教育の到達目標の設定を、それに応じた卒業研究の進展に従い、将来は学生にも教官並みの高度の専門書を与えねばならぬという問題を考えてみなければならない。ここにおいて、中央図書館には学生用図書を、教官研究室には教官用図書をという截然たる区分のもたらす弊害に気付くのである。本項ではこの問題を論じようと言うのであるが、まず、高専における図書費の予算費目別内訳を見ておこう。それは、(A)図書購入費および一般校費流用図書購入費、(B)教官積算校費による図書購入費の二類より成り、現状における両者の比率は下表のとおりである。

図書費の予算費目別内訳

	(A) 図書購入費 一般校費流用 図書購入費	(B) 教官積算校費による図書購入費
昭和38年度	59.0%	41.0%
昭和39年度	45.2%	54.8%
昭和40年度(予定)	34.0%	66.0%

この表によると、(B)による支出分が大きな比率を占めることが明らかであるが、教官の研究用図書がすべて(B)によって購入されていることは言うまでもない。それでは、先に述べた学生の卒業研究用の専門書はいずれで購うべきであろうか。当然に(A)において予算を配当されるべきであろう。しかし、決して満足すべき結果を期待できない現状では、甚だ不本意ではあるが、これもまた(B)をもって補助せざるを得ないのである。問題はさらに深刻となる。上の表の対比は実験講座担当教官の場合は過渡期的なものに過ぎず、今後は教官積算校費の中に図書費が占める比率が著しく減少し、その多くが研究実験費に充当されるに至ると想像できるからである。とするならば、上の表に見た(B)の比率もまた、今後著しく低下するであろうし、さらに学生の卒業研究用専門書の減少ともなるのである。

さて、この問題の解決にはいかなる方法を講ずべきであろうか。まず第一に、(A)による専門書購入の増大を望みたい。しかしそれが不充分である以上は、第二に、(B)によって購入した専門書の効率高い運用、すなわち教官用図書の学生への開放をもって解決したい。そして、(A)、(B)とから支出された専門書は各教室において管理運用されることが最も理想的ではあろう。しかし、ここで我々が各教室図書室設置要求へと飛躍することは時期尚早と思われる。それは、高専の今日の規模から言って、その設置があらゆる面で経済性を欠くためである。そしてまた中央図書館においてその機能に各教室図書室的なものを加えるなら、我々の懸念する問題は充分に解消され得ると思うからである。具体的に述べよう。各教官は研究および教授のために必要な書物を長期帯出形式で手許に置き、卒業研究の進捗に応じ、その指導と平行して学生に教官研究用図書を貸与するのである。手許での利用度の減ったものは次第に返却され、中央図書館蔵書との環流が図られるであろう。

このような、絶えざる全体的有機的な図書運用の効果を挙げることこそ、われわれの懸念を解消する唯一の方法かと思われる。それには、中央図書館の質的量的な強化が前提となることは言を俟たない。狭小な高専の校地であるから、中央図書館の位置選定さえ当を得れば、全研究室はその行動半径100 m以内に図書館を共有し得るであろう。中央図書館への集中による管理人員、施設および図書館資料の集約節減の益を考慮すれば、むしろわれわれは、この方法をこそ高専に相応した組織形態と認めざるを得ない。

高専図書館の組織は集中管理を主とすべきこと、そして適当な位置を校地内に占めて、充分にその機能を発揮せしめるべきこと、これが本項の結論である。

(木本知男)

付　寄宿舎別置の図書について

本校の寄宿舎にはいっている学生数は、全校生のほゞ半数である。従って図書室では、初年度より重複購入している辞典、事典、ハンドブック等の中で利用度の高いものを寄宿舎に別置して、学生の便宜をはかっている。これの管理には、寮務主事及び寮図書委員（学生）が当り、利用については各自の自律的管理によっているが、現在に至るも図書紛失の不祥事件は起っていない。ではその利用度はどうかという実際問題についてみると、図書室の図書ほど活発に利用されていない。それは現在の寮の設計上の問題とも関連してくることになる。すなわち、一・二年がはいっている建物と、三年がはいっているものとでは別棟となっているため、両棟の交流が容易でないこと、更に又、一・二年の棟には談話室があってそこに図書を置いているが、三年の棟にはそれがなく、一・二年の棟へ足を運ぶのを三年生が面倒臭がる傾向が強いことであり、現在、寮別置の図書は充分に活用されていないのが実状である。これらの問題は寄宿舎建設工事の完成を待ち、改めて企画を検討して運営したいと思っ

ている。　　（室永芳三）

Ⅱ－E　技術教育としての　レファレンス、ドクメンテーション

高専は単なる技能者の養成機関ではなくて、第一段階では、大学と同様中級技術者の養成を期待する学校である。大学（院）・試験研究機関・生産機関等の科学技術機関において、経験に富む上級技術者の一般的な指示のもとに、あるいは限られた分野ではあっても単独で技術上の問題ととりくみ、自ら解決し、展開して行くだけの素養を必要とする。

科学技術の進歩が急激で、量も膨大なものとなって行くこんにち、専門科目の授業時数において旧制専門学校や新制大学にまさる高専においても、直接に接しうる内容は極めて限られた範囲にとどまらざるをえない。われわれが学科の基礎に重点を置くのは当然である。しかし工学の目的が実用にある以上、問題の解決は現実的に最も有利な点で行なわなければならないから、進歩した最新の技術に可能な限り目を及ぼす必要がある。

科学技術の進歩の足跡は、軍事上あるいは企業上の理由のあるもののほか、多くは公開の雑誌・書籍等に科学技術情報として公刊されている。いくら基礎学力を有していても、問題の解決・展開に当ってこの情報を無視しては、労力・時間・物品・費用の浪費に終るだけで、ときとしては企業の存否にも拘わる恐れがある。

また一方、自ら試験・研究・調査をして得た事績は記録として残さなければ自分の業績が認められないばかりでなく、他人をして種々のむだをさせることになる。

情報資料を利用するには、資料を見出し、内容を理解することができなければならない。内容の理解は関連事項についての学力の問題であり、その情報が外国語で示されておれば、さらに併せてその外国語の学力を持たなければならぬことはいうまでもない。

ドクメンテーションの国際機関である **Fédération Internationale de Documentation**（略称：**FID**）は「情報資料の収集と保管、分類と選択、周知と利用」をドクメンテーションの定義としているが、目的は「利用」にあるので、他はそのための手段である。

科学技術の分化がそれほど進んでいないころには、技術者は自分自身が直接行なった情報資料の調査をもとにして業務を進めて行けばよかったし、その調査の手段、記録の方法は、結果さえ残っておれば、どんな我流であってもそれで済んでいた。しかし、情報資料が激増し、技術がいよいよ専門化細分化し、その細分した分野の調査研究を組み立てて仕事をしなければならなくなった現在では、その処理法はすっかり変って来た。少くとも同一科学技術機関では、ドクメンテーション組織を編成して一貫した方法で収集・保管・分類・選択・周知までを行なうか、あるいは手法を決めておいて、個々に収集・記録された資料の保管・分類等を特定の部課で行なう必要があるのであり、多くの大企業体ではいずれかの方法を採用しているようである。

ところで、多くの高等教育機関では、教官が個々に文献探索や報告作成の指導にあたり、一応ドクメンテーションの手ほどきをしているが、上記の企業体における情報の収集・保管・分類の手法と根本的には大差がないようである。われわれとしては個々の手ほどきのほかに、ドクメンテーションの基本的知識、普遍的手法を組織的に学習させることが必要であり、学生の将来に大いに役立つと考える。

化学関係を例にとろう。

ある調査、研究に関連する情報が一次資料から直接得られることはほとんどなく、多くは公開の二次資料から求められる。二次資料としては、日本化学総覧、アメリカの **Chemical Abstracts**, その他ドイツ・ソ連で発行されている総合化学関係抄録誌が有力で、これらを利用するのが通例である。企業体では、その性質から調査研究の目的対象がかなりはっきり絞られており、関連事項が非公開資料として蓄積されていることがあるが、それでも社内の二次資料から一次資料を求めなければならない場合がある。

高専はいずれも設立後まだ日が浅く、おそらく大多数の学校では、学術雑誌のバックナンバーの蓄積はほとんどないのが現状であろうが、どんなに少ないといっても抄録誌との関連をうまくつければ、ドクメンテーション教育の第一歩である「二次資料から一次資料への到達」の学習が可能である。

ドクメンテーション教育において、抄録誌はこのほか種々な面で役立つ。たとえば、一次資料と対比することによって、抄録文のあり方・作り方が学べる。索引の必要性・種類・配列方法（選び出し方）も学べるし、また求めている事物の索引から抄録文を見て、調査研究に必要であるか否かの選択に至る手段なども学べるのである

ドクメンテーションの学習項目としては、なおこのほかにも、保管・分類・周知から、利用者の立場を考えての報告書・抄録文の作成に至るまで、多くが挙げられる。

抄録誌はもとより、一次資料源である学術雑誌類は一年分を数冊に分冊するとしてもかなり分厚く製本してあり、持ち運びは不便である。これらを自在に活用するには、各種の辞書・百科事典・専門書を併用しなければならない。また将来学術誌のバックナンバーをそろえる際

には、必ずしも書冊形式のものにこだわる必要はなくマイクロフィルム、マイクロカード形式として入手することも考えられる。一報文に限るような文献は、マイクロフィルムとして入手することも多いであろう。これらはマイクロフィルム・リーダーなどの装置を使わなければならない性質のもので、当然図書館には備えつけられる

さきに述べたように、われわれはドクメンテーション教育をぜひ実施したい考えであるが、ドクメンテーションのために特別の室を用意し、図書・設備を重複させるのはまったく無用の話であって、図書館の一部をそのままこの集団教育に利用できるよう考慮すべきである。図書館内にすくなくとも1クラスは授業できるスペースを設けるべきである。　　（清水正夫）

Ⅱ—F視聴覚サービス

高専図書館における視聴覚サービスにはいかなるものを含むべきであろうか。学習の場に止まらずに一般教養向上の場としての機能をも意図し、高等教育機関としての高専の性格、本稿第Ⅰ章に見た学生の家庭環境などの諸条件をも考慮すれば、以下の施設、備品を具備すべきかと思われる。

A.オーディオ個室

学生3、4人が入室可能、でき得れば防音壁を有する個室を4、5室設け、各室にレコードプレーヤー、テープ・レコーダーを備える。

高専カリキュラムは第二外国語を課しながら、その総時間数は、およそ満足な習得に足るものではない。カリキュラム編成者は、その中級、上級の課程を学生の自学自習に期待するかに見える。とするならば、その側面的援助のため高専図書館は十二分に機能すべきかと思われる。勿論、語学は辞書とテキストのみでは習得不可能であり、ここで我々は録音盤録音テープによる学習を推進させたいのである。また我々は、英語、ドイツ語二ケ国語の教授指導のみで満足すべきではない。旧制高校における語学重視を想起しよう。語学習得の度合は高等教育の程度をはかるバロメーターであり、すべての教養の基礎をなすのは周知のとおりである。その重要性は（Ⅱ—A,E）においても説いたが、高専における語学教育振興のために、オーディオ個室はまことに最低限度の要求であり、必備の施設と思われる。

また、この個室はレコード鑑賞にも用いられる。高専カリキュラムにおいて、音楽の時間数はとったとしても極めて少い。音楽愛好の学生に限らず、青年期の音楽教育は重要と思われる。高専図書館はこの面でも機能しなければならない。演奏面は無理としても、オーディオ個室における学生の自由な鑑賞をゆるしてやり、その渇を癒すべきである。

B.簡易L.L.装置

上記したオーディオ個室の一部には語学授業に必備の簡易L.L装置を含まねばならない。勿論われわれは、鈴鹿高専のごとき、一学級同時使用の正規のものを理想とする。しかし経費上困難であるとすれば、せめて簡易L.L.装置だけは是非設けたいのである。オーディオ個室中にやや広い一室（床面積約25㎡）を設け、10座席余を設備すればよいであろう。

C.視聴覚ホール

映写装置とステレオ再生装置とを備える。

近年、教育文化映画、産業教育映画などの中・短編記録映画の製作が非常に盛んになり、例えば原料から完成品までの生産行程を実写やアニメーション入りで描く産業映画は勿論、更に最近では東海道新幹線やダム工事、あるいは東京オリンピック関係競技場施設や関連高速道路などの完成までを興味深く描いた建設関係の記録映画も数多く作られている。一般商業系統映画館では上映しない視覚的に可能な限りの記録性を結集したこれらの文化映画を専門講義の進行状況に合せて随時上映して、鑑賞させることは実際の工場見学にもまさる教育効果をあげるであろう。現在の貧弱な高専のフィルム・ライブラリーの早急な充実と他の都道府県、市町村立、学校、団体などの視聴覚教育フィルム・ライブラリーとの積極的な相互交換利用促進が望まれる所以である。

ステレオ装置は勿論、優秀な高忠実度再生装置を備え本来のレコード・コンサートはもとより外国語の授業、とくに発音、発声練習から、又最近多くなった非音楽レコード（実況録音、演説集など）の聴取まで巾広い利用を期すべきである。

D.マイクロ・リーダー室

先般、ニューヨークで開催された世界大博覧会の会場跡に、今世紀の文化遺産を永く後世の人類に伝える方法として20世紀の優秀な学術論文や世界各国の有名新聞をマイクロフィルム化し、厳重に密封のうえ、地下数十米の処に埋め、その埋蔵地点の写しを全世界数千の図書館に配布保存していると云うことである。将来の考古学のあり方をも根本的に変えようと云うこの画期的な試みを可能ならしめたのがマイクロフィルムの進歩であり、我国でも国立国会図書館において中央紙はもとより散逸の危険度の高い地方新聞を主体に新聞のマイクロ化が進められている。

精密光学機械の進歩に反比例して格納スペースの減少と云う経済性をもったマイクロフィルム並びにこれを拡大、投影するマイクロ・リーダーこそ次項Ⅱ—Gで後述する複写装置と共に無限の発展性を持った視聴覚機材と

云えよう。従ってこのマイクロ・リーダーのほかにその関連性から文献複写装置とこれに附随する暗室をも併置するのが便利であろう。　　（木村剛三）

Ⅱ—G　文献複写サービス

科学技術の驚異的な進歩に伴う学問の専門化・細分化は今後もますます文献複写の必要性を高めて行くから、図書資料提供という図書館本来の業務の一環として、図書館がそのサービスを行うこともまた当然であろう。

すなわち高専においても、高学年学生の専門講義に使用する教授資料は単なる教科書やテキストのみではなく学術雑誌の論文や洋書の原典などあらゆる資料から抽出した複写教材が使用されるはずである。一方、教官研究用の複写にしても、本来の狭義の文献複写の面にとどまらず、人文科学系部門をも含めて最近では図書館相互間の資料交換がマイクロフィルム化されて来ているので、この面からの需要も増大して行くことであろう。こうした複写を、各学科や各教室でそのつど行っていたのでは、とぼしい予算を細分化して優秀な複写装置も購入できず効果的な人員配置も望み得ない。

したがって、化学変化を起こしやすい現像液・定着液・感光紙などの消耗品から時間的・人員的なロスまでも防ぎ、効果的な複写作業を行うために、ある程度プールした予算で図書館に優秀な複写設備を整え、複写技術に習熟した専任担当者（複写以外のことはしないという意味ではなく、複写のことは必ずその人を通すという意味の専任者）を置いて、これに当らせる、いわゆる集中管理方式が望ましい。

複写機をフルに使用する需要量に達しない段階では、緊急なもの以外は曜日を決めて行ない、更に後日の再使用の際に役立つよう、複写した文献の書名・著者名・発行所・頁数・枚数・規格・露出・感光秒数、請求学科、教官名などの詳細なデータを記入する複写使用簿を整えるなど、より効果的な文献複写サービスの運営、管理に努力すべきであろう。　　（黒田芳則）

Ⅲ　各教科授業と図書館利用

a. 現 代 国 語

開校第1年次の現代国語は、現代国語担任の教官が図書係教官を兼ねたというよりも、図書係教官が現代国語の授業も担任するという姿勢ではじめられた（現代国語の教官が図書係教官を兼ねる必然性は毛頭ないが）。大学と高校とを足して2で割った…というのが、高専の現実である。長と長とが寄り合えばよいが、短と短とが寄り合うのが世の常である。1期生諸君に「高専にはいって」という作文をまず書かせたが、これは夫子自らが書かねばならぬ題目であった。

工業高校においてすら最低の時数である9時間の中にさらに大学教養課程の内容までを目指す高専である。ここで時間が足りないとの泣き言はいうまい。高校プラス大学の7年を5年に圧縮したなかに、専門科目は工学部の1.2倍もの時数が確保されている。これから産まれる高専生の“弱い”点は自ずと明らかであろう。これをなんとかせねば……というのが、極めて単純な動機となった。受験勉強から解放された学生の余剰時間（あるはずはないが、たしかにある）とエネルギーのなるべく多くを、読書即現代国語の時間に指向させ、正規の授業時間はそのためのガイダンスと考える——これを基本線とした。

現在わたくしの実施している授業法を、国語科教育法として反省・検討する責任があると思うが、それは第1期生のコースを終える近い将来にゆずって、ここでは結論だけを報告する。

第1に、原典主義。作品丸本をテキストとする。

第2に、試験は作文（感想文）一本でする——作文教育の超重点化——。

文部省の「高等専門学校教育課程の標準（試案）」の趣旨には、もちろん従っているつもりである。教科書も持たせた。これは「同年令の普通高校生はどんなことを習っているか」という、学生自身の反省のためにも必要だからである。この3年間の教科書があとに紹介するレパートリーのほとんどを収めていることも附記したい。

予習として必読を課し、また教室で授業を進める上に指定テキストを買えない学生が使うだけの複本を図書室に用意しなければならない。これは、大学図書館の体質改善において、最重点の一つとして推進されている**指定図書**のうちでも、とくに指定度の高いものに相当するといえよう。しかし、学生用図書費の現実は、そんなに多くの複本購入を許さない。こうと思った方式を実施するためには、教官積算校費（研究費）でその一部を負担するという変則も止むを得なかった。

3年次を終えようとしている現在、本校図書室に備えた「**現代国語授業用**」**複本**——もちろん、一般図書として配架供用——のリストを紹介する（A表）。わたくしの原典主義授業のレパートリー紹介、かつそれを可能にす

るため図書室が備えるべき最低基準（書目と冊数）とも見做されるであろう。学生にとっては一回きり、試行錯誤は許されぬところであるが、1回生と2回生とではレパートリーの変更、改善を行った。また将来とも行わねばならないことも、もちろんである。

ここにつけ加えたいのは、複本数の右に注記した**本校売店における販売冊数**である。読書週間は言扁（ごんべん）がとれている――とは、口の悪い図書館人の言葉であるが、さらに士をとった<買書>指導も、読書指導のうちではないかとひらき直っている。精選の責任は極めて重いと自戒しつつ、社会人として巣立った高専生が、一生<本を買う>人になってほしいとねがっているのである。

最後に掲げるB表は、原典主義授業の効果の測定を試みたささやかな統計である。現代国語3か年のしめくくりとして、**チボー家の人々**を3年においてとりあげた。必読を課したとはいえ、この長編を学生がどれだけ実際に読むかは、教授者として内心心配した点であった。それゆえ、同書の感想文を課した2学期末の試験終了後、無記名回答によって、学生各人がどれだけの量を読みどのように評価したかを調査したわけである。この結果がそのまま本形式授業の成果を示すとは限らないが、受容された一応の目安はとらえられるであろう。これまた大方の御批判を仰ぎたいと思う。　　（棚町知弥）

A表　図書室備付複本一覧

（附：売店より学生の買った冊数）

		（3期360名分）
キューリー夫人伝	16冊	（134冊）
余の尊敬する人物	22〃	（130〃）
恩讐の彼方に（蘭学事始）☆☆	40〃	（75〃）
藤村詩抄☆☆	40〃	（114〃）
破戒☆☆☆	40〃	（165〃）
		（2期240名分）
田舎教師☆☆	40冊	（90冊）
三四郎☆☆☆	45〃	（135〃）
こゝろ☆☆☆	45〃	（109〃）
出家とその弟子☆☆	30〃	（107〃）
		（1期120名分）
思出の記（上）☆☆	40冊	（51冊）
〃　（下）☆☆☆	40〃	（47〃）
李家荘の変遷☆☆☆	20〃	（13〃）
暗夜行路（前）☆☆☆	20〃	（10〃）
〃　（後）☆☆☆	20〃	（8〃）
宣　言☆	40冊	（81冊）
羅生門ほか☆	40冊	（32冊）
侏儒の言葉☆	40〃	（17〃）
にごりえ・たけくらべ☆	40〃	（23〃）
若きエルテルの悩み☆☆	40〃	（10〃）
チボー家の人々　(1)	40〃	（31〃）
〃　(2)	30〃	（11〃）
〃　(3)	30〃	（13〃）
〃　(4)	30〃	（13〃）
〃　(5)	40〃	（13冊）
チボー家のジャック	6冊	

B表　『チボー家の人々』の受容調査

◇延べで何冊分（白水社5巻本）読了したか

13冊	1名	4冊	6名
10〃	4〃	3〃	26〃
8〃	3〃	2〃	19〃
7〃	6〃	1〃	17〃
6〃	5〃	0冊	1名
5冊	19名		
（以上38名は全巻通読）		計	107名
		総平均	3.75冊

◇もっとも感銘の深かった部分

1914年夏	50名
灰色のノート	11〃
美しい季節	11〃
エピローグ	11〃
ラ・ソレリーナ	6〃
少年園	5〃
父の死	3〃
特記なし	10名

◇評　価

◎　読んで非常によかった	22名
○　よかった	52〃
△	23〃
×　つまらなかった	8〃
回答なし	2名

b. 古　　典

高専における国語授業時数の不足については前項でも説かれたが、普通高校との対比においてさらに少ないのは古典の場合である。普通高校では週2乃至3時間を当てるのに、本校では1時間が得られるに過ぎない。教室において、普通高校生並みの読解力をつけるのは至難の業、学生の自学に期待するところ大きい。教室でなすべ

きことは、何よりもまず古典に興味を抱かせ、しかして民族の文化遺産への関心を高めることであるようだ。

一、二年生の授業では高校用古典甲の教科書(実教版)を使い、数多くの作品に触れさせる。ここでは広さを求め、丸本主義はとらない。図書室では、現代国語におけるテキスト複本の代りに、多種多様の註釈書・鑑賞手引書を備える。その数は高校図書館の場合よりも遙かに多くし、各自が選ぶ作品につき、その全巻の通読を奨励するのである。

三年生には重点精読主義をとり、今年度は一学期に万葉集(テキストはプリント使用)、二学期に源氏物語(テキストは武蔵野書院刊「校註源氏物語桐壺」使用)、三学期に「冥途の飛脚」(テキストはプリント使用、上・中は転読、下の新口村のみ丸本)をとりあげた。ここでは深さを求め、味読の喜びを知らしめるのである。大学教養課程の議義と講読を折衷した授業を行い、特殊テーマのレポート提出によって評価した。図書室は、一・二年生同様の註釈書類の整備に加え、レポート制作のための諸参考図書を用意する。特殊テーマは、こちらが与えた幾つかのヒントを参考とし、彼等自身が選択または創出したものであるが、そのテーマ追求を通じて、多くの学生が古典への興味を深め、喜びを見出しつつあるのは喜ばしい。

ここで、図書室に備えた源氏物語参考図書のリストを掲げ、御参考に供しよう。

朝日古典全書・源氏物語　1～7	池田亀鑑
日本古典文学大系・源氏物語　1～5	山岸徳平
源氏物語評釈　1～3	玉上琢弥
日本古典鑑賞講座・源氏物語	玉上琢弥編
源氏物語(昇竜堂刊)	秋山　虔
与謝野晶子訳源氏物語(河出書房新社刊)	
谷崎潤一郎訳源氏物語　1～5・別巻(中央公論社刊)	
源氏物語の研究	今井源衛
源氏物語の世界	秋山　虔
源氏物語新見	門前新一
源氏物語の旅	吉田精一
日本絵巻物全集・源氏物語絵巻(角川書店刊)	
源氏物語事典	岡　一男編
源氏物語事典　上・下	池田亀鑑編
文芸読本・源氏物語	中村真一郎編
日本文学史・中古	久松潜一編
文学に現はれたる国民思想の研究　1	津田左右吉
岩波講座・日本歴史4・古代〔4〕	秋山光和他
日本の歴史3(読売版)平安貴族	秋山　虔他
日本の歴史5(中公版)王朝の貴族	土田直鎮
図説日本文化史大系・平安時代　下	秋山　虔他

まだまだ不充分なことはよく承知しており、「源氏物語大成」は無理としても、「対校源氏物語新釈」までは備えねばなるまいと、目下は書目の増加に意を注いでいる。しかし、上記のすべての帯出を禁じている現状では学生の深夜の自室における熟読は期待できない。当分は実現困難と思えるが、上記の一部の複本化を企図したいのである。　(田中道雄)

c. 歴　　史

高専での歴史教育は、日本史二単位、世界史二単位を履習することになっている。これは普通高校はもちろんのこと、実業高校に比べても縮減されており、高等学校と同等の一般的学習の消化さえも困難な配当時間数である。従って、この規定時間数の枠の中でのカリキュラムの編成には、学校図書室の利用という点が考慮されてもよいのではないかと考えている。幸いにも、本校の図書室所蔵の歴史関係の書物は、高校のそれに劣らないだけの内容を既に有し、特に、地方郷土史関係の資料については、地元教育委員会の御好意を得て、充分な蒐集がなされているのである。では、図書館利用をどのように具体的に取り上げるかという点になると、現在の所では、課題学習、或いは郷土研究のために利用しているのがほとんどである。課題学習と図書室利用についても問題は多く、解決せねばならないことを多く抱えているが、ここでは、時間的に縮減されている高専での歴史教育において、本校であえて郷土史研究を教材化している理由についてごく簡単にふれ、歴史と図書室利用というテーマの報告に換えたいと思う。

郷土史研究を歴史教育の中に取り上げようとする場合に起る問題点については、既に多くの人々によって論じられているのでここでは省略するが、単元に対する配当時間の圧縮、地方史関係資料のもつ特殊性などから指摘される多くの問題点を未解決のままにしながらも、郷土の研究のために、独立した時間を配当している大きな理由は、本校の校地周辺が、郷土の古代文化をさぐるための宝庫となっているからである。

本校は、福岡と熊本の県境にある丘陵地帯に建っている。この丘陵地帯には、五世紀から七世紀ごろと推定されている円墳、前方後円墳が数多くある。例えば、本校の敷地整備のブルトーザーによる削平工事中にも、三基の横穴式石室が発見されているのである。また、校地の西側を流れる諏訪川の河原からは、須恵器の破片が数多く見出されるのである。この諏訪川と周辺古墳群との関係については、最近の研究で次第に明らかにされつつあり、校地周辺の古墳群をめぐる際には、途中に石人から

南北朝ごろの仏塔まである。尚、これらの見学のために要する時間は、教室を出て30分間もあれば往復できるのであるから、誠にめぐまれた環境といえるであろう。

隣接する両県の荒尾・大牟田の両市は、それぞれ優秀な市史の出版に努力され、既に大牟田市は 40 年3月に「大牟田市史　上巻」を刊行した。その他にも、両市の文化財調査委員会の調査報告が数多く出版され、それらはすべて学校図書室に所蔵されている。これらの郷土史関係資料より教材化を行い、実地見学や調査を行って、県という行政区画とは関係なく、県境に立つ本校周辺の郷土の古代文化史を自由な立場でまとめてみようとしているのである。学生達の手になる労作の一部は、本校の学校新聞に連載している。　　（室永芳三）

d. 地　　理

地理は週に二時間で、高等学校では普通課程が週に四時間、職業課程では三時間であるからいずれにしても高等学校より授業時間が少ない。学生の専攻が工学であるから少い授業時間を生かすためには工業地理を主体として授業をし、図書館を利用させればいいという考えかたもあるかも知れないが、地理は地域と人間の関係を理解するものであるから、これでは片手落ちだと思わざるを得ない。自然環境の人間に与える影響も大きいものがあり、やはり工業だけでなく、他の産業も含めて全体を理解させる必要があると思う。しかし授業時間の絶対数が少ないため、全体を授業すれば無理が生じる。そのためには図書館を利用して、補足的なことや新しい課題を与えて勉強させる必要がある。地理では地図や地域に親しみを覚えさせる必要があると思う。そのために、新大陸ことにアングロアメリカの各州を例にとって、各州の地名について勉強させている。特にアメリカ合衆国では、ヨーロッパ大陸を始め各地の民族がここに移住し、彼等の出身地や著名な人物の名を開拓地に名付けておるが、それらのうち比較的判明しやすい地名を選びどこの国の人達が開拓したかを調べさせている。これは、アメリカ合衆国が世界の人種のルツボといわれることを理解させるためである。これには基礎的な資料が与えられるのは当然である。これらの地名は、図書館にある地図を調べればどこの州にあるかすぐ理解されるが、それだけでは十分とはいえず、英語、ドイツ語、オランダ語、ラテン語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、ロシア語などの辞書を調べなければならず、英語以外の外国語の勉強にも役立つと思っている。そのための準備として、図書館には諸外国語の辞典や外国製の精密、詳細な地図(主として英語版)、各国の地誌などを揃える必要があるが、本校図書室の場合これらはいずれも揃っており、準備は十分だと思っている。今後は英語版以外の地図、特にドイツ語版の地図を購入したく思っている。

地形図購入の要望　五万分の一の地形図を購入したく思っている。それは、地理の学習の補助や地形図を利用しての地形図の見方や地形図に慣れるのみでなく、休みを利用してのサイクリング、ワンダーフォーゲル、登山旅行などを実施する場合にはどうしても必要が生じるからである。ただの旅行案内や道路マップだけでは、地域の景観の特色など充分把握することはできない。そのためには、図書室に五万分の一の地形図を揃えたく思っている。全国の地形図があれば申し分ないが、費用が約七万五千円もするし、一度に揃えることは不可能と思われる。さしあたり、九州全部の地形図（費用約一万三千円）を揃え、その後は順次利用度の高いと思われる地域を加え、ぜひとも全国の地形図を揃えたいと思っている。　　（日野尚志）

e. 倫　理・社　会

倫理・社会は週に二時間であるが、高等学校でも同様、週に二時間である。高等学校では昭和三十九年から実施された。倫理・社会は「人間尊重の精神に基づいて、人間や社会のあり方について思索し、自主的な人格の確立を目ざし、民主的で平和的な国家の形成者としての資質を養うにある」とされている。内容は主として、人間とは何か、古代から現代までの思想史、現代社会と人間関係を取り扱っている。これらはいずれも授業として欠かすことができないが、その中でも特に青年期や人生のあり方などは学生にとって大変興味を感じる所であると思う。そのためには、単に人生の悩みや青年期の特徴を論ずるだけでなく、世界の著名な人々が青年期をいかにすごしてきたかを知り、また、世界の著名な人々の小説や随筆を自分で読んで、その中の主人公や人々がそのような問題に対してどのように対処してきたかを自分で考えることが大切である。本校では、幸いにも国語の授業の一環として読書活動が活発に行われ、この中にもこの問題に関する書物も取り扱われている。古代から現代に至る思想はその基本的なことは教授しなければならないが著名な哲学者、思想家の著作やある一つの哲学（例えば実存哲学とは何かの内容）を実際に深く掘りさげることには種々の困難がともなう。それは単に内容が抽象的であるばかりではなく、日本語訳の方法が難かしいためとも言われている。そのためこれらの本は、教場で読むことは一部の学生にとってかなり理解困難と思われるので学生が自発的に読むことを期待している。学生が読むには、いわゆる学生に適する書物を選択して図書館に揃える必要があるが、本校では哲学の思想の書物が相当に揃

っているし、国語の読書活動の準備として、人生論に関する書物も多く、不自由はないと思っている。

（日野尚志）

f. 数　　学

Ⅰ 現　　状

指導は本の紹介を授業時に断片的に行っている程度で組織的、定期的なものはない。学生側の利用度は、統計によれば可成りの程度である。

Ⅱ 指定図書

次の理由で必要。

(イ) 高専では、バラエティに富む広い分野を足早に走り抜けるために、突込みが浅く、練習不足に陥り易い。

(ロ) そのための高専程度の本は市販にされているものが少く、又その選択が学生自身では困難である。

（例） **Wiley**：工業数学 上・下　微分積分学 上・下

その他教育効果を立体化するために、目的に応じた各種図書が必要である。（学生の層、質、要求は多次元的である。）

(1) 数表・図表・辞典（立体幾何ステレオグラフ）
(2) 雑誌（数学セミナー・数理科学）
(3) Cクラスの学生のために、特に解説の懇切なもの
(4) Aクラスの学生のために、深く広く堀下げて展開したもの。
(5) 応用各分野の具体例に富むもの。
(6) 一品料理的に、各単一テーマをまとめて解説したシリーズ。（東京図書：数学新書）
(7) 夢と食欲を育て唆るもの。
パズル・伝記・随筆・読物風の解説。
（ライフ社：数の話）
(8) 数学の山脈の峯々を示すもの。
（たとえ程度は高くても）
(9) 原書（ハイスクール・カレッジ用のものから内容平易なものを選択）
(10) 特に高価なもの。　　（井上盟朗）

g. 保 健・体 育

保健と体育あわせて週2時間、5学年通して10時間という授業時間はなんといっても足りない。しかも高専においては、保健体育科として学生に望むべきこと——守備範囲——は、高校や大学の場合よりもはるかに広い。具体的に列挙すれば下の如くである。

1. 寮生の健康管理（1～3年生は高校生年令で、社会通例よりすれば、親が健康を管理している。）
2. 労働衛生の基礎（卒業すれば工場現場において、皆中堅技術者となる。法制科の労働法などの履習とも見合わせて、労働衛生管理の基本について、高学年において履習させたい。）
3. 生物・家庭のカバー（普通この2教科との関連ですすめる保健授業の意義は、生物がないだけに更に一段と重いものがあると考える。）
4. レクリエーションのリーダーとなる素養——競技ルール・審判技術など（競技ルール・審判技術の素養さらにレクリエーション一般についての基礎は、高専生にとって、特に望ましいと考える。）

「少ない時間により高く広い到達点を」との背反する二要求の上に立つのは、保健体育科に限らず高専の一般教科、ことに国語、社会などに課せられた宿命である。これが解決は、次の二つよりほかない。すなわち、実技面においては、課外のクラブ活動を充実し、しかも選手本位ではなく、全員参加のものとすること。次に、理論面においては、図書館による自学自習を必修として課し、また自発的に利用させることである。

上記の原則にそって、昭和38年秋の開館以来、図書係教官と密接な連絡をとり、保健体育守備範囲の蔵書充実をはかってきた。第3年次の40年度は、学生の年次進行とも見合わせて、生理学、スポーツ医学、労働衛生などの医学専門書も購入した。学生用の図書費は、上記の理想を裏附けるには程遠いほど僅少である。体育科教官の積算校費より購入した本をなるべく図書室に公開して、学生諸君の利用をねがっている。上記各項の具体例を若干かかげて御参考とする。

1. 医学大辞典（南山堂）
家庭大医典（講談社）　家庭の医学百科（保健同人社）など
スポーツ科学講座（大修館）医学概論（沢瀉久敬）
2. 健康管理学・保健衛生学（逍遙書院）
3. 現代の生物学大系（中山書店）
岩波講座現代の生物学（岩波書店）
4. 講座現代レクリエーション（ベースボール・マガジン社）
レクリエーション総説（G. D. パトラー著）
体育図書館シリーズ（不昧堂）　29冊
キネシオロジーによる新体育・スポーツ選書（学芸出版社）　11冊
登山講座（山と渓谷社）　8冊

本校の教育方針として牛尾校長はいわゆる青白きインテリを排し、三本の柱の第一として、強健な体力をかかげられている。5年一貫、しかも受験によってゆがめら

れない、高専の体育は、はなはだやり甲斐のある問題である。少ない時間にしかも高く広い結果をあげるのに、図書館の寄与を期待するところ大なるものがある。

（寺本匡謨）

h. 英　語　科

日本における学校教育と学問研究の分野において、工業高等専門学校の教育・研究がどのような位置を占め、いかなる使命をもつか、そして、この高専の教育・研究の領域において、英語科に課せられた使命はどのようなものであるか。先ずこのことを明かにして、英語科がこの使令を遂行して行く上において、高専図書館の演ずる part におよび、高専図書館と英語科の連関に触れて行きたいと思う。

高専教育の目的が、いわゆる中堅ないし中級技術者（これらの呼称は主として企業の高専卒業生の処遇いかんによつてその実質を決するものである）の養成であるならば、高専英語教育の目的ないし任務は、先ず、このような技術者の必要とする英語力、すなわち、工業技術関係の報告書・雑誌・書籍類の読解力の涵養でなければならないことはもちろんであるが、それと共に、高専学生の円満な人間形成に資することをも包含するものでなければならない。このような目的達成のため、本校においては1年次より4年次に至る英語教授の期間を前後2期に分ち、前期2ヶ年を基礎教育に、後期2ヶ年を応用的教育に当てている。前期においては、発音・基礎文法・単語・慣用語句・構文の習得、英文への親近感の増成を主眼とし、後期においては、英語読解力の養成と、工業高専の性質上、人格形成の偏頗を排除してその円満を期するため、主として英米作家の文学作品を中心とした授業を行うのである。後期の前半には、前期における基礎教育を延長加味し、後半第4年次は、純粋な seminar 形式による授業の実施を予定している。また、工業英語、ことに technical terms の習得は専門教科教官を煩わし、学科によっては初年次より実施されている。

以上のような本校英語教育活動の遂行に際して、図書館の果す役割はいかなるものであるか。ここでいう図書館とは、いわゆる research library をしばらくおいて大学における undergraduate library 的図書館を意味するのであるが、このような図書館の任務は、各教科よりそれに求められる要望事項を満たすことによって自ら明白となるであろうから、以下、英語科よりの図書館に対する要望事項を列記して見ることにする。

1. 高級、特殊辞書類の整備。学生に対するこれら辞書類使用の指示は、その都度、これまで英語科教官によって度々なされて来たのであるが、ことに学生の経済的負担となるもの、あるいは使用頻度の低い辞書類は、図書館において是非整備しておくべきである。本校図書室において、この要望は既に大体充足されている。

2. Reserved books 制の実施。前述の前期・後期の学力に応じた英米の読物を常備し、授業に連関して教官の指導のもとに使用されるものであり、これは、特に学生の自発的学習意欲を促進し、variety を与え、その人間形成に資すること大であり、文部省において予算化措置をとられるべきである。

3. Audio-visual materials の整備。ことに語学教育においては、教育の視聴覚化は不可欠の要件である。これなくしては、語学教育は具体性・実践性を喪失して死物と化するであろう。ソノシート・レコードのplayer または stereo による再生、テープの録音・再生、英米事情紹介資料としてのスライド・映画フイルムなどの上映などのために、常時に使用可能な視聴覚室——少くとも1クラス収容できて、更にこれにL.L（10台～20台）——の設備を一部兼ねれば間然するところはないであろう。

本校図書室も、その蔵本保管および学生閲覧室などの space において、すでに限界に達しようとしているが、これが、上述の本科よりの要望及び他教科よりのそれを満たしつつ改革を遂げ、research library の機能をも加えた図書館に発展する時、それは文字通り本高専の心臓となって鼓動するであろう。その日の到来の一日も速からんことを、英語科として翹望するや切である。

（井芹龍成）

i. 機 械 工 学 科

一般教科では、所謂参考図書として一冊の本をかなりの部数づつ揃え、講義と関連して読ませる方法が多く行なわれているようである。しかし専門教科ではこの方法は適当ではないように思われる。およそ理工系学科においては、頻繁に利用する本、絶えず手元におく必要のある本、或はかなり密着して勉強する必要のある本が多い。また理解の道程の覚え書きとして、書き込みの必要を感ずることもしばしばある。このような事情を考慮すると、専門教科の基礎的段階では利用度の高い本は個人の所有であることが望ましい。したがつて図書館利用のあり方としては、学生に図書に対して心を開かせ、図書に取りくむ意慾をおこさせることを第一の目標とすべきであろう。このため、基礎的段階においては、幅広く揃えて一般的に学習の参考として利用するような方法をとりたい。現在、専門図書、ことに学生の学力に相応した専門図書が少ないことも原因して、学生の利用は低調のようであるが、講義の進展とともに活発になるものと期

待してよいであろう。

次に、基礎の知識を総合的に活用する力――これは実験と設計によって急速に高められて行くものである。ことに機械工学科においては、設計は極めて重要な意義を持っている。「基礎的な設計」に対する自信は、技術者として立つ上に非常に大きい力となるものである。この点から、第二の目標として設計に関する図書および資料の充実がのぞまれる。この種のものは、かなり形の大きいもの、また高価なものが多い。利用度について考えると、それぞれの場合に必要なのはその一部分づつということが多い。したがって、この種のものに重点をおきながら広い視野で整備して行くのが適当と思われる。

第三の目標として学術雑誌の充実をあげたい。現在、或程度は一般図書費で購入され、また各教官の手元にはそれぞれ研究費で購入されたものがおかれている。しかしこれで充分というには程遠い感じである。ことに学年進行とともに卒業研究が始まると、これはかなり高度のものになると思われるので、この点からもかなり切実な問題である。教官研究費の中で実験設備の比重が大きくなってくることが予測されるので、学術雑誌充実のための費用についての考慮がなされるべきであろう。

（下村竜太郎）

j. 電 気 工 学 科

専門図書の性質は、機械工学科においても述べられたように一般教科用図書とかなり異なっている。ここでは機械科と多少異なる所を述べるにとどめるが、その他は機械科の図書選定方針と殆んど同じである。

電気工学の近年に於ける発展はめざましく、その上他学科に比較し電気関係専門分野はかなり広範囲にわたっていて、最近電気工学科のカリキュラムは変更を迫られている。

例えば電子計算機を主体とする情報処理工学、システム理論、情報理論、自動制御、超高周波工学、レーザ、メーザ等、これらは最近急速に発展した分野で現在とみに重要性を増している。これらの一部は当校のカリキュラムに盛り込まれているが、それだけでは不充分なことはいうまでもない。そこで考えられるのが図書館の利用であるが、これらは皆簡単には理解出来るものではなく相当な基礎学力を要し、又手元において時間をかけて読まねばマスターするのはおぼつかない。また学生もそれだけの時間的ゆとりがあるとは思われないのでこれらの分野では解説的な書物を選定し、学生の目を開かせるようにする。さらに深く学びたい者には、教官用図書を利用させるようにする。さて、上に述べた分野の殆んどが当校カリキュラムを離れたものであるが、これら日毎に発展する電気工学の的確な理解のためには基礎科目に重点を置いた教育が望ましく、図書館の蔵書構成も基礎科目（電磁気学・回路論・計測・半導体電子工学・電子回路等）に重点を置く。程度は高校から大学院程度までとするが、程度の低いものは数多く取揃えてもあまり役に立たず、例えば「電気学会工高構座」一揃いあれば充分ではないかと思われる。この他(1)補助教材として 16㎜ フィルム・スライド。(2)ＪＩＳ規格・ＪＥＣ規格・数表・ハンドブック類・専門用語辞典は図書室に取揃えるのが望ましい。

（辻　一夫）

資料Ⅰ　有明高専図書室双書類目録抄

〔注〕教官室別置分を除く学生閲覧用のみ。括弧内数字は未完結、又は一部未購入の全集物の最終完結予定巻数を表わす。〔　〕内数字は遂次刊行中の全集物で既刊分のうちの購入済み冊数を表わす。

総　記		
国書総目録	岩波書店	(8)
岩波講座現代	〃	16
岩波新書	〃	〔561〕
岩波文庫（100冊の本）	〃	〔212〕
中公新書	中央公論社	〔80〕
津田左右吉全集	岩波書店	(33)
創元選書	創元社	〔33〕
筑摩叢書	筑摩書房	〔42〕
世界教養全集	平凡社	38
東洋文庫	〃	〔47〕
哲　学		
中国の思想	経営思潮研究会	(12)
岩波講座現代思想	岩波書店	12
思想学説全書	勁草書房	(60)
講座哲学大系	人文書院	(8)
朝倉心理学講座	朝倉書店	8
西田幾多郎全集	岩波書店	(19)
三谷隆正全集	〃	(5)
出隆著作集	勁草書房	7
シュヴァイツァー選集	白水社	9
バートランド・ラッセル著作集	みすず書房	(15)
歴　史		
図説日本文化史大系	小学館	14
日本の歴史	読売新聞社	12
日本の歴史	中央公論社	(26)
岩波講座日本歴史	岩波書店	23
講座日本文化史	三一書房	8
体系日本史叢書	山川出版社	(23)
日本文化史	筑摩書房	(8)

日本歴史叢書	吉川弘文館	〔11〕
徳川禁令考	創文社	11
戦国史料叢書	人物往来社	〔4〕
福岡県史資料	福岡県	〔12〕
世界史新書	至文堂	〔10〕
世界各国史	山川出版社	13
世界の歴史	中央公論社	17
人物叢書	吉川弘文館	〔130〕
ツヴァイク全集	みすず書房	19
日本の地理	岩波書店	8
世界の文化地理	講談社	(19)
新世界地理	朝倉書店	12
旅	有紀書房	11
大航海時代叢書	岩波書店	(12)
社会科学		
現代社会科学叢書	東京創元新社	〔15〕
岩波講座現代法	岩波書店	(15)
憲法講座	有斐閣	4
労働法大系	〃	5
西洋経済史講座	岩波書店	5
現代教育学	〃	18
定本柳田国男集	筑摩書房	(35)
総合日本民族語彙	平凡社	5
自然科学		
現代の自然観	岩波書店	3
図説科学大系	平凡社	12
世界科学の事典	理論社	(6)
ライフ・サイエンス・ライブラリー（Ⅰ.Ⅱ期）	タイム・ライフ社	(14)
新数学シリーズ	培風館	〔22〕
近代数学新書	至文堂	〔20〕
基礎数学講座	共立出版K.K	21
新初等数学講座	ダイヤモンド社	10
数学新書	東京図書	〔45〕
市民の数学	共立出版K.K	8
朝倉数学講座	朝倉書店	20
現代数学入門シリーズ	明治図書	〔3〕
物理学叢書	吉岡書店	22
ガモフ全集	白揚社	14
新物理学講座	ダイヤモンド社	12
初等物理学	東京図書	20
コロナシリーズ	コロナ社	〔19〕
新しい化学	共立出版K.K	10
実験化学講座（正・続）	丸善K.K	〔33〕
大有機化学	朝倉書店	24
有機化学における物理的方法	共立出版K.K	(10)
新天文学講座	恒星社	〔15〕
地学教育基礎講座	ダイヤモンド社	4
現代生物学入門	岩波書店	9
保育社の原色図鑑	保育社	〔12〕
現代生物学大系	中山書店	(15)
岩波講座現代の生物学	岩波書店	(9)
現代の記録・動物の世界	紀伊国屋書店	(6)
工学		
技術の歴史	筑摩書房	10
東京大学基礎工学	東京大学出版会	7
基礎工業数学講座	朝倉書店	6
実用機械技術全書	槇書店	(19)
標準機械工学講座	コロナ社	27
設備工学講座	共立出版K.K	(6)
現代電気工学講座	オーム社	(40)
標準電気工学講座	コロナ社	(18)
基礎電気工学講座	共立出版K.K	(15)
エレクトロニクス講座	〃	12
解説エレクトロニクス・コース	〃	8
応用金属学大系	誠文堂新光社	15
新化学工学講座	日刊工業新聞社	12
続新化学工学講座	〃	6
産業		
日本の産業シリーズ	有斐閣	23
芸術		
世界美術大系	講談社	25
日本原始美術	〃	6
現代の絵画	小学館	7
日本近代絵画全集	講談社	24
書道全集	平凡社	(9)
新アサヒカメラ教室	朝日新聞社	7
グラフイックデザイン大系	美術出版社	5
大音楽家・人と作品	音楽之友社	(31)
名曲解説全集	〃	18
体育図書館シリーズ	不昧堂	29
スポーツ科学講座	大修館書店	(5)
スポーツ新書	ベースボールマガジン社	〔7〕
旺文社スポーツ・シリーズ	旺文社	23
キネシオロジーによる新体育スポーツ選書	学芸出版社	(11)
登山講座	山と渓谷社	7
語学		
講座現代語	明治書院	6
日本語の歴史	平凡社	7
中国語講座	白水社	4

英文法シリーズ	研究社	3
現代英文法講座	〃	11
田島フランス語講座	白水社	(4)
笠井スペイン語講座	〃	3
東郷ロシヤ語講座	〃	3
ロシヤ語講座（日ソ学院版）	酒井書店	3
ロシヤ語初級コース	白水社	3
文　学		
世界名詩集大成	平凡社	(18)
世界文学全集	新潮社	50
世界文学全集（〔Ⅱ〕別巻）	河出書房新社	80
世界文学大系	筑摩書房	(98)
世界の文学	中央公論社	(56)
世界古典文学全集	筑摩書房	(50)
日本文学史	至文堂	6
現代日本文学全集	筑摩書房	76
日本現代文学全集	講談社	(109)
日本の文学	中央公論社	(80)
現代の文学	河出書房新社	(43)
国民の文学	〃	(18)
昭和戦争文学全集	集英社	(16)
日本文学アルバム	筑摩書房	25
近代文学鑑賞講座	角川書店	25
近代文学注釈大系	有精堂	〔5〕
日本現代詩大系	河出書房	10
明治文学全集	筑摩書房	(100)
日本古典文学大系	岩波書店	(100)
日本古典鑑賞講座	角川書店	25
万葉集注釈	中央公論社	(20)
源氏物語評釈	角川書店	(11)
定本西鶴全集	中央公論社	(14)
寺田寅彦全集	岩波書店	(17)
啄木全集	〃	(17)
鷗外全集	〃	22
二葉亭四迷全集	〃	9
芥川龍之介全集	〃	10
漱石全集	〃	19
透谷全集	〃	3
堀辰雄全集	角川書店	(10)
宮沢賢治全集	筑摩書房	12
高見順日記	勁草書房	(8)
中国古典選	朝日新聞社	(12)
中国詩人選集（正・続）	岩波書店	33
新釈漢文大系	明治書院	(19)
中国現代文学選集	平凡社	20
魯迅選集	岩波書店	13
詳注シェイクスピア双書	研究社	(20)
シェイクスピア全集	新潮社	15
ヘミングウェイ全集	三笠書房	9
ゲーテ全集	人文書院	12

資料Ⅱ　有明高専図書室雑誌

〔注〕※は教官室別置分

A　和雑誌

図書館雑誌	日本図書館協会
学校図書館	全国学校図書館協議会
読書科学	日本読書学会
日本古書通信	日本古書通信社
学術月報	日本学術振興会
文芸春秋	文芸春秋新社
中央公論	中央公論社
世　界	岩波書店
朝日ジャーナル	朝日新聞社
リーダーズ・ダイジェスト	リーダーズ・ダイジェスト社
Reader's Digest	Reader's Digest 社
思　想	岩波書店
思想の科学	思想の科学社
日本歴史	日本歴史学会
歴史教育	日本書院 ※
体育科教育	大修館書店 ※
学校体育	日本体育社 ※
新体育	新体育社 ※
体育の科学	体育の科学社 ※
自　然	中央公論社 ※
科　学	岩波書店
科学朝日	朝日新聞社
数学セミナー	日本評論新社 ※
数学教育	明治図書 ※
数理科学	ダイヤモンド社
物　性	槇書店 ※
機械エンジニヤ	産　報
金属材料	日刊工業新聞社
機械設計	〃 ※
機械の研究	養賢堂 ※
工作機械の技術	日本技術資料K.K ※
内燃機関	山海堂
モーターファン	三栄書房
技能ヤング	K.K技研
日本機械学会論文集	日本機械学会 ※
新電気	オーム社
図説電気	電気書院
電気雑誌（オーム）	オーム社

電波教材	電波新聞社 ※
無線と実験	誠文堂新光社
電子科学	産報 ※
電子展望	誠文堂新光社
電子材料	工業調査会
電子計測	電子計測出版社
計測と制御	コロナ社
オートメーション	日刊工業新聞社
電気学会雑誌	電気学会 ※
電気通信学会雑誌	電気通信学会 ※
計測自動制御学会論文集	計測自動制御学会 ※
化　学	化学同人社
化学の領域	南江堂
化学経済	化学経済研究所
ケミカル・エンジニヤリング	化学工業社 ※
化学技術誌 Mol	オーム社
化学装置	工業調査会 ※
化学工場	日刊工業新聞社
化学工学	化学工学協会
化学工業	化学工業社
化学と工業	日本化学会
石油と石油化学	幸書房
日本化学雑誌	日本化学会 ※
工業化学雑誌	〃 ※
有機合成化学協会誌	有機合成化学協会 ※
太　陽	平凡社
婦人公論	中央公論社
芸術新潮	新潮社
みづゑ	美術出版社
アサヒカメラ	朝日新聞社
音楽の友	音楽の友社
ステレオ	〃
Study of English	研究社
High School English	〃
英語青年	〃 ※
時事英語研究	〃 ※
ドイツ語	大学書林
日本文学	日本文学協会
国文学	学燈社
国文学・解釈と鑑賞	至文堂
世界文学	富山房

B　外国雑誌

American Literature. (A) Q.※
Annals of Mathematics. (A) B-M.※
Chemical Abstracts, Complete Ed. (A) B-W.※
Classical Review. (E) 3 Nos.※
Communication on Pure and Applied Mathematics. (A) Q.※
Contribution to Differential Equations (A) ※
I.E.C., with all Quarterlies. (A) M.※
　　Fundamentals.
　　Process Design and Development.
　　Product Research and Development.
Journal of American Chemical Society. (A) S-M ※
Journal of Applied Physics. (A) M.※
Journal of Chemical Physics. (A) S-M.※
Journal of Physical Chemistry. (A) M.※
Life. (A) B-W.
Physical Review. (A) W.※
Proceedings of I.E.E.E. (A) M.※
Quarterly Review of
　　English Literature. (E) Q.※
Reviews of Modern Physics. (A) Q ※
Review of Scientific Instrument. (A) M.※
Science Abstracts. (E) M.※
　　Section A Physics Abstracts.
　　〃　B Electrical Engineering Abstracts.
Time. (A) W.
Transactions of the A.S.M.E. Series A.B.C.D.E. all 5 Journals. (A) Q.※
Transactions of Faraday Society, including Discusstion. (E) M. ※
Zeitschrift f. Physikalische Chemie. (E.G) ca 3 Bde.※

資料Ⅲ　よく読まれた本

分類別利用統計（本文29ページ参照）の表Cである。ただし、延10回以上帯出のもの。数学については20回以上、文学については30回以上のものをとり、各文学作品が全集等に収録の場合は、この数値に含まれない。

◇総　記

天声人語（朝日新聞社）	14
読書術（加藤周一）	11

△1哲　学

（哲学一般・宗教）

シュヴァイツァー関係書〔同選集他〕	39
幸福論（ラッセル）他	36
聖書関係書〔聖書他〕	22
おれについてこい！（大松博文）	21

人間形成・ある根性〔正続〕（毎日新聞社） 21
岡潔の諸著書（春宵十話他） 20
三太郎の日記（阿部次郎） 19
眼られぬ夜のために（ヒルティ） 14
人生論（武者小路実篤）他 11
（心理学）
短時間睡眠法（古閑永之助） 14
欲望（望月衛） 13
◇2歴　史
（日本史）
日本の歴史（読売新聞社） 71
炎は流れる（大宅壮一） 33
岩波講座・日本歴史 21
江戸の刑罰（石井良助） 11
犯科帳（森永種夫） 10
（世界史）
世界の歴史（中央公論社） 69
夜と霧（フランクル） 22
北京収容所（佐藤亮一） 18
バルチック艦隊の最期他
（世界ノンフィクション全集31） 18
アジアの曙（山中峯太郎） 17
漫画世界歴史（ミンゴーテ） 15
いちばん長い日他
（世界ノンフィクション全集16） 14
世界各国史（山川出版社） 14
ユダヤ人（村松剛） 14
マッカーサー回想記（朝日新聞社） 13
歴史の教訓他（トインビー） 13
失われた大陸（アンドレーエヴァ） 13
おそるべき証人他
（世界ノンフィクション全集26） 12
ベトナム戦争関係書〔ベトナム戦記他〕 11
ドレフュス事件他
（世界ノンフィクション全集15） 11
1914年7月他（世界ノンフィクション全集13） 11
インカ帝国（泉靖一） 10
（伝　記）
キューリー家関係書〔キューリー夫人伝他〕 138
余の尊敬する人々（矢内原忠雄） 118
ケネディ関係書〔悲劇の大統領他〕 51
自叙伝（河上肇）他 29
アラビアのロレンス（中野好夫）他 28
クレオパトラ（エミール・ルートヴイッヒ） 24
ツヴァイク全集（みすず書房） 19
ナポレオン伝（エミール・ルートヴイッヒ） 17
岩波茂雄伝（安倍能成）〔および惜櫟荘主人〕 15
徳川家康（北島正元）他 14
怪盗ヴィドック自伝他
（世界ノンフィクション全集38） 12
偉大なる道（スメドレー） 11
西郷隆盛（田中惣五郎）他 10
高い山（大内兵衛） 10
（地　理）
何でも見てやろう（小田実） 21
カナダエスキモー（本多勝一） 15
旅（有紀書房） 13
新人国記（朝日新聞社） 13
ニューギニア高地人（本多勝一） 12
新しいアメリカ（加藤秀俊） 12
アメリカ（小田実） 11
若いヨーロッパ（阿部良雄） 11
ゴリラとピグミーの森（伊谷純一） 10
アメリカ感情旅行（安岡章太郎） 10
◇3社会科学
（政治、法律）
なし
（経　済）
日本の会社（坂本藤良） 10
（社会、教育）
学者の森（毎日新聞社） 11
（風俗、民俗学）
エチケット（日高孝次他） 15
◇4自然科学
（自然科学一般）
小事典・科学の手帳（崎川範行） 17
（数　学）
新数学シリーズ（培風館） 73
数学新書（東京図書） 61
新数学Ⅰ（遠山啓） 48
朝倉数学講座（朝倉書店） 39
基本問題・解法の手びき（矢野健太郎） 37
研修数学1（小林善一） 34
基礎数学講座（共立出版） 31
学研数Ⅰ（矢野健太郎） 29
新数学ⅡB（遠山啓） 25
数ⅡBの基礎（戸田清） 24
数学Ⅰ研究（矢野健太郎） 22
研修数ⅡB（小林善一） 21
数学パズル（藤村考三郎） 20
零の発見（吉田洋一） 20

（物理学）

ガモフ全集（白揚社） 147
コロナシリーズ（コロナ社） 48
新物理学講座（ダイヤモンド社） 22
物理の散歩道（ロゲルギスト） 22
新訂物理学（寺沢寛一） 21
科学普及新書（東京図書） 20
基礎物理学（金原寿郎） 18
物理学（柿内賢信）他 18
相対性理論入門（エリ・ランダウ） 18
初等物理学（ピョーリシキン） 18
理工系物理学入門（堀伸夫） 17
物理学概説（小谷正雄） 14
物理学はいかに創られたか（アインシュタイン） 13
半導体物語（ボリソフ・ピヤトノワ） 13
物理の世界（湯川秀樹他） 12
新しい物理学（福田信之他） 11
物理学概要（一瀬正巳他） 10

（天文学・地学）

宇宙を探る（小尾信弥） 18

（生物学・医学）

昆虫記（ファーブル） 71
胃袋（飯島登） 11

◇5工学、技術

（工学技術一般、産業）

石のおのから人工衛星まで（ラルゼン） 15
現代の技術者（菊池誠） 11
人工頭脳時代（菊池誠） 11
原子力潜水艦（ノーマン、ポルマー） 10

（機械工学）

加工技術シリーズ（産業図書） 13
金属材料（河合匡） 13
酸素アセチレン溶接及び電気溶接（桐淵勘蔵） 10

（電気工学）

電気理論（電気学会） 45
新ラジオ技術教科書（日本放送協会） 29
電気磁気学（電気学会）他 28
電気磁気学演習（石川静一） 26
エレクトロニクス入門（バーナード・グロブ） 24
交流回路（宇野辛一） 20
電磁気学（川西健次）他 19
理工系のための電気工学の基礎（入江富士男） 17
電気回路論（安宅彦三郎） 15
電磁気学概論（松田栄） 14
電磁事象（電気学会） 14
電気磁気測定（電気通信学会）他 13
ハムになる本（日本アマチュア無線連盟） 13
電気数学（電気学会）他 11
電気工学原論（星合正治他） 10
電気回路教室（森光三） 10

（化学・化学工業）

基礎有機化学（フィーザー） 29
化学（白井俊明他） 16
化学演習（白井俊明） 16
一般化学（ポーリング） 16
有機化学（ブルースター） 15
物理化学（小野宗三郎他） 12
物理化学教本（鮫島実三郎） 12
新しい化学（共立出版） 11
実験化学講座（丸善） 10
実験分析化学（石橋雅義） 10

◇7芸術

（芸術一般、諸芸、娯楽）

なし

（美　術）

新アサヒカメラ教室（朝日新聞社） 17

（音　楽）

名曲解説全集（音楽之友社） 15

（演劇、映画）

なし

（体育、スポーツ）

登山関係書（登山講座他） 81
サッカー（旺文社スポーツシリーズ12） 31
卓球　（　〃　3） 25
柔道　（　〃　16） 20
軟式庭球（　〃　5） 19
ラグビー（　〃　13） 18
陸上競技（　〃　6） 17
東洋の魔女の5年間（大松博文） 17
オリンピック関係書〔世紀のオリンピック他〕 12
剣道（旺文社スポーツシリーズ15） 10

◇8語学

（言語学一般）

すてんどぐらす（朝日新聞社） 10

（国語学）

なし

（英　語）

Oxford English Picture Readers
　その他オックスフォード版低学年向シリーズ 266
英語に強くなる本（岩田一男） 30
英語の総合的研究（赤尾好夫） 25
Choice Reading Series（日栄社） 24

現代英文解釈法（荒牧鉄雄） 22
もうチョットで英語は話せる（シャフスヌ） 13
英語の基礎（梶木隆一） 11
英文法の研究（古瀬良則他） 11
（ドイツ語）
新ドイツ語入門（倉石五郎） 44
（フランス語）
田島フランス語講座（田島清） 15
新フランス語入門（前田陽一他） 13
（ロシヤ語）
東郷ロシヤ語講座（東郷正延） 19
ロシヤ語初級コース（ポターポヴア） 11
（その他諸国語）
笠井スペイン語講座（笠井鎮夫） 12

◇9文　学

（和漢古典）
水滸伝（施耐庵） 59
（日本文学）
こゝろ（夏目漱石） 349
三四郎（〃　） 288
破戒（島崎藤村） 233
田舎教師（田山花袋） 212
宮本武蔵（吉川英治） 210
藤村詩抄（島崎藤村） 184
暗夜行路（志賀直哉） 177
それからの武蔵（小山勝清） 118
新平家物語（吉川英治） 115
羅生門（芥川龍之介） 109
宣言（有島武郎） 107
思い出の記（徳富健次郎） 96
出家とその弟子（倉田百三） 93
思譽の彼方に（菊池寛） 87
私本太平記（吉川英治） 83
侏儒の言葉（芥川龍之介） 76
寺田寅彦随筆集（岩波書店） 75
にごりえ（樋口一葉） 70
人間の運命（芹沢光治良） 65
吾輩は猫である（夏目漱石） 58
音高く流れぬ（村上信彦） 52
石川啄木全集（岩波書店） 50
智恵子抄（高村光太郎） 41
氷壁（井上靖） 39
坊つちやん（夏目漱石） 36
土（長塚節） 34
しろばんば（井上靖） 34
江分利満氏の優雅な生活（山口瞳） 32
西郷札（松本清張） 32
友情（武者小路実篤） 30
橋のない川（住井すゑ） 30
（世界文学）
＜文学一般＞
なし
＜中国文学＞
李家荘の変遷（趙樹理） 50
阿Q正伝他（魯迅） 36
＜英米文学＞
風と共に去りぬ（ミッチエル） 91
嵐ケ丘（E・ブロンテ） 85
武器よさらば（ヘミングウェイ） 60
怒りの葡萄（スタインベック） 41
エリザ・シリーズ（アダムソン） 32
＜ドイツ文学＞
若きエルテルの悩み（ゲーテ） 83
アンネの日記（アンネ） 44
＜フランス文学＞
チボー家の人々（デュ・ガール） 500
ジャン・クリストフ（ロラン） 106
レ・ミゼラブル（ユゴー） 91
モンテクリスト伯（デュマ） 79
狭き門（ジイド） 50
ボヴァリー夫人（フローベール） 45
＜ロシア文学＞
戦争と平和（トルストイ） 120
静かなドン（ショーロホフ） 107
アンナ・カレーニナ（トルストイ） 70
罪と罰（ドストエフスキー） 70
カラマーゾフの兄弟（ドストエフスキー） 57
＜その他諸国文学＞
なし

付　よく読まれた作家

日本についてはその作品が延50冊以上、外国については延20冊以上読まれた作家をとった。

（日本）

①夏目　漱石	925	
②島崎　藤村	520	
③吉川　英治	408	
④芥川龍之介	273	
⑤田山　花袋	251	
⑥志賀　直哉	221	
⑦有島　武郎	181	
⑧井上　靖	164	

（中国）

①趙　樹　理	51
②魯　　迅	38

（英米）

①シェイクスピア	152
②ヘミングウェイ	126
③ミッチェル	91
④E・ブロンテ	85
⑤スタインベック	41

⑨徳富　蘆花	125
⑩小山　勝清	118
⑪倉田　百三	96
⑫菊池　寛	92
⑬樋口　一葉	91
⑭武者小路実篤	86
⑮寺田　寅彦	75
⑯谷崎潤一郎	73
⑰松本　清張	73
⑱芹沢光治良	65
⑲森　鷗外	62
⑳石坂洋次郎	59
㉑山本周五郎	58
㉒野間　宏	57
㉓三島由紀夫	57
㉔村上　信彦	56
㉕川端　康成	53
㉕石川　啄木	53

⑥ロレンス	41
⑦アダムソン	32
（ドイツ語）	
①ゲーテ	130
②ヘッセ	122
③アンネ・フランク	44
（フランス）	
①マルタン・デュ・ガール	502
②ロマン・ロラン	149
③スタンダール	99
④ヴィクトル・ユゴー	91
④ジイド	91
⑥アレクサンドル・デュマ	79
⑦モーパッサン	74
⑧フローベル	45
⑨バルザック	42
（ロシア・ソビエト）	
①トルストイ	243
②ドストエフスキー	143
③ショーロホフ	107

内容目次（4ページ）にお断りしたように、このあと**管理と運営**の諸章がつづくところを、紙面の都合により割愛し、以下の附録をもってこれに代える。

「高専図書館設置基準」において、特に考慮さるべき基本的諸問題

われわれは「高専図書館設置基準」のすみやかな制定を望むものである。同基準は、大学図書館体質改善の最近の道標である「大学図書館設置基準要項」に準じて勘案さるべきであるが、大学図書館とはまたちがった特性を賦与すべきことも明らかである。それらの基本的な諸問題を以下に列記する。

Ⅰ趣　旨

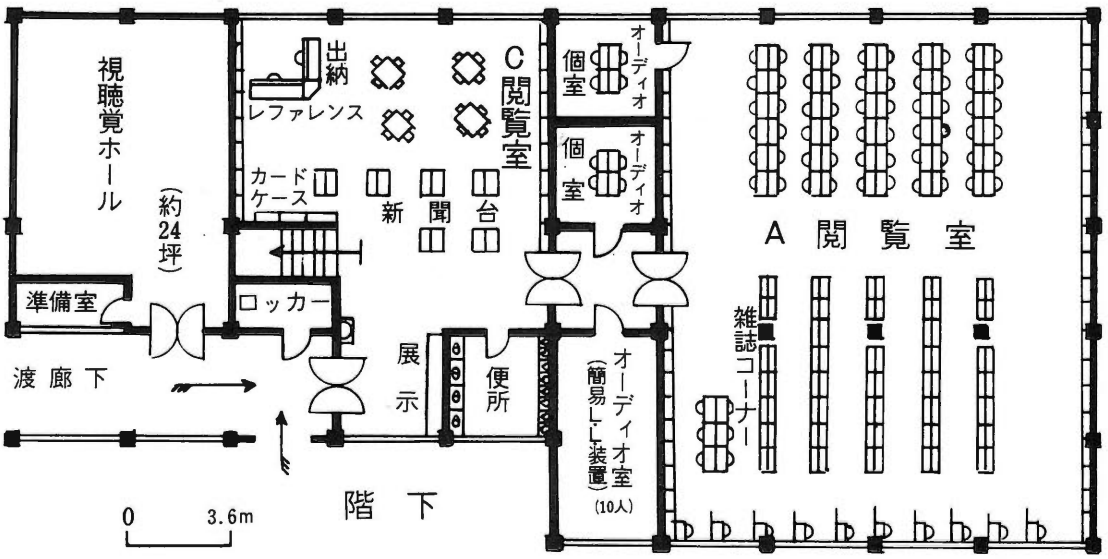
Ⅰ－1　高専図書館とはただ単に(中央)図書館のみをさすものでなく、各学科の図書室・教官研究室（図書）などをも総括したものをいう。

Ⅰ－2　「高専図書館」の果たすべき機能の主力は学生図書館(**undergraduate library**) にある。ことに「総合的な一般教養の場」としての役割は、大学図書館に比し一層重大である。

Ⅱ　図書および資料

Ⅱ－1　高専図書館における学生用図書と教官研究用図書とは、全学的視野にたった有機的蔵書構成により、おのおのその特性を充分に生かしうるよう、最高度の利用効果を意図して管理、運営されねばならない。

Ⅱ－2　高専図書館においては、**指定図書**、一般参考図書など、授業や論文・レポート提出、また自学自習にのぞんだ学生が必要とする、すべての図書および資料を充分な複本数をもって整備すべきである。



Ⅱ－3　高専図書館は、高専における学術研究を推進するため、大学図書館の研究図書館(research library)機能に準じて教官研究用・高学年生用の専門書その他必要な図書資料を収集・整理・保存するとともに、他大学高専との共同利用についても配慮しなければならない。

Ⅲ　施設・設備

Ⅲ－1　高専図書館の閲覧方式は、原則として全面開架方式をとり、少なくとも次の3つの閲覧室を設けるものとする。

A. 自然科学および工学系閲覧室

B. 人文科学・社会科学系閲覧室

C. 新聞雑誌閲覧室兼軽読書室

〔注〕図書館は知的さらに情操的憩いの場でもあらねばならない。C閲覧室は新聞閲覧台・（非専門）雑誌・美術書・文学書などを備えて、いわゆるブラウジング・ルームの一部をも兼ね、ここでは小声の談話も許される。

Ⅲ－2　上記の閲覧室には合計して学生総数の百分の二十以上の座席を備えるものとし、上記A・Bでは演習授業を行い得るよう各40席以上を備えるものとする。

〔注〕大学図書館の基準は「百分の五」より「百分の十」に改訂された。大学より規模がはるかに小さいことなどを勘案し、「百分の二十」は最低と考える。ちなみに「国立大学図書館改善要項」㈠（大学図書館の学生に対する運営の改善について）の㈣には「学生のための閲覧室座席は学生総数に対する相当数（10%～20%）用意するようつとめ……」と記してある。

Ⅲ－3　高専図書館には、閲覧室のほかに次の施設を備えるものとする。

①マイクロ・リーダー室（マイクロ・リーダーを備え、視聴覚ライブラリーを兼ねる）

②オーディオ個室（録音テープによる語学学習、レコード鑑賞などに利用する小部屋を数室）

③小集会室（研究集会・討論会などに利用）

④整理室（事務室）

⑤複写室（一部は暗室設備とする）

⑥館長室

⑦書庫（将来増築にても可）

〔注〕書庫に収納する図書は、雑誌バック・ナンバー、利用瀕度低下の図書などに限る。

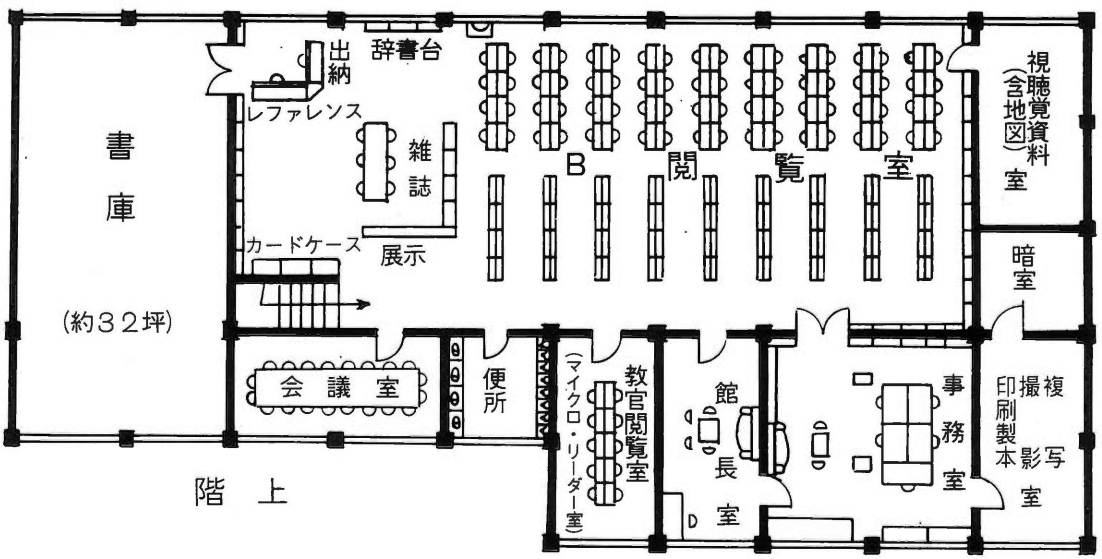
Ⅲ－4　高専図書館の建築計画例を下図に掲げる。

有明高専図書館新営希望図

学生数 1,000名　蔵書数 60,000冊　座席比率 20%
建坪 595.04㎡（180坪）　延坪 1,190.08㎡（360坪）

閲覧座席数	A（理工学系）	76席〔内10は個席〕	学生席小計 200席（他に教官用10席）
	B（人文・社会系）	78〃	
	C（新聞・軽読書）	28〃	
	オーディオ個室	18席	
書架能力	（開架）	ABC3室あわせて	38,000冊
	（書庫）	内部は積層2層として	22,000冊

＜全般的にモデュラープランニング可能とする＞



Ⅳ　管理と運営

Ⅳ－1　高専図書館の長は、図書館行政並びに学生の一般教養について深い理解を有する教官から全学的に選ばれなければならない。図書館長は図書館運営委員会の推せんにより校長が任命する。その任期は2年とし、再選を妨げない。

Ⅳ－2　**図書館長**たる教官は、図書館の教育効果を高めるため、授業担任の全部あるいは一部を免ぜられて学生の指導にあたることが望ましい。

〔注〕「国立大学図書館改善要項」の㈠の㈡に「館長は……その在任中は原則として授業は担任しないこととすること」、また㈠の㈡に大学図書館に教官ポジションを導入すべきことが示されている。また一方、「学校図書館法」第5条に「学校には学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない」とあり、同法第4条第4項に「利用の指導を行うこと」を明記していることは、中学卒業生を受け入れる高専図書館において、特に留意されねばならない。

Ⅳ－3　高専図書館の管理および運営に関する基本方針並びにその他の事項を審議するため、図書館運営委員会を置くものとする。

図書館運営委員会は図書館長を委員長とし、各学科より選出された各1名、並びに一般教科の人文社会科学系と自然科学系の二系列より選出された各1名の教官、および事務（部）長をもって組織する。

Ⅴ　職員組織

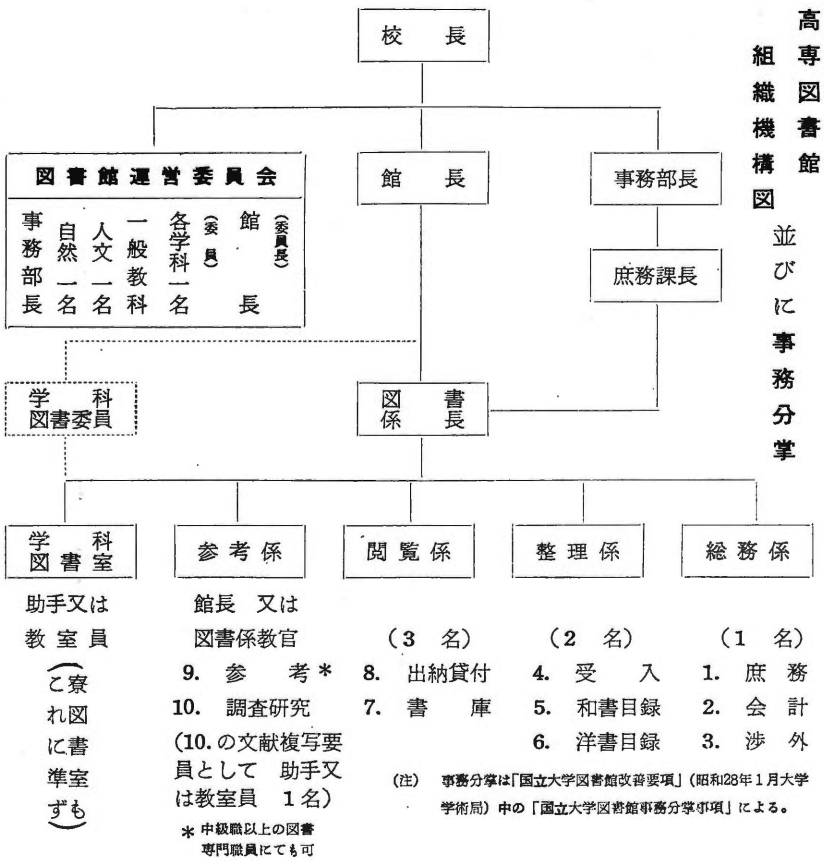
Ⅴ－1　高専図書館の図書専門職員は、年少な低学年生に対し、教育的指導的に接し得る資質をもたねばならない。

Ⅴ－2　高専図書館の図書専門職員は、夜間および休日の開館を可能にする定数を配当されねばならない。

Ⅴ－3　高専図書館の組織機構ならびに事務分掌事項の概略は、図示すれば次の如くである。

（村上正男）

高専図書館組織機構図並びに事務分掌



＊中級職以上の図書専門職員にても可

（注）　事務分掌は「国立大学図書館改善要項」（昭和28年1月大学学術局）中の「国立大学図書館事務分掌事項」による。

図書館共同研究あとがき

拙速を旨とした本報告をここに敢て公刊する。われわれの微衷をくみ、高専図書館の問題が、広く高専教育関係者・図書館関係者にとりあげられて、爾後活潑に討議されんことを願ってやまない。その第一段階としては何よりもまず高専図書館協議会の設立が望まれる。

校正の筆を擱くにあたり二、三を記させていただく。

①本共同研究は、有明高専の校長・全員に近い教官・事務長・図書室員の共同作業であるが、甲木・清水・西・品川・田中五教官には担当部分のみならず、全般的に参画していただいた。疎漏も多いと思われるが、そのすべての責めは、主として企画進行にあたった本職にある。

②九州大学附属図書館の船越事務部長・山崎整理課長には、本職を通じて本研究に対する懇切な御指導をいただいたことを深謝申し上げる。

③最後に、感謝といささかの誇りをもってつけ加えたいことは、本稿の蔭の執筆者が本校の学生諸君、ことに一期生の諸君であるということである。

＜1966.2.15
図書係教官　棚町知弥＞

教科、身体の形態と体力、運動能力の相関についての一考察

寺　本　匡　謨

A Study of Interrelation between Physical Strength or Motor Fitness and Mental Strength and Type of Body

Masaaki　Teramoto

Summary

Though I had been taking interest in the subject 'Interrelation between Physical Strength or Motor Fitness and Mental Strength and Type of Body', I had only taken it up intuitively or only surmised it. I, however, obtained an opportunity to survey the matter minutely and some data on it, by dint of which, here, I have elucidated the subject, though partially.

はじめに

戦後青少年の背たけ体重といった体格の伸びはめざましいが、体力や運動能力はむしろ戦前より低下している。身体の形態的なもの（身長体重胸囲座高）は明治33年から調査され、世界でもめずらしい貴重な資料となっているが、体力や運動能力の面での資料はほとんどない。文部省の調べによると、たとえば13才の少年の場合60m競走では昭和9年に平均9秒9だったのが、37年には10秒1と落ち、走幅跳も9年の平均3m70が37年は3m40と低下している。特に運動能力は中学高校によると受験がひびいてめっきり落ちるといわれる。東京オリンピックでは水上陸上がふるわず、青少年の体力不足をさらけだした。そこで青少年の体力強化をはかるため、文部省は昨年からスポーツテストの全国的普及に乗りだした。昨年5、6両月10才から20才までの青少年の体力運動能力調査を全国的規模で行なった。（小、中、高校が青森・福島・静岡・大阪・香川・長崎など9府県、一般勤労青少年は宮城・茨城・三重・福井・兵庫・福岡・大分など23府県）このように毎年行われんとしているスポーツテストによって、体力運動能力については明示されることだろう。一方戦後のベビーブームも中学から高校、今明年は大学へと進んでいる。最近の入学難ははげしく、受験勉強のため体力運動能力にも何彼につけ影響することだろう。勉強と運動は両立するか否かと云うことは、昔より色々と論議されている。そこで私は多年考えていた体力・運動能力・身体の形態と勉学との相関関係如何と云う点について、平常関心を持っていながら直観的に解釈するか単に憶測するのみでこれらについて詳細に調査する資料や機会を得なかった。幸い昭和38年度の本校入学生（受験者1,627名中合格者120名の難関を突破した一応優秀な男子学生）について、調べて見ることにした。もちろんこの一時点の調査からただちに決定的な結論を出すことは早計でもあり、本調査の直接の目的でもない。今まで単に憶測の域を脱しえなかった私の関心に対し、一つの実例実証を提示することを第一の目的としたい。

下記公式により相関係数を求めた。

$$\bar{u} = \frac{\Sigma uf(u)}{n} \qquad \bar{v} = \frac{\Sigma vf(v)nS}{n}$$

$$Su = \Sigma u^2 f(u) - (\Sigma v) \times \bar{u}$$

$$Sv = \Sigma v^2 f(v) - (\Sigma v) \times \bar{v}$$

$$Suv = \Sigma uv - (\Sigma v)\bar{v}$$

$$r = \frac{Suv}{\sqrt{Su.Sv}}$$

判定の基準　　0.5以上　　有り

0.4～0.2　　やや有り　　0,199以下無し

対象……本校二年男子学生全員

測定検査方法……文部省スポーツテストに準拠

教科成績……第一学年末綜合成績

表 1.1　社 会 と 50 m

v	u	−2	−1	0	1	2	f(v)	vf(v)	v²f(v)	u	vu
	y　x	6″3	6″7	7″1	7″4	7″8	=f(y)				
2	75	1	2	6	2		11	22	44	−2	−4
1	80	1	11	14	6	4	36	36	36	1	1
0	85	3	5	14	2		24	0	0	−9	0
−1	90	1	8	16	2	2	29	−29	29	−4	4
−2	95			2	1		3	− 6	12	1	−2
f(u)=f(x)		6	26	52	13	6	103	23	121	−13	−1
uf(u)		−12	−26	0	13	12	−13				
u²f(u)		24	26	0	13	24	87				
v		2	7	6	6	2	23				
uv		− 4	−7	0	6	4	−1				

$\bar{u}$=−0.13　Sv=115.94
$\bar{v}$=0.22　Suv=1.86
Su=86.31　r=0.015

表 1.2　英 語 と 50 m　r 0.07

y　x	6″1	6″3	6″5	6″7	6″9	7″1	7″3	7″5	7″7	7″9
58				1	4				1	
63		1	1	1	5	3	2	1	1	
68				2	4	4	1	1	1	
73				4	9	3	1	1		
78		2		4	9	1	1	1	1	1
83				1	7	6	1	1		
88		1			6	2		1		
93					2					

表 1.3 国 語 と 50 m　r 0.008

y　x	6″1	6″3	6″5	6″7	6″9	7″1	7″3	7″5	7″7	7″9
65									1	
70				4	5	1				1
75		3	1	3	18	7	2	3		
80				4	14	5	3	3	2	1
85	1	1		1	7	1		1	1	
90		1		1	1	3	1			
95						2				

表 1.4　理 科 と 50 m　r 0.119

y　x	6″2	6″6	7″	7″4	8″
64			5	1	2
73	2	11	33	7	3
78	1	3	8	1	
83	2	1	11	2	
88		1	4		
93			2	1	

表 1.5　平 均 点 と 50 m　r 0.007

y　x	6″1	6″3	6″5	6″7	6″9	7″1	7″3	7″5	7″7	7″9
68				1	2			1		
73			1	1	14	2	1			1
78		3		9	14	9	3	6		1
83	1	1	1	3	12	6	2	1		
88					2	1	1	1		
93					1					

表 1.6　身　長　と　50　m　　r　0.186

y	x	6″1	6″3	6″6	6″8	6″9	7″2	7″4	7″7	7″8
152						1	1			
158			1			5	I	1	1	1
163		1			4	11	5	2	3	1
168			2		13	19	3	3		
173			1	1	4	8	2		1	
178				2	1	1	2	1	1	

表 1.7　数　学　と　50　m　　r　0.027

y	x	6″1	6″3	6″5	6″7	6″9	7″1	7″3	7″5	7″7	7″9
48			1		1	1	1	1		1	
53											
58					1	6					1
63						2	4			1	
68											
73			1	1	3	13	7	4	2		
78											
83		1	2		7	12	5	1	2	2	1
88											
93					2	6	2	1	3		
98						3	1				

表 1.8　体　重　と　50　m　　r　0.29

y	x	6″1	6″3	6″5	6″7	6″9	7″1	7″3	7″5	7″7	7″9
43							1	1	1	1	1
48					2	8	2	2	1		1
53					1	12	5	3	3	1	1
58		1	3		6	11	6	1	1	1	1
63			1	1	5	9	4		3		
68							1				
73							1				

表 1.9　胸　囲　と　50　m　　r　0.23

y	x	6″1	6″3	6″5	6″7	6″9	7″1	7″3	7″5	7″7	7″9
75									1		
78			1			10		1	1		
81					2	17	2		2		
84			2		5	13	10	1	2	1	2
87					5	9	3	4	1	3	
90		1		1	1	2	3				
93			1		1	3	2				

表1.1から表1.9までの相関係数を見ると、体重の0.29を筆頭に胸囲の0.23と段々になり、社会の0.15と連なって居る。最初に決めた基準に照らして相関を見ると体重と胸囲がややあり、次は身長において少々匂いがする位で他はなしと判断せざるを得ない。国語においてーが出て居るのは反対の係数があるのではないかと思われる。然しその裏を如何にして見きわめるかは今後の研究とし全体的に見て50mと教科の相関は非常に弱いが身体的面おいて強いといえるだろう。

表 2.1　社 会 と 巾 跳

	u	−2	−1	0	1	2	f(v) =f(y)	vf(v)	v²f(v)	u	vu
v	y　x	75	10	45	80	20					
2	73	1	3	5	2	1	12	24	48	−1	−2
1	78	3	11	14	9	0	37	37	37	−8	−8
0	83	3	6	10	7	2	28	0	0	−1	0
−1	88	5	10	8	1	5	29	−29	29	−9	9
−2	93	1	0	1	1	0	3	− 6	12	−1	2
f(u)=f(x)		13	30	38	20	8	109	26	126	−20	1
uf (u)		−26	−30	0	20	16	−20				
u²f (u)		56	30	0	20	32	134				
v		−2	7	14	10	−3	26				
uv		4	−7	0	10	−6	1				

$\bar{u}=-018$　Sv=120

$\bar{v}=0.24$　Suv=1.04

Su=133.4　r=0.009

表 2.2　英 語 と 巾 跳　r 0.069

	3m		4m					5m	
y　x	60	80	00	20	40	60	80	00	20
48						1			
53									
58		1		1		1	2		
63			3	4	5	3	2	1	
68	1		6	1	4	1	3		
73		1	1	3	5	2	1	3	1
78		3	1	5	3	3	2	2	
83		2	1	4	5	3	3	1	
88		2	2	1	1	1	2		
93				1	2				

表 2.3　国 語 と 巾 跳　r 0.022

y　x	3,755	3,955	4,155	4,355	4,555	4,755	4,955	5,155	5.28
65	1								
70	2	1	2	4	1	2	2		
75	3	6	9	6	3	6	1	1	
80	2	5	8	9	7	2	1		1
85	2	1	2	2	3	1	1	2	
90	1	1		2	1	2			
95		2							

表 2.4　理 科 と 巾 跳　r 0.134

y　x	3 m 75	4 m 10	45	80	5 m 20
64	1	3	2	2	1
73	8	21	20	10	2
78	0	1	9	4	
83	3	3	4	2	4
88	1		3	1	
93	1	1		1	

表 2.5　平 均 点 と 巾 跳　r 0.107

y　x	3.50	3.70	3.90	4.10	4.30	4.50	4,70	4.90	5.10
68			1	1		2	1	1	
73	1	4	2	5	7		1		3
78		1	6	8	9	11	6	4	1
83		2	4	3	6	4	2	4	3
88			1		2		2		
93					1	1			

表 2.6　身長と巾跳　r 0.45

y	x	3m 68	88	4m 8	28	48	68	88	5m 8	30
152		1	1							
158			2	5	3		1			
163		1	6	5	6	6	2	1	1	
168		1	3	7	7	9	5	4	3	1
172			2		7	3	3	3	1	
178				1	1		3	2	1	

表 2.7　数学と巾跳　r 0.031

y	x	3m 67.5	87.5	4m 1.5	27.5	47.5	67.5	87.5	5m 7.5	27.5
48				1			3	2		
53										
58			2	2	4					
63		2	1	3	1	2		1		
68										
73			5	7	10	6	2	1	3	1
78										
83			2	1	4	9	6	5	4	
88										
93		1	3	1	3	3	2	1		1
98				1	1		1	1		

表 2.8　体重と巾跳　r 0.5

y	x	3m 77.5	97.5	4m 17.5	37.5	57.5	77.5	97.5
43		2	1	1	1			
48		3	5	4	1	1		
53		2	5	6	9	2	2	
58			1	3	10	8	5	8
63			1	5	5	5	4	2
68		1	1				1	
73					1			

表 2.9　胸囲と巾跳　r 0.23

y	x	3m 77.5	97.5	4m 17.5	37.5	57.5	77.5	97.5	5m 17.5
75					1				
78			1	2					
81		5	6	5	7	5	2		
84		1	3	5	10	6	6	3	2
87			2	4	5	4	3	2	1
90				3	3		1	1	1
93		1	1		1	1	1	1	

2表は走り巾跳との相関で、その係数を見ると体重の0.5、身長の0.45、胸囲の0.23となり、教科の面に於ては理科の0.134で他はほとんど取るに足らない係数ばかりである。決めた基準によれば体重に関してはあり身長胸囲共にややありとなる。普通一般に考えられる事と思われる。教科については有意性の問題として後の研究に待つことにして、身体の形態的面に於ては前述の通り相関はありと判断する。

表 3.1　社会とボール投げ

v	u	−2	−1	0	1	2	f(v)=f(y)	vf(v)	$v^2f(v)$	u	vu
y \ x		19	23	28	32	36					
2	75		4	4	4	1	13	26	52	2	4
1	80	1	17	11	6	0	35	35	35	−13	−13
0	85	1	10	8	6	0	25	0	0	− 6	0
−1	90	2	11	8	7	1	29	−29	29	− 6	6
−2	95		1	2			3	− 6	12	− 1	2
f(u)=f(x)		4	43	33	23	2	105	26	128	−24	−1
uf(u)		−8	−43	0	23	4	−24				
$u^2f(u)$		16	43	0	23	8	90	$\bar{u}$=−0.23		Sv=121.5	
v		−1	12	7	7	1	26	$\bar{v}$=0.25		Suv=4.9	
uv		2	−12	0	7	2	−1	Su=84.5		r=0.05	

表 3.2　英語とボール投げ　r　0.04

y \ x	19	22	25	28	31	34	37
48						1	
58		1	2		1	1	
63		4	5	3	2	2	
68		1	5	6	1	2	
73			9	7	1		
78	1	2	5	6	7		
83	1	1	5	8	3	1	
88			3	3	2		
93			2				

表 3.3　国語とボール投げ　r　0.17

y \ x	19	22	25	28	31	34	37
70		3	5	3		1	
75		3	13	10	6	4	1
80	2	1	12	15	3	1	
85		1	4	12	3	1	
90		1	1	2	4		
95			1		1		

表 3.4　理科とボール投げ　r　0.027

y \ x	19	23	27	31	35
64	1	3	3		2
73	1	22	20	10	4
78		2	5	3	
83		3	10	3	
88	1		3		
93		1	2		

表 3.5　平均点とボール投げ　r　0.035

y \ x	19	22	25	28	31	34	37
68			1	2		2	
73		6	10	1	1	3	
78		3	15	17	9	2	
83	2		7	12	6		1
88			4				
93			1				

表 3.6　身長とボール投げ　r　0.47

y　x	19	22	25	28	31	34	36
152		1	1				
158		3	3	3			
163	1	3	15	9	1		
168	1	3	11	15	9	2	
173		1	3	4	5	4	1
178			2	3	1	1	

表 2.8　体重とボール投げ　r　0.35

y　x	16	22	25	28	31	34
43		2	2			
48		2	10	5		1
53	1	3	11	7	5	1
58		3	8	13	6	
63	1		2	9	6	5
68			3			1

表 3.7　数字とボール投げ　r　0.037

y　x	19	22	25	28	31	34
48		1		2	1	2
53						
58		3	5			
63						
68		2	3	2	1	1
73		3	13	9	5	2
78						
83		1	7	13	9	2
88						
93	2		4	7	1	
98			2		1	

表 3.9　胸囲とボール投げ　r　0.33

y　x	19	22	25	28	31	34	37
75		1					
78			3	1	1		
81	1	4	10	9	3	2	
84	1	3	13	11	4	1	
87			8	7	4	1	1
90		1	1	5	1	2	
93				1	3		1

3表はハンドボール投げを主体にした相関係数で、全般を見て身長の0.47でありの部、次に体重の0.35、胸囲の0.33でややあり、前表の走り巾跳と同様身体の形態的面においては、相関関係は大体ありと判断される。但し巾跳の場合体重0.5であるのに、此の表では身長0.47と身長との面に出て来ている。教科についてはほとんどなしと判断される。

表 4.1　社会と懸垂屈伸

v	u		−2	−1	0	1	2	f(v) =f(y)	vf(v)	v²f(v)	u	vu
	y	x	4	8	11	14	19					
2	75		2	3	4	2	0	11	22	44	−5	−10
1	80		6	10	12	7	0	35	35	35	−15	−15
0	85		4	12	5	4	2	27	0	0	−12	0
−1	90		7	10	8	3	2	30	−30	30	−17	17
−2	95		1	2	0	0		3	−6	12	−4	8
f(u)=f(x)			20	37	29	16	4	106	21	121	−53	
uf(u)			−40	−37	0	16	8	−53				
u²f(u)			80	37	0	16	16	149	$\bar{u}$=−0.5		Sv=116.8	
v			1	2	12	8	−2	21	$\bar{v}$=0.2		Suv=10.6	
uv			−2	−2	0	8	−4		Su=43		r=0.15	

表 4.2　英語と懸垂　r　0.268

y	x	2	5	8	11	14	17	20
48						1		
53								
58			1	1	1	2		
63			2	5	5	3	1	
68			3	5	3	1	2	1
73		1	2	8	5		2	
78			4	7	5	5	1	
83			4	7	7	1		
88			1	5	4			
93								

表 4.3　国語と懸垂　r　0.18

y	x	2	5	8	11	14	17	20
70			1	1	5	5	1	
75			8	13	10	4	3	
80		1	6	13	10	1	2	
85			2	7	3	1		
90			1	3	1	2		1
95				1				

表 4.4　理科と懸垂　r　0.06

y	x	4	8	11	14	19
64		3	4	1	1	
73		7	18	17	10	3
78		3	10	2	3	1
83		3	4	7	2	
88		1	1	3		
93		1	2			

表 4.5　平均点と懸垂　r　0.12

y	x	2	5	8	11	14	17	20
68				2	2	1		
73			3	6	4	3	3	
78		1	10	17	14	6	1	1
83			4	10	10	2	2	
88			1	2	1			
93				1				

表 4.6 身長と懸垂 r 0.07

y \ x	3	5	8	11	14	17	19
152		2					
158		3	2	4	2		
163		5	11	6	3	4	
168		5	14	13	6	2	1
173		2	8	6	3		
178	1	1	3	1			

表 4.7 数学と懸垂 r 0.15

y \ x	2	5	8	11	14	17	20
48		1	1	2	2		
53							
58		1	3	1	3		
63		1					
68		1	4			3	1
73	1	5	11	11	5		
78							
83	6	5	12	9	3	2	
88							
93		2	6	6			
98		1	1	1		1	

表 4.8 体重と懸垂 r 0.099

y \ x	2	5	8	11	14	17	20
43		2	1	2			
48		6	5	3	1	2	
53		3	10	6	5	2	
58	1	2	15	19	5		
63		4	6	8	2	2	1
68		1	1	2			

表 4.9 胸囲と懸垂 r 0.24

y \ x	2	5	8	11	14	17
75		1				
78			4		1	
81	1	7	9	9	3	2
84		4	14	13	3	
87		3	9	5	2	2
90		1	2	2	3	1
93		1		1	2	1

4 表は懸垂屈伸との相関係数で全般的にほとんど係数上からは関係ありとは思えない。今までの表（1～3）では身体の形態的面に何らかの関係を認めたが、此の表では本当に見当らない。特に一般的に考えた場合体重との関係ありと先入的に思ったが全然なさそうだ（他の表より倍位計算したが）。胸囲が少々あるのではないかと、匂いがする位で、有意性の問題として後の研究課題に残したい。

表 5.1　社会と反復横跳

v	u		−2	−1	0	1	2	f(v)=f(y)	vf(v)	$v^2f(v)$	u	vu
	y	x	28	32	36	40	44					
2	75		0	3	8	2	1	14	28	56	1	2
1	80		1	3	18	12	0	34	34	34	7	7
0	85		0	5	17	3	1	26	0	0	0	0
−1	90		0	3	12	11	1	27	−27	27	10	−10
−2	95		0	0	3	0	0	3	− 6	12		
f(u)=f(x)			1	14	58	28	3	104	29	129	18	− 1
uf(u)			−2	−14	0	28	6	18				
$u^2f(u)$			4	14	0	28	12	58	$\bar{u}$=0.17		Sv=120.83	
v			1	6	16	5	1	29	$\bar{v}$=0.28		Suv=−6.04	
uv			−2	−6	0	5	2	−1	Su=55.94		r=−0.073	

表 5.2　英語と反復横跳　r　0.28

y	x	28	33	38	43
48					
58				6	
63		1	3	8	4
68			3	12	
73			8	8	2
78			7	11	2
83			4	12	1
88			3	6	1
93			1	1	

表 5.3　国語と反復横跳　r　0.075

y	x	28	33	38	43
65				1	
70			3	7	1
75		1	9	23	5
80			9	20	3
85			5	8	
90			3	4	
95				2	

表 5.4　理科と反復横跳　r　0.066

y	x	28	32	36	40	44
64				8	2	
73		1	10	32	14	3
78			2	6	4	1
83			3	5	6	
88				5		
93				2	1	

表 5.5　平均点と反復横跳　r　0.079

y	x	28	33	38	43
68			1	6	
73		1	6	10	4
78			12	27	5
83			8	19	
88			2	2	1
93				1	

表 5.6　身長と反復横跳　r　0.208

y　x	27	33	38	43
152		1	1	
158	1	4	5	1
163		7	17	3
168		13	24	2
173		3	14	1
178		1	3	4

表 5.7　数学と反復横跳　r　0.022

y　x	33	38	43
48	1	6	
53			
58	2	3	2
63	4	6	
68			
73	10	17	5
78			
83	6	21	2
88			
93	5	10	
98	1	2	1

表 5.8　体重と反復横跳　r　0.208

y　x	28	33	38	43
43		3		1
48		5	11	1
53	1	10	13	3
58		6	21	3
63		4	7	2
68			1	2
73			1	

表 5.9　胸囲と反復横跳　r　0.055

y　x	33	38	43
75			
78	1	3	1
81	9	18	4
84	11	20	2
87	9	10	1
90		8	2
93		6	

5表は反復横跳との相関係数であるが、此の表も前表と同様ほとんど関係ありとは考えられない。特に教科面に於ては全然なしと判断される。元来反復横跳は敏捷性にとんだ種目であるが、身体の形態的面に於てもほとんどなく、体重に少々ありと思わせる位で他はない。

表 6.1　社 会 と 垂 直 跳

v	u	−2	−1	0	1	2	f(v)=f(y)	vf(v)	v²f(v)	u	vu
y	x	40	52	57	62	67					
2	73	2	3	2	2	2	11	22	44	−1	−2
1	78	9	11	10	4	1	35	35	35	−23	−23
0	83	5	11	8	3	1	28	0	0	−16	0
−1	88	8	10	8	2	0	28	−28	28	−24	24
−2	93	0	3	0	0	0	3	−6	12	−3	6
f(u)=f(x)		24	38	28	11	4	105	23	119	−67	5
uf(u)		−48	−38	0	11	8	−67				
u²f(u)		96	38	0	11	16	161	$\bar{u}$=−0.64		Sv=113.94	
v		5	1	6	6	5	23	$\bar{v}$=0.22		Suv=19.84	
uv		−10	−1	0	6	10	5	Su=42.88		r=0.28	

表 6.2　英語と垂直跳　r　0.15

y \ x	33	38	43	48	53	58	63	68
48								
58				2		2		1
63		1	1	8	1	6		
68				2	8	1	2	
73				4	9	3	2	1
78				7	9	4	1	
83			3	2	5	7	1	1
88				4	4	1		
93			2					

表 6.3　国語と垂直跳　r　0.13

y \ x	33	38	43	48	53	58	63	68
70				5	3	2	2	
75		1		7	13	10	1	3
80	1		2	11	9	9	2	
85			3	1	4	4	1	
90			3	2	4	1		
95				1	1			

表 6.4　理科と垂直跳　r　0.065

y \ x	39	50	54	58	62	67
64	1	2	4	1		1
73	4	28	13	13	3	1
78		4	4	2	2	1
83	2	6	3	3	1	1
88		2	1	2		
93		1	1			

表 6.5　平均点と垂直跳　r　0.018

y \ x	33	38	43	48	53	58	63	68
68				2	1	2		1
73	1	1	1	7	5	5	1	
78			2	11	18	11	4	2
83			1	5	13	7	1	
88				1	1	1		
93				1				

表 6.6 身長と垂直跳 r 0.24

y \ x	34	43	48.5	53	58	63	68.5
152	1			1			
158		1	5	2	3		
163			13	6	7	1	2
168		1	9	19	9	3	
173		1	3	5	5	2	1
178			1	4	2		1

表 6.7 数学と垂直跳 r 0.24

y \ x	33	38	43	48	53	58	63	68
48					1	2		1
53								
58		1	1	5	1			
63	1		1	4	2	2		
68								
73			1	9	14	6	1	
78								
83			1	4	12	10	4	2
88								
93			2	5	5	3	1	
98					2	1		

表 6.8 体重と垂直跳 r 0.38

y \ x	33	38	43	48	53	58	63	68
43				3	1	1		
48	1			8	6	1		
53			2	12	9	5	2	1
58				6	12	8	2	
63			1	1	7	11	2	1
68				1	1			1
73						1		

表 6.9 胸囲と垂直跳 r 0.22

y \ x	33	38	43	48	53	58	63	68
72								
75						1		
78				2	2			
81	1		1	13	10	6	1	
84			2	9	13	7	2	1
87				5	8	5	2	2
90			1	1	1	6		
93				1	2	1	1	

6表は垂直跳との相関係数であるが、体重の0.38、身長の0.24、胸囲の0.22と、はじめに決めた基準に照らせば、身体の形態的面にややありと思われる。教科面に於ては今までの表とほとんど同じであるが、数学・社会にややありと思われ、有意性の問題として後の研究に残したい。

表 7.1 社 会 と 握 力

v	u		−2	−1	0	1	2	f(v) =f(y)	vf(v)	v²f(v)	v	vu
	y	x	32	37	42	47	52					
2	73		3	3	3	2	2	13	26	52	−3	−6
1	78		4	5	15	6	5	35	35	35	3	3
0	83		1	7	11	6	3	28	0	0	3	0
−1	88		3	9	10	5	1	28	−28	28	−8	8
−2	93		0	3	0	0	0	3	−6	12	−3	6
f(u)=f(x)			11	27	39	19	11	107	27	127	−8	11
uf(u)			−22	−27	0	19	22	−8				
u²f(u)			44	27	0	19	44	134				
v			7	−4	11	5	8	27				
uv			−14	4	0	5	16	11				

$\bar{u}=-0.075$　　$S_v=120.25$

$\bar{v}=0.25$　　$S_{uv}=12$

$S_u=128$　　$r=0.09$

表 7.2 英語と握力　r　0.15

y	x	28	33	38	43	48	53
48					1		
58				3	2		1
63			3	5	4	1	3
68			1	4	3	2	3
73			3	2	9	3	1
78			5	4	11	2	3
83				9	7	2	
88		1		4	1	4	
93				1	1		

表 7.3　国語と握力　r　0.03

y	x	32	37	42	47	52	57
65					1		
70		2	4	2	2	2	
75		3	8	15	6	5	
80		5	9	14	5	2	
85		1	4	5	2	1	1
90			1	2	4		1
95		1					

表 7.4　理科と握力　r　0.01

y	x	31	35	39	43	47	51	55
64		1	2		4		2	0
73		8	13	13	10	8	3	3
78			2	6	4	1	1	1
83			2	5	4	4	1	
88		1	1	2	1	1		
93				2				

表 7.5　平均点と握力　r　0.011

y	x	32	37	42	47	52	57
68			1	2	2		
73		5	3	8	1	4	
78		6	13	13	9	4	2
83		2	6	14	5	1	
88			1	2	2		
93			1				

表 7.6　身長と握力　r　0.34

y　x	32	37	42	47	52	55
152	2					
158	4	1	3	1	2	
163	2	13	9	3		
168	3	9	15	9	4	1
172		5	5	1	2	1
178		1	5	2		

表 7.7　数学と握力　r　0.094

y　x	32	37	42	47	52	57
48			1	3	1	
53						
58	2	2	3		1	
63						
68	3	2	1	2	1	1
73	4	7	13	5	3	
78						
83	2	7	14	5	3	1
88						
93		7	6	2		
98	1		1	2		

表 7.8　体重と握力　r　0.456

y　x	32	37	42	47	52	57
43	4	1				
48	3	6	7		2	
53	2	8	9	7	1	
58	1	8	11	6	4	
63		3	10	5	4	2
68			2		1	
73					1	

表 7.9　胸囲と握力　r　0.54

y　x	32	37	42	47	52	57
75	1					
78		3	1			
81	8	10	11		1	
84	2	7	13	10	2	
87	2	3	9	6	1	1
90		2	2	1	3	
93			1	2	1	1

7表は握力との相関係数を表したものであるが、教科面に於ては前表同様全然匂いがしない。此の表で胸囲の0.54、体重の0.456共にありと思われるし、身長の0.34はややありと判断される。特にこの表で胸囲体重共に0.5の上下にあるのは一考を要せられる。

表 8.1　社 会 と 背 筋 力

	u	−2	−1	1	0	2	f(v)				
v	y　x	100	120	140	160	180	=f(y)	vf(v)	$v^2f(v)$	u	vu
2	75	2	3	4	2	2	13	26	52	−1	−2
1	80	2	12	13	8	2	37	37	37	−4	−4
0	85	2	7	10	8	0	27	0	0	−3	0
−1	90	4	11	10	5	0	30	−30	30	−14	14
−2	95	1	1	1	0	0	3	−6	12	−3	6
f(u)=f(x)		11	34	38	23	4	110	27	131	−25	14
uf(u)		−22	−34	0	23	8	−25	$\bar{u}$=0.23		Sv=124.25	
$u^2f(u)$		44	34	0	23	16	117	$\bar{v}$=0.25		Suv=20.25	
v		0	5	9	7	6	27	Su=111.25		r=0.17	
uv		0	−5	0	7	12	14				

表 8.2　英 語 と 背 筋 力　r 0.06

y　x	95	105	115	125	135	145	155	165	175	185
48					1					
58				1	1	1	1	1		
63	2	1	4	2	2	4			1	1
68	1	1		1	2	4	4	2		
73		1	3	1	5	4	2	3		
78	1	2	3	7	1	2	4	1	1	
83	1		2	7	2	3	2		1	
88	1		2	1	4		1			
93						1		1		

表 8.3　国 語 と 背 筋 力　r 0.053

y　x	95.5	105.5	115.5	125.5	135.5	145.5	155.5	165.5	175.5	193
65							1			
70		2	2	4	2	1	3			
75	2	3	3	2	9	10	5	2	1	2
80	3	1	7	8	6	4	3	2		
85		1	2	4	1	3	2	2		
90			1	1	1	1	1	1		
95				1				1		

表 8.4　理 科 と 背 筋 力　r 0.12

y　x	105	120	140	160	185
64	1	1	5	3	
73	7	26	17	9	3
78		1	6	7	
83	1	4	9	2	1
88	2	1		1	
93		1	1	1	

表 8.5　平 均 点 と 背 筋 力　r 0.162

y　x	95	105	115	125	135	145	155	165	175	185	195
68					1	2	2				
73	2	1	3	3	2	2	3	3	1		
78	2	3	8	8	9	9	5	3	1		
83	1		4	7	5	5	4	1			
88			1		1	1	1	1			
93		1									

表 8.6　身長と背筋力　r 0.33

y　x	98	107	118	128	138	148	158	168	178	195
152	2									
158		3	2	2		1	2	1		
163	1	2	4	7	5	5	4	1		
168		3	7	5	10	6	3	3	3	2
173				2	2	5	3	4	1	
178				1	3	1	2			

表 8.7　数学と背筋力　r 0.062

y　x	97.5	107.5	117.5	127.5	137.5	147.5	157.5	167.5	177.5	187.5	197.5
48				1	2	2	1	1			
53											
58		1	1	3	2		1				
63											
68		1	1	2	1		2	2			1
73	2	1	8	5	4	7	4	3	1		
78											
83		4	3	6	5	7	5	1			1
88											
93	1	1	1	3	5	2	1	1			
98			1		1	1	1				

表 8.8　体重と背筋力　r 0.458

y　x	97.5	107.5	117.5	127.5	137.5	147.5	157.5	167.5	177.5	187.5	197.5
43		2	2	1							
48	2	3	1	3	4	2	1	1			
53	1	2	5	8	3	4	3	1	1		
58			3	5	7	8	4	5			
63		1	1	3	4	4	4	2	3		2
68						2	1				
73							1				

表 8.9　胸囲と背筋力　r 0.5

y　x	97.5	107.5	117.5	127.5	137.5	147.5	157.5	167.5	177.5	187.5
75		1								
78				2	1	1	1			
81	1	6	5	6	7	3	2	1		
84	1	2	5	6	4	10	3	4	1	
87			2	3	4	2	6	1		
90				2	3		2	1	1	1
93					1			2	2	1

8表は背筋力との相関係数を表わしたものであるが、教科面に於ては前表同様殆んど見当らない。然し此の表で特に身体の形態的面に於て、胸囲の0.5、体重の0.458共にありと判断され、又身長の0.33もややありと思われる。2表3表7表と同様にはっきり相関関係があると思われる。形態面で三者共にはっきり出ている係数については、もっと深く分析し解明するのは今後の研究課題としてやって行く心組みである。

昭和39年度に於ける16才の運動能力の本校と全国平均の比較及び各教科・形態との相関

種　目	全国	本校	英語	数学	国語	社会	理科	平均	体重	胸囲	身長
50　m	7.40秒	7.06	0.07	0.027	−0.008	0.015	0.119	0.007	0.29	0.23	0.186
走り巾跳	443.55㎜	418.96	0.069	−0.031	0.022	0.009	0.134	0.107	0.5	0.23	0.45
ハンドボール投	28.25m	26.37	−0.04	−0.037	0.17	0.05	0.027	0.035	0.35	0.33	0.47
懸垂腕屈伸	8.75回	9.20	0.268	0.15	−0.18	0.15	−0.06	0.12	0.099	0.24	0.07
反復横跳	40.50回	37.30	−0.28	0.022	0.075	−0.073	0.066	−0.079	0.208	0.055	−0.002
垂直跳	55.62㎝	58.68	0.15	0.24	−0.13	0.28	0.065	0.018	0.38	0.22	0.24
背筋力	139.09㎏	137.67	0.06	0.062	0.053	0.17	−0.12	0.162	0.458	0.5	0.33
握力	41.74㎏	41.17	0.15	0.094	0.03	0.09	0.01	0.011	0.456	0.54	0.34

おわりに

はじめに一定の基準を定めた中で、0.2 以下は相関なしとしたが、係数の有意性については、まだ色々と研究が残されている。この有意性とは、相関の程度を表わすrの大きさの測定値があまり小さくなく、rが1に近ければ高い相関が考えられ、rがほとんど0に近ければ、相関がないと考えられる。しかし、rが0.2とか0.1とかであると、果して相関があるのかないのか疑問になる。このような場合、相関係数の有意性の検討を必要とすることは当然であるが、今回はそこまで手が伸びなかったので、今後の研究に残したい。特に学科との相関において、大変多くの有意性の検討が必要であることを痛感している。身体の形態については、表1より表8までの注によって、色々相関あることを述べたのではぶき、要するに、体力・運動能力と身体の形態・勉学との相関関係にわたって調査した結果は、当初の予想どおりのもの、予想に反したものなどいろいろあり、これによって多くの示唆を得ることができた。各点についての分析は、年次を追って継続される調査にゆずるが、ここに一応、私の所期の目的とする事項に、多くの解明や、実証を得られたことは収穫であった。

参考文献

スポーツテスト　文部省体育局
体育学研究法　日本体育学会編
初等数理統計学　森口繁一著
朝日新聞記事データー
航空高専紀要　No.1

高感度核四極共鳴吸収測定器の試作

酒　見　次　郎

Construction of a High Sensitive Measuring Apparatus of Nuclear Quadrupole Resonance

Jiro Sakami

The aim of this work is to construct a sensitive detector of NQR absorption of iodine nuclei whose frequencies range from about 250 Mc/s to 670 Mc/s.

The detector was a super-regenerative type with light house tubes 2C40. The frequency was modulated with a tuning fork oscillator of 265 c/s and swept between the above-mentioned region by changing length of parallel lines automatically. In order to suppress noises we adopted a method of a lock-in amplifier and recorder.

The signal to noise ratio was improved by about one order of magnitude.

§1 まえがき

核四極共鳴周波数は、数 Mc から 1000Mc までの範囲にわたっていて、それに使用される発振器は周波数に応じてそれぞれ適当なものが選ばれる。一般に数 Mc から 20Mc 位まではＬＣ共振の再生発振器、20Mcから50Mc 位までは ＬＣ共振の超再生発振器、 50Ｍｃ から 1000 Mc 位まではレッヘル線型超再生発振器が用いられている。

ここでは沃素核について測定をするために、沃素の共鳴周波数が332Mc と 644Mc（室温）の二つであることが知られている[1) 2) 3)]ので、周波数が250Mcから670Mc 位まで変えられるような超再生発振器を作った。これ位の周波数になるとコイルとコンデンサーの共振回路では発振しないので、レッヘル線を共振回路に使う。回路の調整には可成りの根気がいるもので、グリッド抵抗や、断続用発振器の発振周波数、発振電圧などを変えて最高感度の点を見出すのであるが、感度に主として影響するのは断続用発振器の周波数と電圧なので先ずこれらと感度との関係を調べた。

新しい試料について吸収線を探すときには、吸収エネルギーは極めて小さいのであるから、できるだけ広い範囲にわたって感度の高い検出器が要望される。そのためここでは、オシロスコープによらないで、感度のよい、狭帯域増巾器と記録計による方法をとった。これによって、オシロスコープによるものよりおよそ一けた感度を上げることができた。

また、新たに化合物の吸収線を見つけるとき、少くもどれ位の試料が要るかを知っておくために、沃素の量と吸収強度との関係も調べた。

§2 装　　置

全体の装置図は、図1に示してある。

試料は主発振器のプレート側レッヘル線の一部を変形した共振回路のコイルの中に入れ、レッヘル線の近くにおかれた振動板を低周波で振動させて発振周波数を周期的に変調する。主発振器の発振周波数は、モーターの回転でゆっくりとレッヘル線の上を動くショートバーによって連続的に変わり、周波数が共鳴周波数に一致すると吸収が起って発振勢力が弱まる。これを検波増巾し、陰極線オシロスコープの縦軸に入れ、横軸を変調器に同期させると吸収のあるところがくぼみとして見られる。記録計を用いるときには狭帯域増巾器、位相検波器を通して記録させると吸収曲線が画かれる。

次に記録計を用いるときの装置の概要を述べる。

1）主発振器

周波数が高いので共振回路にはレッヘル線を用い、板極管２Ｃ４０によって発振させる。発振周波数を変えるには、レッヘル線の上でショートバーを動かし線の長さを変えればよい。これによって約 250Ｍｃ から 670Ｍｃ まで変えることができた。記録計で画かせる時には、ショートバーを極めてゆっくりと滑らせることが必要で、始め移行速度を変えられるように標準 10rpm の平衡電

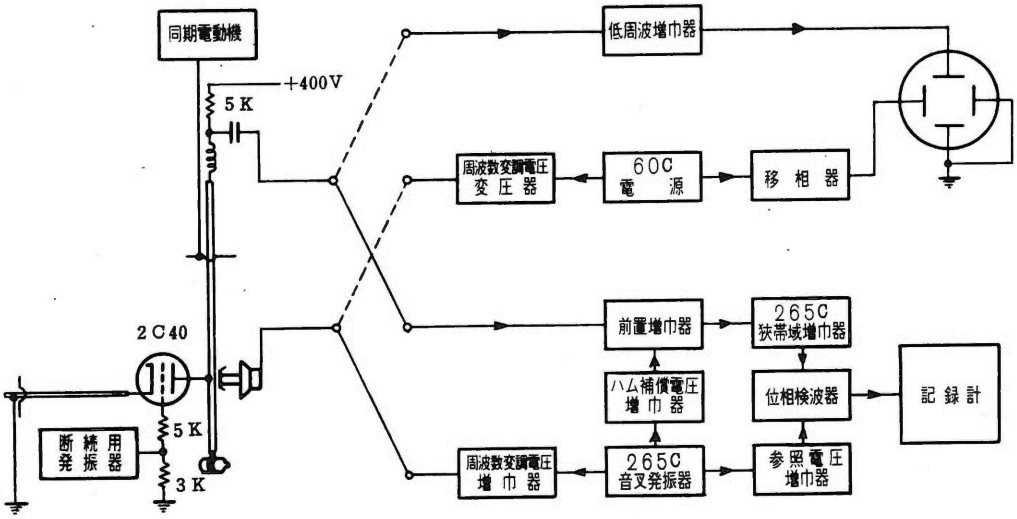


図1 装置の系統図

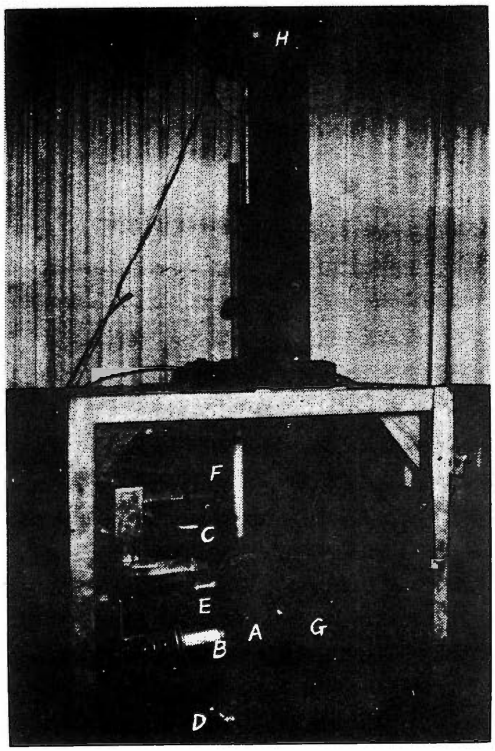


写真1 主発振器

A：2C4O　B：振動板　C：ショートバー
D：試料　E：微調整用アルミ板
F：プレート側レッヘル線　G：カソード側レッヘル線　H：同期電動機

動機を用いたが、これでは早すぎて安定した吸収曲線が得られなかった。後に7.5rph の同期電動機に換えたら、これによって始めて正確な曲線を画かせることができるようになった。また、ショートバーとレッヘル線との間の接触抵抗は雑音のもとになるが、これを取除くのにはコンタクトクリーナーが有効であった。周波数を僅かに変えるためには三角形のアルミ板を円柱状にしレッヘル線の近くで廻してレッヘル線間の容量を変える。周波数変調を行うためには、スピーカーのコーンに紙筒をつけてその先端に軽いアルミ板をつけ、これをレッヘル線の前で振動させて容量を変化させる。カソード側レッヘル線には中空の銅管を用い、その中にヒーター線を通した。これはヒーター線に高周波が乗り干渉するのを避けるためである。外来電波の干渉を避けるために発振器全体をシールド箱に入れてあるが、その扉は少し開いておく方が感度はよいようであった。2C4Oのグリッド抵抗は感度に大きな影響をもつもので、330Mc 附近では図1のように 5kΩ、3kΩ のとき最もよかった。

この回路では2C4Oの検波作用を利用できるので別に検波器はいらない。写真1は主発振器を示す。

2）狭帯域増巾器

増巾器の最後の限界は雑音によって制限される。雑音は増巾帯域巾に比例するから雑音を少くするには帯域巾を狭くすればよいというのが狭帯域増巾器の原理である。この増巾器の主要部分をなすのは twin T で、その抵抗、コンデンサーの容量をそれぞれ R, C とすれば $\omega=1/RC$ の関係があるから 265c に対してはそれぞれ 300kΩ、0.002μF とすればよい。これによって 265c 附近の信号だけが増巾される。

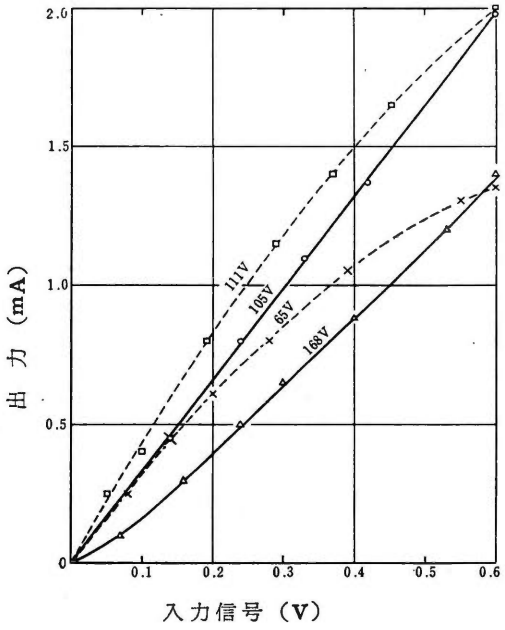


図2　位相検波器の特性曲線
曲線上の数値は参照電圧を示し、縦軸は記録計（内抵抗 4k Ω）の針のふれを示す

3）位相検波器

これは、Schuster によって報告された安定度の高い位相検波器で、入力の位相が外から加えられている参照電圧の位相と丁度合っているときは増巾され大きな出力となって記録計の針を振らせるが、位相が合っていないときは出力は小となり、特に位相が $\pi/2$ ずれているときは出力は0となるようにしてある。そこで予めオシロスコープによって信号の位相に参照電圧の位相を合わせておけば、吸収による信号は増巾されて大きく針を振らせることになるが、雑音は位相が一定でなくしたがって参照電圧の位相と合わないことが多いので打消されて非常に小さな出力にしかならない。

位相検波器の動作は、参照電圧によって相当に変る。図2はその特性曲線でこの曲線の勾配が大きい程増巾率は大となり、また直線に近い程ひずみが少い。したがって図から参照電圧が105Vのとき最もよいことがわかる。

4）音さ発振器

変調電圧、参照電圧、ハム補償電圧の供給源として安定性のよい音叉発振器を用いた。発振周波数は 265c で周波数確度は±0.04%である。 265c には電源周波数の整数倍でないということのほか特別の意味はない。

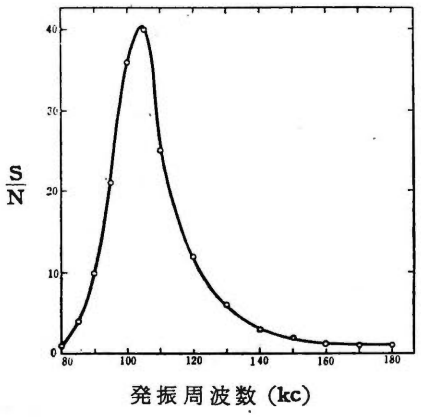


図3　断続用発振器の周波数と感度との関係
発振電圧は31Vである

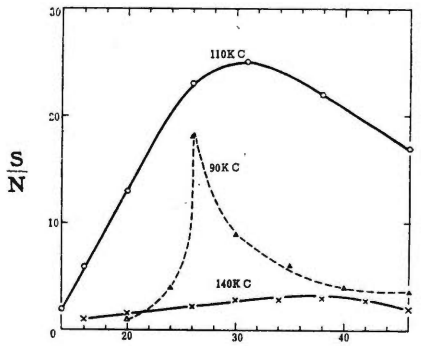


図4　断続用発振器の電圧と感度との関係
曲線上の数値は発振周波数を示す

§3 結　果

1）断続用発振器の周波数、電圧と感度との関係

この種の測定器で最も調整の難しいのは断続用発振器のところで、ここがよく調整してないと検出できない。装置を作り終って沃素の吸収線を出すまでに一月以上かかったのは作った断続用発振器の周波数範囲が高すぎてその中に適当な周波数がなかったことによる。感度のよい点を見出すにはオシロスコープを用い、超再生特有の雑音を目安として別に用意されたレッヘル線による吸収を受けて周波数、電圧を調整しながら最良の点を求める。

図3、図4は、沃素の 332Mc の吸収線について、それぞれ周波数、電圧と感度との関係を記録計によって求めたものである。これによると、105Kc、31V 附近に最高の感度を与える点があり、周波数がその点から少しずれると感度は急にわるくなることがわかる。

2）オシロスコープによる感度との比較

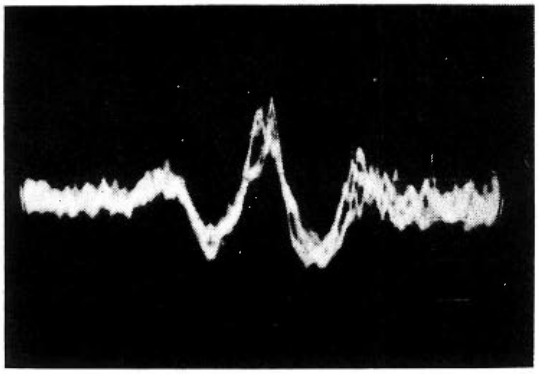


写真2　オシロスコープによる沃素核四極共鳴吸収
振動板とレッヘル線との間隔は2mmである

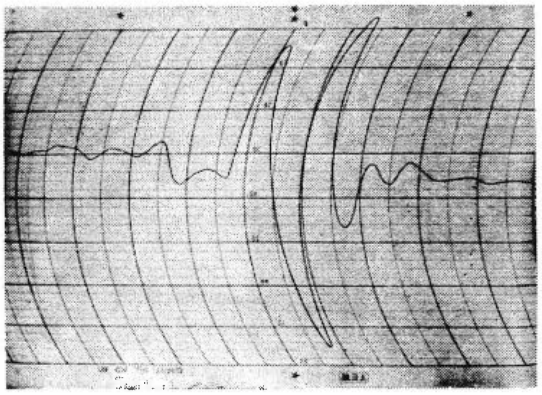


写真3　記録計による沃素核四極共鳴吸収
記録計の送りの速度は20mm/minである

写真2は、沃素の332Mcの吸収線について、それをオシロスコープで見たもので、変調には60cの電源電圧をスライダックで落したものを用い、また吸収を一つの画面におさめるために振動板をレッヘル線に十分近づけて変調度を大きくしてある。S/Nは約4になっている。

写真3は、写真2と同じ吸収を記録計で画かせたもので、変調には265cの音叉発振器からの出力を増巾して用い、また変調度は小さくしてある。更に小さくすれば曲線は微分されたものになる。S/Nは約40でオシロスコープによるものの10倍位になっている。

3）試料の量と吸収強度との関係

試料中の核の数をNとすれば、飽和現象が起らない限り吸収強度は、$N\mu^2\nu/T$ に比例するから、新しく化合物についてその吸収を探そうとするとき、必要な試料のモル数を知るためには、予め沃素の量と吸収強度との関係

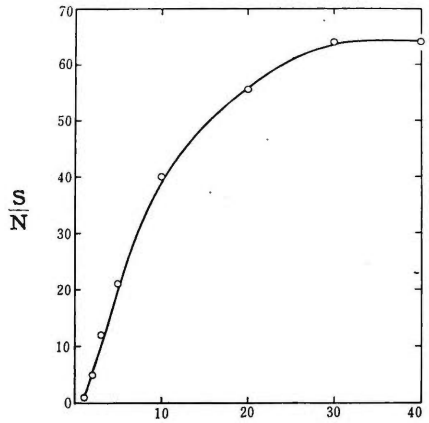


図5　沃素の量と吸収の強度との関係

を調べておくとよい。これを調べるために40g、30g、20g、……の沃素を同じ16ccの容積をもつガラス管に入れ、隙間のできるときは石膏を入れてよく混ぜ合わせ沃素が管内で一様に分布するようにして後封じ込めた。

図5は、このような試料について吸収強度を調べたものである。これによると、この測定器で化合物の吸収を検出するには、その中に2g以上の沃素が含まれていればよいとゆうことになる。30gで飽和しているのは、それ以上になるとコイルの両端からはみ出る部分ができることによると思われる。

§4　あ と が き

最高感度を与える断続用発振器の発振周波数は、主発振器の発振周波数によって著しく異る。したがって後者の周波数変化に対する前者の最適周波数の関係も調べたい。また、レッヘル線による吸収のような比較的強い吸収に対する最適周波数は、必ずしも核四極共鳴吸収のような微弱な吸収に対する最適周波数にはなっていないのではないかと思われる。これらの点を検討した上で、新しい試料について吸収線を出したいと思っている。

この実験には東京教育大学小島教授の御指導を受けた。心から感謝の意を表わすものである。

文　献

1）H. G. Dehmelt : Z. Physik 130 (1951) 346
2）R. V. Pound : Phys. Rev. 82 (1951) 343
3）T. Kamei : J. Phys. Soc. Japan 7 (1952) 649

切削加工における傾きの角計算

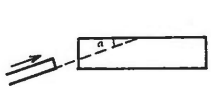
永　田　達　郎

Calculation of Angle in Cutting with Grinder

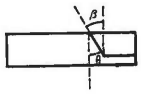
Tatsuro　Nagata

In cutting specimens with the cutting grinder and so on, instead of a parallel with the horizontal plane, some of the specimens is holden on the plane sloped by some angle with the horizontal plane and cut with the cutting grinder. In this paper, the tormulae, which evaluate the angle, are derived, the angle between the horizontal and the cut plane, and the vertical angle of the triangle of the plane cut, etc.

§1．問題の出所と問題点



（図1）



（図2）

（図3）

上図(1)のように水平に置かれた材料を矢印の方向に削るとき、水平とのなす角をαとする。そのバイトの刃先きが、図(2)のように面（水平とαをなす平面）と（$90°-\beta$）の角をなしている。更に刃先きが面（水平とαをなす平面）の中央線と（$90°-\gamma$）の角のなしているとしょう。こゝで言う中央線とは水平面と、水平とαをなす平面との交線のことである。

水平面を平面Ⅰ、水平とαをなす平面を平面Ⅱ、削られて出来る三角形状の平面を平面Ⅲとする。

問題はα、β、γが与えられたとき

①平面Ⅲと平面Ⅰとのなす角（$\frac{\pi}{2}-\theta$）を求めること。

平面Ⅲと平面Ⅱとは（$\frac{\pi}{2}-\beta$）の角をなし、平面Ⅰと平面Ⅱとはαの角をなしている。

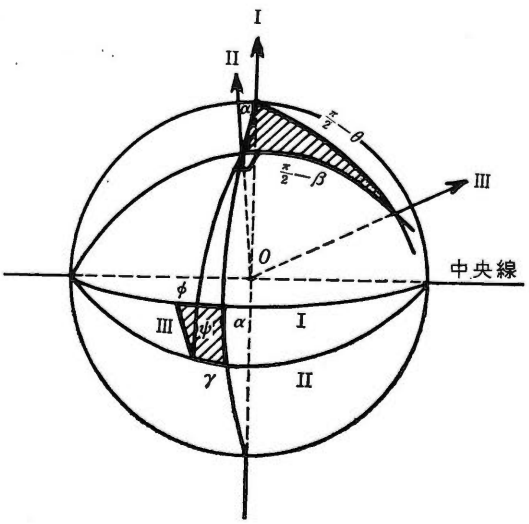
②平面Ⅰと平面Ⅲとの交線が平面Ⅰ上で、中央線とどんな角（$\frac{\pi}{2}-\phi$）をなして交わっているか。

③平面Ⅲの三角形の頂角ψはどれだけか。

という以上の3つの角度を求めてみょう。

§2　解　法

3つの平面の交点をOとし、Oを中心にして、半径が1の球面を考えると、次図(4)のようになる。

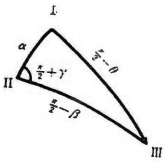


（図4）

平面Ⅰ、Ⅱ、ⅢのO点に於いて立てた法線にも同じくⅠ、Ⅱ、Ⅲと矢印のところに書いてある。図の作り方から容易にわかるように、Oに於いての2本の線のなす角は、球面上では、その2本の線の端点（球面との交点）を結ぶ大円の孤の長さに等しい。

(i) 上の方にある球面三角形について調べる。

図(5) に必要な数値を入れて再揚してある。



（図5）

α、β、γよりθを求める式を作ればよい。

よく知られた球面三角の公式より直ちに次の式が得られる。

$$\cos\left(\frac{\pi}{2}-\theta\right)=\cos\alpha\cos\left(\frac{\pi}{2}-\beta\right)+\sin\alpha\sin\left(\frac{\pi}{2}-\beta\right)\cos\left(\frac{\pi}{2}+\gamma\right),$$

$$\sin\theta=\cos\alpha\sin\beta-\sin\alpha\cos\beta\sin\gamma.$$

(1)によってθの値は直ちに求められる。

(ii) 下方の四角形について調べる。

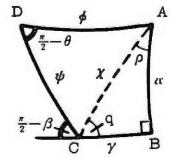
図(6)に再揚してあるように、AとCとを結んで計算することにする。こゝにAとCとを結ぶということは勿論球面上で行うことだから、AとCを通る大円の孤で結ぶことを指す。

球面三角形ABCで(i)と同様に球面三角の公式より

$$\cos x=\cos\alpha\cos\gamma+\sin\alpha\sin\gamma\cos\frac{\pi}{2}$$

$$\therefore\cos x=\cos\alpha\cos\gamma \qquad (2)$$

をうる。(2)式によって、αとγが与えてあればxが求められる。



（図6）

次に同じ球面三角形ABCについて次の式が成り立つ。

$$\sin x\cos p=\cos\gamma\cos\alpha-\sin\gamma\cos\alpha\cos\frac{\pi}{2}$$

$$\therefore\sin x\cos p=\cos\gamma\sin\alpha$$

$$\cos p=\frac{\cos\gamma\sin\alpha}{\sin x} \qquad (3)$$

(2)でxが求められるから、(3)よりpが求まる。

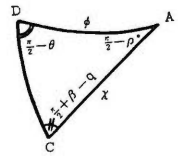
又、同様にして同ABCより

$$\sin x\cos q=\cos\alpha\cos\gamma-\sin\alpha\cos\gamma\cos\frac{\pi}{2}$$

$$\therefore\sin x\cos q=\cos\alpha\sin\gamma$$

$$\therefore\cos q=\frac{\cos\alpha\sin\gamma}{\sin x} \qquad (4)$$

(2)でxが求められるから、(3)と同じく、(4)よりqが求まる。



（図7）

上図より

$$\cos\left(\frac{\pi}{2}-\theta\right)=-\cos\left(\frac{\pi}{2}+\beta-q\right)\cos\left(\frac{\pi}{2}-p\right)+\sin\left(\frac{\pi}{2}+\beta-q\right)\sin\left(\frac{\pi}{2}-p\right)\cos x$$

$$\therefore\sin\theta=-\sin(q-\beta)\sin p+\cos(q-\beta)\cos p\cos x \qquad (5)$$

(2), (3), (4)を(5)に入れると、α、β、γよりθが求まるが、この式は(1)と同じ値を与える筈である。しかし(5)でθを求めるのは計算が回りくどいから、計算値に大きな誤差が入ってくるのは明らかである。従ってθは(1)で求める方が誤差が小さくて正確である。

又図(7)より次の(6)、(7)式が得られる。

$$\cos\left(\frac{\pi}{2}+\beta-q\right)=-\cos\left(\frac{\pi}{2}-p\right)\cos\left(\frac{\pi}{2}-\theta\right)+\sin\left(\frac{\pi}{2}-p\right)\sin\left(\frac{\pi}{2}-\theta\right)\cos\phi$$

$$\therefore\sin(p-\beta)=-\sin p\sin\theta+\cos p\cos\theta\cos\phi$$

$$\therefore\cos\phi=\frac{\sin(q-\beta)+\sin p\sin\theta}{\cos p\cos\theta} \qquad (6)$$

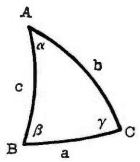
$$\cos\left(\frac{\pi}{2}-p\right)=-\cos\left(\frac{\pi}{2}-\theta\right)\cos\left(\frac{\pi}{2}+\beta-q\right)+\sin\left(\frac{\pi}{2}-\theta\right)\sin\left(\frac{\pi}{2}+\beta-q\right)\cos\psi$$

$$\therefore\sin p=-\sin\theta\sin(q-\beta)+\cos\theta\cos(q-\beta)\cos\psi$$

$$\therefore\cos\psi=\frac{\cos p+\sin\theta\sin(q-\beta)}{\cos\theta\cos(q-\beta)} \qquad (7)$$

註 1.

以上の式を出すのに球面三角法の公式を利用した。



（図8）

$$\cos a=\cos\ell\ \cos c+\sin\ell\ \sin c\ \cos\alpha$$

$$\cos\alpha=-\cos\beta\ \cos\gamma+\sin\beta\ \sin\gamma\ \cos a$$

$$\sin\alpha\ \cos\beta=\cos\ell\ \sin c-\sin\ell\ \cos c\ \cos\alpha$$

註 2.

式(1)と(5)とが同一であることの証明。

$0<x<\pi \quad \therefore \sin x>0$

$$\therefore \sin x=\sqrt{1-\cos^2 x}=\sqrt{1-\cos^2\alpha\cos^2\gamma}$$

$0<p<\pi \quad \therefore \sin p>0$

$$\therefore \sin p=\sqrt{1-\cos^2 p}=\sqrt{1-\frac{\sin^2\alpha\ \cos^2\gamma}{\sin^2 x}}$$

$$=\sqrt{1-\frac{(1-\cos^2\alpha)\cos^2\gamma}{1-\cos^2\alpha\ \cos^2\gamma}}$$

$$=\sqrt{\frac{1-\cos^2\gamma}{1-\cos^2\alpha\ \cos^2\gamma}}$$

$$=\frac{\sin\gamma}{\sqrt{1-\cos^2\alpha\ \cos^2\gamma}}=\frac{\sin\gamma}{\sin x}$$

$0<q<\pi \quad \therefore \sin q<0$

$$\sin q=\sqrt{1-\cos^2 q}=\sqrt{1-\frac{\cos^2\alpha\ \sin^2\gamma}{\sin^2 x}}$$

$$=\sqrt{1-\frac{\cos^2\alpha\ (1-\cos^2\gamma)}{1-\cos^2\alpha\ \cos^2\gamma}}$$

$$=\sqrt{\frac{1-\cos^2\alpha}{1-\cos^2\alpha\cos^2\gamma}}$$

$$=\frac{\sin\alpha}{\sqrt{1-\cos^2\alpha\ \cos^2\gamma}}=\frac{\sin\alpha}{\sin x}$$

(5)より

$$\sin\theta=-\sin(q-\beta)\sin p+\cos(q-\beta)\cos p\ \cos x$$

$$=-\sin q\ \cos\beta\ \sin p+\cos q\ \sin\beta\ \sin p$$

$$+\cos q\ \cos\beta\ \cos p\ \cos x$$

$$+\sin q\ \sin\beta\ \cos p\ \cos x$$

$$=-\frac{\sin\alpha}{\sin x}\cos\beta\frac{\sin\gamma}{\sin x}$$

$$+\frac{\cos\alpha\ \sin\gamma}{\sin x}\sin\beta\frac{\sin\gamma}{\sin x}$$

$$+\frac{\cos\alpha\ \sin\gamma}{\sin x}\cos\beta\frac{\cos\gamma\ \sin\alpha}{\sin x}\cos x$$

$$+\frac{\sin\alpha}{\sin x}\sin\beta\frac{\sin\alpha\ \cos\gamma}{\sin x}\cos x$$

$$=-\frac{\sin\alpha\ \cos\beta\ \sin\gamma}{\sin^2 x}+\frac{\cos\alpha\ \sin\beta\sin^2\gamma}{\sin^2 x}$$

$$+\frac{\sin\alpha\ \cos\alpha\ \cos\beta\ \sin\gamma\ \cos\gamma\ \cos x}{\sin^2 x}$$

$$+\frac{\sin^2\alpha\sin\beta\ \cos\beta\cos x}{\sin^2 x}$$

$$=\frac{\cos\alpha\ \sin\beta\ (\sin^2\gamma+\sin^2\alpha\ \cos\gamma\frac{\cos x}{\cos\alpha})}{\sin^2 x}$$

$$-\frac{\sin\alpha\ \cos\beta\ \sin\gamma\ (1-\cos\alpha\ \cos\gamma\ \cos x)}{\sin^2 x}$$

$$=\frac{\cos\alpha\ \sin\beta\ (\sin^2\gamma+\sin^2\alpha\cos^2\gamma)}{\sin^2 x}$$

$$-\frac{\sin\alpha\ \cos\beta\ \sin\gamma\ (1-\cos x)}{\sin^2 x}$$

$$=\frac{\cos\alpha\ \sin\beta\ \{(1-\cos^2\gamma)+(-\cos^2\alpha)\cos^2\gamma\}}{\sin^2 x}$$

$$-\sin\alpha\ \cos\beta\ \sin\gamma$$

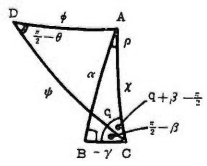
$$=\frac{\cos\alpha\ \sin\beta\ (1-\cos^2\alpha\ \cos^2\gamma)}{\sin^2 x}$$

$$-\sin\alpha\cos\beta\ \sin\gamma$$

$$=\cos\alpha\ \sin\beta-\sin\alpha\ \cos\beta\ \sin\gamma$$

註 3.

尚 $\gamma<0$ のときには、次の図(9)のようになり、



（図9）

θを与える(1)の式と、xを与える(2)の式はそのまゝ変更はないが、p、q、ϕ、ψを与える(3)、(4)、(6)、(7)は以下のように変化する。

$$\sin x\cos p=\cos\gamma\sin\alpha-\sin\gamma\cos\alpha\cos\frac{\pi}{2}$$

$$\therefore\sin x\cos p=\cos\gamma\sin\alpha$$

$$\therefore\cos p=\frac{\cos\gamma\sin\alpha}{\sin x}=\frac{\cos(-\gamma)\sin\alpha}{\sin x}\quad(3)'$$

即ちpの式は変化しない。但しpの値は負の値をとるべきである。このように cos より角を求めるのは0° の近くでは十を取るべきか、一をとるべきかの判断をするのが困難となり好ましい求め方とは言えない。

$$\sin x\cos q=\cos\alpha\sin\gamma-\sin\alpha\cos\gamma\cos\frac{\pi}{2}$$

$$\therefore\sin x\cos q=\cos\alpha\sin\gamma$$

$$\therefore\cos q=\frac{\cos\alpha\sin\gamma}{\sin x}=-\frac{\cos\alpha\sin(-\gamma)}{\sin x}\quad(4)'$$

即ちqのときは絶対値を求めて計算すればよい。そして cos$q$ は負になるから、qは第Ⅱ象限の角（90°＜ q ＜180。）で求めればよい。これらのことを念頭に置いておけば、p、qとも前出の(3)、(4)式を使ってよい。

$$\cos(q+\beta-\frac{\pi}{2})=-\cos(\frac{\pi}{2}-\theta)\cos(\frac{\pi}{2}+p)$$

$$+\sin(\frac{\pi}{2}-\theta)\sin(\frac{\pi}{2}+p)\cos\phi$$

$$\therefore\sin(p+\beta)=\sin\theta\sin p+\cos\theta\cos p\cos\phi$$

$$\therefore\cos\phi=\frac{\sin(q+\beta)-\sin\theta\sin p}{\cos\theta\cos p}\quad(6)'$$

(6)式とくらべると符号が変化していることがわかる。

$$\cos(p+\frac{\pi}{2})=-\cos(\frac{\pi}{2}-\theta)\cos(q+\beta-\frac{\pi}{2})$$

$$+\sin(\frac{\pi}{2}-\theta)\sin(q+\beta-\frac{\pi}{2})\cos\psi$$

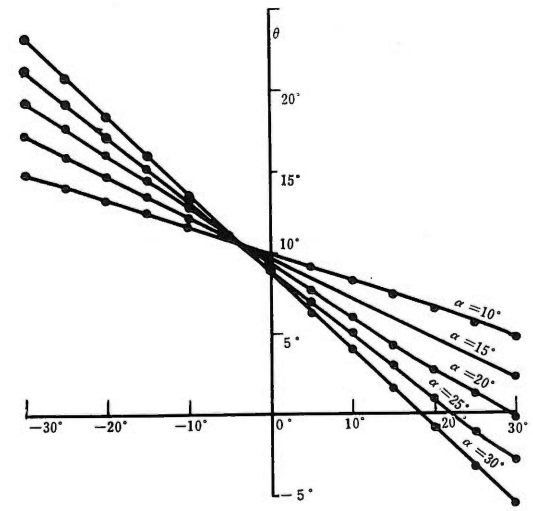
$$\therefore-\sin p=-\sin\theta\sin(q+\beta)+\cos q\cos(q+\beta)\cos\psi$$

$$\therefore\cos\psi=\frac{-\sin p+\sin\theta\sin(q+\beta)}{\cos\theta\cos(q+\beta)}\quad(7)'$$

(7)式とくらべると、こゝでも符号が変化している。

(6)′、(7)′の符号の変化も、p、qに対する注意を守れば、前出の(6)、(7)そのまゝでよい。

こゝで与えた式より角を求めると、その精度は余り良いとは言えない。普通の教科書にある程度の三角関数表を利用して計算してみると、非常に不正確な値が得られる。もっと詳し数表を利用して計算してみたが、それでも満足のいく値にはならなかった。結果を1つ2つグラフに示してある。特に角度が少さい時に計算の不正確さが甚だしくなる。僅かの違いが、式は比の形（不定形に近い）で与えられる為に、結果に重大な違いを与えることになってくる。従って小さい角のときの値は余り信用出来ない。



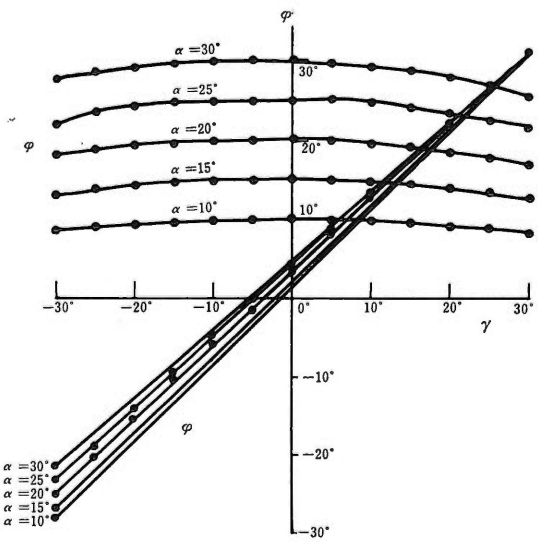


表. θ （ α は5°～30°， β は0°～30°． γ は−30°～30°）

(1) α =5°のとき

β=	0°	5°	10°	15°	20°	25°	30°
γ= −30°	2°30′	7°29′	12°28′	17°28′	22°26′	27°25′	32°24′
−25°	2°07′	7°06′	12°04′	17°04′	22°02′	27°01′	32°00′
−20°	1°43′	6°42′	11°40′	16°40′	21°38′	26°37′	31°36′
−15°	1°18′	6°17′	11°15′	16°14′	21°13′	26°12′	31°10′
−10°	0°52′	5°51′	10°49′	15°49′	20°47′	26°00′	30°45′
− 5°	0°26′	5°25′	10°24′	15°22′	20°21′	25°20′	30°18′
0°	0°	4°59′	9°57′	14°56′	19°55′	24°54′	29°52′
5°	−0°26′	4°33′	9°31′	14°30′	19°29′	24°28′	29°26′
10°	−0°52′	4°07′	9°05′	14°04′	19°03′	23°45′	29°01′
15°	−1°18′	3°42′	8°40′	13°39′	18°38′	23°37′	28°36′
20°	−1°43′	3°17′	8°15′	13°14′	18°13′	23°12′	28°11′
25°	−2°07′	2°53′	7°51′	12°50′	17°49′	22°48′	27°47′
30°	−2°30′	2°29′	7°28′	12°27′	17°26′	22°25′	27°24′

(2) α =10°のとき

β=	0°	5°	10°	15°	20°	25°	30°
γ= −30°	4°59′	9°56′	14°52′	19°48′	24°44′	29°40′	34°35′
−25°	4°13′	9°09′	14°05′	19°01′	23°56′	28°52′	33°46′
−20°	3°24′	8°20′	13°16′	18°12′	23°07′	28°02′	32°33′
−15°	2°35′	7°30′	12°26′	17°21′	22°16′	27°11′	32°06′
−10°	1°44′	6°40′	11°35′	16°30′	21°25′	26°20′	31°14′
− 5°	0°52′	5°48′	10 43′	15°38′	20°33′	25°28′	30°22′
0°	0°	4°55′	9°51′	14°46′	19°41′	24°36′	29°30′
5°	−0°52′	4°03′	8°59′	13°54′	18°49′	23°44′	28°38′
10°	−1°44′	3°12′	8°14′	13°03′	17°58′	22°53′	27°48′
15°	−2°35′	2°21′	7°17′	12°13′	17°08′	22°03′	26°586′
20°	−3°24′	1°32′	6°28′	11°24′	16°19′	21°15′	26°10′
25°	−4°13	0°44′	5°36′	10°36′	15°32′	20°28′	25°24′
30°	−4°59′	−0°02′	4°54′	9°51′	14°47′	19°44′	24°39′

(3) $\alpha=15°$のとき

$\gamma=$ \ $\beta=$	0°	5°	10°	15°	20°	25°	30°
−30°	7°26′	12°18′	17°10′	22°02′	26°52′	31°42′	36°31′
−25°	6°17′	11°08′	15°59′	20°50′	25°40′	30°29′	35°17′
−20°	5°05′	9°55′	14°46′	19°36′	24°25′	29°14′	34°02′
−15°	3°50′	8°41′	13°31′	18°21′	23°09′	27°58′	32°45′
−10°	2°34′	7°25′	12°14′	17°04′	21°52′	26°40	31°28′
− 5°	1°18′	6°08′	10°57′	15°46′	20°35′	25°23′	30°10′
0°	0°	4°50′	9°39′	14°29′	19°17′	24°06′	28°53′
5°	−1°18′	3°32′	8°22′	13°11′	18°00′	22°49′	27°36′
10°	−2°34′	2°16′	7°05′	11°56′	16°45′	21°34′	26°22′
15°	−3°50′	1°00′	5°50′	10°41′	15°30′	20°20′	25°09′
20°	−5°05′	−0°14′	4°37′	9°28′	14°18′	19°08′	23°58′
25°	−6°17′	−1°25′	3°27′	8°18′	13°09′	18°00′	22°51′
30°	−7°26′	−2°34′	2°18′	7°11′	12°03′	16°55′	21°46′

(4) $\alpha=20°$のとき

$\gamma=$ \ $\beta=$	0°	5°	10°	15°	20°	25°	30°
−30°	9°51′	14°37′	19°22′	23°49′	28°49′	33°31′	38°10′
−25°	8°19′	13°03′	17°47′	22°30′	27°13′	31°53′	36°31′
−20°	6°43′	11°27′	16°09′	20°52′	25°33′	30°13′	34°50′
−15°	5°05′	9°48′	14°30′	19°11′	23°52′	28°31′	33°08′
−10°	3°24′	8°07′	12°48′	17°29′	22°10′	26°48′	31°25′
− 5°	1°43′	6°25′	11°06′	15°47′	20°27′	25°06′	29°43′
0°	0°	4°42′	9°23′	14°05′	18°45′	23°24	28°02′
5°	−1°43′	3°00′	7°41′	12°23′	17°03′	21°43′	26°22′
10°	−3°24′	1°18′	6°00′	10°43′	15°24′	20°05′	24°44′
15°	−5°05′	−0°21′	4°21′	9°05′	13°47′	18°28′	23°09′
20°	−6°43′	−1°59′	2°45′	7°29′	12°12′	16°56′	21°38′
25°	−8°19′	−3°33′	1°11′	5°57′	10°42′	15°26′	20°10′
30°	−9°51′	−5°04′	−0°18′	4°29′	9°15′	14°01′	18°33′

(5) α =のとき

γ=	β= 0°	5°	10°	15°	20°	25°	30°
−30°	12°21′	16°50′	21°26′	26°01′	30°34′	35°04′	39°31′
−25°	10°17′	14°53′	19°28′	24°11′	28°33′	33°01′	37°26′
−20°	8°19′	12°53′	17°26′	21°59′	26°29′	30°56′	35°20′
−15°	6°17′	10°50′	15°22′	19°53′	24°23′	28°50′	33°14′
−10°	4°12′	8°45′	13°16′	17°47′	22°16′	26°43′	31°07′
− 5°	2°07′	6°37′	11°10′	15°41′	20°10′	24°37′	29°01′
0°	0°	4°32′	9°03′	13°34′	18°04′	22°31′	26°57′
5°	−2°07′	2°26′	6°57′	11°29′	16°00′	20°28′	24°55′
10°	−4°12′	0°21′	4°53′	9°25′	13°57′	18°27′	22°56′
15°	−6°17′	−1°43′	2°51′	7°25′	11°58′	16°30′	21°01′
20°	−8°19′	−3°43′	0°52′	5°28′	10°02′	14°36′	19°09′
25°	−10°17′	−5°40′	−1°19′	3°25′	8°11′	12°47′	17°22′
30°	−12°12′	−7°33′	−2°55′	1°45′	6°24′	11°03′	15°41′

(6) α =30°のとき

γ=	β= 0°	5°	10°	15°	20°	25°	30°
−30°	14°29′	18°56′	23°22′	27°45′	32°05′	36°20′	40°30′
−25°	12°12′	16°37′	21°00′	25°21′	29°39′	33°53′	38°01′
−20°	9°51′	14°14′	18°30′	22°55′	27°11′	31°24′	35°32′
−15°	7°26′	11°48′	16°08′	20°26′	24°42′	28°54′	33°02′
−10°	4°59′	9°19′	13°38′	17°56′	22°12′	26°24′	30°33′
− 5°	2°30′	5°40′	11°09′	15°26′	19°43′	23°55′	28°05′
0°	0°	4°20′	8°39′	12°57′	17°14′	21°28′	25°40′
5°	−2°30′	1°50′	6°10′	10°29′	14°47′	19°03′	23°17′
10°	−4°59′	−0°38′	3°43′	8°04′	12°24′	16°42′	20°58′
15°	−7°26′	−3°03′	1°19′	5°41′	10°03′	14°24′	18°43′
20°	−9°51′	−5°27′	−1°02′	3°23′	7°47′	12°11′	16°33′
25°	−12°12′	−7°46′	−3°19′	1°09′	5°36′	10°03′	14°29′
30°	−14°29′	−10°00′	−5°30′	1°00′	3°31′	8°01′	12°30′

The Lattice Theory of Liquid State under the Condition That Can Make Two Molecules Involve into each Cell (with the Zero Approximation)

Tatsuro Nagata (Aug. 1965)

We calculate our liquid system by the cell method of zero approximation, when particles to two from zero are contained in single cell. Volume V, here, is divided into L cells of equal volume τ, namely $L\tau = V$, but this τ is larger than one in the usual method and, therefore, L is smaller.

§ 1. Introduction

Some methods have been proposed for the liquid state. In this paper, the theory of liquid state is expanded by using the lattice theory. The lattice theory of the liquid state developed by Peek and Hill, et al. [6] have provided a useful approximate description of the thermodynamic properties of liquids in terms of intermolecular forces.

The lattice theory yields explicicit results with less labor than do the more exact treatments of the liquid state, developed by Kirkwood and Born, Green. [7]

Liquids have been considered both as disordered solids and as very dense gases for the purpose of constructing approximate theories. It is these lattice, or "solid-like", theories of the liquid state which will be discussed here. The principal characteristic of all such theories is that they consider each molecule to be confined to the neighbourhood of one of the lattice sites by the surrounding molecules. It is usual to consider only the effect of nearest neighbors on the motion of the molecule within its "cell".

Between the years 1936 and 1941, Eyring and those who worked with him, made much progress in correlating the various properties of liquids by means of theories which assumed a regular lattice structure. These papers introduced the important idea that some of the lattice sites might be vacant. It was postulated that these vacant sites, or "holes", played a particularly important role in determining the behavior of a liquid near its critical point. However, this approach was, on the whole, empirical.

Classical statistical mechanics is used. Quantum corrections are important when considering the solid state, but, except for helium, hydrogen and neon, may be ignored in considering the liquid and gaseous states.

It is assumed that the internal energy of each molecule is indepedent of its environment. Such energies are therefore ignored in writing down the partition functions.

Let us divide a whole volume inside the container into cells having the not-equal volume or let us can each cell have more than one molecule into, so the theory of liquid state will become better. The theory is expanded by simplified for the sake of convenience in computing the case that two particles can be involved in each cell. [1] More generalized cases do not deal with in here, why generalized case do not able to expand the theory as a result of the complicated computation. If n-particles can be involved into each cell, the number of sorts of cells is n+1, and the number of sorts of interaction between cells is $\frac{(n+1)(n+2)}{2}$; that is, this is 21, when n=5, so this is very much large number.

Without electronic computer, these computations can not perform. It is beside the following purpose for lattice theory to do such complicated computation ; that is, estimate by simple model and simple computation. These complicated computation is done by the method of integral equation.

Many authors proposed various papers for liquid theory. The paper for the imperfect gas by Berlin and co-workers [2] is worthy of notice.

§ 2. Energy

We assume that the whole volume V is divided into L-cells and each of cells divided (L's) can have to two particles of liquid. The cell size, V/L, must be large enough for interactions between molecules which are not in adjacent cells to be ignored. The number of molecules of liquid is N_P. There are three sorts of cells following,

1. Cells to involve two particles,

or 2. Cells to involve one particle and one hole,

3. Cells to involve two holes only.

If the number of these sorts are N_2 or N_1, N_0, respectively, sum of these numbers is equal to L, whole number of cells.

$$N_0+N_1+N_2=L$$

Table I.

Sorts of cells	symbols	the number of cells
Hole+hole	0	N_0
Hole+a particle	1	N_1
A particle+a particle	2	N_2

As we have molecules in N_1 and N_2, the number of molecules (N_P)is the form

$$N_1+2N_2=N_P\ (=N_{particle}),$$

and as we have holes in N_0 and N_1, the number of holes (N_h) is the form

$$2N_0+N_1=N_h(=N_{hole}).$$

We write N in the form

$$N_1+N_2=N.$$

The number g of the distinguishable arrangement of these L cells is

$$g=\frac{L!}{N_0!\ N_1!\ N_2!}.$$

The number of sorts of pais of cells is 6. The number of the nearest neinghbours denotes z; z=12 for the face-centered cubic lattice cell, and the number of pairs zX, energy of the interaction denotes ε.

Table 2.

Pairs	The number of pairs	Interaction energy
0-0	zX_{00}	ε_{00}
0-1 1-0	zX_{01}	ε_{01}
1-1	zX_{11}	ε_{11}
1-2 2-1	zX_{12}	ε_{12}
2-2	zX_{22}	ε_{22}
0-2 2-0	zX_{02}	ε_{02}

As the total number of pairs is $-\frac{1}{2}zL$, we have the following.

$$zX_{00}+zX_{01}+zX_{11}+zX_{12}+zX_{22}+zX_{02}=-\frac{1}{2}zL,$$

$$\therefore X_{00}+X_{01}+X_{11}+X_{12}+X_{22}+X_{02}=\frac{1}{2}L.$$

We write the following relation.

$$X_{01}+X_{02}=X_{0P},$$

$$X_{11}+X_{12}+X_{22}=X_{PP}.$$

We can have the following easily.

$$2X_{00}+X_{01}+X_{02}=N_0,$$

$$2X_{11}+X_{01}+X_{12}=N_1$$

$$2X_{22}+X_{02}+X_{12}=N_2.$$

As $N_1+N_2=N$, so

$$X_{01}+X_{02}+2X_{11}+2X_{22}+2X_{12}=N.$$

In six variables Xs, the degree of independent variable number is four [3] (to hold constant numbers of cells L and particleles N_P) .

With use of these relations, we have the internal energy U.

$$U=N_0\,\varepsilon_0+N_1\varepsilon_1+N_2\,\varepsilon_2+z\,(X_{00}\,\varepsilon_{00}+X_{01}\,\varepsilon_{01}+X_{11}\,\varepsilon_{11}+X_{12}\,\varepsilon_{12}+X_{22}\varepsilon_{22}+X_{02}\varepsilon_{02})\ .$$

We must divide the cells such as minimize the probability-density-function, as Mayer-Careri [5] pointed out, but we neglect this condition in this paper. Even if it happens the case that N_0 and N_2 are nearly one, the Stirling's formula shows the values of the very good approximation, therefore we could use this treatment at a very good approximation. The major defect originates from the zero approximation.

§ 3. Zero—approximation

As a whole number of cells is L and a number of cell of symbol o is N_0, the probability that one cell of symbol o occupies the present site is N_0/L, and the probability of symbol 1 is N_1/L, that of symbol 2 is N_2/L.

Therefore, the probability that symbol o occupies the neighbouring site of symbol o is $\frac{N_0-1}{L-1}$.

If cells are independent in each other, the probability causing this phenomenon is $\frac{N_0}{L}\ \frac{N_0-1}{L-1}$.

As the total number of the such pairs is $-\frac{1}{2}zL$, number of present pairs is

$$\frac{N_0}{L}\ \frac{N_0-1}{L-1}\cdot\frac{1}{2}zL.$$

This equals to zX_{00}, so

$$\frac{N_0}{L}\ \frac{N_0-1}{L-1}\cdot\frac{1}{2}zL=zX_{00},$$

$$\therefore\ X_{00}=\frac{1}{2}\ \frac{N_0(N_0-1)}{L-1}$$

When, alternatively, N_0 and N_1, N_2, L all are very large,

$$X_{00}=\frac{1}{2}\ \frac{N_0^2}{L}.$$

And, samely, we have

$$X_{01}=\frac{2}{2}\ \frac{N_0\,N_1}{L},$$

$$X_{12}=\frac{2}{2}\ \frac{N_1\,N_2}{L},$$

$$X_{11}=\frac{1}{2}\frac{N_1^2}{L},$$

$$X_{22}=\frac{1}{2}\frac{N_2^2}{L},$$

$$X_{02}=\frac{2}{2}\frac{N_0 N_2}{L},$$

Now, if we denote the following,

$N_0=n_0L$,

$N_1=n_1L$,

$N_2=n_2L$,

$N=nL$,

we have

$n_0+n_1+n_2=1$,

$n_1+n_2=n$,

and

$$X_{00}=\frac{1}{2}Ln_0^2,$$

$$X_{01}=\frac{2}{2}Ln_0n_1,$$

$$X_{11}=\frac{1}{2}Ln_1^2,$$

$$X_{12}=\frac{2}{2}Ln_1n_2,$$

$$X_{22}=\frac{1}{2}Ln_2^2,$$

$$X_{02}=\frac{2}{2}Ln_0n_2.$$

By making use these, the energy U is rewritten in the form

$$U=Ln_0\varepsilon_0+Ln_1\varepsilon_1+Ln_2\varepsilon_2+\frac{1}{2}zL\,(n_0^2\varepsilon_{00}+2n_0n_1\varepsilon_{01}+n_1^2\varepsilon_{11}+2n_1n_2\varepsilon_{12}+n_2^2\varepsilon_{22}+2n_0n_2\varepsilon_{02}).$$

If we put $\varepsilon_0=\varepsilon_1=\varepsilon_{00}=\varepsilon_{01}=\varepsilon_{02}=0$ roughly and $\triangle\varepsilon=\varepsilon_{12}-\frac{\varepsilon_{11}+\varepsilon_{22}}{2}$, we have

$$U=Ln_2\varepsilon_2+\frac{1}{2}zL\,(nn_1\varepsilon_{11}+2n_1n_2\triangle\varepsilon+nn_2\varepsilon_{22}).$$

We assume that the centers of these cells constitute the lattice points in a face-centered cubic alloy. Suppose the cell occupied by the i-th molecule is surrounded $w_{0i}z$ symbol 0 cells, and $w_{1i}z$ symbol 1 cells, $(1-w_{0i}-w_{1i})\,z$ occupied ones. If these molecules are situated as the centers of their own cells, the potential energy of the i-th molecule is expressed by $\{w_{1i}\varepsilon_{12}+(1-w_{0i}-w_{1i})\,\varepsilon_{22}\}z$. The interactions between the molecules which are not in the adjacent cells are neglected; this is valid when the force between molecules decreases as rapidly as the van der Waals attraction.

Let us denote by u_i the potential energy of the i-th molecule. Here we shall use the value of the potential energy of the molecules surrounded by the neighbouring molecules at the centers of their own cells as the approximated value of u_i so that we may assume that this potential energy depends only on the positional coordinates of i-th molecule and w_i; that is $u_i=u(x_i,\ y_i,\ z_i;\ w_{0i},\ w_{1i})$. Then the partition function for the i-th molecule is

$$q(w_i)=\int_\tau \exp\left[-\frac{u_i-\{w_{1i}\varepsilon_{12}+(1-w_{0i}-w_{1i})\,\varepsilon_{22}\}\,z}{kT}\right]dv_i,$$

where dv_i is the volume element of the i-th molecule and the integration extends over the cell. And the partition function $Q(s)$ appropriate to the given configurations can be written in the form

$$Q(s) = \left\{\phi_1(T)\right\}^{N1}\left\{\phi_2(T)\right\}^{N2}\prod_{i=1}^{N} q(w_i),$$

where ϕ is $(2\pi mkT)^{3/2}\, j(T)/h^3$, $j(T)$ being the partition function for the internal degrees of freedom of a molecule. We may express the partition function of the system in the form

$$f(T)=\sum_{s}\exp\left(-\frac{U(s)}{kT}\right)Q(s),$$

where the sum extends over all configurations, s, of the system.

In order to make further progress it is necessary to know $q(w)$ as a function of w. But this procedure is next to impossible, so that we adopt the following [6]

$$q(w_i)=\tilde{\omega}_1, \qquad \text{or} \qquad q(w_i)=\tilde{\omega}_2.$$

Then, we have the following for $f(T)$.

$$f(T)=\{\phi_1(T)\tilde{\omega}_1\}^{N1}\{\phi_2(T)\,\tilde{\omega}_2\}^{N2}\sum g e^{-\frac{U}{kT}}$$

As the free energy A of the system is given by the relation

$$A=-kT\ ln\ f(T),$$

we obtain

$$A=-kT\{N_1 ln\ (\phi_1\tilde{\omega}_1)+N_2 ln\ (\phi_2\tilde{\omega}_2)\}+LkT\{n_0\ ln\ n_0+n_1\ ln\ n_1+n_2\ ln\ n_2\}$$
$$+L\left\{\frac{1}{2}z(nn_1\ \varepsilon_{11}+2n_1n_2\ \Delta\varepsilon+nn_2\ \varepsilon_{22})+n_2\ \varepsilon_2\right\}.$$

In here, we used Stirling's formula $n!\fallingdotseq n^N$.

The following formula (obtained in put $n_2=0$)

$$A=-NkT\ ln\ (\phi\tilde{\omega})+\frac{1}{2}zLn^2\varepsilon+LkT\{n\ ln\ n+(1-n)\ln(1-n)\}$$

agrees with the formula proposed even.

As the equation of states is given by

$$P=-\left(\frac{\partial A}{\partial U}\right)_T,$$

we obtain, (if Cernuschi-Eyring's approximation is used in $\tilde{\omega}$)

$$P=-\frac{n}{b}RT\left[ln\left(1-\frac{b}{v}\right)-\frac{z}{2}\frac{1}{kT}\left(\frac{b}{v}\right)^2\left\{\frac{\alpha}{b}\left(\frac{v}{b}\right)\varepsilon_{11}\right.\right.$$
$$\left.\left.+\frac{\alpha}{b}\left(1-\frac{\alpha}{b}\right)\Delta\varepsilon+\left(1-\frac{\alpha}{b}\right)\left(\frac{v}{b}\right)\varepsilon_{22}\right\}\right],$$

where we denote

$$\tau=\frac{v}{L}, \qquad \text{and} \qquad b=N\tau, \qquad \alpha=n_1v, \qquad \beta=n_2v,$$

$$\alpha+\beta=b, \qquad \text{and so} \qquad n=\frac{b}{v}.$$

References

(1) Harasima Akira; Ekitairon (Iwanami) p. 60. (in Jap.)

(2) T. H. Berlin, L. Witten and H. A. Gersch; Phys. Rev. **92**, 189 (1953)

(3) H. Tompa; J. Chemi. Phy. 21. 201 (1953)

(4) Oomori-Ono; Kagaku Buturi Gaku (Kyoritu) p. 404. (in Jap.)

(5) J. E. Mayer and Curtiss; J. Chem. Phy. **20**. 1001 (1952)

(6) Rowlinson and Curtiss; J. Chem. Phy. **19**. 1519 (1951)

(7) J. G. Kirkwood; J. Chem. Phys. **3**, 300 (1935)
M. Born and H. S. Green; Proc. Roy. Soc. A. **188**, 10 (1946)

'The Grapes of Wrath' の国際的反響について

井　芹　竜　成

How Has 'The Grapes of Wrath' Been Received in the World?

Ryujo Iseri

Synopsis

The masterpiece 'The Grapes of Wrath' by John Steinbeck, the Nobel Prize winner, had scarcely been published in America in April, 1939, when it became the first-best-selling novel of the year, so that it stirred up violent polemics. Partially or synthetically several American books tell us how that happened, which also in Japan two or three scholars introduced concisely and whose meaning they mentioned.

We have, however, hardly seen any adjusted and all-round writings about how 'The Grapes of Wrath' has been received in the world or its international reception or echo. The critical reception of this novel in the world is considerably different from that in the U.S.A., especially just after the publication of it; the former is far more objective, indirect and impartial than the latter, and at the same time it contains the critical reception of this novel as a literary work. It is, therefore, I think, very conducive to the study and valuation of 'The Grapes of Wrath' or Steinbeck, a novelist, that we take up and examine the international reception.

Here, I am to pick up the echoes or receptions mainly in France, Japan, Sweden, whose Academy awarded the Nobel Prize for Literature to Steinbeck, and the Soviet Union. It is sure that that in Russia is especially of immense interest, because it demonstrates the effects of applying socialist realism literary doctrine to a modern classic and we can see some Americans' response to it.

But, at present, it is very difficult for me to collect comprehensive and essential data which embrace those several languages, I am, therefore, afraid that this essay not only might go up like a rocket and come down like a stick, but cannot help being rendered mostly of objective description.

Introduction

ある作家の作品を読んで感銘を覚えるとき、先ず、われわれはその感銘の由来を究明して、人それぞれ自分なりに知的確信をつかみたいと思う。そして、その作品への傾倒が深ければ深い程、他によってその確信を傍証、強化し、あるいは、それを修正したいという欲求に駆られる。もちろん、その人の知的水準の広狭深浅の度合に応じて、そのような欲求現実化活動の範囲も限定されるが、身近かに始ったそのような活動は、もし可能であれば、そして、その作品の声価が世界的な scale をもつものであれば、それは遂には、この遊星を掩う範囲にまで拡大されて行くであろう。そして、このように拡大された活動—国際的評価ないし反響の検討に当っては、興味は単にその状況の客観的把握、その妥当性の討究の埒を越えて、必然的な結果として、その各国の文学現象ないし芸術現象の水準・傾向、そして、その基底をなす社会経済政治的動向にまで及んで行くであろう。

さて、私はここで、Steinbeck の 'The Grapes of Wrath' をとりあげて見ることにする。この作品は、世に出て、すでに4分の1世紀の歳月を閲したが、それは Nobel 文学受賞作家 John Ernst Steinbeck (1902～) の代表作として、また、30年代アメリカ文学を飾る唯一の proletaria 小説として、現在もなお読み続けられて少しも衰えをみせていない。[1] 1939年4月、Viking Press によってこの本が出版されるや、たちまち best seller となり、また、そのために、アメリカ国内に大き

な社会的反響を巻き起した。その状況に関しては、幾つかの著作[2]に収録され、あるいは断片的に、あるいは綜合的に、窺い知ることができる。日本においても数氏[3]によって簡潔な紹介がなされ、その意義にも言及されている。

しかし 'The Grapes of Wrath' のアメリカ合衆国外における反響ないし受容態度一ここでは、これを国際的反響と呼ぶ一に関しては、その尨大さ、その広汎さにもかかわらず、いや、寧ろその故に、ほとんど断片的言及を見るのみで、整理、綜合された記述に接しない。このような記述は、あるいは、文学作品としての、 'The Grapes of Wrath' の鑑賞・評価には本質的連関のない二義的なことと考えられるかもしれない。しかし、国際的反響は、 'The Grapes Wrath' 出版当時のアメリカ国内に起った反響が、主としてその題材・内容に関して、切迫した、直接的、主観的な価値判断より導き出されたものであったのとはおのずからその性質を異にするもので、その内容、題材に対しても、前者は後者のそれよりはるかに客観的、間接的態度をとりうるものであり、非理性的偏見を排除すると同時に、文学作品としての 'The Grapes of Wrath' の評価の面をも多分に包含した、いわば、ゆとりのある反響とも言うことができる。それ故、このような反響をとりあげて検討・考察を加えてみることは、作家 Steinbeck ないし、'The Grapes of Wrath' の研究、論評に寄与することのあるのは確かであると思う。

この小説は、ヨーロッパ、アジア、アメリカ各大陸の諸国の夥しい数の読者に愛読され、また今も読まれているのであるが、これら諸国のうち、主としてフランス、日本、および Nobel Prize との関係上スウェーデン、そして最後にソヴエット連邦の各国における反響ないし受容状況を叙述して行きたいと思う。ことにソ連における受容態度は、いわゆる「socialist realism 文学理論の modern classic への適用効果を示すもの」[4] として、また、これに対するアメリカ人の反応を見ることにおいて極めて興味深いものということができる。

しかし、このように広汎な叙述の筆をすすめるに当って、最大の難事は、もちろん、必須資料の蒐集である。上述諸国の数ケ国語にわたる資料の蒐集・検討は、筆者の現状においては極めて困難な仕事であれば、勢い、この小説が意図のみ大にして惨澹たる結末に終るかもしれないことを、先ずお断りしておかねばならない。ここでは主として Warren French の編著、[5] T. W. Tuttleton の論文、[6] および Deming Brown のロシア語よりの英訳書[7]を中心として本文の筆を進めて行く積りであるが、その所論は、上のような理由から、概ね、客観的叙述に止まらざるをえない所が多いこともまた、諸彦の寛恕にまつ次第である。

I. フランスにおける反響

1939年9月1日、ドイツ軍のポーランド侵入をもつて英・仏はドイツに宣戦し、第二次大戦は始るのであるがこれは、 'The Grapes of Wrath' の最初のアメリカ版出版後僅かに5ケ月目であった。その時までに、[8] 既に、この小説の各国語への翻訳の arrangement は、デンマーク、オランダ、フランス、イタリア、ノルウエイ、ポーランド、ポルトガル、ルーマニア、スペイン、スウェーデン、ロシアの各国において済まされていた。イギリス版の出版も、最初のアメリカ版が出てから数ケ月後になされた。[9] この時、イギリスは既に戦争には入っていたが、広汎な世間の注目がこの本に集ったという。

もし大戦の勃発がもっと遅れていたら、その時の情勢から、更に多くの国語に翻訳されて、直ちに出版されていたことは確かである。なお上述出版諸国の list 中にドイツ国の名を見出さないのは、ドイツ語版の出版が、原著者によって拒否されたためである。

フランスにおいては、大戦前既に、著名な学者 Maurice Coindreau は、Marcel Duhamel の協力をえて、La Fontaine の寓話[10]の冒頭の句からとった "Le Ciel en sa Fureur" という表題のもとに、 'The Grapes of Wrath' の翻訳を始めていた。だが、それは独軍侵入の際には未完成であった。ドイツ人はフランス占領中「pessimistic なアメリカの書籍を宣伝目的に用いようとして」[11]、フランスの出版業者 Gallimard に、 'The Grapes of Wrath' の出版を促した。彼が断ると、独仏協会の手によって、あるベルギー人の協力者によるこの小説の訳本が、 "Grappes d'Amertume" という表題のもとに出版の準備がなされた。だが、その頒布促進の計画は、1944年6月の連合軍の Normandy 上陸によって挫折してしまった。戦時中、フランスにおいて、Steinbeck の名声は、主として、 'The Moon Is Down' (1942) の地下版[12]によって非常に高くなっていた。戦後、前述の Coindreau Duhamel 版の、 'The Grapes of Wrath' が急遽出版されたが、その際、訳者たちは、戦時中流布されていたこの小説の逐語訳の表題を使用することを余儀なくされたという。[13] 1946年5月から12月まで、この翻訳は有名な週間紙 Les Lettres Francaises に連載されて多大の反響をえた。 1947年、これが単行本として出版された時には、忽ち、その年の best seller の第6位を占め、総売上げ部数は、概算120,000部に達したという。[14]

'The Grapes of Wrath' のフランスにおける受容

状況を以上のように概観したのであるが、ここに、更に二三のフランス人のこの小説に対する評言を付記することにする。1939年、アメリカで開催される国際 P.E.N. Club 出席のため渡米した André Maurois は、5月初め、New York に向う豪華な特急列車の中で、今評判の 'The Grapes of Wrath' を手にして、読みふける。そして最後の章を読み終るや、巻をおいて、「これは、何とまた残酷な本だろう。…Steinbeck が書いているような悲惨の間を縫って、こんな豪華な列車が今走っているのは一体、真実なのだろうか。」そして、自ら答えて言う、「アメリカは退屈しているのだ。アメリカの読者は倦怠を感じている。それで恐怖か快楽の thrill を求めるのだ。アメリカ文学の嗜虐性の根源はここにあるのだ。Caldwell の官能的な猛烈さも、Steinbeck の残忍さも、ここから生れるのだ、」[15]と。Maurois は、'The Grapes of Wrath' を残酷な小説だとし、作家が予め読者の嗜好を打算して生れた作品だとしている。また、Jean-Paul Sartre (1905-) は1946年、The Atlantic Monthly の Statement において、次のように述べる、「'The Grapes of Wrath' のように妥協のない小説は、フランスでは決してアメリカに嫌悪の情を催させるものではない。いや、それどころか、その中にアメリカの自由の現われを見るのだ、」と、そして、更に、「この小説のあばく不正は、われわれにとっては決して、アメリカ社会の欠陥と思われるのではなくて、rather a sign of the imperfections of our time.」[16]と述べて、彼もまた、この作品のきびしさを言い、そして、その普遍性を指摘している。

戦時中の出版制限や、人的・物的な諸不足一ことに紙不足や、アメリカ小説愛読諸国への枢軸国の侵入などのために、'The Grapes of Wrath' が、その国際出版史上に被った受難の数数については、今さら言うも愚かなことである。それ故、このような諸制約が解除されるや、ヨーロッパ諸国の大部分は言うに及ばず、アジア、アフリカの諸国においても、相次いでこの小説の新版、翻訳が現われた。UNESCO の報告によれば、1959年と60年の2ケ年だけで、ベルギー、デンマーク、ドイツ、ハンガリア、南朝鮮（韓国）などの諸国で、新版が出されている。[17]

Ⅱ. 日本における反響・評価の概況

日本においては、早くも1940年、最初のアメリカ版が出版された翌年、新居格訳の 'The Grapes of Wrath' の日本語版が第一書房より出された。次いで、第二次大戦も漸く終り、戦後の混乱も鎮静の兆しを見せ始める1951年に、大久保康雄訳の「怒りのぶどう」上下2巻が六興出版社より出された。この訳本は、1953年には、新潮社版現代世界文学全集21として一本にまとめられる。以後、この国において企画出版される世界文学全集[18]の中に、'The Grapes of Wrath' は幾人かの文学者[19]によって訳され、アメリカ文学の代表作の一つとして収録されることとなって、日本におけるその地歩を確立して行く。なお、すでに新潮、角川、岩波その他の文庫本[20]として、この小説が広く大衆の座右にあることは人のよく知るところである。

'The Grapes of Wrath' に関する日本国内諸大学関係の学術論文は他日に割愛することにして、この小説に言及したアメリカ文学の研究・評論および文学史関係の著作を一瞥してみよう。先ず、1946年、終戦の翌年、物資不足のただ中に、杉木喬、鈴木幸夫、龍口直太郎、高垣松雄によって三冊の本[21]が出版される。その後、50年代を経て60年代の初めに至る間に、志賀勝、滝川元男、高村勝治、吉武好幸、斉藤光、佐渡谷重信そして野崎孝らの手に成る労作・編著[22]は、その数およそ十指に垂んとするを見るのである。

日本における、'The Grapes of Wrath' 受容の一般的概況は大体以上の如くであるが、更に、上述の著作者および翻訳者の肯定的、あるいは否定的評言に具体的に触れることによって、この小説の日本における評価の状況の検討、把握に資したいと思う。

大久保康雄は、前述翻訳書の委曲をつくしたあとがきにおいて述べる。「Steinbeck はアメリカ商業主義へ強い怒りをこめ、烈しい抗議の文学としてこの小説を書きあげているが、その筆致は主観を抑えてあくまで冷静であり、時には非情でさえあって、それがこの小説の劇的雰囲気を盛り上げて行く上に、すばらしい効果をあげている。」[23]と、その hard-boiled style の効果を指摘し更に、この小説の全体的結構が、旧約聖書の Exodus とその原型、すなはち、人類社会の歴史が始ると共に起った人間社会の葛藤の一つの基本的な型と全く同一であるとし、このような意味においては、「'The Grapes of Wrath' は Oklahoma 農民の苦難を、歴史と共に古いこうした原型の中に物語ることによって、文学作品として一つの時代と場所とを越えた地点にまで達している、」[24]と評価する。杉木喬は、また、このことを次のように表現する、「Steinbeck は、30年代アメリカの悲惨な現実を追求しながら、そこに深い人間の真実を見ようとしたのである。それであればこそ、この小説が単なる傾向小説や社会抗議の小説としてではなく、普遍的な人間性を豊かに湛えている作品として、今でも読む者の心を強く打つのである、」[25]と。高村勝治もまた、その著「現代アメリカ小説序論」において次のように言う、

「'The Grapes of Wrath' はある意味ではproletaria文学であると同時に、芸術作品としても勝れたものである。proletaria 文学では、得てして理論が先ず設定されて、人物はそれに振り回される木偶坊になり勝である。しかしこの小説では、理論は生きた貧民の間から必然的に生れて来る。生きた人間がアメリカ大陸を横断して、大きな叙事詩をかなでて行く。これがこの小説の単なる proletaria 文学でない所以である、」[26]と。そして、この小説では、25万の Okies の動きをうつし出す短い奇数章と、Joad 一家の一連の物語りをえがく長い偶数章とは互に相照応して、「Joad 一家の悲劇がアメリカ全体の悲劇として」描かれており、また、この作品は「ただ Oklahoma 農民たちの問題を扱ったという時代的な意味をもっているばかりでなく、あらゆる苦難に会いつつも屈することなく、求めても得らぬ理想をあくまで追求して行く人間一般の雄々しい姿を象徴するものであって、時代を超えて読者に訴えるのである、」[27]と、述べている。

'The Grapes of Wrath' の肯定的評価の中、代表的な2,3のものを以上のように摘出して見たのであるがこの中、最も簡潔な杉木喬の評言をその典型と見てよいであろう。このような肯定的評価が、大体、この国では支配的であると言うことができる。

ここで、Alfred Kazin の「Steinbeckの作品には、何か不完全に作りあげられたものがある。それは創造的な人物を1つももっていないのである。彼の strike 小説を30年代の社会小説中のすぐれたものにしている、困窮した人間に対するその同情的な理解にもかかわらず、Steinbeck の描く人物は、いつも人間になろうとして決してそうなることがない。」[28]という批判的評言を思い出すのでであるが、日本においても、もちろん、否定的評価が存在する。それは評言の一部として包含され、あるいは、肯定的評価と対置され、あるいは終始一貫して述べられるのをみるのであるが、以下、さらに、このような批判的評価に眼を転じてみることにする。

高村勝治は前述の評言において、さらに次のように続ける。Steinbeck の人間観には、いわば性善説とも言うべきものが貫いている。こうした人間観の甘さが、彼の社会的 realism の角の鋭さを擦り減らしている。'The Grapes of Wrath' に見る解決の不徹底さもここから生れるのだとして、さらに、「このような Steinbeck自身の人生観の甘さ、それに、アメリカ社会自体としての苦悩の浅さ、そしてアメリカ的な理想主義といったもののためであろうか、第二次大戦が勃発するや Steinbeck は社会的 realism 文学をかなぐり捨ててしまったのだ、」[29]と評している。野崎孝もまた Steinbeck におけるこの肯定的人間観ないし楽天的社会観をとらえて、'The Grapes of Wrath' に批判的な立場をとっている[30]が、更に、3年後には、Steinbeck の "biological view of man"[31] をとりあげて批判する。すなはち、政治問題ないし社会問題というものは、ある価値観から発生する人間社会の葛藤である。'In Dubious Battle' (1936) や、'The Grapes of Wrath' は政治問題ないし社会問題を素材にした写実小説である。それを作者は、価値観を排除した生物学的人間観に立って描こうというのだから、最初から矛盾があるのは明らかである。移動農民が生きんがために闘う strike を素材にしながら、それを政治闘争や経済闘争としては見ないで、「一般生物界に行われる生存競争の一種として、生物界全体の枠の中でとらえようとするのである、」[32]と言い、そして、この小説は、アメリカ社会の動きを簡潔に叙述する短章の挿入と、「いつもどこかへ行こうとしている土亀」と、last scene の Rosasharn 授乳の場の2つの symbol の成功、そして緊密な構成、引締まった文体、意欲的な theme などのため、単に、「Steinbeck 個人のみならず、30年代か生んだ代表作と呼ばれるにふさわしい貫録を備えた達成」[33]とみなしつつも、この作品の意図が、「5千の家族を餓死寸前に追いつめている殺戮者どもの頭上に一撃を加える」[34]烈しい抗議のそれにあったとすれば、その意図は充分に果されたと言うことはできない。それは前述のように、作者をして一方の側に与することを許さぬ彼の人間観の故であり、「人間界の一切の現象を、生物学的法則で割り切ろうとする、あまりにも強引で単純な彼の思想のもつ欠陥」[35]の故である、と批判している。

Steinbeck に見るこの「生物学的人間観」は、"excessive preoccupation with biology…" として、彼の作品非難の一つの典型となっているものである。成程、社会的作品としての 'The Grapes of Wrath' は、確かに、この人間観によって不徹底となり、昏迷に導かれているのであるが、しかも、この "biological view of man" は、明確な価値観に立って正邪善悪を峻別して一方の側に与することを退け、Steinbeck における一種の綜合的人間観の基調をなすものである。 'In Dubious Battle' において、作者は、Burton 医師に、このことを次のように言わせている。 "…I want to see the whole picture—as nearly as I can. I don't want to put on the blinders of 'good' and 'bad', and limit my vision. If I used the term 'good' on a thing I'd lose my license to inspect it, because there might be bad in it, … I want to be able to look at the whole thing." [36] Steinbeck の作品にた

だようあの類まれなやさしさの源泉は、実にここにあるとも言えるのである。

また、佐渡谷重信は、「Steinbeck が 'The Grapes of Wrath' を書くと、社会問題として、とりあげられ、当時の農地証券行政部は低廉住宅の建設に努力し、毎年、土地を求めて移動する農民の救済に当った。文学が存在するのはこういう所に意義があるので、読者の本能だけを刺戟して best seller になる日本の小説とは違う、」[37]と述べて、この小説の社会的・政治的効用をとりあげて、この国の評論に一つの variety を与えている。

'The Grapes of Wrath' に対する日本における受容評価一主として substantive values に関する一の概略を以上のように一瞥し終った。ここで私に浮んだ想いは、これらの評言が概ね、アメリカにおけるこの小説に関する研究・評論書[38]に source を求め、あるいは参照参考にして、その強い影響の下に所論が構成され、そこに独自の日本的個性[39]の発現をほとんど見出しえないということである。これは、この国に長く培はれた西欧的教養の帰結の一つとも見ることができるであろう。W. French は "In most Western countries critics have discussed the novel ('The Grapes of Wrath') in the same terms as Americans…"[40]と、言っているが、この "most Western countries" を "Japan" に変えれば、この評言が、そのまま日本における 'The Grapes of Wrath' の評論にも該当できるであろう。

Ⅲ. スウェーデン Academy の Nobel 委員会による評価

1962年10月、Steinbeck は Nobel 文学賞を授与された。しかし、彼の国際的声価が、他の幾人かの受賞作家[41]のように、専らこの名誉によってのみ高まったわけではない。けれども、作家 Steinbeck ないし、'The Grapes of Wrath' の評価に関しては、例えば、F. J. Hoffman [42] などに見るような酷評もあって、その声価にいささか疑問をもつ者もあったのであるが、この受賞は、それらの疑いを排除するのに相当の力があったことは否定できないであろう。スウェーデン Academy の常任書記で、同 Academy の Nobel 委員会の議長である Dr. Anders Osterling が、同年10月25日になした審査の経過・結果に関するラヂオ放送は、そのような意味で、Steinbeck の国際的声価に関する決定版とも言え、また、そのこよなき certificate とも称することができるのである。

同放送によると、授賞は Steinbeck の全作品、ことに 'Winter of Our Discontent' (1961)を中心としてなされたものであるが、以下、'The Grapes of Wrath' の関係箇所を主としてこの放送を見て行くことにしよう。

This year's Nobel Prize for Literature has been awarded the American author John Steinbeck. で始る放送は、先ず、Steinbeck の生い立ちと、波瀾の多かった青年時代の概略を紹介して、彼の作品に及んで行く。1935年、'Tortilla Flat' の出版で初めて彼は世間的成功を収める。当時、アメリカ国内に広がっていた大恐慌の憂欝を吹き払う有難い解毒剤 (a welcome antidote) として、この小説は大歓迎を受ける。しかし Steinbeck は「罪のない慰安者になったり、人を喜ばせる芸人になったり」することを屑しとしない。それどころか、題材に California の果実、綿花農場の苛烈な strikers を選んで、真剣な弾劾の作品 'In Dubious Battle' (1936) を出す。この間、彼の筆力は着実に充実して行き、37年には 'Of Mice and Men' を生む。放送者はこれを "little masterpiece" と呼んでいる。そして翌年、作家が集めた "incomparable short stories" である、'The Long Valley' を出す。ここで放送は、いよいよ、'The Grapes of Wrath' に触れることになる。以下、原文を引用する。

The way had now been paved for the great work that is principally associated with Steinbeck's name, the epic chronicle 'The Grapes of Wrath', which tells of the migration to California forced upon a group of people from Oklahoma by unemployment and the abuse of power. This tragic episode in the social history of the U.S.A. has inspired in Steinbeck a poignant description of life as it is lived by the common man, a description centered on the experience of one particular farmer and his family on endless, heartbreaking journey to a new home…[43]

'The Grapes of Wrath' は、作家 Steinbeck にそれまであったすべてのものが集大成されてできた彼の代表的大作であることを先ず言い、そしてその物語りは、Oklahoma の一農夫とその一家とが新しい居住地を求めて行く、果てしない苛酷な旅の途上の経験を中心として述べるのであるが、それは、とりも直さず、アメリカの庶民の、いや、更に、世界中の善良な庶民の、失業と「善良とはいえない人人」の力の濫用とによって、惹き起される苦難の epic chronicle であり、また、アメリカ社会史上の tragic episode であるとして、こて小説の社会性を指摘し、そこに見る特殊即普遍の実現をとらえている。

更に放送は、Sinclair Lewis から Hemingway に至る Nobel 賞受賞の現代アメリカ作家の中で、Stein-

beck が独自の立場を占め、独特の達成をなしとげたとして、次のように指摘する。すなはち、しばしば彼に見る残酷・生硬な motif をある程度まで救う、そのgrim humorの調子。虐げられた者、環境に順応しにくい者、または困窮者たちにいつもそそがれる彼の同情。彼が好んでする素朴な生活の歓びと、残忍冷酷な金銭欲との対比。そして、彼の inspiration の尽きることのない源泉となっている自然―耕地や、荒地や、山岳や海岸―に対する溢れるばかりの感情となって表われるその American temperament。[44]

このように述べて、スウェーデン Academyは、最後に、授賞理由を次のように要約・結論する、(We have awarded the Prize to John Steinbeck) "for his at one and the same time realistic and imaginative writings, distinguished as they are by a sympathetic humor and a social perception."[45]

'Winter of Our Discontent' を中心として、Steinbeck の全作品に対してなされた以上の評言は、もちろん、 Nobel 文学賞授与のためのそれであれば、そこに、忌憚のない、強烈な個性的批評を期待することは無理であり、勢い、総花的・公式的きらいをもつことになるのは免かれえないところである。しかもなお、簡潔にして要をえた、その適確な結語は、 Steinbeck の国際的声価を決する至言であり、それは群小の批判を排除して、今後とも、恐らくその生命を維持し続けて行くであろう。

Ⅳ. ソ連における反響・評価と、これに対するアメリカ人の反応

この章は、本年10月30日、九州大学文学部における、日本英文学会第18回九州支部大会研究発表論文に基くものである。

1

今世紀において、革命と社会主義建設という人類最大の実験をやりとげたソヴェット、そして、文学批評の基盤を socialist realism におくロシアにおける、 'The Grapes of Wrath' の反響ないし評価は、おのずから、他とは異った独特の発現を示すものである。そして、これに対して、あるいは party-line に従うものとして、あるいは、その国に支配的である New Criticism の立場から批判を加えるアメリカ人。以下、これらの諸点に関して検討して行きたいと思う。

'The Grapes of Wrath' 翻訳の arrangement は、前述のように、ソ連においては、既に第二次大戦勃発までに済まされていた。そして、1940年に、連載小説としてその部分訳が雑誌に掲載された。その年の出版総部数は25,000部にしかすぎなかったが、41年には、実に300,000部の全訳本の出版をみた。[46] Deming Brown は、"No other American author has received so large a single printing in the Soviet Union."[47] と言い、また、大恐慌に関して書かれたアメリカの小説の中で、最も大きな impact をロシアに与えた作品[48]だと言っている。

このように、'The Grapes of Wrath' は、ロシアにおいて、一般的に異常な人気を博したが、更に、この小説の評価の状況を詳細に把握するために、ソ連評論家、文学研究者の評言に具体的に触れることによって検討を進めて行き度いと思う。

'The Grapes of Wrath' が特に暖い賞讃を受けたのは、作中の主要人物である Ma Joad, Tom Joad および元説教師の Jim Casy である。この小説は André Maurois がしたように、Caldwell の 'Tobacco Road (1932) と較べられて、 Steinbeck の声価を増し、またMaxim Gorky の「母」と比較されて、 Gorky のソ連における評判に鑑みて、Steinbeck の信用を増したのであるが、F. Chelovekov は Literaturnoye obozreniye 誌上において、 Ma Joad を Gorky の「母」の heroine と比較して、「ひどい生活に直面して、同じように日毎の暮しに勇気を示し、同じように reality を理解して行き、悲しみに耐えるのにすばらしい才能を示し、喜んで苦難に当つた」[49]と言い、また、 R. Orlova は、1962年、 Inostrannaia Literatura 誌上で、'The Grapes of Wrath' に詳細な考察を加えた評論[50]において、 Ma Joad は、「あの処女大陸を征服した開拓者たちの直系の子孫であり、また、そこにあれば眼につかぬが、なくなると胸も痛む程さびしくなる、あのすばらしい一家の光である。」[51]と言い、そして、彼女には「人間社会や、平静なあきらめ、確固たる決意が、何年も前から身についていたかのように分って来る。この小説では、Ma は発展するのではなしに自分をあらわにして行く。」[52]また「彼女は親切を一家の財産よりもはるかに価値あるものと考える。…そして、底ぬけの善良な魂をもつ故に、極めて誇り高い人間である。」[53]と評している。

Tom Joad について、T. Khmelnitskaya は「民間伝説の英雄的人物として描かれた。」[54] と言い、また Orlova は、上述のような母親 Ma の息子である Tom は「彼が受けねばならぬ苦難の過程において変化する。彼は、平和を、平穏を、そしてのどかな生活を心から希う気立てのよい青年である。思考は彼にとっては苦手である。だが尋ねざるをえないし、また答を求めざるをえない。 Tom は闘士になる。それは闘いを求めているから

ではなしに、闘わなくては人間として生き続けることができないからである。」[55]と、強い言葉で評している。

Jim Casy の作中人物としての成敗については、批評家の間にかなり意見の分裂を見たが、Khmelnitskaya は「Casy という人物の大胆さ、独創力、誠実さは、彼を習慣的な思考や表現様式から引離さないで、作者が説教師から純粋に革命的伝道者を創造したという事実に存在する、」[56]と言い、Orlova はまた Casy について、「彼は自分の前職（preacher）の偽善であることを悟って、それを捨てた。Steinbeck のあまたの敵の中に聖職者たちがいるが、彼らはこの説教師 Casy の性格描写に激怒した。Casy は strike の組織者となり、警官から殺害されたが、彼の私心のない苦闘は、Tomとその同志たちの進むべき道をえらぶ指針となったのである。」[57]と言っている。

この小説の用語、style, construction などに関する、いわゆる形式批評の面を一瞥する。先ず構成上からもいろいろ論議の多い、いわゆる説明の中間章（主として奇数章）の散在に関して、また賞讃の言葉を聞くことができる。Olga Nemerovskaya は Zvezda 誌上において、「それらは一種の緊張した叙情詩調をおびた芸術的 journalism である。小説そのものに劣らず感動的である。初めから終りまで、一つの烈しい叙情的な調べが鳴りひびき、冷たい合理的な分析になってしまうことは決してない。」[58]と評し、また、Orlova は「これらの章は、Joad 一家に関するというより、むしろ、アメリカ人一般に、人類に、この地上の人間生活に関するものである。だが、この小説の歴史的特殊性は、もちろん Joad 一家の変遷をもって尽きるものではなく、それはまた、これら中間章においても示されるのである、」[59]と言い、また、その中の一章の、金持で退屈した連中が、速い speed で通りすぎて行く66号国道の記述は、「内容、文体において Hemingway が、'To Have and Have Not' で、yacht 所有者について書いた怒りの page に極めて類似している、」[60]とも述べている。また、style に関して Orlova は、この小説には二つの文体、すなはち、"low" style と "high" style とが相並んで現れる。これらは互に分離しているのではなしに、非常に多くの複雑にして論議の多い connections によって結合されている。high style は聖書にまでさかのぼることがでる。Steinbeck は聖書の用語を芸術的に変形して 'The Grapes of Wrath' という "organic alloy" の要素となしたのである、[61]と述べている。

'The Grapes of Wrath' は、もちろん、party line に従って書かれた作品ではないが、アメリカ資本主義に対して極めて批判的な作品ということができる。従って、socialist realism に基くソ連の批評家は、当然、この面を強くとりあげる。P. Balasov は Novy Mir において、「作家は変化が起りつつあることを知っている。そして、このような変化や革命に誰が脅かされるかを知っている。階級意識の目覚め、新しい観念・思想の誕生、"I" から "we" へ "my" land から "our" land という言葉への移り変り、一つの同じ不幸に見舞われた人人の間の親密な仲間意識の始まり、一何よりも今、Steinbeck に興味をもたせ、彼の小説に明確な革命的方向と、力強さと、新鮮さとを与えるものは、これなのである。」[62]と述べ、Nemerovskaya は、この小説の基本的 optimism に触れ、「Joad 一家の没落にも拘わらず、それぞれの主人公たちの悲運にもかかわらず、この小説の結末は optimistic である。それは、資本主義が高貴な人間感情を破壊することができず、それは、人間の精神と意志とを強化し、将来起るべき不可避の決定的階級闘争の準備をなさしめるからである。」[63]と言っている。また、M. Mendelson は、1947年―戦後、米ソ間のいわゆる "cold war" で Steinbeck was subjected to his bitterest critical attacks by Russians. [64] の時期一に、ソ連高等教育省主催の Moscow における講演で、Steinbeck を強く批判しつつ、'The Grapes of Wrath' に関しては、この小説は、正にアメリカ現代文学の最高作の一つであるといい、そして、これは「Joad 一家の運命に責任があるのは現行のアメリカ社会の状況であって、Joad 一家の人人自身の生来の欠陥にあるのではないということを、充分に知っている人によって書かれた本であり、また、その人には、余計者となった労働者たちを、喜んで餓死させようとする fascist 的性癖をもった人間こそ、Joad 一家の苦境に対して咎めるべき者だということがよく分っていたのだ、」と言い、そして "The author of 'The Grapes of Wrath' felt that the Joads were true representatives of American democracy, that they possessed lofty human qualities, a sense of their own individual dignity, and the capacity to struggle against oppression". [65] と述べている。また、Orlova も次のように述べる、「Ma や Tom や Casy が打たてようと努める真の人間社会に至る道程における重大な障害は bourgeois order である。'The Grapes of Wrath' は徹頭徹尾反資本主義の小説である。この本の中で問題とするのは、個個の制度組織の欠陥ではなくて、その根本原理である。」と言い、そして、'The Grapes of Wrath' の第15章を引用する、すなはち、「もし君たち、人のもたねばならないものを所有している者が、原因と結果とを見分けることができれば、Paine や Marx や Jefferson

や Lenin が、結果であって原因ではないことを知ることができれば、生き残れるかもしれない。だが、君たちには分らないのだ。なぜなら、『所有』というものの性質は、君たちを永遠に "I" という観念に閉込め、"we" というものから永久に切離すのだから、」と。そして、この小説は、「今日のアメリカの失業者たちが、Joad 一家の運命の中に自らの運命を見、なお、空腹がアメリカに存在し、狡猾な政治屋どもに欺かれて、人人が自分の土地から追出される地方がまだ存在し、またアメリカの内外においては、人間による人間の搾取が、なお存在する故に、生き続けるであろう、」[67]と言っている。

以上のように、Soviet の各批評家は、この小説が反資本主義の作品であることを指摘して、強調するのであるが、ただにこの点にとどまらず、更に進んで、'The Grapes of Wrath' が人間性の深奥に触れた作品でありそれ故に、時と所とを超えた普遍性をもつことを、また指摘する。Balasov は、"In these people···Steinbeck has found the fundamental human characteristics -the feeling of dignity and faith in humanity." [86]と、その評言を結論し、また Orlova は、"'The Grapes of Wrath' lives and will live because of that active, deep humanism which is expressed in this book more powerfully than in other works of the writer ···"[69] と述べ、'The Grapes of Wrath' の第14章の"The last clear definite function of man—muscles aching to work, minds aching to create beyond the single need—this is man." を引用、そして、「このような思想は、人間が人間を搾取することのない時代にも、また生き続けて行くであろう、」とその評論の、substantive values に関する部分を結んでいる。

'The Grapes of Wrath' によってロシア人は Steinbeck を知り、それを出発点として、彼の過去の作品に溯り、また将来の作品に期待した。しかし、何れもロシア人に充分な満足を与えることはできなかった。Tuttleton は、"The critical reception of John Steinbeck in Russia may especially be seen as almost a barometer of Soviet-American political relationships." [70]と言っているが、この間にあって、'The Grapes of Wrath' はもちろん、その評価に多少の高低はあったが、上に見たように、概ね、賞讃に終始して来たし、また、これからも恐らくそうであろう。そして、Soviet 批評家の上のような評価に接する時、思い浮ぶのは前述の杉木喬の評言である。Soviet の文学批評が Socialist realism に基いていようといまいと、'The Grapes of Wrath' の評価に関する限り、それは大体妥当なものであると言うことができるであろう。

2

ソ連における 'The Grapes of Wrath' の受容・評価の状況を以上のように見たのであるが、次に、これに対するアメリカ人の反応をとりあげ、検討してみたい。

James W. Tuttleton は、Modern Fiction Studies において、この小説の Soviet における異常な声価の理由を次のように分析する。[71]すなはち、先ず第1に、Soviet 批評界の情勢の変化である。30年代初期のソ連の批評界は、アメリカ文学はproletaria 的 sentiments の拡大を支持すべきだと考えたが、アメリカの作品は、「文学によって、将来の理想社会、すなはち、さし迫った proletaria 革命によって実現する社会へ至る道を指示するという重責を背負っている soclalist realsm」の目ざす所に近づきえないという理由のために、その大部分の作品を非難したが、30年代の中・末期には、次第に、資本主義制度に対して、絶対的に批判的な作品のみを寛容するという傾向が増大した。かくして、批判的 realism の作品である 'The Grapes of Wrath' は Marxian のいわゆる "tolerant" に全くふさわしい作品であり、それ故に、ロシアにおいて、非常な好評を受けることとなったのであると。第2に、政治的な理由をあげる。Soviet の文学批評は、大体、公式的な政党の政策と密接して来たから、ソ連におけるアメリカ作家の批評の消長によって、比較的正確に、政治的な米・ソ関係の粗密を知ることができる。そして、ことに、ロシアにおける Steinbeck の評価は、前述のように、ほとんど、「米・ソの政治的関係を示す barometer」であり、'The Grapes of Wrath' は、いつも、このような Steinbeck 査定の中心となった。この 'The Grapes of Wrath' が、1940年、部分訳として Soviet で出版された時、ソ連ではドイツ fascism の脅威と、Hitler との不可侵条約の失敗とのため、アメリカ資本主義へ対する批判は緩和され、従って、アメリカ作家に対する批判も大いに和らいでいた。アメリカが、たとえ proletaria 革命を実現しえなくとも、少くとも、fascist を共通の敵とする同盟国として、その支援を受けることができたのである。このような異常な環境の下に 'The Grapes of Wrath' は出現して、賞讃をうけることになつたのである、と。最後に、これらの外的な事情とは別に、作品そのもののもつ、いわば本質的な理由をあげる。すなはち、Steinbeck の資本主義の批判、根絶した Okies 問題の記述の realism、彼らの素朴、勇気、そして、凄まじいばかりの誇り、彼らがそこから生れて来た大地への親近感と、それに対する作家の personal feeling, Joap 一家の苦難、悲歎にもかかわらず、この小説の基底に存

する optimism —これらの本質的諸特質が、Soviet 批評家の心を痛烈につかんだのである、と述べる。

ソ連における、'The Grapes of Wrath' の人気の由来を以上の3つの理由に帰結して、Tuttleton は、また、中間章に関する前述の Nemerovskaya の評言に対して、「これらの言葉は、proletaria 小説に審美的な関心をもつロシヤの批評家の間に広っている、先入見を示すものだ、」[72]と、批判するが、Balasov の評言[73]に対しては "The general tenor of Soviet criticism of The Grapes of Wrath' might have been summed up in Balasov's observation…"[74]と述べる。

この言葉、および、前述の3つの理由のうち、第1、第3のものなどより見て、'The Grapes of Wrath' を資本主義批判の小説であると強調し、また、深く humanism の深奥に触れた作品であると評価する Soviet の批評に対する Tuttletonの態度は、この小説に関する限り、概ね、その評価を肯定するものということができるであろう。

それに対して、次に、Warren French の批判を見ることにする。Tuttleton はロシヤにおける Steinbeck の評価が、その政治情勢に密接することを言ったのであるが、French もまた同じ立場に立って興味を示す。すなはち、第二次大戦後の米ソ間の緊張と、'The Grapes of Wrath' がその出版後、アメリカ国内において、いわゆる party line に従う者たちによって非難されて来たことのために、どのようにこの小説がロシヤ人に受容されたかということより出発する。彼は述べる、'The Grapes of Wrath' は Soviet においては、"evidence of American decadence and the imminent collapse of American System" として、Nazis が戦時中にそれを利用しようと望んでいたように、この小説を利用しようとしていることは明白である、[75]と言い、また、ロシヤの評論家たちは「自分の目的に都合よくするような仕方で Steinbeck の小説を読もうと企てて来たのだ、」として、前述の Mendelson の所説を引証する。また、このような傾向は、1962年の前述の Orlova の評論を見ても、Mendelson 以来少しも変つていないとする。そして、Orlovaの評論は Marxism 文学理論の modern classic への適用の効果を示すものであると皮肉り、また、彼女の分析は、「異質の議論が、いわゆる party line によつて解釈される その仕方を見事に説明するもの」[76]である、とし、さらに、その記述は、「アメリカの批判的作品が、ロシヤの学者にどのような効力をもつかを示すよき例である」[77]とも述べる。

French のこのような批判の由って来る根拠を見れば次のごとくである。彼は言う、'The Grapes of Wrath' の theme は、人間は利己的な衝動を克服して、非常の際には他人を助けるようになることが必要だということであり、この本は、このような道義的問題を中心にもった作品である、と安易な解釈を下し、また、Steinbeck の 'A Russian Journal' (1948)の結語を引用、すなはち、"We know that this journal will not be satisfactory either to the ecclesiastical left, nor the lumpen right. The first will say it is anti-Russian, and the second that it is pro-Russian.…"[79] Steinbeck の著作態度がこのようであれば、'The Grapes of Wrath' もまた、アメリカの extremists に対しても、ロシヤ人に対しても、何の慰めも与えるものではないとし、更に前述の Jean-Paul Sartre の statement を引証してこの小説が、ただにアメリカ資本主義批判の枠内に限定されず、より大きな普遍性をもった作品であることを述べる。そして、Soviet 批評家が、この小説を、いかに利己的利用に供しようとしても、それが徒労にしか過ぎないものであると結論する。

Steinbeck は、はっきりと1つの ideology をもって、'The Grapes of Wrath' を propaganda 小説として書いたものではないことは確かである。しかし大恐慌に支配された30年代のアメリカ文学の作家たちは、大なり小なり、自分たちの作品に明確な社会意識を表明しようと努めた。'The Grapes of Wrath' もまた、そこに豊かな社会意識の横溢を見るのであり、Albert Maltz(1908-)の言うように、「30年代の最も力強い作家たちは、政治を用いて、政治から使われたのではなかった」[80]のではあろうが、'The Grapes of Wrath' は、French の強弁にも拘らず、アメリカ資本主義批判の小説であることを否定することはできないであろう。それ故、この小説が socialist realism の批評家たちを満足せしめるには充分であり、彼らがこの小説を枉げて読み、利己的利用に供しようとしたと言う French の批判は、必ずしも妥当であるということはできないのである。否、むしろ、French の批判こそ、政治的な偏見に動かされて形成されたと言うこともできるであろう。

さらに、French のこのような批判は、彼の文学批評の立場からも由来したと考えられる。Ransom に始まる New Criticism は、40年代50年代を通じてアメリカ批評の主流の観を呈し、それは「手軽に操作できる最新型の電気器具のように一気に普及して」[81]現在に及んでいる。新批評家たちは、前代の印象主義批評が「主観的放恣に流れ易く、当の作品に含まれないようなことを語る傾きをもち」[82]また、批評家の受けた感銘の具体的根拠を充分に示していない、として反対し、また作品の autonomy を主張して、「作品の中に含まれている作者

の人生観や政治的態度によって作品を批評することは、作品の批評ではなくて別のものである。」[83]とした。

New Critics の主要な一人である Richad P. Blackmur(1904) は、従来のアメリカ批評、主として社会学的、心理学的批評と、New Criticismの新しい立場とを強く対比して、非難の矢を向ける。そして好例として、Van-Wyck Brooks の著書と Granville Hicks の 'The Great Tradition' (1933) などをあげて、これらに共通の点は、「文学から離れた内容を扱い、それなりには有益でありながら、文学を文学として論じていない」[84]とし、例えば左翼批評家 Hicksは、「Marxist の立場からアメリカ文学を解釈、評価したもので、彼のもつ政治的、社会的見解で作家がものを見ているかどうか、またそれが作品にいかに表現されているかによって作品を評価しようとするのは、その作品の中に実際存在しないような作家の目的をとりあげたものであって、批評とは言えない」[85]と言い、また Brooks は、「他の目的のために、 James の作品を利用しているだけだ」と攻撃している。

こゝで、われわれは、先述の French の評言を思い浮べよう。すなはち、「ロシアの批評家たちは、自分の目的に都合よくするような仕方で 'The Grapes of Wrath' を読もうと企てて来た」と言い、また「Orlova の分析は、異質の論議が party line によって解釈されるし方をよく説明するものである。」と。これを見 Blackmur の評言を見るとき、両者が全く一致するのを知るのである。この一事をもって、 French の批評の立場が New Criticism にありと速断するのは、もちろん、軽卒にすぎるであろうが、しかも、彼の評言が、少くとも、New Criticism の多少の影響のもとに形成されたであろうとすることは、必ずしも牽強付会として退けることはできないであろう。

Notes

Introduction

1. Malcom Cowley (1898-) の評言。'The Reader's Encyclopedia of American Literature' (New York, T. Y. Crowell Company, 1962), p. 402.
'The Grapes of Wrath' won the 1939 Pulitzer Prize.

2. 'Steinbeck and His Critics' (University of New Mexico Press, 1957), 'A Companion to The Grapes of Wrath' (New York, The Viking Press, 1963), etc.

3. 大橋健三郎、倉橋健など。

4. Warren French, 'A Companion to The Grapes of Wrath', p. 151.

5. 上掲書。

6. James W. Tuttleton, "Steinbeek in Russia: The Rhetoric of Praise and Blame," Modern Fiction Studies, Vol. xi, No. 1(Spring 1965).

7. Deming Brown, 'Soviet Attitudes toward American Writing' (Princeton: Princeton University Press, 1962).

I

8. 最初の出版から3ケ月以内。(W. French, op. cit. p. 148).

9. The first edition in England was published in September, 1939. See 'The Grapes of Wrath', (Penguin Books, 1951), p. 4.

10. La Fontaine's 'Fables' (Books I～XII), published 1668 to 1694, revealed his true genius. These, classical in source, are based especially on the fables of Aesop, Phaedrus, Horace and the Indian collection by Pilpay. ('Dictionary of French Literature,' London, Peter Owen Ltd. p. 169.).

11. Jean-Paul Sartre の言。(French, loc. cit.).

12. 主として Resistance 出版業者 Edition de Minuit により刊行された戦時版。

13. 第2次大戦中のフランスにおける 'The Grapes of Wrath' の受容状況に関する記述は、 Thelma M. Smith and Ward L. Miner, 'Transatlantic Migration'(1955)を source とする。(French, loc. cit.)

14. Ibid. p. 149.

15. André Maurois,『アメリカ文学の嗜虐性』. André Maurois 著、島田正一訳、「フランス紀行」(東京. 1941)、月報世界文学全集II—19)河出書房新社、1962), p. 2.

16. French. op. cit. p. 150.

17. UNESCO 報告、(1959, 1960). なお、同年、イタリアのある出版社は、'The Grapes of Wrath' 出版20周年記念特別版を出した。(Ibid. p. 149.)

II

18. 石一郎訳、世界名作全集62(平凡社)。同、世界名作全集39(筑摩書房)。大久保康雄訳、現代世界文学全集32(新潮社、第2期版、1962)。石一郎訳、世界文学全集(河出書房、1955)。同、倉橋健解説、世界文学全集11—19(河出書房新社、1962)など。

19. 石一郎、大橋健三郎、大久保康雄。

20. 大久保康雄訳、新潮文庫(上、中、下)、1955。大橋

健三郎訳、岩波文庫（上、中、下）1961。石一郎訳、角川文庫（上、中、下）1956。大久保康雄訳、コンパクト・ブックス15（集英社、1964）。

21. 杉木喬、「アメリカ文学試論」東京、大興堂、1946。鈴木幸夫、「アメリカ現代文学」東京、白桃書房、1946。杉木喬、龍口直太郎、高垣松雄共編、「現代のアメリカ文学」東京、東西出版社、1946。

22. 志賀勝、「アメリカ現代作家」東京、研究社、1947. 再版、1958。
同、「アメリカ文学現実主義時代」同、1950。
同、「アメリカ文学の生長」同、1954。
滝川元男、「現代のアメリカ文学」大阪、大丸出版、1953。高村勝治、「現代アメリカ小説序論」東京、研究社、1954。龍口直太郎、吉武吉幸共編、「現代アメリカ文学」東京、有信堂、1958。
斉藤光、「アメリカ文学と生活」東京、創元社、1958。佐渡谷重信、「アメリカ作家の作品とスタイル」東京、研究社、1956。
「英米文学史講座11」東京、研究社、1961、（野崎孝の評論所載）。

23. 現代世界文学全集21、（新潮社、1953）、p. 4.

24. Ibid. pp. 6—7.

25. 月報世界文学全集11—19、loc. cit.

26. 27. 高村勝治、op. cit. pp. 160, 161, 162.

28. Alfred Kazin, 'On Native Grounds', (New York, Harcourt, Brace and Company' 1942), p. 394. 杉木喬、大橋健三郎、佐伯彰一、他訳、「現代アメリカ文学史」（東京、南雲堂、1964）、p. 462.

29. 高村、op. cit. pp. 163—164.

30. 野崎孝、『スタインベック』、斉藤光編、op. cit. pp. 115—121。

31. F. Bracher, "Steinbeck and the Biological View of Man", 'Steinbeck and His Critics', pp. 183—196.
英米文学史講座11. pp. 259—260 参照。

32. Ibid. p. 261.

33. Loc. cit.

34. From Steinbeck' s letter to his agent Elizabeth Otis. ('The Portable Steinbeck' New York, 1946. pp. xx—xxi), Ibid. p. 263.

35. Loc. cit.

36. Steinbeck, 'In Dubious Battle' (New York, The Modern Library, 1936), p. 143.

37. 佐渡谷重信, op. cit. p. 128.

38. W. M. Frohock, 'The Novel of Violence in America, 1920-1950' (1950). Alfred kazin 前掲書。Peter Lisca, 'The Wide World of John Steinbeck' (1958). Tedlock, Jr. & Wicker(ed.)'Steinbeck and His Critics' (1957), その他。

39. ここでは、'The Grapes of Wrath' ないし Steinbeck の諸作品に表われる一抹の東洋的諸思想、すなはち、古代インド思想（Veda）、老子思想および仏教思想（煩悩即菩提ないし自然法爾）などへの言及・指摘をいう。

40. French, op. cit. p. 149.

III

41. Sinclair Lewis (1885—1951) won the Nobel Prize in 1930, Eugene O'Neill (1888—1953) in 1936, Pearl Buck (1892—) in 1938, William Faulkner (1897—1962) in 1950, and Ernest Hemingway (1899—1961) in 1954.

42. F. J. Hoffman, 'The Modern Novel in America 1900-1950' (Henry Regnery Co., 1951).
高村勝治・大橋健三郎共訳「アメリカの現代小説1900-1950」（東京、評論社、1955）、pp. 216—228 参照。

43. French, op. cit. p. 147.

44. 高村勝治は、アメリカ文学の特質として、規模の大きさ、社会性、そして、原始的な素朴なものに対するあこがれの3つを挙げる。そして、けがれのない美しい素朴な自然の賛美の感情は、開拓者たちのそれに由来するものだとしている。（小原敬士編、「アメリカとアメリカ人」毎日新聞社、1956, pp. 204—205）。

45. French, loc. cit. なお、（ ）内の句は筆者挿入。

IV

1

46. 'Modern Fiction Studies', p. 80. French, op. cit. p. 149.

47. Glenora W. Brown and Deming B. Brown, 'A Guide to Soviet Russian Translations of American Literature' (New York, King's Crown Press, 1954), p. 195.

48. French, loc. cit.

49. Literaturnoye obozreniye, No. 12 (1940). p. 38. Deming Brown, 'Soviet Attitudes toward American Writing' (Princeton, Princeton University Press, 1962), pp. 74—75.

50. Inostrannaia Riteratura, No. 3(March 1962), pp. 197—208. "Money against Humanity" by R.

Orlova in this magazine has been translated from the Russian by Armin Moskovic. ('A Companion to The Grapes of Wrath', pp. 152—159).

51. Ibid. p. 156.

52. Idid. p. 155.

53. Ibid. p. 156.

54. Khmelnitskaya, "Grozdya gnava Steinbeka", Literaturny sovremennik, No. 12 (1940), p. 157. (Deming Brown, op. cit. p. 75).

55. French, op. cit. p. 156.

56. Khmelnitskaya, p. 159. (D. Brown, loc. cit.)

57. French, loc. cit.

58. Zvezda, Nos. 8—9 (1940), p. 274. (D. Brown, op. cit. pp. 77—78).

59. French, op. cit. p. 158.

60. Loc. cit.

61. French, op. cit. pp. 158—159.

62. Novy Mir, No. 10 (1940), p. 213. (D. Brown, op. cit. p. 77).

63. Zvezda, p. 273. (Ibid. p. 76).

64. Modern Fiction Studies, p. 83.

65. 'Soviet Interpretation of Contemporary American Literature', trans. Deming B. Brown and R. Mathewson, (Washington, Public Affairs Press, 1948), p. 18.

66. R, Orlova, "Money against Humanity", French, op. cit. pp. 156—157.

67. Ibid. p. 157.

68. Novy Mir, p. 214. (D. Brown, op. cit. p. 76).

69. Orlova, (French, loc. cit.).

70. Modern Fiction Studies, p. 79.

2

71. Ibid. pp. 79—80.

72. Ibid. p. 81.

73. 本文 p. 96参照。

74. Ibid. p. 82.

75. French, p. 150.

76. Ibid. pp. 151—152.

77. Ibid. p. 152.

78. Ibid. p. 145.

79. Steinbeck, 'A Russian Journal' (New York, The Viking Press, 1948), p. 220.

80. Daniel Aaron, 'Writers on the Left' (New York, Harconrt, Brace & World, 1961), p. 392.

81. 佐伯彰一、『教壇から見たアメリカ文学』(朝日新聞、Sept. 19, 1964).

82. 小川和夫、『アメリカの批評』(英米文学史講座12). p. 148.

83. Ibid. p. 155.

84. 高橋正雄編、「ニュークリティシズム研究」(東京、北星堂、1963), p. 146.

85. Ibid. p. 147. 小川和夫、op. cit. pp. 155—156.

一

二十五日　暁夜恒例之法会也

午の刻**和歌披講之式左之通**」

先延執上〔延寿王院（大鳥居）・執行坊・上座坊〕并講師読師発声之人数

延家え相揃　夫より御詩歌之箱守護致之　一列々々に御橋通　御宮に参着

詩歌二拾五首組題にて宮様方関白様雲上方之分也　短冊箱に入　御撫物御

用之御箱に入候て　文台も其内に入置候也

右之箱烏帽子白張之者四人にて舁奉る　延家え兼て附添之足軽五人御箱之

左右に附添奉る　小使之者両人先払致す

延家之家頼四人烏帽子狩衣にて又左右に附添奉る　金棒引四人先に立

御造営奉行并手附両人御宮庭上に控る　御側筒頭足軽頭等延家門前に控る

御箱延家より出御之上　参役六人順々に一列々々に参る　諸人下座致させ

申候事」参役六人并宮司中衣常法裳七条也　列附左之通

先払二人　金棒四人　足軽五人　宰領四人　白丁四人御辛櫃持

次に延寿王院　青士五人　侍四人　傘（白丁）一人　沓持（白丁）一人

跡箱二人

御供屋隠居　講師にて出仕也　青士三人　侍四人　傘（白丁）一人

沓持（白丁）一人　跡箱一人」

執行坊　青士三人　侍四人　傘（白丁）一人　沓（白丁）一人

草履一人　跡箱二人

上座坊　青士二人　侍二人　傘（白丁）一人　沓（白丁）一人　跡箱一人

読師　連歌屋　同　断　」

発声　小野加賀　同　断

延執上は拝殿東より上る　御隠居連歌屋加賀は拝殿西より上る」

六人御宮透縁揃之上　護灯両人立出　拝殿より御辛櫃を透縁中央に置也

延家并宮司中助力して御蓋をとり　御短冊延家取出しに相成　夫より御辛

櫃拝殿に下る　透縁にて延家より右之短冊箱を講師に被相渡候上　護灯当

番之者又壱人拝殿に参り　御辛櫃より文台取出　護灯三人一同に透縁西の

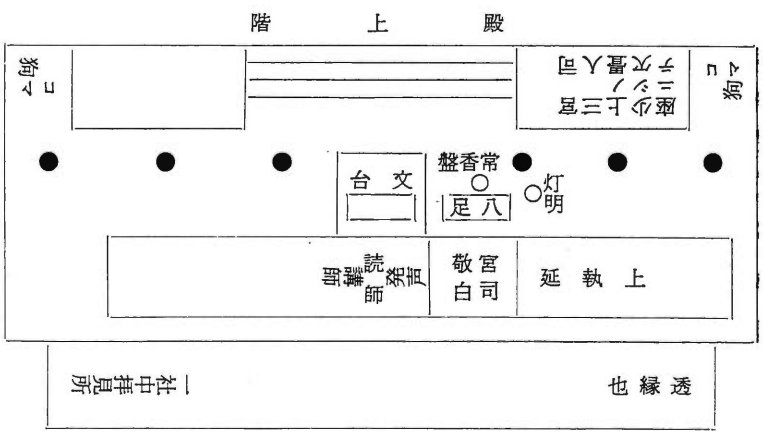
方に控る　文台持候壱人之護灯西殿上唐獅子之前に控る　夫より参役六人

一同に殿上に参て着坐致す　宮司其次に殿上に着坐　夫より護灯文台を読

師之前に置候て引取　次に宮司当番敬白致す　次に披講始る　左之通

講師先短冊箱を開き壱枚取出し」文台に置　読師其短冊を取て中音に読曲

なし　読終て　発声之者上音に曲あり　助声二の句より同音に曲有也



尤助声は読師相兼る

壱枚々々に同様之義也

尤宮方摂家方之分は三返　其余は二返也

詩之分は読師曲無に壱返中音に読也

右終て講師右之短冊を桐の仮箱に納候て瑠璃段に相備る

護灯文台を引候て　皆々柏手相済　透縁に下座致す

出仕之節同様に一列々々引取

延家に相揃候上　同院広間にて参役六人御三寸頂戴致候て

帰宅也　宮司中は御宮出勤而已也

御宮**披講座列**左之通〔上図〕」

此通之式にて文台之下には

御社参之節之御拝畳を敷也

読師発声之坐は西の殿上畳

を中央に敷よする也

当節満盛院は不快にて出仕無之」

一　二十七日　**御能御奉納**　舞台は去冬より新規に取立　財木等一切新調也

福岡御普請方出役に成〔桟敷ノコト、配置図ナド省略〕」

一　二十八日　御能役者より役筋え願出候由にて　同日奉納致す　見物随意也

右御能両日番組

廿七日　翁（千歳　三番叟）　弓八幡（重左衛門）　間（末広）　田村（九市）

間（柿山伏）　羽衣（五三郎）　間（米市）　鉢木（重左衛門）

間　猩々（政吉）

廿八日　氷室　間（靱猿）　箙　間（口真似）　班女　間　黒塚

間（骨皮）　盛久　間（太刀奪）　小鍛治　間　祝言　岩舟

〔コノアト、奏楽・弐万五千灯、三千七百韻之連歌三物ナドアリ、省略〕

月細く雁かね靡く雲のはに　〔小鳥居〕信　昇
秋の時雨は夜嵐の末　〔御供屋〕信　竜」
庭に見し昨日の艳旦敷て　〔執行坊〕信　亨
軒を覆へる松深けなり　〔浦之坊〕信　彦

次々略す　名残之花左に記す

雨止て花に色香も十寸鏡　公

右相済当日七つ時御帰館也

従是　御忌中之次第

二月十日　御幡餝〔下略〕

一　立花二瓶二七日之間殿上畳之」上東西に置　延家より兼立花師速水氏え頼有之　同人延家え止宿に相成　小使夫等入用也

一　十一日より十七日迄連歌　尤初後素絹五条　余日は直綴小五条也　右様衣帯并出勤日取之義は　延家より回章にて申来る事

東西回廊にて有之　延家より日々昼飯等持出し　禁裏御祈禱之節同様之料理向也　尤廿〆目之内にて　小使夫等入用

右七日之間　日々御供後早々催鐘有之　此段兼て鐘撞え申聞置

連歌十五日迄に六百韻　東西にて三百韻宛興行　十六日十七日両日に読上け也」連歌座列左之通

東之回廊

延寿王院　御供屋隠居　信覚
執行坊　満盛院　快源
南　信亨　○上座坊　実量
勾当坊　○寺主坊　観増
泰重　○安秀院　全継
大夫度寺　○迎寿院　義解
仙賀　北之坊　全祐　〔博多　鏡天神〕
○東北院　信宝
真寂坊　良海
五十境坊　良範
○東北院　信宝
西之回廊
御供屋　小鳥居　信昇
検校坊　○浦之坊　信彦　南
快俊　花台坊　良誓
信竜　常修坊　快芳
信順　安祥寺　謙重
小野伊与　氏興
○同相続　昌言
連歌屋　昌順
小野加賀　氏伸
同　光明寺　瑤巌
幸　岡本　和泉
雄　円　智　坊
○小野但馬　氏章

○印之分執筆也

右三千七百韻之内御奉納七百韻は兼て連衆にて無之面々は一順名前無之尚又北之坊は初千句第一而已名前出る　岡本和泉円智坊両人は一切名前無之　寂門坊良程始終不快にて無出勤　明星坊石築地坊は無住也　小鳥居隠居信泰執行坊隠居信隆　時々自由にて出方致候義は指閊も無之由に候得共当節は両人共出方不致候て相済候也」右連歌之節詰方之者給仕子等皆延家より出る　烟草盆は有之候得とも連衆中しう炉持参致す也

一　七百韻之**連歌御布施**福岡より銀五数御渡しに相成　右は兼て連歌致し候面々而已配当に相成　三上衆〔山上衆・衆徒ノコト〕連歌不致候面々は出席而已にて御布施配当無之　但配当之次第　延家三人前　連衆中皆々一同　隠居後住は半高也　尤隠居にても**執筆脇**は連衆同様一人前也　迎寿院并水田東北院は四半高配当也　都合当節は拾六人刻にて配当有之左之通

延三人　小　御　執　浦　上　寺　安　伊与　加賀　但馬　連かや

御隠居(執筆脇にて同並)　連後住(半高)　東北院迎寿院(二人にて半高)

〆拾六人刻

当節御渡銀延引にて十月に漸々御渡有之候間　此処に書加置也」

一　十八日　十九日　巳の刻　不老文太夫　惣之市　神楽相勤る　終て水田社人四人神楽相勤る　午の刻大祓有之〔下略〕

一　二十日　巳の刻曼陀羅供〔下略〕」

一　二十一日　同日十講会之筈之処　二十二日承天寺指閊之由にて同寺より頼にて　二十二日と日取操替に相成

巳の刻首楞厳会　承天寺諷経也〔下略〕」

一　二十二日　巳の刻十講会〔下略〕

一　二十三日　」同日御能興行之日取に有之候処　国君御障之日に付　日限御延引にて　廿七日御能御奉納に成　因て同日は勤行筋休間也

一　二十四日　巳の刻法華三昧行道懺法〔下略〕

同日　未の刻皆参御供　元日之式　文人中九百年御忌之節より願に因て御仮殿に出仕也　控所は三綱之次座に控る〔下略〕」

より御荷船御渡に付福岡湊より乗船有之也

一　御忌中小使入用之出夫三百人程郡々より出候也　延家より郡奉行え前弘頼に相成候而　郡奉行より大庄屋え達に」相成候得は　御忌中入用次第人数高　延家より大庄屋え引合に相成筈〔以下略〕」

一　亥八月十八日　御宮御普請成就に付執行坊宿坊之御翠簾五流掛替に相成宮司護灯世話致す〔以下約二頁略〕

一　亥十月　連歌三千句丈**仕寄**有之

初千句　延家受持之分　朔日より五日迄にて終る
二千句目　小鳥居宮司中にて順々に興行　十八日より廿二日迄に終る
三千句目　上官中にて興行　廿六日より十一月朔日迄に終る

尤御供屋　執行坊　浦之坊にて一日つゝ会座　三綱中にて一日上座坊会坐」文人中にて一日　小野加賀会坐　連歌屋にて衆徒中相加り竟宴の饗応也　右に付別段切銭等無之

千句毎に朝六つ半時揃也　昼晩二度つゝ賄に成　尤初日は昼軽き本膳膾晩は一菜にて引杯　日々煎染壱つ茶受に出す　二日目より昼晩共一菜にて引杯　千句毎に竟宴有之

竟宴之献立

本膳　後段酒肴　吸物二つ　三つ盆　数々

右

延にて一度　小〔鳥居〕并宮司中分検校坊にて一度　一社中分連歌屋にて壱度

右連歌三つ物等後に出す」

一　子正月　小社家左之人数え延家より廿〆目之内にて装束料渡に相成〔下略〕

一　子正月廿七日　延家に上官中寄合有之　諸事申談に成

一　同晦日　当節御奉納七百韻之連歌之内　百韻并表十句丈つゝ」延家にて**仕寄**に成　尤昼飯并夜酒等延より出る

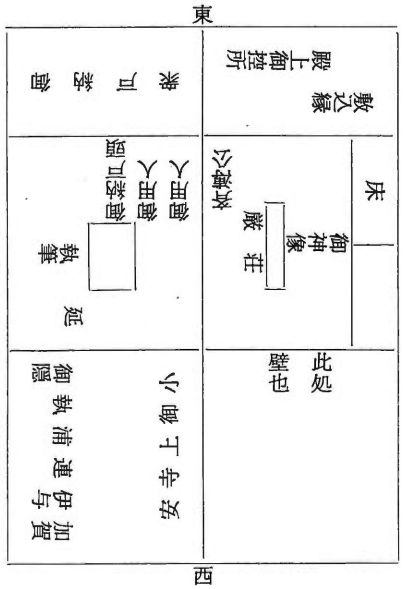
一　町方にても二月十一日より廿五日迄魚肉禁制之義　兼て延家より福岡表に申出に相成候に付　郡方よりも大庄屋え達に相成候事〔中略〕触状左之通　来る二月十一日より廿五日迄御神忌法会遂修行候条魚類」肉類取扱候義堅停止之事〔下略。火用心之義。博奕諸勝負堅停止之事ナヾ〕」

一　二月九日　同日宮司立合役護灯罷出御宮荘厳致し　延家上見分有之　御幕等張立之筈之処　同日殿様御社参に付　右御荘厳等は八日に相成也

御宮惣回廊并拝殿前に手摺竹仕回に成　延家受持也

一　九日　殿様御社参にて　御忌に付御連歌御奉納有之　延家に連衆中罷出る　尤本式の御社参にて御供中も皆々麻上下也　御神拝并独礼中御目見等は一切例之通」〔注。独礼・惣礼・無礼はランク〕

右御連歌中座列左之通



執筆　御供屋信竜　執行坊信亨　五十韻つゝ交代にて致す

御連歌相済候上連衆中え拝領物有之　尤寺主坊安秀院は無礼に付　願に仍て一立限り出席被仰付候義に付　拝領は銀子也　右御連歌正月之内御用人より延家え引合に相成　其後延家御館え御呼出」之上　斉溥公御直に延家信全老え御相談にて御発句被遊　六句目迄福岡にて仕寄有之　信全老持帰り之上順々仕寄致し　名残之花之句残し置　又々福岡に指出しに相成候上　右花之句又々公御自句に被遊候也

何路

松梅の栄え尽せぬ宮居哉　　斉溥公
ためし替らす祭る二月　　信全
舞人の袖も霞の立添て　　立花平左衛門　増熊
光の移るけふののとけさ　　浦上帯刀　正質
浦波も源(カ)て小舟や出すらん　　竹田助之亟　義存
明はなれたる遠の嶋山　　小川専左衛門　実節

〈資料　四〉

〔小鳥居家蔵・天保15・執行坊編『一山社用旧格雑記』より〕

嘉永五年壬子二月

九百五十年御忌之記大概

一　嘉永元年極月々次寄合之上にて　延家信全老より同院先規之記録二冊被相見せ　先例之通福岡表え願出之義　且御宮諸品修覆等之義可申出旨示談有之〔注　延家―延寿王院―大鳥居氏ノコト〕

一　先例三ヶ年以前之正月に諸事願出に相成居候間　当節も酉正月願出有之筈之処　当年御撫物〔オンナデモノ〕上京年にて　願筋も繁雑之由に付延家上京相済帰院之上早々可願出との事にて　正月迄は願出無之

一　御池さらへ之義は申の冬申出に相成居候処　酉二月御聞済に相成候間」延家より郡方え右之趣掛合に相成

一　酉三月蓮池さらへ有之　人夫郡々より出す

一　戌三月心池さらへ有之　人夫千七百人之積りにて千三百人にて相済　郡々より出る也

一　酉閏四月延家帰院に付　五月六日出福有之　先例之通願書指出に相成右願書は延家旧記之通故略す

一　同十月右願之通被仰附候段　月次寄合之上延家より被相達候　御書渡左之通

延寿王院え

天満宮九百五拾年御忌　来る子年相当　先規之通執行仕度候　右に付連歌之発句披講之詩歌等堂」上方え為所望　御忌前上京可仕段　**和歌披講伝受**として社中両三人召具候例に候得者　神用附届彼是入用凡銀弐拾貫目無之ては難相調　且官位も加階之年数にて先格有之　旁難指捨　右銀高御寄附被仰附被為下候はゝ　神祭官位をも相仕舞申度段願之趣相達候　仍之以御詮議　先例之通銀子弐拾〆目　内此節五〆目御寄進被成　残り拾五〆目は御国中勧化御免被成候　右之外神具修覆能興行等之義は其節に至り可被仰附候事

酉十月

別紙奉行所え御達之書附左之通　」

町奉行え

天満宮九百五拾年御忌　来る子年相当　先例之通銀子廿貫目之内　五〆目は此節御寄進　残拾五〆目は御国中勧化御免被成候段は　別紙相達候　右勧化之義は来戌年より子年迄三ヶ年に取立候様　延寿王院え可被相達候事

酉十月

右之通之御達に候得共　子年迄に勧化致居候ては間に合兼候　尚又先例御国中寄附之分役筋より取立に相成候て御渡に相成候事故　此節も亥年迄に役筋より世話有之候様　延家より又々申出に相成候由也」

一　酉正月　御本社御道具幷一社中受持之諸末社御道具等修覆有之候分　書上げに相成候事

一　同五月　御用方より御宮御普請場等見分有之也

一　**連歌三千七百韻**之内　初千句は堂上方発句にて　表十句つゝ花下にて致し　花下昌同より戌正月延家え贈り来る　尤前以て延家より頼に相成居候也

右連歌三物等後に出す

一　戌八月　明春延家幷社中二人上京に付　当節は連歌屋昌順　小野加賀氏伸上京可然　月次寄合之上申談にて　右両人えも延家より申附に相成

一　戌十月々次寄合之上　御宮御普請」取掛に相成候段延家より達し有之尤諸末社等御造営御普請は其以前より追々造作有之也〔以下略〕」

一　同寄合之節明亥正月より高札立候に付　当冬より仕立置候様　延家より示談有之　右高札は延家世話被致候事　場所は三ノ橋鳥居西柱之前也

〔札　面〕

来壬子年二月

〔柱　面〕

天―九百五十年追福法会

当山より無縁勧化一切出不申

従十一日廿五日迄

右之札檜木にて仕立候也　先例二川氏え頼有之候得とも　当節は吉富柱次郎え書頼に成　尤菓子酒一瓶進物有之　延家え同人出処之上書写致す

右之高札幷進物雅□等は御惣物銭より出る也

一　亥正月　右高札立」

一　亥二月　御供屋隠居信覚　小鳥居信昇　執行坊信亨延家に参り候て御連歌三千七百韻之**趣刻名盛附**等致す　延より一寸酒飯出る

一　同月十五日　御宮御普請に付御囲始る　右之式略す

一　同三月廿七日　延家幷連歌屋小野加賀上京発足　尤昌順氏伸苦労料銀三百目つゝ　外に道中賄等　廿〆目之内にて　延家より渡之に成　福岡表

第四　咲て世々名に流れけり花の滝
第五　一重八重千代やかさねて桜花
第六　花はけふおらぬをぬさの手向かな　」

第七　ちりうせぬ松の葉やいく千々の春

〔ココマテ原本本文中〕

享和二年壬戌聖庙九百年**二十五首詩歌**自京都御詠

〔原本別紙中ニアリ〕

早春梅　忠良
新玉の春のひかりを神かきやまつさく梅の花にみすらん

浦霞　雅盛
もしほやく煙も春はうちはへて霞をいろになひくうら風

寄雲花　為敦
美よしのゝはるはいく代も雲の色にかさねそへたる花の山かけ

首夏　織仁
夏のきて梅の梢は実をむすふわか葉そしけき神の御社

初郭公　愛徳
はつ声をきくそうれしきほとゝきすほのかなるをもうらみとはせす

罌麦露　実秋
ちりをこそ花にもいとへとこなつにをきぬるけさの露ははらはし

納涼　伊光
千世のかすきよくすゝしくよる波になつをもしらぬ生のまつはら

七夕河　美仁
いくめくりくもりなきよの星合になかれてすめるあまの河水

菊花盛　持豊
はなさかりうつろふことも白菊は神のめくみの露やかけゝむ」

時雨　等覚
幾千里さそひへたてぬ山かせにくものかよひちしくれ行そら

千鳥　雅光
むら千鳥友をさそひて浪風もさえゆく月に浦つたふ声

神楽　光祖
仰け猶神代おほえて榊葉のもとするゑかれすうたふこゑ〳〵

述懐　為章
とこしはのまもり久しく天満る神にたむけの松のことの葉

驚知春　為徳
廟外百花猶未開独憐好鳥報春来　試看皖晛知何処占得相公遺愛梅

柳風　長親
裊々柔条瘦四肢繊々嫩葉展双眉　樹間時有軽風起恰似刑姫学舞姿

夏月　有庸」
碧霄月満夏雲収晴漢金波滌暑流　竹簟紗窓明旦爽水風庭樹浄於秋

聞虫　為弘
唧々陰虫報素秋衆声相接半叢頭　聞来恰似奏天楽月影夜深祠庙幽

海辺鹿　俊長
秋深海嶠水烟空野鹿求群出晩叢　濯々踏来千浦月呦々鳴送五更風

見月　長親
行雲流水去無還唯見月明上碧山　九百年前秋夜影猶将光徳照人間

滝辺氷　在淵
朔風凛烈暮山陰瀑布無声返景沈　縦使前賢将洗耳寒光徹骨積氷深

遠山雪　宣光
林風籬菊謝玄冬寒景（ムシ）近来懶曳笻　早起推窗覚幽覚天辺積雪皎遙峰

松歴年　有政
昌泰表惶不翅翔享和□仰□翳光　忠貞準擬長松樹九百年来神徳彰

砌竹　愛親
嫩色更加両三竿亭々抽出傍欄干　可知鉛節凌雲去枝葉長侵書帙寒

江上舟　福長」
浩々溶々千里流江潯欲渡一孤舟　紅蓼深処櫓声響映水驚飛沙上鷗

社頭久　高辻前大納言　尚長
一世元勲万古香也知星斗煥文章　鳳兮歌就西溟外廟宇結将天地長　胤長

以上二十五首

壬戌三月　前満盛院　快伝写之　」

第七松　何木

色いく代春を忘れぬ神の松　信廉
長閑なる日の移る真砂地　賢増
波よする浜への霞今朝晴て　信廉」
雨間折よく船出こそすれ　信誠
蜑人や釣の仕業や急らし　信賢
難波渡りの明果る比　昌逸
月の暮見しは桜の薄丹葉　実詮
垣のしりへは稲のしら菊　快伝
ウ盈いつよりか音を絶ぬらん　玄川
我も敷捨行旅衣　信純
相舎出立袖の軽気にて　執筆

第八梅　二字返音

この花や九かへりの春の色　信廉
緑立そふ常住の松　賢増
若水を結ふ岩井や清からん　信廉」
年を迎へし袖の豊けさ　信誠
言の葉の心新たに読出て　信賢
月は替らぬ望の夜の空　昌逸
浮雲の行方は不知秋の風　実詮
たゝ露はかり時雨せし山　玄川
ウ友を待爪木の道の休らひに　信純
放ち置つる駒そ嘶へる　執筆
沢水の流れも絶ぬ野を広み　信庸
苔地の丹良影は薄しも　玄川
分行はまた暮やらぬ道のへに　信誠
近き栖のかへさいそかし　信純
ウ末迄も作り果へき小田の菴　信賢
限りしらるゝ山の片岨　執筆
桟のそなたも雲の隔しな　信庸

第九松　花之何

神風や松に聞えし代々の春　法眼昌逸
靡く霞も八重の注連縄　信廉」
雪消る垣は頃日ゆひかへて　実詮
うつし住つる山際の里　賢増
涼しくも舎る筧の水の月　快伝

第十梅　何船

梅の花玉と見えつる井垣哉　高辻新宰相福長」
鏡も清き御社の春　昌逸
八咫鴉あした青陽に声立て　玄川
門出は月の夜を掛てけり　信廉
送りゆく関路の露や深からん　信誠
岩間の水の音も冷し　実詮
夕汐は遠く引つる浜川に　信純
誰か小舟を指捨にけん　賢増
ウ掻残す藻屑はこゝら打乱れ　信賢
雨のふる田と成し一方　快伝
柴の戸や只山風の叩くらん　執筆」

追加

廻り逢ふ春や久しき宮柱　高辻少納言俊長

享和二壬戌年五月

前満盛院　快伝

右菅家之発句昌逸代句御頼之由ニ候一順通**里村家**へ延寿王院**凛**ニ付」昌逸法眼より参候書面之通写置候間**名順社格ニ相違**候也

信庸実詮病中平生之社役出勤無之当御神忌同前」

〔ココマデ原本別紙〕」

〔ココヨリ原本本文中〕

二千句　発句　初千句別紙写置也

第一　春は世々香ににほひけり神の梅　〔大鳥居〕信賢

第二　代々を経て見るに花あり神の松　〔御供屋〕信庸

第三　ふりぬ香やあるし尋し神の梅〔検校坊〕快隣

第四　春いく世神やしめゆふ老の松〔勾当坊〕円重

第五　今も香や天かけるらし神の梅〔上座坊〕実詮

第六　緑たつ陰いや高し神の松　〔連歌屋〕昌因

第七　咲梅や神のまに〳〵世々の春〔伊予〕氏尚」

第八　仰き見る瑞籬久し松の春　〔加賀〕氏意

第九　梅か香を神の宮居のしるへかな〔但馬〕氏聡

第十　さらて住宮居や千代を松の春　快伝

三千句　発句

第一　年にそふ緑や恵み神の松　〔小鳥居〕信純

第二　仰け香は世にけしめなき神の梅　〔浦之坊〕信延

第三　生し世をおもへは遠し松の春〔寺主坊〕賢増

第四　梅あらは外なたつねそ宮所〔都維那〕廉靖」

第五　常盤木や神の御めくみ松の春〔花台坊〕良収

第六　今こゝにあるやむかしの神の梅　良恭

第七　一夜松生ゆく末や千々の春　〔安祥寺〕慈重

第八　守るてふ代々の薫りや神の梅〔常修坊〕快句

第九　雪きえて松はまことの緑かな〔六度寺〕準賀

第十　伝ふ香は代々にあまねし神の梅　〔執行坊〕信誠

右二千句は申年春**仕寄**相修候事」

邦君御幸納七百韻

第一　長き世をあらはす梅の立枝哉

第二　花の香は明るをまたん朝戸かな

第三　八雲たつ山やさくらの華盛

被下候事　八百五十年忌ニモ御布施被下候由承伝候

一　八百五十年之通御神忌為諸入用正銀廿貫目従福府延寿王院ヱ御渡
御修覆物并同院依先例上京和歌披講為伝授連歌屋昌因小野加賀氏
意上京入財右之内ヨリ出候事
右弐十貫目八百五十年ハ御国中人高ニ御割付之由　此節モ百姓
ヱ掛候由伝承候

聖廟九百年三千句之初千句〔原本別紙中ニアリ〕

第一松　山何

宮はしめ松は夫よりいく千春　高辻大納言胤長卿
仰けは高し瑞籬の梅　〔大鳥居〕信賢
月移る御池の氷ひま添て　〔寺主坊〕賢増
風も長閑に渡る反橋　〔小鳥居〕信純
岩か根に下ゐて鶴や求食るらん〔上座坊〕実詮
人気稀なる十代田の末　〔執行坊〕信誠
村竹の小枝もたはむ雪の日に〔大鳥居〕信廉
釣簾巻袖の寒き朝明　玄川」
北窓にむかへは山の遠からて　昌逸
船よせし江の波閑也　〔御供屋〕信庸
蜑の引網のえ物は取々に　執筆

第二梅　夕何

野も山も梅そ栄ふる神の国　高橋宰相在凞(テル)
豊かに諷ふ鶯の声　信純
庭の面や長閑なる日の廻るらん　信誠
軒の細雨の漸晴ぬめり　玄川
呉竹のそよ〳〵戦く風立て　信庸
岸根によする波の閑けさ　〔前満盛院〕快伝
月影の更渡りぬる川淀に　賢増
秋より霜の結ふ板橋　実詮」
谷合は早くも霧の打時雨　信廉
蟬啼声を聞初る山　昌逸
釣簾の外の松に涼しき風落て　執筆

第三松　何人

并ひ立千木や千年の春の松　桑原勘解由長官為弘
雪解尽す杉村の陰　信誠
朝ほらけ霞の上の峰見えて　昌逸
翅もしるく雁帰るなり　快伝
吹落る月の下風青陽に　信純
そこと聞ゆる滝つ瀬の音　信廉
網代守水上嘸な時雨らん　信庸」
波のまに〳〵木葉流るゝ　信賢
ウ打戦く真砂の竹は緑にて　実詮
庭清らにも作りなすころ　玄川
仰かるゝはこやの山の陰深み　執筆

第四梅　何水

梅か枝や雪につゝめる白幣　五条式部太輔為徳
鳥井の内外霞晴けり　玄川
打向ふ春の山水明初て　快伝
袖連つゝも出る柴人　実詮
隙無は船の棹手の取々に　昌逸
夕風誘ふ川添の月　信賢」
半散柳の梢あらはにて　信誠
閉置まゝに秋たけし門　信庸
ウ住捨る軒端は霜の深かれや　賢増
野らと成ぬる砌いつより　信廉
夜な〳〵に出て狐や声すらん　執筆

第五松　朝何

ねきことの答へかすまし松の声　清岡式部権太輔長親
袖良閑(ママ)に見ゆる祝子　信庸
こち風の渡る階塵もなし　信純
あしたの庭の雪消にけり　昌逸
青やかに垣根の小草萠出て　賢増
竹の下葉や打けふるらん　玄川」
有明の影も氷らぬ岸水に　信賢
友よひかはし千鳥鳴也　信廉
ウかち人も道後れてや急くらん　快伝
暮るは早き谷々の陰　信誠
日をさふる檜原槇原生続き　執筆

第六梅　花何

梅か香は風の取たるみぬさかな　東坊城大内記尚長
摘し若菜はけふの膰　快伝
来る年の例し替らぬ精進して　信廉
着たる衣の色も清しな　信賢
故郷に帰るこゝろや勇むらん　玄川」
駒も泥まぬ道の月影　賢増
声〳〵に鳴や折しる轡虫　昌逸
小草も花の咲出にけり　信純
ウ総角か分馴す野の末広み　信庸
明離れたる岡へ麓辺　実詮
打向ふ山は貞に雲晴て　執筆

烈敷寒気同前　簾ノ外ニ幕張凌風候事

一　初千句之内四百韻酉ノ年**仕寄**　残六百韻自十一日十五日迄満吟
十六日十七日ハ二千句三千句**読上ケ**　次ニ自上御奉納七百韻読上ケ　出勤退出共ニ本社エ神拝帰院也、
日々於連歌席中飯延寿王院ヨリ調有之也
懐紙大杉原」清書ハ雲紙也
千句ハ延寿王院受持　千句ハ惣社中受持　千句ハ小鳥居宮司三人受持也　五百韻ハ小鳥居五百韻ハ宮司三人　酉冬相認延寿王院へ差出置候て　神忌後一箱ニ納内陣ニ奉納也

一　御上御奉納七百韻酉冬於延寿王院仕寄有之　中食有之也

一　十八日四ツ時惣之市不老奏神楽　次ニ水田社人四人奏神楽　太皷笛　皷　一人ハ以鈴白幣舞

一　同日八時大頌　備物仮殿　座左如」
〔省　略・文人主トナリ勤ム〕

一　十九日　神楽　大頌　如十八日　〔省略〕」

一　廿日　胎憂供　〔省略〕」

一　廿一日　十講　〔省略〕」

一　二十二日　承天寺一派光明寺諷誦〔省略〕

一　二十三日　**能**五番　自御上御奉納
弓八幡　箙　油屋　融　猩々　狂言　麻生　連歌盗
朝五ツ時始　八ツ時終　三人片輪

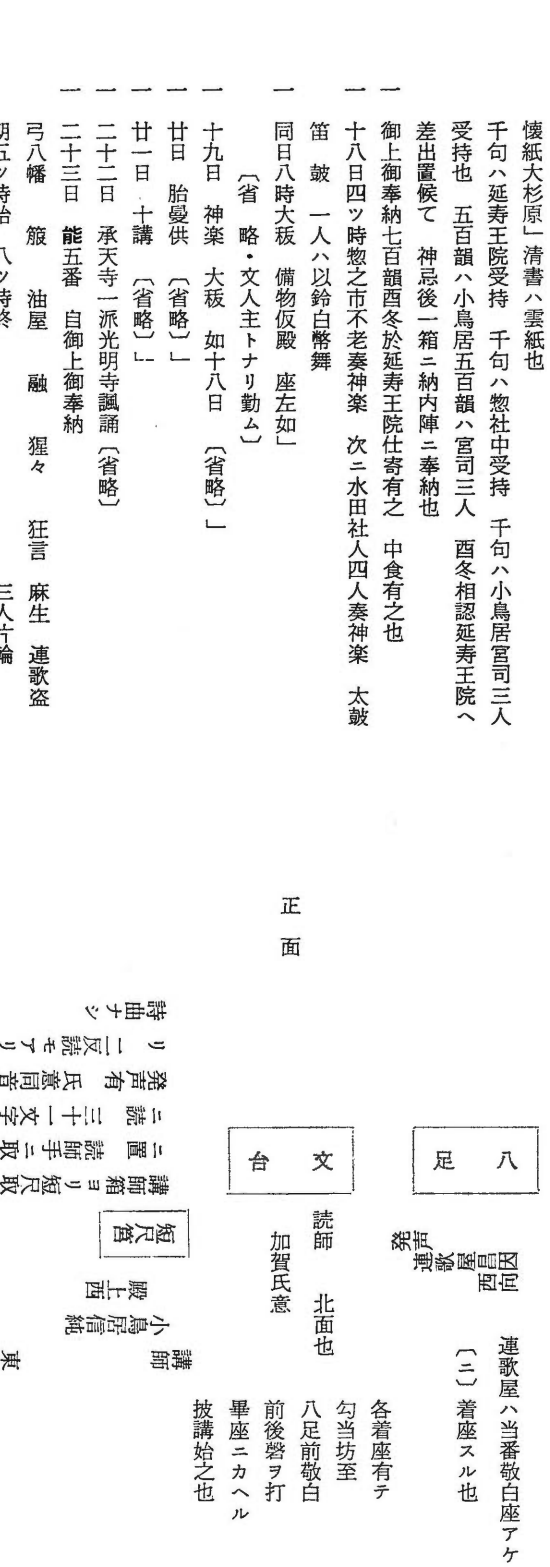
一　二十四日　法華三昧　〔省略〕」

一　同日皆参臨時御供諸事如元朔　献備宣命宮司一臈　配分正月如十

一　五日　文人中ハ仮殿出勤伝供也　八百五十年忌ヨリ出仕之由伝承

一　万灯　〔省略〕」
二千句発句　初千句別紙写置也
三千句発句　邦君御奉納七百韻　〔後出別紙分ノナカニ収ム〕

一　二十五日　**和歌披講**　座如左
披講之節ハ二十五夜ノ通殿上畳西ノ方ヨリ東八足前半畳ニ敷ヨスル也　文台居所ハ邦君御拝畳半畳ヲ敷也



一　惣社中千句ハ於会所興行　中飯如夏連歌」

一　千句之内於小鳥居五百韻　満盛院二百〔韻〕勾当坊二百韻　検校坊百韻　五百韻修　中飯凡夏連歌之通ニ致候　五百韻清書并中書共ニ検校坊ニテ快伝廉靖相調　回廊ニテ読上候懐紙大杉原同坊ヨリ出ス　本懐紙ハ三人ニテ調申候事

一　懐紙大雲ハ二千句惣中分共ニ一同延寿王院へ相頼申候事　代銭ハ同院へ相納也

一　邦君御奉納七百韻興行料銀子　延寿王院エ御渡　連衆エ御布施

松梅ノ栄ヤ仰ク神ノ春　立花二郎太夫　重敬
百年ヲ八十年重テ二月ノ神ノ手向ニ匂フ梅カ香　長崎　林鶴
神ノ梅無匂ラム御開帳　肥前高木　小嶺氏　正時
久シサヲ梅ニテモシレ神ノ松　河津氏　助興
神ヤ恵ム梅ニアヤカレ八百年　長崎　大河内氏　令戴
古モサソヤ在ナン八百年ノ祭豊カニサカユ梅カ枝　豊前香春　松嶋興翁
春ヤ今四方ニ天満神慮　如児
松梅モ千年ニ近キ宮居哉　一声」
梅ヤ尚二百トセヲ松ノ春　種国
花咲テ尚モヤ高シ神ノ梅　竹鶴
紅梅ハ世ニ隠ナキ二木哉　氏勝

石城山主　何惹和南

菅神祭会如神在　威霊満天八百霜　序文別ニ在
貴分賤夫投敬拝　詩人才子訴文章
竜髯松老万年緑　星火梅花千里香
無尽灯革映池上　大悲応化不曽蔵」

西岡氏

旧忌已至元禄五　八百年齢神徳新
梅朽芳根松樹緑　貴賤相興古今真」

経年ノ神ノ恩知ル午ノ春
八百年ノ春ヲ迎テ神垣ノ梅モ一入色増ルラム　肥後熊本　如空尼
ヒサマツク所貴シ梅ノ花　同　琴舟
八百年ノセウコヨヤハリ松ト梅　久留米住人

〔以下空白〕

〈資料　三〉

享和二壬戌年三月

聖廟九百年祭祠記録

満盛院

（表　紙）

〔表紙・裏表紙共ニ、半紙一〇枚。コノ他、初千句各百韻ノ一順ヲ記セルモノ二丁、二十五首詩歌ヲ記セルモノ二丁、計四丁ノ懐紙様横折紙片ヲ表紙上ニ添附ス。〕

神前荘厳次第

一　神鏡　一　金幣　二　香炉　一　多羅枝　二張　花瓶　二
格子取除簾掛ル．大坂ヨリ紫御紋附幕寄附有之ニ付簾之外ニ右之幕張也　御幡二月祭礼之通掛ル
一　十一日従邦君御奉納立花二瓶殿上畳ノ上東西ニ置　二七日之間ハ折々手入有之也　速水才七　同正助
二月従十一日至十七日**連歌張行**出勤辰ノ刻　集来鐘撞　東西回廊也
座如左・初日十七日両日ハ素絹　余ハ直綴小五条也」

連歌
東回廊　文台　東向
北　信泰　信延　円重　良取　良泰　重慈　良保　宗林
執筆　貫実
昌因　氏聡
宗琳　交代
南　信賢　信豊　快伝　貫実　昌因　氏尚　氏意　氏聡」

連歌
西回廊　文台　西向
南　信廉　信誠　快麟　賢増　廉靖　水田松林寺
執筆　廉靖　信洪
信庸当病出勤無之
実詮同断
北　信純　信源　快瑱　良永　快旬　準賀　快安　良俊　快恕　円智房
武蔵　病アリ不参」

神前荘厳連歌所十日迄ニ万端相修候事ニ候得共　御普請出来兼候ニ付　御旗等ハ十一日御供後早々荘厳有之候事　連歌所用金屏拝借　回廊北ハ簾掛ル　南後ハ屏風也　十一日十二〔日〕十三日風

信約去来甚有情　秋風到日必聴声
曽従聖作賦孤雁　騒客至今結旧盟」

山月　高野　左中将保光

霧散雲収嶺上螢　団々一鏡少焉生
山前山後明如昼　聞説林間宿鳥驚」

暁霧　清涼寺　沙門尭真

月落鐘鳴破暁天　迢々駅洛旅行懸
霧横曠野馬難進　不覚衣裳自湿然」

紅葉　日野　頭右大弁輝光

立田姫そめてや神にたむくらんわきて色こき木々の紅葉々」

時雨　樋口　右兵衛佐康潤

過るかと見れはいくたひ立かへりあかすしくるゝ空のうき雲」

庭霜　竹内　従二位惟庸

神も今朝ますかことくに置霜の白ゆふかくる庭のさかき葉」

水鳥　広橋　右中弁兼廉

鴛鴦のうはけの霜ははらひてもこほる汀に寝られすやなく」

松雪　桑原　民部大輔長儀

吹風もえたをならさて神垣のまつにつもれる雪のしつけさ」

歳暮　光明寺梶嶽

茅店残灯坐不眠　客心今夜騁長天
漏壺滴尽歳云晏　巖撫白頭徒兀然」

忍恋　庭田　前大納言重条

なみた川たえぬなかれもせく袖の朽はてぬ間は人にしられし」

逢恋　六条　右中将有慶

閨中夢就鴛鴦衾　月入紗牕玉漏沈
一夜尽忘相思恨　千歳共約合歓心」

恨恋　柴山　権佐広豊

一約千秋無暫忘　相思往昔笑鴛鴦
訪尋今却音書絶　妾倚欄干春恨長」

述懐　冷泉　宰相為経

飛梅香渡三千里　都府楼辺二月天
天錫曽称神徳美　高風余韻鎮巍然」

神祇　白川　従二位雅光

かしこしなその氏ならぬもろ人も世にへたてなくあふく神垣」

〔初千句発句重出ニツキ省略〕

元禄壬午仲春二十五日正当天満天神八百年忌
遙聞宰府霊廟大設法会奉修祭儀不堪仰瞻」企
望之至謹賦一律而代澗毛遠献廟前以表寸忱夙
慕風声望遺廟壮遊猶未入西洋詭雲敵影梅無月」
貞操堪寒松有霜三代文英勝白様万機密詔拝金
剛栄名八霊徳山高江水長寛平法皇一名金剛覚
故云爾」　従五位下守大学頭　藤原信篤拝書（朱印）」

元禄壬午仲春二十五日正当天満天神八百年忌
辰謹賦一律遠献宰府霊廟可歎八百歳星周」霊
廟巍然天下尤国史成編分類聚坊斎励業汲儒流
孫謀詒厥平原駅身後伝名都府楼莫恨遺唐空当
任」誉声遠得達中州　林信充拝（朱印）

元禄壬午仲春二十五日正当天満天神八百年諱
辰謹」裁律詩一章遠献宰府神廟徳沢威風兼得
全霊神如在仰蒼天門槐表位清陰茂月桂攀枝香
靄伝曽思東曹対窓」雪豈知西府染塵煙梅花添
色彩星耀点点余光八百年　林信廉拝（朱印）」

諷誦一本　在別　如雲軒弘有

詩一連

松樹枝繁八百年梅花香郁界三千　同
威霊可貴菅君徳擁護群生勢動天
八百年同シ色有神ノ梅
老松モ春ハ若木ノ緑哉　同
天満ル神ノ真モ八百年ノ春ノ光リニ尚ミカキソフ　平井善助重信
ナキ御名ノ世々ニ普キ濡衣ハ神慮ヨリヒルニソ在ケル　同」

諸方寄進ノ灯爐大小　十日ヨリ廿六日迄　社殿回楼神社仏閣諸末社道小路門々辻々　或連灯釣灯　油路次ニ漂流事如河　燼燭塵芥ノ如ク跨歩行

一　臨時御供如元旦　御供屋坊　」

社中惣参

公文　上座坊

寺司坊

都維那坊　舞台上　着座

諸法如恒例

一　廿五日　晨朝法事如恒例　」

祓

和歌備講　」

小鳥居　信亮

勾当坊　陽重

常修坊　快喜

都維那　仙継

加賀　氏仍

一　廿六日晨撥遣　」

能舞台御笠郡中寄進之　於鳥居前新造立

仮拝殿於神前新造立之　三間四面以唐油紙覆之

瑠璃段八足之机再興

幡九流再興　神人十一口賜装束　惣市同

右造営料二百表宛之

一　社中詮義在而上官妻体免装束清」僧同前金襴七条之袈裟着用

殿上之畳薄縁再興　外回楼畳三十帖薄縁廿畳　連歌回楼ニ敷

幕一双　右同　造栄料以出来

弘有覚書

元禄十五年二月廿七日

示安亀麻呂

」

二十五首

朝霞　翫梅　春月　花盛　暮春

卯花　葵露　郭公　夜螢　納涼

籬萩　初雁　山月　暁霧　紅葉

時雨　庭霜　水鳥　松雪　歳暮

忍恋　逢恋　恨恋　述懐　神祇　」

朝霞　伏見殿　中務卿邦永親王

来る春のひかりも知るく今朝ははやのとかにかすむ四方の山の端

翫梅　中院　権大納言通躬

花の香の天に満つゝさく梅を今年はわきて神もめつらむ　」

春月　万里小路　前大納言浮房

あかす見む春はおほろの名に立てかすみも月のひかりとそなる

花盛　川鯖　前大納言実陳

春はけふ散へくもなきさかりにて心のとかにあかぬ木のもと　」

暮春　東園　宰相中将基長

また来んとおもひわきても名残あれや花うくひすの春のくれかた

卯花　藤波　従二位景忠

白ゆふの色にまかへて神垣のあたりにちかくさける卯の花　」

葵露　高辻　前大納言豊長

衛足此花占露光　佳人誇色似成粧

感情草木異名在　夏苑紅葵知太陽

郭公　土御門　兵部少輔泰連

池上乗涼到五更　雲辺謝豹両三声

令年南畝将饒富　宜有新詩献聖明　」

夜螢　伏原　少納言宣通

熠燿霄行北野林　松風梅雨気蕭森

群飛似拱神光恵　万点飄星玉燭陰

納涼　阿野　左中将公緒

一亭瀟洒遠炎暑　遙見西山含夕陽

林外長流声冷々　松風渡水送清涼　」

籬萩　勘解由小路　従二位韶光

破竹籬辺花一叢　暁風無力露玲瓏

只疑錦繡凝粧女　秋恨悽愴濺涙紅

初雁　玉井　法眼道乙

〃七　見や神の名もすか〳〵し梅の花　〔加賀〕石見　氏仍」
〃八　わきて猶松の思はん神の春　〔宝寿坊〕良暁
〃九　八百とせに満たる梅の香哉　〔常修坊〕快喜
　老松も緑は春のしるしかな　〔執行坊〕信盛

亦

一　立よらん霞しりそけ神の松　〔小鳥居〕信賀
二　天か下かくれぬ梅の匂ひ哉　〔小鳥居〕信亮
三　みとり立時に逢けり神の松　〔御供屋〕信好
四　今の世に梅は昔の匂哉　〔都維那〕兼碩」
五　千とせ経ん春の緑の神の松　花台坊　良門
六　唐国の風迄匂へ神の梅　〔勾当坊〕竜重
七　緑立松や夫より春の色　〔満盛院〕快倫
八　爰に植て瑞籬久し梅の花　〔検校坊〕快鳳
九　千代の春と神や見立し松の春　〔勾当坊〕陽重
十　神代わふ花の物いふ梅もかな　〔満盛院〕快雅
　此春は猶見そなわん神の梅　大隅様御法楽百韻
　咲梅の花もて祭る宮居哉　和泉様御法楽」
　神やます野にも山にも梅の花　御前様御法楽
　初花も神のまに〳〵さくらかな　同
　紅や尚往昔の梅の花　同
　里〳〵も見るに花あり国の春　同
　あかす見む二月弥生桜花　綱政公法楽

亦

一　松やむへ老ぬと春に深緑　信仙
二　咲時の春を忘な松の花　信賀」
三　初当をおもへは久し松の春　信伯
四　声涼し御影やそふる神の松　信盛
五　茂れ尚千代の隠見ん老の松　陽重
六　秋に尚涼しさおこせ松の風　仙継
七　本つ葉や末もうるはし松の露　氏仍
八　秋を経て新に青し神の松　快鳳
九　いや高し百代もつもる雪の松　快倫
十　松風や物の音添る小夜神楽　〔亀井戸・大鳥居〕信円」
追　夜を照す天津星かも梅の花　信兼
　右は江戸（亀井戸）信円法楽
　仰見よ年も八百枝の梅の花　豊後国　円寿寺」
〔一ページ半空白〕

一　十八九両日　稄神楽　惣之市　女
　神人　伊予　弥三左衛門
　加賀　弥三兵衛
　但馬　弥市
　真寂坊弟子　右近
　〔宮之内大宮司清五郎以下十名省略〕」
　筑後水田県　四人」

一　廿日　曼陀羅供
　導師　検校坊　快鳳法印　／　四智讃　六度寺　秀賀　／　鐃
　勾当坊　陽重　／　鉢　十境坊　良栄　／　同　真寂坊　良海
　着座　宝珠坊　良暁　／　唄　花台坊　良寛」　散花　寂門
　坊　良因　／　対揚　常修坊　快喜　／　供養文　十境坊　良
　栄　／　唱礼　六度寺　秀賀　／　九方便　勾当坊　陽重　／
　大讃　真寂坊　良海　／　仏讃　満盛院　快玄　／　甲讃　明
　星坊　快円」　洒水　安祥寺　伴重
　祭終
一　廿一日　十講供養　〔導師花台坊良寛以下13行省略〕」
一　廿二日　承天寺　惣末寺中
　光明寺
　本願寺
　首楞厳咒普門品行道諷誦有
一　廿三日　太夫三橋権六
　能　高砂　頼政　松風　天皷　百万
　鉢木　海士　神相撲
一　廿四日　行道懺法　例時
　導師　検校坊」　惣衆会十二人
　廿四日廿五日　万灯高三尺余貫板ヲ渡シ凡一間ニ土器廿五数宛造営勤之

（宝物殿文書22）慶安四年に

七百五拾年御忌の御祭祀二月廿二日より同廿四日迄　初日謌会寺家中　中日は能七番太守公より被仰付候　奉行大橋与三右衛門　終日衆徒中法事跡に志摩郡大日と云所のおとり有　黒田睡鷗見物

とあるのが管見では一番古いが、これまた、初日謌会の内容が連歌興行か、和歌披講をさしているのか詳らかでない。同筆記には、寛文十二年江戸本所（亀井戸天満宮）の七百七十年忌に、大鳥居信兼・検校坊快鎮・加賀氏利・（水田）東北院信綱が、千句連歌を興行のため出府したことが記されているが、宰府での執行は記録されていない。亀井戸大祭の連歌興行のため大鳥居氏の出府は以後も恒例となっているようで、柳営連歌の連衆と大鳥居氏との接点となっている。元禄十四年二月にも八百年取越祭礼二千句連歌興行のため、大鳥居信仙等が出府している。

ここに紹介する**八百御年忌記録**（元禄5）〈資料　二〉は、「満盛院什物」と表記の如く満盛院に伝来し、同院の後裔味酒加代氏が所蔵されている。その筆者は、奥書の一に「弘有覚書　元禄十五年二月廿七日　示安亀麻呂」とある如雲軒弘有で、同書中に諷誦一本及び詩一連と二句とをよせているが、如何なる人物であるか詳らかにしない。**聖廟九百年祭祀記録**（享和2）〈資料　三〉の筆者は当時の満盛院隠居快伝であり、連歌の好士であったとみえ、作品、写本も多く現存する。これまた味酒氏の御所蔵である。

〈資料　四〉として、『一山社用旧格雑記』（天保15・執行坊編）に収められている**九百五十年忌之記大概**（嘉永5）を、あわせて紹介する。大分時代が下るが前二者が大祭の「表」の記録であるのに対して、この資料は「裏」の記録を伝えている点が興味深い。

八百年忌については、古く古川勝隆氏「太宰府史乗の一端」（「築紫史談」26、大正11・8）の中に紹介がある。同氏の見られた資料が本稿と同じものか否かは不明。当時すでに八百年忌より以前の大祭記録は見出されなかったと思われる。

なお、翻刻中に一部語句をゴシックにしたのは、後に論を立てる際の検出の便を考えての、筆者のさかしらである。また、〔　〕内は筆者の注である。

〈資料　二〉

満盛院

八百御年忌記録

八百年詩哥　什物

（表紙）

〔表紙・裏表紙共ニ、半紙二九枚、袋綴。〕

鎮西府天満宮八百年祭祀禄之

一　元禄十五壬午歳二月廿五日相当八百年

一　二月十日聚来事始ル

連歌三千七百句楼門列左右両座

初千句発句

第一　松栄え扨や御社花の春　高辻大納言　豊長卿

〃二　並ふ木に紛ぬ梅の立枝哉　唐橋侍従　在隆卿

〃四　袖にあまる梅か香知し空の月　清岡式部権太夫　長時卿」

第五　神垣や千年もちかき松の春　桑原民部太輔　長儀卿

〃六　むめは世に神風しるき匂哉　風早中納言　実種卿

〃七　八百を（年や）松や知る人神の春　西洞院宰相　時成卿

〃十　匂へなを梅も年経る家の風　五条千勝　為範卿

追加　浅くやはかすみ天満宮所　外山三位　光顕卿

第三　名は一夜まことや千代を松の春　里　村　昌　億

第八　今は人夢にも折し神の梅　里村法眼　同　昌　陸

第九　松や尚高く加へし若緑　大鳥居　信　仙」

亦

第一　此花はむへ今度の手向哉　大鳥居　信　兼

〃二　としを経て色増りけり松の春　御供屋　信　伯

〃三　四方に知る梅か香清し神の庭　浦ノ坊　信　慶

〃四　下葉染て今爰にあり神の松　連歌所　昌　俊

〃五　万木はありとも梅や花の兄　伊　予　氏　直

〃六　なつる手に満るや松の若緑　〔都維那〕安秀院　仙　継

渡し替たる真木の板橋　与
百敷や心の儘の住ゐして　久
とゝめかたしや暮る春秋　与
もろき社齢覚ゆる泊なれ　久
祝言の日の交はりの袖　与
読出る影の口つき定まらて　同
思ひおもはす契る化人　久」
底までは打も解しの我心　与
住み離れよと誘ふ蓬生　久
世の外の山や有ともしらさらん　与
岩の陰路を埋むしら雪　久
帰るさは休む樵のこゝかしこ　与
花より花に籠る草の戸　久
藪はらの梅の下枝の咲初て　与
日のあたゝかに移る野の末　久

惟久　五十
等与　五十

第二　何人

花咲て朝霧匂ふ太山かな　等与
真木の雫に残る春雨　惟久
庭に瀬〳〵岩垣水の長閑にて　与

惟久　五十　等与　五十

第三　初何

散かゝる花にも動く柳かな　惟久
驚ぬるゝ明反の露　等与
春寒き谷の扉は霧降て　久

惟久　五十　等与　五十

第四　山何

暮ぬ間は風さへぬるき扇かな　等与
窓の螢のかすか成影　惟久
竹のはに夜更る雨の音添て　与

等与　五十　惟久　五十

第五　何艸

飛螢月に治まる光り哉　惟久
涼み更すもさゝぬ柴の戸　等与
秋近き籬の荻のそよめきて　久

惟久　五十　等与　五十

第六　何路

みたれあふ虫の音涼し夕月夜　等与
草葉の露に通ふ秋風　惟久
架垣のひまより匂ふ菊咲て　与

等与　五十　惟久　五十

第七　下何

刈跡の山田色こき稲葉哉　惟久
時雨る暮の小男鹿の声　等与
露払ふ野風の上に月出て　久

惟久　五十　等与　五十

第八　露顕一字

露に見て竹の葉重し月の雪　等与
寒けにねたる秋のむら鳥　惟久
暮渡る空に野分の鎮りて　与

等与　五十　惟久　五十

第九　白何

朝疊り雪に晴たる檜原哉　惟久
尾上の鐘の声寒き雁　等与
さしながら日影幽かに秋更て　久

惟久　五十　等与　五十

第十　玉何

川音の空に流るゝ霜夜哉　等与
千鳥鳴行暁の月　惟久
満汐に遠き船出を催して　与

等与　五十　惟久　五十

追加

春風の音や水行柳はら　木山備後守惟昌
霞む流れに出る江の舟　栗林喜助盛安
雁帰る夕の山に月見えて　木山瑠璃松丸

三、大御神忌と連歌

古来太宰府天満宮においては、百年回り、あるいは五十年回りに大御神忌が行われてきた。安永六年に大鳥居信貫がはじめての「廿五年回りの追福」として八百七十五年忌を行う旨を、『聖廟八百七十五年忌記録』（味酒氏蔵）は冒頭にしるしている。同忌が、九百二十五年忌など、その後の中御神忌の先例となったのである。

本稿に紹介する八百年忌までの大祭の記録は以下のようである。慶長七年の七百年忌に、北野での万句が記録（『連歌の史的研究』）されているが、太宰府での大祭連歌の資料は未だ見出せない。宰府の大祭の記事は、「信兼筆記」

〈**資料　一**〉

太宰府天満宮西高辻宮司家蔵。写横一。墨付四一丁。奥書「文久元年酉ノ十二月廿五日書終之十五歳菅原信厳（花押）」

（表紙）

両吟千句　木山左近大夫惟久入道紹宅　栗林主計入道等与

（本文）

天正八歳正月日

第一　　木山左近太夫惟久

栗林主計入道等与　惟久　等与

白川や雪より出る春の水　久

朝日ほの〳〵霞む遠山　与

桜咲梢を伝ふ鳥鳴て　久

ふかぬも靡く風の青柳　久

夕露のかつ〳〵結ぶ道のへに　与

はしめて霜の見ゆる秋の野　久

澄る夜は暑さ残らぬ庭の月　与

暫しと思ふはしのうたゝね　久

語らひし友のいつくに帰るらん　与

たちても戸の求食冬草　同

声寂し湊田かくる川千鳥　与

夕の日影くもる汐風　久

山本や夏をよ所なる舟の中　与

旅の枕はみしか夜もなし　久

難面にまけてやましの方たかへ　与

さゝぬ戸口に忍ひ入けり　久

いか斗り心有らし仕人　与

植加へたる陰の神杉　久

春なから花に珍らし時鳥　与

こほるゝ雨の霞む東雲　久

長閑なる月のぬれたる野への露　同

泪にまよふ塚の古道　与」

数々の親の憐み思ひ出て　久

もくすかたやり頼む御仏　与

遠近の里より見ゆる初瀬山　久

尾上の雪の今朝の明ほの　与

鳴行や松に舎りし村からす　久

夜船の音の近き江の水　与

秋寒き風や鐘を誘ふらん　久

夢は覚てのさむしろの月　与

移ろひし匂ひな消そ袖の露　同

妹か植おく草〳〵の花　久

すみれつむ垣根は哀れ野に成て　与

飛かふ蝶の閑かなるかけ　久

絶〳〵の風の行へや霞むらん　与

海より明る山のはるけさ　久」

嶋このむ砌の池に舟うけて　与

涼み馴るゝや松の木隠れ　久

草深き野へにちいさき道の末　与

庵りさし捨出る旅人　久

降そはんけしきなりしも一時雨　同

月の光りにあらはるゝ山　与

岩間より幽かに落る秋の水　久

鮎のたゝよふ浪は冷し　与

ゐる鷺のみの毛乱るゝ川風に　久

日の色薄く残る竹の葉　与

ひまもるも音せぬほとの窓の雨　久

つれつれのみに送る莚葺　与

老ぬれは花の陰にも行やらて　久

出て馬かふ春の野のはら　与」

山水の霞みかすまぬ末々に　与

あらしの跡の暁の月　久

秋の夜は度〳〵めくる時雨にて　与

むしの鳴よる軒の下草　久

住人のあるかなきかのあはら屋に　与

入来る関の袖のいろ〳〵　久

かたはらに行合車立おきて　与

舟にのせたる陰の山柴　久

外はまた降ぬもつもる谷の雪　与

寒きあしたの風の村雲　久

春浅き田面に厂の鳴落て　同

柳の木の間わつかなる比　与

あし垣の古葉に交る若緑　久

小家の道の明暮の露　与」

山畑のさかひ分れす霧降て　久

幽かなりけり鹿の一声　与

初風の漸移り行秋の空　久

月の夕の尾花村萩　与

都人狩して帰る野を遠み　久

酒のむ処求ぬる神　与

立よるもせはしき市の仮庵に　同

ぬきたる笠は壁にかけおく　久

五月雨の晴間の入日かた分て　与

雲より出る遠の川水　久

滝つ瀬や花のひゝきの吉野山　与

春も吹そふ風の槇原　久

鶯の声を去年より聞初て　与

霞む朝けの霜の村消　久」

焼捨し庭火や暫しけふるらん　与

集る袖のかた〳〵になる　久

はかなきを送る涙の深野に　同

暮待むしは風の下露　与

薄霧にぬれ〳〵行は漸涼し　久

柳散うく水はるか也　与

一筋の河浪白き空の月　久

5 天正3・4・19「山何」「播州医師宗琳興行」「夏草はたゝ夕くれのまかき哉　紹巴」　紹巴　宗琳　昌叱　心前　文閑　正繁　紹宅　寿恩　紹清　恕公　秀尊　玄仍　（大阪天満宮蔵『古連歌千六百（十六番）』など）

6 天正8・正・10（西高辻本には「天正八歳正月日」）『白川千句』木山左近太夫惟久入道紹宅・栗林主計入道等与両吟（大阪天満宮蔵）。

連歌作者としての紹宅を評価する、ほとんど唯一の資料であるので、本項の末に太宰府天満宮西高辻宮司家蔵の写本により、その第一の百韻と第二以後各巻の三つ物とを翻刻収録する。

天正十八年には次の百韻三巻、6～8が記録されている。

7 天正18・3・6「何垣」「遠山の花や船ゆくみをつくし紹巴」紹巴　頼介　昌叱　英怙　玄仍　正繁　友益　紹宅　恕慶　了程　清房　小梅（国会連歌合集四三・大阪天満宮蔵『古連歌千七百（二十三番）』など）

8 天正18・3・27「懐旧」「心前追善」「ちる花は夢にまさらぬ現かな　紹宅」独吟「付墨廿句　此内長二　紹巴判　三月廿七日　木山紹宅」（大阪天満宮蔵『古連歌千弐百（二十五番）』など）

9 天正18・8・吉「何路」「紅葉して松あらはなる外山哉　孝高」孝高　長政　紹宅　正三　一安　宗鉄　虎直　浄貞　宗漸　鎮継　長松　亀　宗俊　（金子堅太郎著『黒田如水伝』に中津城竣工祝賀の連歌会とし、初一順と思われる十三句を収録）

紹宅が黒田に属したのは何時からであろうか。因に、秀吉により豊前八郡のうち六郡十二万石が黒田勘解由に下されたのは、天正十五年七月三日、九州征伐の帰途小倉城においてであった。ちょうど三年後の中津城竣工祝賀の連歌会に、紹宅がすでに黒田家のお抱え、あるいは客分の連歌師として出席しているという推定のほかに、当時紹宅は太宰府に身を寄せており、中津へは招かれて出席したとの推定もされるのが次に引用する『玄旨公御連歌』（「文学研究」60）の記事である。

10 〔年月不明〕「於名護屋天満宮万句木山紹宅被執行　由有て発句所望　梅は世に又のそみなきいろ香かな」とあり。文禄二年かと思われる。

11 文禄2・6・3　如水二男熊之助「未だ十六歳の少年なれば、豊前中津に留守せしが、今回の外征に参加せざるを遺憾に思ひ、窃かに渡海して父兄の軍に投ぜんと決心し、母里太兵衛の嫡子吉太夫（十六歳）、黒田三左衛門の弟吉松（十六歳）及び木山紹琢を伴ひ、中津より出帆せしが玄海灘に於て、俄かに暴風に逢ひ、一行尽く溺死したり」（『黒田如水伝』）

右の木山紹琢が紹宅と同一人物であることは、まず間違いないと思う。熊之助に従った他の二人が、ともに十六才であるのは、熊之助の相手役の少年たちであり、紹宅はさしづめ傅役として仕えていたかと思われる。本件確認のため熊之助の位牌のあるという高野山坊中赤松院について、榎坂浩尚氏に調査していただいたところ、同院は万延元年烏有に帰し、その際過去帳等焼失したことが判明した。

12 太田武夫氏「連歌七人付句判詞」の解題（慶応・国文学論叢2『中世文学』所収）によれば、同氏御架蔵の原本中には、(4)天正二十年千句之内紹宅付句　(6)夢想三吟（重綱・寿三・紹宅）(7)何人両吟（寿三・紹宅）が含まれている。（島津先生の御教示によりこのことを知ったのが本稿校正中であり、原本を早速調査させていただきたく考えている。）

紹印についてはわずかに次の三資料しか判明していない。

13 慶長3・6・6「何人」「於宮崎」「月は夕涼しさまさる松の陰　長俊」長俊　紹忍　長純　信白　急閑　信讃　紹印　家信　元朔　（大阪天満宮蔵『紹巴前後連歌千三百（二十一番）』）

長俊は福部社を建立したりして宰府に縁深い山中山城守橘長俊。田原紹忍は大友の部将。信白は御供屋。角（大鳥居）信讃は、信岩の頃の代官。因に黒田の筑前入国は慶長五年末である。

14 〔年月不明〕〔懐紙断片〕　紹巴　玄仲　玄仍　友益　寿恩　信寛　知彦　紹印　寛実　（小鳥居氏蔵懐紙れ七2）

大鳥居信寛は天文22生、天正16戌子年退身、慶長5戊子年8・23卒、歳48。寛実は上座坊。

15 慶長7・1・16「夢想」「松むめや末なかかれとみとりたつ山よりつゝくさとはふく岡」　御2　円清11　幸円1　長政1　御上1　松寿丸1　御菊丸1　信岩8　古庵8　江青8　真斎9　実右8　正重8　良乗9　清重8　空与8　紹印7　信生1　（太宰府天満宮宝物殿蔵。前稿80頁に翻刻）

ここに整理する。その多くは鳥津忠夫先生の御教示によるもので、厚く御礼申し上げる。木山紹宅については、目録でその名の省略された一座の作品など、まだまだ多くの資料があると思う。乏しい調査結果をここに報告するのも、大方の御教示を希うからに他ならない。

1 木山氏の出自は『姓氏家系大辞典』にも、肥後国益城郡木山邑より起る清和源氏新田氏流として、かなり詳しく紹介されている。

木山氏の後裔左近太夫惟興は、阿蘇家に客として仕ふ。嘉吉元年、益城郡腰尾郷に居城し、後腰尾を木山と改む。惟興の子備後守惟正、その子左近惟貞、天文十六年、居城を赤井（木山の南）に移す。惟貞の子太郎惟久は文武に名あり、薙髪して**紹宅**と号す。永禄天正頃の人なり。其の子備後守信連、天正十三年・島津氏に攻められ、赤井木山一同に落城す。其の時二歳の児を町人梅屋某の家に隠せしが、其の孤・長じて梅屋の家を譲られ、四郎左衛門と曰ふ。今に多く古文書を伝ふ（国志）。甲斐系図に新秀の女は木山惟久の室と見ゆ。又天草家来に木山弾正あり、加藤清正と戦ひし勇将也。

2 **旧連歌屋木山義昌家系**（『太宰府神社旧神官家系』ノ内）

新田義貞ヨリ十三世ノ孫肥後国木山ノ城主左近太夫従五位下維久入道紹宅ノ長男同木山備後守信連故有テ前筑前国主黒田長政ニ属ス　入道シテ紹印ト号ス　和歌連歌ニ長スルヲ以テ　太宰府連歌屋廃跡ヲ再立シ之ニ居シム是ヲ連歌屋ノ中祖ト為ス　毎年社式月次連歌ヲ賦シテ神前ニ献スルヲ以テ職ヲ奉シテ世々尊神ニ勤仕スル事式ノ如シ

木山備後守左近大夫入道紹印

紹印　慶長六　奉職　元和五年退職
昌林　同　五年任職　寛永十八年退職
昌三　同　十八年任職　寛文元年退職
昌純　同　元年任職　延宝三年退職
昌俊　同　三年任職　宝永七年退職
昌的　同　七年任職　享保六年退職
昌永　同　六年任職　寛延四年退職
昌範　同　四年任職　宝暦六年退職
昌麟　同　六年任職　安永七年退職
昌謙　同　七年任職　天明五年退職
昌英　同　五年任職　寛政七年退職
昌春　同　七年任職　同　十年退職
昌因　同　十年任職　文政六年退職
昌順　同　六年任職　安政四年退職

明治元年復飾　木山紹完ト改ム
昌賢　同　四年奉職　同時復飾　木山義昌ト改ム

明治五年四月神官御癈シ民籍編入

3 祐徳神社寄託中川文庫蔵の近世中期の写本〔逸題随筆・倒鼈気〕中に、紹宅について左の記事がある。

一　秀吉殿下九州下向鳥津降参ノ後肥後宇土ニ御着　近年違命ノモノ助命セラルヽノ中　肥後ノ住人木山左近入道紹宅当国一揆ノ魁首ナレハ誅伐アルヘシト　此者連歌ノ達者　先年上洛シ北野ニ於テ連歌ノ有シニ　心苦シキ月ヲコソマテト云前句ノアリシニ紹宅　人シレス肌ニ結フイハタ帯ト付タリケレハ　時ノ宗匠花ノ下里村紹巴法眼甚感心シ　岩田帯ノ紹宅ト唱ヘテ都鄙カクレナシト言上シケレハ　殿下左様ノ風雅ノモノ非レ可レ誅ト宣ヒケレハ　木山不堪喜百韻ノ興行スヘシトテ　紹巴法眼ニ発句ヲ所望シタリケレハ　花見ヨト杣木ニ残スアフチ哉トセラレケリ

秀吉の宇土着は『太閤記』によれば天正十五年六月一日のことである。それ以前における紹宅の連歌作品については、**5**の百韻一巻と**6**の千句一冊（二本あり）しか管見に入っていない。

4 左に引用する『醒睡笑』（広本）の木山が、木山紹宅であることは間違いないと思う。紹宅が中央にどの程度名の通った連歌師であったかは、後出**10**の読みにも関係するが、未だ詳らかにしない。名順の早い作品が現存しないことより、「地方の上手」であったと推するのみである。（この項については松本正光氏にお世話になった。）

一　九州に木山とて連歌の上手あり　八月十五夜に紹巴にて発句をせんと月もなしといへり　紹巴のわるひ〳〵　名月に月もなしはと申されし　まつすゝを聞他□とて

月はなし日をそのまゝの今霄かな　（内閣文庫本複製・下九〇九頁）

石築地
良慶 良仲 良珊 良三 良吟 良実 良章 良宅（宝寿坊） 良暁 良融 良啓 良珉 良泰 良承 良韻 良純〈玉之井〉

真寂坊
良慶 良元 良弘 良忠 良海 良悦？ 良仲 良融 勝山 良瑞 良空 良然 念 良照 良海 良俊 良駈 良籌 良海（良頼） 義彦〈高 杉〉

寂門坊
良翁 良璘 良雄 良長 良芳 良聚 良順 良延 良因 良珠 良種 良堅 良栄 永 良賢 良啓 珪 良潮 良永 良程 良明（良蔵）〈一宮世〉

安祥寺
光重 選重 永重 宣重 珪重 盛重 僊重 雄重 伴重 琳重 玄重 伴重？ 祇重 岷重 慈重 仙重 栄重 弘重〈安 堂〉

明星坊
快円 快淵 円 快勤 快伸 快岩 巌 快安 謙重

常修坊
快廉 快林 快円 快順 快実 快祐 快喜 快山 快仙 快康 快璉 快旬 快厳 快剛 常広（快芳）〈宮 垣〉

連歌屋（木山紹宅）
紹印 昌林 昌三 昌純 昌俊 昌的 昌永 昌範 昌麟 昌謙 昌英 昌春 昌因 昌順（隠居紹完） 昌言 義昌（昌寛）〈木 山〉

伊予
氏雄 氏定 氏美 氏敦（弥八郎） 氏重（弥平次） 氏次（弥右衛門） 氏直（弥三左衛門） 氏滋 氏貞 氏植 氏房 氏順 当 氏尚 氏胤 好廉（氏興）〈南小野〉

加賀
氏保 氏則 氏吉 氏利 氏仍（石見） 氏堅 賢 氏清 氏意 氏倫 氏伸 好寸（氏機）〈東小野〉

但馬
氏功 氏世 氏質 氏方 氏玄 氏綏 氏孝（弥市） 氏治 氏喜 氏栄 永 氏聡 氏嗣 氏輝 氏彦 好堯（氏章）〈西小野〉

光明寺
長怡 円心 円般 知奉 知清 知的 知性 知哲 知竜 知玉 知順 知廉 知釣 知珪 知俊 知珪 光晴〈護 山〉

迎寿院
〈不詳〉 宗秀 義泰 宗英 宗寛 義円 宗益 義海 義量 義宣 義盈 義顕的 義譲 義解 宗行〈鳥 井〉

〈水田〉

東北院
信順 信砌 信元 信潤 信竜 信甫 信林 信性 信慶 信淳 信宝〈角〉

〈亀井戸〉

大鳥居
信祐 信円 信政 信欽 信隆 信遵 信盛 在信 良信

〈筥崎〉

田村
重昌 重次 重房 重守 重郷 重次 重成（重次弟） 重仲 重祥 重昭 重慶 重知 重純

黒田
職隆（美濃守） 孝高（官兵衛 勘解由 如水） 長政（甲斐守 筑前守） 忠之（右衛門佐） 光之（右衛門佐） 綱政（右衛門佐） 宣政（肥前守） 継高（筑前守） 治之（筑前守） 治高（筑前守） 斉隆（備前守） 斉清（備前守） 斉溥（長溥） 慶賛（下野守 長知） 長成

大鳥居 25 信寛（天正） 26 信岩（慶長） 27 信助（寛永） 28 信兼（寛文） 29 信仙（元禄） 30 信恭（享保） 31 信貫（元文） 32 信賢（宝暦） 33 信廉（天明） 34 信観（化政） 35 信全（天保） 36 信厳（安政）＜西高辻＞（維新）

小鳥居 信全 信誉与 信重 信賀 信亮 信随 信純 信泰 信昇 信暢 信成＜小鳥居＞

御供屋 信方 信白 信朔 信通 信好 信伯 信碩 信興 信善？ 信孝 信庸 信覚 信竜了（隠居岷山） ＜広辻＞

執行坊 23 信乾（後信英） 24 信歓 25 信成 26 信達（信助猶子） 27 信盛（始信能） 28 信宝（又信芳） 29 信恢 30 信誠 31 信豊 32 信隆 33 信亨（始信賓） 34 信充＜松大路＞

浦之坊 信永 信連璉 信裡？ 信程 信養 信慶敬 信順？ 信呈？ 信寿 信延 信源 信彦 信淳＜浦橋＞

＜宮司（宮師）＞

満盛院 快元 快欽？快琳？快栄？快盛？快鎮？快岩？ 快欽 快竺 快雅 快倫 快玄元 快運 快翁 快鉄哲 快伝 快雄 快顕？ 快豊？ 快瑱 快椿 快欽 快源元（快欽再） 快璘（快順） 安範＜宮部＞

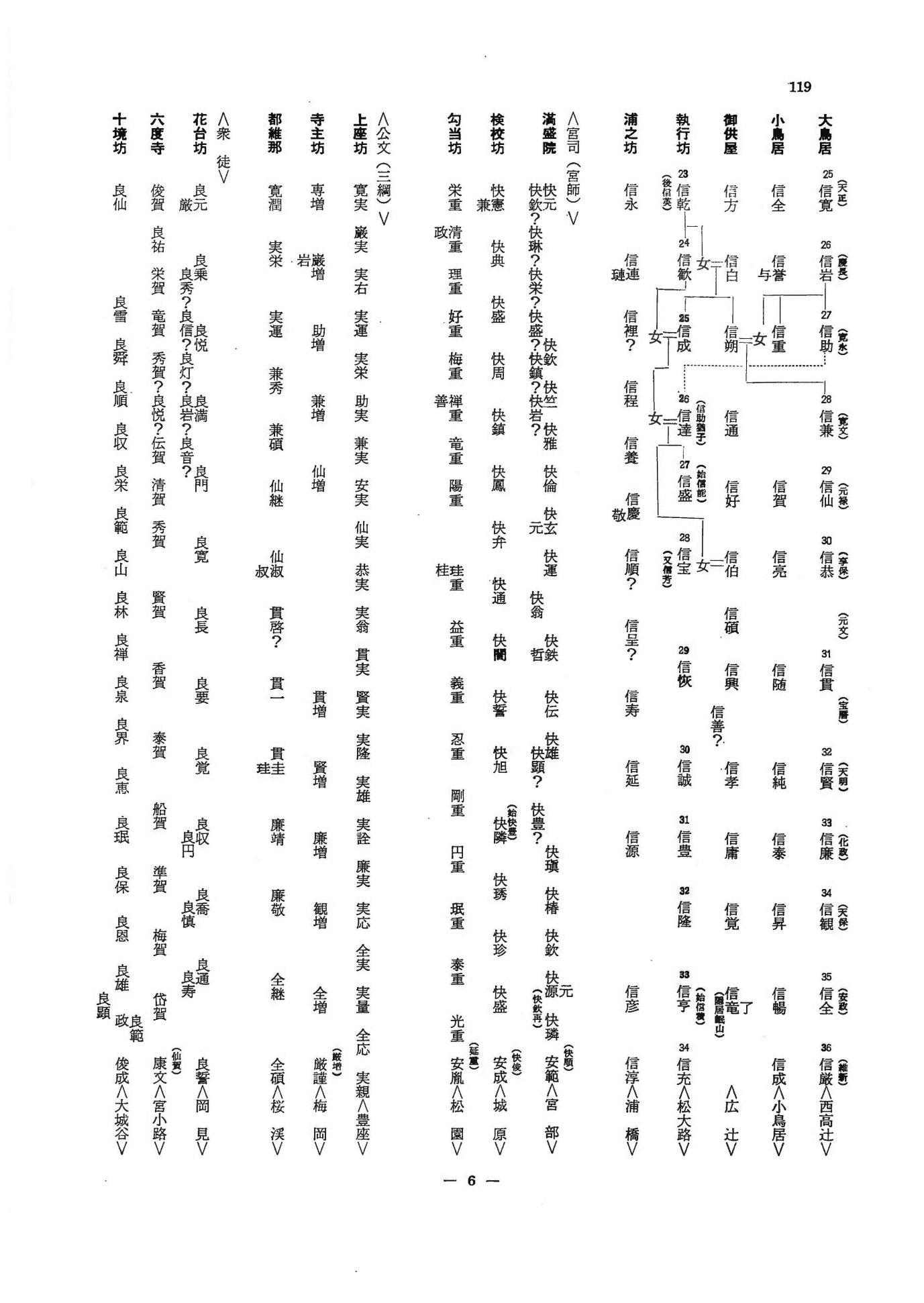
検校坊 快憲兼 快典 快盛 快周 快鎮 快鳳 快弁 快通 快闇 快誓 快旭 快隣（始快豊） 快琇 快珍 快盛 安成（快俊）＜城原＞

勾当坊 栄重 清重政 理重 好重 梅重 禅重善 竜重 陽重 珪重桂 益重 義重 忍重 剛重 円重 珉重 泰重 光重 安胤（延重）＜松園＞

＜公文（三綱）＞

上座坊 寛実 巌実 実右 実運 実栄 助実 兼実 安実 仙実 恭実 実翁 貫実 賢実 実隆 実雄 実詮 廉実 実応 全実 実量 全応 実親＜豊座＞

寺主坊 専増 巌増岩 助増 兼増 仙増 貫増 賢増 廉増 観増 全増 厳謹（厳増）＜梅岡＞



都維那 寛潤 実栄 実運 兼秀 兼碩 仙継 仙淑叔 貫啓？ 貫一 貫圭珪 廉靖 廉敬 全継 全碩＜桜渓＞

＜衆徒＞

花台坊 良元厳 良乗 良秀？良信？良灯？良岩？良音？ 良悦 良満 良門 良寛 良長 良要 良覚 良収 良円 良喬 良慎 良通 良寿 良誓＜岡見＞

六度寺 俊賀 良祐 栄賀 竜賀 秀賀？良悦？伝賀 清賀 秀賀 賢賀 香賀 泰賀 船賀 準賀 梅賀 岱賀 康文（仙賀）＜宮小路＞

十境坊 良仙 良雪 良舜 良順 良収 良栄 良範 良山 良林 良禅 良泉 良界 良恵 良珉 良保 良恩 良雄 良範政 良顕 俊成＜大城谷＞

大御神忌と連歌　附連歌屋考（一）

――近世太宰府天満宮連歌史・その二――

棚町知弥

"Renga" at the Anniversary Services of Michizane —A History of "Renga" at the Dazaifu (Temmangu) Shrine Part II—

by Tomoya Tanamachi

Contents : 1. A Collective Genealogy of the "Saifu Renga" Group. 2. A Study on "Renga-ya" (1)
3. "Renga" at the 800th, 900th and 950th Anniversary Services.

はじめに

前稿、福城松連歌――近世太宰府天満宮連歌史・序説――（「近世文芸資料と考証」Ⅳ）を承け、本稿では資料の紹介を主として左の報告を行う。

一、近世宰府連歌壇綜合系譜（再稿）

二、連歌屋考㈠　――木山紹宅・紹印のこと――

△資料　一▽惟久・等与『両吟千句』（天正8・正月）西高辻宮司家蔵

三、大御神忌と連歌

△資料　二▽八百御年忌記録（元禄15・満盛院文書）　味酒加代氏蔵

△資料　三▽聖廟九百年祭祠記録（享和2・同　右）　同　右

△資料　四▽九百五十年御忌之記大概（嘉永5・『一山社用旧格雑記』）
小鳥居権宮司家蔵

前稿より引きつづいての中村幸彦先生・島津忠夫先生・檜垣元吉先生の御指導に厚く御礼申し上げる。また調査に多大の便益を与えられた西高辻宮司・小鳥居権宮司・安恒篤氏はじめ太宰府天満宮の方々、木村図書部長はじめ福岡県文化会館の方々、資料紹介を許された味酒加代氏に深謝申し上げる。

一、近世宰府連歌壇綜合系譜（再稿）

前稿を発表して後、福岡県文化会館所蔵の『太宰府神社旧神官家系』（写本一冊）を披見した。同神社の罫紙に、神官各家それぞれの由緒・世代を録したこの一冊は、明治初年に県当局の求めにより提出された書類と推定される。宝物殿文書等の根本資料と照合するとき、一致しない点も間々あるので、定稿はさらに将来に期さねばならぬが、同写本によって前稿を補える部分があまりにも多いので、ここに発表する次第である。

二、連歌屋考　㈠　――木山紹宅・紹印のこと――

前稿に紹介した『宰府御社領配分之帳』に明らかなように、連歌屋の拝知高三十石は、宰府一山内ではかなりの高禄である。大鳥居・小鳥居両家はさておき、上官二十数家中連歌屋を上廻る拝知高は、満盛院（宮司）・上座坊（三綱）・花台坊（衆徒）と、それぞれ各グループ筆頭の三坊にすぎない。平安以来の文人三家の筆頭たる小野伊予（伊勢）家でさえ二十石である。宰府上官中もっとも――というより、唯一の新参である連歌屋に対するこの厚遇は、如水・長政の入国→社領加増→連歌屋再立という関係によってのみ説明されよう。

『旧連歌屋木山義昌家系』に「連歌屋廃跡ヲ再立シ之ニ居シム是ヲ連歌屋ノ中祖トナス」（後出2）とあるが、黒田入国（慶長5）以前に、「連歌屋預り」が、文人三家のほかに存したかどうか。小早川の禄書（文禄4）に該当者のないことは前稿で述べた。連歌御祈禱がいつ和歌にとって代ったかという問題とともに、今後明らかにしたい。連歌屋には北野連歌会所奉行や大阪天満宮連歌所宗匠とはちがった性格があるからである。（なお、太宰府天満宮の弟分、江戸本所の東安楽寺亀井戸天満宮でも「連歌屋」と称し、賀茂真淵に『亀井戸天満宮連歌屋の記』（明和2）のあることを『国書総目録』で知ったが、原本は未調査である。）

連歌屋考㈠として、連歌屋の祖木山紹印、その父紹宅について管見の資料を

大牟田長洲
（五万分一地形図）
北
〔註〕
A　三十六
B　五ノ江
C　五ノ枝
D　三十六ノ浦
太字線は条里の境を示す
大牟田市
初島
山鹿
至関町
至上坂下

に東から西へと前進していることと関係があるように思われるからである。坪並と条及びの里地番附けには関連があり、一ノ坪から六ノ坪の進行が条の進行と一致し、一ノ坪から六ノ坪の第一列より七ノ坪から十二ノ坪の第二列への方向が里の進行と一致する。(ヰ)前述のように前者の場合であれば、条は北から南へ、里（又は甲）は東から西に配列されたと思われ、条は三条、里（又は甲）は七里から構成されていたと思われる。隈川流域と長溝川流域では条里の施行された地域は地籍図や地形図からはほぼ復原できるが、坪並は現存地名の皆無からまったく不可能である。諏訪川流域では前述したように三十六ノ浦の北を三十六ノ坪と想定した。沖田の木ノ坪は一町四方よりやや広い程度で、九ノ坪の変化したものと思われるが断定はできない。もし木ノ坪が九ノ坪の変化したものとして坪並を判断すると一ノ坪は東北隅に始まり、六ノ坪は西北隅、三十六ノ坪は西南隅に終る平行式となる。なお熊本県の荒尾市内には国鉄荒尾駅の東から万田附近にかけて六町四方程度の小規模な条里の遺構がみられるが、諏訪川流域の条里とは続いておらず、条里の方向も相当に異なっている。

条里制の諸問題

大化の改新の五十戸一里は霊亀元年に郷と改称された。三池郡（現在の大牟田市と三池郡）には日奉・十市・砥上・米生の四郷があったことは和名抄に記載されている。これから判断すると三池郡には二百戸前後の戸数があったと考えられるが、当時の一戸は現在のように少人数ではなく、五十人前後の大家族であり、この計算でゆくと律令時代には少くとも一万人位の人々が居住していたと思われる。この四郷のうち米生を除いては地名として残らず、大体このあたりの地域であったろうと推定されているにすぎない。大牟田市の条里制の遺構が小規模にもかかわらず、広く平地に分布することは注目されなければならない。条里の施行は律令国家の統一的権力による大規模な土地開発であり、それ以前の非連続的土地利用を連続的土地利用に変えるものであった。(ヰ)また条里の施行は水田耕作に主眼をおいたので、沖積平野では可能な限り条里が施行されたので、条里施行以後の沖積地の発達の度合を知ることができる。三池の歴史をふり返ってみると、日本書紀七、景行天皇十八年、秋七月辛卯朔甲午の条に「到筑紫後国御木居於高田行宮」とあり、この文によれば三池は御木となっている。（和名抄には三毛とあり、現在の三池となったのは鎌倉時代の初期と言われる。なお、高田行宮址は三池郡高田町の高木、または、大牟田市三池町の高泉という二つの御高説がある。）この文を全面的に信用することはできないが、三池の歴史の古さを示しているとは言えるであろう。条里と郷の関係は古文書の文献が皆無なので、はっきりした断定はできないが、白銀川・長溝川流での条里が砥上郷、隈川と白銀川流域の一部が十市郷、諏訪川流域の条里が米生郷、三池郡高田町一帯の条里が日奉郷と関係があったと思われる。沖積地における条里制の遺構の分布によって、それ以後の沖積地の発達の度合を知ることができることは前述したが、有明海では大体一年に十メートルの速度で海岸線が進出していると言われるが、地域によってかなりの格差があり、一概には断言できない。大牟田市の場合、白銀川の流域の沖積地が条里制の遺構の縁辺より少くとも千百メートル前後進出しているが、長溝川の流域では千四百メートル前後、諏訪川の流域では千三百メートル前後進出しており、条里の施行後少くとも十三世紀を経過しており、沖積地の進出は大牟田市の場合、一年一メートルの速度で海岸線が進出していると言えるであろう。以上のように大牟田市における条里制の諸問題について論じたが、まだ十分とは言えず、今後新しい資料があらわれて条里制の復原が完全に出来ることを願う次第である。

最後に地籍図を始め大牟田市の地形図など心よく便宜を計っていただいた大牟田市役所の土木課・税務課の方々、諏訪川流域の旧藤田村の貴重な地籍図を拝借させていただいた（現在この地域の小字名は整理されている。）本校の寺本匡謨助教授、古文書の資料でお世話になった九州大学文学部国史学研究室の恵良宏助手に深謝します。

註

(一) 大牟田市誌　上巻（一九六五）八七八頁

(ニ) 米倉二郎（一九五七）　条里の南限―肥後および大隅の条里―史学研究六十六号、十七頁

(ヰ) 西村嘉助（一九五八）　条里分布と地形、史学研究七十号、一頁

端を意味していると思われる。諏訪川の三十六ノ浦は、地籍図を検討してみると非条里地域（三十六ノ浦の東・西・南側も非条里地域）で三十六ノ浦の北側は地籍図から判断して条里地域であり、三十六ノ浦は三十六ノ裏と思われる。隈川の下流域である渡瀬付近から河道が急に曲流しているが、これはこの付近（荒田比付近）の地域が近世の新田開発によって土地が形成され、その際人工的に河道が造られたと思われる。このことは地形図からも読むことができる。その新田地帯の前に八ノ坪があるが、条里の坪番号の八ノ坪とは考えられず局地条里における坪の個数を示したものと思われる。

条里制の復原

史料と現存地名の不足から大牟田市内における条里の完全な復原は大変困難である。そのため地籍図を丹念に調査して復原に努力したが決定的な決め手がないので、これからの記述は試案の領域を出ないものである。条里の坪付に関する古文書は現在のところ見られないが、次の古文書に条里に関する文章が見られる。

荒木文書（近藤文書）

しよぶんしやみそうしんがせんぞさうでんの所りやうしよしよくら、なんによしそくらにわけゆづる所々はいりようのしだいの事あり、ちくごのくにみぬまの御しやうのうち、あらきのむらならびにみけのほうかうのうちみやべのむらのてんはたさいけつのりめんでんらのただしせんせんのゆづりとこれをもちゐるべからざるしさいの事、てんはたさいけつのりめんでんら、つほつけちうもん、だいだいのほんせうもんのおもて、ことにはそうれんのゆづりじょうらにみえたり、かつちやくしいや二らうむねつぐにたびあたふるてんはたさいけにおいては、むねつぐしきよのきざみ、なんによのしそくらにゆづりあたふるといへとも、むねつぐそうしんにさきだてしきよせしむるうえは、これをくひかえしてそうりやうにつきおはぬ、一、おなじきむらのうちながひさみやうのてんはたさいけらの事。つほつけらにをきてはほんせうもんならびに、びくにめうじようのゆづりじやうのおもてにみへたり、たゞしこのうちなんによのしそくらに、わけゆづるぶんは、つほつほをさしてめんめんのゆづりじやうにのせおはぬ、そのほかはたんぶももらさず、そうりやうむねずみが、さたたるへき也、一、おなじきししやうのうちふぢよしのうちのてんち、あざなおちはな七たん二つえの事、ほんしゆふぢよしのてつきしやうをあひそえてゆつりあたふるところ也、云々。

一、とうこく三池のほうこうのうちみやべのむらのうち、てんはたさいけらの事、てんちのぶん、一所かきもと九たん三つえ（つほさけおしのつくり）一所おもがさき六たん一つえ（おなじきつほさけ）一所ひろかは五たん、一所おなじきつほ四つえ（うへのつくり）一所くきさき三たん二つえ、一所しやうしまち四たん、さいけのふん、一所いや二らうくわすがその、一所ほうの二らうがその、一所げん二らうべたうがその、一所なうたらうがその、かのみやべのむらのてんはた、さいけらにおきては、九郎むねよしにゆつりあたへおはぬ、ただしえうがいばんやくにおきては、一ばんうちにむねよしがぶん七ケ日きんしせしむべし、もしきやうとおうばんいできたらんときは、えうかいばんやくのぶんげんををうて、そうりやうあらきにくわえて、きんしせしむべきよし、云々。

えいにん五ねん十月廿二日

ちやくしおうへのむねずみ 回
じなんおうへのむねしげ 回
しやみそうしん 回

この古文書にててくるみやべは現在でも大字宮部として存在するが、小字名はしようしまち（現在は庄司町）以外は現在残っておらず、現在のどの地域であったかは判断できない。この古文書からも条里が施行されていたことを立証するが、何条何里何坪などの記述がないため完全な条里の復原は困難である。なお、文中につほさけおしのつくりとあるのははっきりしないが、多分、耕地と耕地の間の低い土地で、その耕地から低くなる土地の淵の耕作と思われる。前述した橘の三十六・五ノ江・唐船の五ノ枝を考慮して条里を復原してみると、この中では三十六が条里復原の重要な鍵となっている。それは三十六の北は非条里地域であるのに対し、三十六の東・西・南側は条里地域であること、しかもほぼ一町四方である。これらから判断すると坪並は北東隅を一ノ坪とし北西隅を三十六ノ坪とする連続千鳥式か、又は、西南隅を一ノ坪とし西北隅を三十六ノ坪とする連続千鳥式かのどちらかであるが、多分前者が妥当かと思われる。このことは白銀川の流域は上流域の山麓に縄文式時代の遺跡が多く、中流域の山麓には弥生式時代の遺跡が多く、下流域では干拓地域と時代の進展と共

が狭く東西に細長い条里を形成している。現在の有明海の沿岸近くまで条里が施行されていたことは、一万分の一の地形図のみでなく、地籍図や字名からも判明する。例えば現在の有明海の海岸線より一番近い所で六百五十メートルほどの地点に丁地（唐船地域）という小字名があり、これは一町四方を十等分した土地割を長地といい、長地の長が丁に変化したものと思われる。条里を施行して一町四方に満たない縁辺では五反坪・六反坪のような呼称を使用したと思われるが、小坪（手鎌地域）も五反坪・六反坪と同様一町四方に満たないので小坪と呼ばれたと思われる。地籍図によると小坪（現在の地積は約四町四方）の西側は非条里的土地割のみならず、土地割の方向が条里の方向と一致せず、小坪の西側が条里施行当時の海岸線であったと思われる。小坪は筑後の条里制の遺構地域でもしばしば見受けられ、条里の縁辺にない場合もあり、五ノ坪の変化したものと思われる。

長溝川流域の条里の分布

長溝川の流域には二つの異なった条里制の遺構がみられる。上流域の三池（旧三池郡の中心地で郡司がおかれたところ）から七夕橋付近にかけての狭少な平地に細長く条里制の遺構がみられるし、七夕橋付近から日出町付近にかけても狭少な条里制の遺構がみられる。

諏訪川流域の条里の分布

諏訪川は大牟田市と荒尾市の境付近にある萩之尾橋から下流では川が北に蛇行し始めるが、この萩之尾橋から下流の諏訪川と荒尾市境付近に挟まれた沖積地に条里制の遺構がみられ、現在でもこの地域ではっきりと一町ごとに溝渠が直線にひかれていることからも条里制の土地割と判断される。ただこの沖積地域が狭少であるため条里制の遺構も狭少である。条里の限界は鹿児島本線付近と思われ、ここから西側は地籍図から判断すると非条里的土地割で、字名には新田に関する地名が多く大部分は江戸時代に入ってから以後順次干拓された。諏訪川の右岸にはかなりの平地があるにもかかわらず、条里制の遺構は存在しなかったと思われる。地籍図にも条里制の土地割が認められない。萩之尾橋から諏訪川の右岸の臼井・馬込・馬場町・片平町付近の集落は平地にはなく低い丘陵上に位置し、これらの地域の平地は堤防が崩壊し、洪水が多かったと思われる。このことは馬込・馬場町・片平町を通って天領町に抜ける道が周囲よりやや高く自然堤防を形成している。そのため自然堤防と諏訪川に囲まれた地域は悪地であったと思われる。江戸時代の文書に

寛政四年

一、御代官中へ書付相渡左之通り

一、臼井村田方の内二町五反八畝二十六歩、悪作に付年々見放し検見願出候

此儀追而沙汰候迄は、是迄之通り立毛候様取計ひ可申旨、庄屋へ可被申付候

とあり、(一)多分繰り返す洪水によって田畑が冠水するために悪地であったと思われる。これからただちに条里施行当時の状態を判断することは出来ないが、良田ではなかったと思われる。

条里関係の地名

大牟田市内の条里制の遺構地域では坪並の復原に役立つような地名はほとんどなく、現在判明している関係地名〈主として小字名〉(　)内は参考地名・(　)内は所属の大字、を列挙すると次の通りである。なお坪のことを江ともいい江が変化して枝・恵になる場合もある。

白銀川流域

五ノ枝（唐船）・三十六（橘）・五ノ江（橘）

（大坪（唐船）・小坪（手鎌）・口ノ坪（甘木）・京ノ坪（田隈）・大坪（田隈）・丁地（唐船））

隈川流域

八ノ坪（倉永）

深浦地域

（八反坪（岬）・大坪（岬））

諏訪川流域

三十六ノ浦（藤田）

（大坪（藤田）・中ノ坪（藤田）・木ノ坪（沖田））

数詞をもって呼ばれる坪名のうち、三十六は一町四方よりやや広い程度であり、五ノ枝は東西二町・南北一町・五ノ江は東西二町・南北は北が二町、南が一町で台形の変形のような状態である。ここで条里制の遺構地域に出てくる地名について考察してみたい。口ノ坪はよく出てくる地名で条里の縁辺に出てくる場合が多く、条里の始まる所（逆の意味で条里の末端）を意味していると思われる。京ノ坪も口ノ坪と同じようによく出てくる地名で、条里の縁辺に出てくる場合が多く、京は境の変化したものと思われ、口ノ坪と同じように条里の末

大牟田市における条里制の諸問題

日野尚志

Some Problems of the Jori System in Omuta City

Takashi Hino

Summary

There are four remains of Jori System in Omuta City. Mainly in the alluvial river valleys of the Kuma, the Shiragane, the Nagamizo and the Suwa, they enforced this System, whose land allotments are all different from one another, because Jori System, requiring irrigation facilities, is restricted by topography. It is especially worthy of attention that these Systems are distributed far and wide in those alluvial lands, though small-scale.

はしがき

大牟田市内には小規模な条里制の遺構が分布するにもかかわらず、その復原が行われていないのは、条里関係史料の古文書が皆無に近いこと、条里関係現存地名の少なさがその大きな原因である。このため条里制の完全な復原は困難であるが、若干の問題点について論を進めるとともに、復原を試みたいと思う

条里の分布

大牟田市内には、大きくわけて四つの条里制の遺構地域がある。条里制は主として隈川・白銀川・長溝川・諏訪川の流域に沿う沖積平野において施行された。これらの条里制の土地割の系統はすべて異っているが、これは平地が連続していないばかりでなく、条里は灌漑設備を必要とするので地形的な制約を受けるためである。条里制の遺構地域を地籍図で検討してみると、土地割は半折型が大部分で長地型は少ない。条里制の遺構を地域別にみると、最大の連続地域は白銀川の流域で、以下隈川、諏訪川、長溝川の流域となる。そのほか小規模ではあるが、深浦地域にもきわめて局地的であるが条里制の遺構が分布する。

隈川流域の条里の分布

隈川の流域には三つの異なった条里制の遺構がみられる。上流域の怒縄田から中流域の西鉄渡瀬駅付近にかけて川の流れに沿って細長く条里制の遺構がみられるし、西鉄渡瀬駅付近から倉永にかけての狭少な平地にも局地的な条里制の遺構がみられる。隈川の下流域の荒田比付近で、隈川と甘木山の間に挟まれた狭少な平地にも局地的な条里制の遺構がみられる。隈川の流域では上流域には花崗岩からなる丘陵が多く、中流域から下流域にかけては洪積台地や結晶片岩からなる丘陵が隈川の流域に迫っているために、条里制の遺構も狭少である。このように小さな平地にも条里がある場合、川の流れに条里が従うことは当然と思われる。

白銀川流域の条里の分布

白銀川の上流域の下内付近から有明海の沿岸付近まで条里制の遺構がみられる。下内から上流域には白銀川の流域に局地的な条里制の遺構がみられる。これは流域の両岸の土地の傾斜が急で、川の流域以外は条里施行当時より遅れて開発されたものと思われる。白銀川の流域では、上流域から中流域にかけては花崗岩からなる丘陵が多く、中流域から下流域にかけては洪積台地が多く、白銀川がこれらの丘陵に挟まれた状態にあり、このため条里制の遺構は南北に幅

有明工業高等専門学校紀要
創刊号（1966年）

昭和 41 年3月 15 日　印刷
昭和 41 年3月 20 日　発行

編　集　有明工業高等専門学校紀要委員会
発　行　有明工業高等専門学校
大牟田市東萩尾町150
電話　大牟田 8440・5803

印　刷　西田印刷所
大牟田市小浜町25
電話　大牟田 3433・2080

CONTENTS

A Common Study : The Basic Principles of the Technical College Library
..... S. Katsuki and Other Members of the Ariake Technical College Staff··· 2

A Study of Interrelation between Physical Strength or Motor Fitness
and Mental Strength and Type of Body ..... Masaaki Teramoto ····· 55

Construction of a High Sensitive Measuring Apparatus of
Nuclear Quadrupole Resonance ..... Jiro Sakami ····· 73

Calculation of Angle in Cutting with Grinder ..... Tatsuro Nagata ····· 77

The Lattice Theory of Liquid State under the Condition That Can Make
Two Molecules Involve into Each Cell ..... Tatsuro Nagata ····· 84

How Has 'The Grapes of Wrath' Been Received in the World ?
..... Ryjuo Iseri····· 89

"Renga" at the Anniversary Services of Michizane
– A History of "Renga" at the Dazaifu (Temmangu) Shrine Part II–
..... Tomoya Tanamachi····· 120

Some Problems of the Jori System in Omuta City ... Takashi Hino ····· 124